山形県埋蔵文化財センター調査報告書第176集

上大作裏遺跡発掘調査報告書

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

上大作裏遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書176集

2009

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

かみおおざくうら

上大作裏遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書176集

平成21年

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

第1次調査区全景（東を上に）

第2次調査区全景（北を上に）

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、上大作裏遺跡の調査成果をまとめたものです。

上大作裏遺跡は、山形県南東部に位置する南陽市にあります。南陽市は古くから赤湯温泉や果樹栽培が盛んなことで知られていますが、近年は道路網の整備や市街地の活性化が図られており、自然と調和した景観豊かな地方都市として発展しています。南陽市には国史跡の稲荷森古墳をはじめ、縄文時代から中世までの数多くの遺跡が確認されています。

この度、一般国道113号赤湯バイパス改築事業に伴い、上大作裏遺跡の発掘調査を実施しました。２ヵ年に亘る調査では、縄文時代の竪穴住居跡や狩猟のための陥穴、平安時代～中世の井戸跡や溝跡など、多数の遺構が検出されました。特に、縄文時代の竪穴住居跡は、これまでに調査された事例が少ない早期末から前期初めに属するものでした。また、旧河川の縁辺に当たる第１次調査区からは、弥生時代の土器がまとまって出土するなど、大きな成果を得ることができました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の啓蒙や普及、学術研究や教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、調査において御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成21年３月

財団法人　山形県埋蔵文化財センター

理事長　山口常夫

凡　　例

1　本書は、一般国道113号赤湯バイパス改築事業に係る「上大作裏遺跡」の発掘調査報告書である。

2　既刊の年報、現地調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

3　調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

4　本書の執筆は、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章を今正幸が、第Ⅰ・Ⅴ・Ⅵ章を須賀井新人が担当し、柏倉俊夫、小笠原正道、佐東秀行、安部実、長橋至、伊藤邦弘、黒坂雅人が監修した。

5　遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）により、高さは海抜高で表す。方位は座標北を表す。

6　本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

　　ＳＴ…竪穴住居跡　　ＳＥ…井戸跡　　ＳＫ…土坑・陥穴・墓壙

　　ＳＤ…溝跡・溝状遺構　　ＳＰ…ピット・柱穴　　ＳＸ…性格不明遺構

7　遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。

8　基本層序および遺構覆土の色調記載については、1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。

9　本書を作成するにあたり、弥生土器について石川日出志氏（明治大学）から御助言をいただいた。

調 査 要 項

遺　跡　名	上大作裏遺跡（かみおおざくうら）
遺 跡 番 号	平成８年度登録
所　在　地	山形県南陽市大字砂塚字大作前ほか
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査受託者	財団法人山形県埋蔵文化財センター
受 託 期 間	平成18年4月1日～平成21年3月31日
現 地 調 査	＜第１次調査＞　平成18年８月21日～平成18年11月９日
	＜第２次調査＞　平成19年５月10日～平成19年７月27日
調査担当者	平成18年度　調査第一課長　野尻侃
	調査研究主幹　長橋至
	主任調査研究員　須賀井新人（調査主任）
	主任調査研究員　小林圭一
	平成19年度　調査課長　長橋至
	専門調査研究員　伊藤邦弘
	主任調査研究員　須賀井新人（調査主任）
	調査研究員　今正幸
	平成20年度　調査課長　長橋至
	課長補佐　伊藤邦弘
	専門調査研究員　須賀井新人
	調査研究員　今正幸（整理主任）
調 査 指 導	山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室（平成18～19年度）
	山形県教育庁文化遺産課（平成20年度）
調 査 協 力	南陽市教育委員会
	山形県教育庁置賜教育事務所
業 務 委 託	基準点測量業務　株式会社アサダ（第１次調査）
	有限会社山栄測量設計（第２次調査）
	遺構測量（俯瞰撮影）業務　株式会社寒河江測量設計事務所（第１次調査）
	株式会社セビアス（第２次調査）
	打製石器実測業務　株式会社アルカ
発掘作業員	安部カツ子　市川武男　伊藤勝助　歌丸美津夫　内谷佐七　梅津弘
	江袋伸一　大武繁　小倉幸次　小原義一　川村慶二　君島滝五郎
	後藤忠太郎　今野勝雄　紺野輝子　志田秀雄　島貫忠夫　島貫三喜男
	鈴木君子　鈴木京四郎　平雅氏　髙橋貞夫　二宮民夫　長谷部勝廣
	長谷部建　舟山たみ子（五十音順）
整理作業員	伊藤真由美　稲毛順子　加藤朱律　加藤文子　岸晴美　齋藤由美子
	佐藤淳子（五十音順）

目　次

Ⅰ　調査の経緯
　　1　調査に至る経過……1
　　2　発掘調査の方法と経過……2
　　3　整理作業の経過……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境
　　1　地理的環境……6
　　2　歴史的環境……6
Ⅲ　遺跡の概要
　　1　遺跡の層序……11
　　2　遺構・遺物の分布……12
Ⅳ　検出遺構
　　1　第１次調査の遺構……22
　　2　第２次調査の遺構……29
Ⅴ　出土遺物
　　1　縄文時代の遺物……52
　　2　弥生時代の遺物……62
　　3　古墳時代以降の遺物……73
Ⅵ　総　括
　　1　縄文時代早期末葉の集落……78
　　2　縄文土器の型式……80
　　3　弥生時代の様相……81

報告書抄録……巻末

表

表１　発掘調査工程表……3
表２　整理作業工程表……4
表３　打製・磨製石器属性表……61
表４　礫石器属性表……61

図　版

第１図　遺跡分布図・地形分類図……８
第２図　調査概要図……11
第３図　第１次調査　遺構配置図（グリッド）……13
第４図　第１次調査　遺構配置図（等高線）……15
第５図　第２次調査　遺構配置図（グリッド）……17
第６図　第２次調査　遺構配置図（等高線）……19
第７図　試掘調査　概要図・断面略図……21
第８図　第１次調査　土坑（ＳＫ９ほか）……24
第９図　第１次調査　土坑（ＳＫ29ほか）……25
第10図　第１次調査　土坑（ＳＫ30ほか）……26
第11図　第１次調査　ＳＸ100ベルト断面……27
第12図　第２次調査　竪穴住居跡（ＳＴ240・242）……34
第13図　第２次調査　竪穴住居跡（ＳＴ252・300）……35
第14図　第２次調査　竪穴住居跡（ＳＴ290）……36
第15図　第２次調査　溝跡（ＳＤ210）……37
第16図　第２次調査　井戸跡・土坑……39
（ＳＥ285　ＳＫ202ほか）
第17図　第２次調査　土坑（ＳＫ206ほか）……40
第18図　第２次調査　土坑（ＳＫ222ほか）……41
第19図　第２次調査　土坑（ＳＫ233ほか）……42
第20図　第２次調査　土坑（ＳＫ244ほか）……43
第21図　第２次調査　土坑（ＳＫ249ほか）……44
第22図　第２次調査　土坑（ＳＫ269ほか）……45
第23図　第２次調査　土坑（ＳＫ275ほか）……46
第24図　第２次調査　土坑（ＳＫ293ほか）……47
第25図　第２次調査　土坑（ＳＫ305ほか）……48
第26図　第２次調査　土坑（ＳＫ314ほか）……49
第27図　第２次調査　土坑（ＳＫ309ほか）……50
第28図　第２次調査　土坑（ＳＫ317ほか）……51
第29図　縄文土器……53
第30図　有孔円板……54
第31図　石鏃・石槍・石匙……57
第32図　石匙・石篦……58
第33図　石篦・掻器・削器……59
第34図　磨製石斧・磨石・石皿……60
第35図　弥生土器（１）……63
第36図　弥生土器（２）……64
第37図　弥生土器（３）……65
第38図　弥生土器（４）……67
第39図　弥生土器（５）……68
第40図　弥生土器（６）……69
第41図　弥生土器（７）……70
第42図　弥生土器（８）……71
第43図　弥生土器（９）……72
第44図　土師器・須恵器……74
第45図　土師器・須恵器・中世陶器……75
第46図　土師器・中世陶器・貨幣……76
第47図　木製品・石製品……77
第48図　縄文時代早期中葉～前期初頭の住居跡……79
第49図　弥生時代の住居跡……82
第50図　川原町口遺跡出土土器……83

写真図版

巻頭写真１	第１次調査区全景（完掘）
巻頭写真２	第２次調査区全景（完掘）
写真図版１	第１・２次調査区近景
写真図版２	第１次調査区各部（検出）
写真図版３・４	第１次調査区各部（完掘）
写真図版５・６	第２次調査区各部（検出）
写真図版７・８	第２次調査区各部（完掘）
写真図版９	畝状遺構　ＳＸ100東端（完掘）
写真図版10	ＳＸ100南端（完掘・遺物出土）
写真図版11	ＳＸ100ベルト（断面）
写真図版12	ＳＴ240・242（完掘）
写真図版13	ＳＴ240・242（検出・断面）
写真図版14	ＳＴ240・242（完掘）　ＳＴ252
写真図版15	ＳＴ290（検出・完掘）
写真図版16	ＳＴ290（断面）　ＳＴ300
写真図版17	ＳＤ210
写真図版18	ＳＤ243　井戸跡
写真図版19	陥穴　墓壙
写真図版20	袋状土坑
写真図版21	第１次調査　土坑（完掘・遺物出土）
写真図版22	第２次調査　土坑（完掘・遺物出土）
写真図版23	第１次調査　土坑（断面）
写真図版24～27	第２次調査　土坑（断面）
写真図版28	縄文土器
写真図版29	縄文土器・有孔円板
写真図版30	縄文土器・弥生土器・土師器
写真図版31	打製石器
写真図版32	打製石器・磨製石器・礫石器
写真図版33	磨製石器・礫石器
写真図版34	弥生土器・土師器
写真図版35・36	弥生土器
写真図版37	弥生土器・土師器
写真図版38～47	弥生土器
写真図版48	弥生土器・土師器・須恵器
写真図版49	弥生土器・須恵器
写真図版50	須恵器
写真図版51	土師器・須恵器・中世陶器
写真図版52	中世陶器・砥石
写真図版53	木製品・貨幣

Ⅰ　調査の経緯

1　調査に至る経過

国道113号は福島県相馬市と新潟市とを結び、東北地方南部を横断する幹線国道である。このうち、山形県南陽市と新潟県荒川町までの区間では「新潟山形南部連絡道路」としての整備が計画され、バイパス建設による改築事業が進展中である。この路線は地域高規格道路として、将来的には整備中の東北中央自動車道（南陽高畠IC）と日本海沿岸東北自動車道（荒川IC）とを結ぶもので、地域間交流の促進や置賜地方の活性化等と共に、南陽市内の交通混雑を解消するといった効果も期待されている。

山形県側では平成６年に、高畠町深沼から南陽市竹原に至る延長7.2kmの「赤湯バイパス」建設計画が示されたのを受けて、県教育委員会が平成７・８年に路線内の分布調査を実施し、埋蔵文化財の所在確認を行った。その結果、路線内に周知の遺跡を含めて９箇所の埋蔵文化財包蔵地が存在することが明らかとなり、他にもその可能性のある場所が数箇所認められた。南陽市砂塚地区に所在する上大作裏遺跡はこの調査によって確認され、平成８年度に縄文時代及び平安時代の遺物散布地として登録された遺跡である。

その後、赤湯バイパス建設の進捗に合わせ、路線に係る遺跡の規模や遺存状況等を把握するための試掘調査が平成13年から順次行われた。その結果、先の分布調査で遺跡可能性地の一つとして捉えられていた１箇所を追加した計10遺跡について、保存のための協議及び文化財保護法に基づく手続きが必要と判断された。これを受けた事業主体の国土交通省山形河川国道事務所では、遺跡の取り扱いについての協議を行い、着工前に記録保存のための発掘調査を実施することで調整が図られた。

上大作裏遺跡は用地取得の関係から、試掘調査及び発掘調査とも２ヵ年に亘って行われている。県教育委員会による最初の試掘調査は、遺跡東端域を対象として平成17年11月に実施された。用地内における遺構・遺物の分布は希薄な状況であったが、隣接する事業区外の畑地からは平安期の土器が採集されたことから発掘調査が必要との判断に達し、対象面積1,800㎡について翌18年に第１次調査を実施するに至った。また、路線に係る遺跡西半域の試掘調査は第１次調査中の平成18年10月に行われ、12箇所の試掘溝のうち７箇所から遺構や遺物が確認された。出土土器から縄文時代と平安時代の集落跡であることが判明し、事業に係る約4,000㎡について翌19年に第２次調査を実施する運びとなった。

これらの経過を経て、発掘調査実施機関である県埋蔵文化財センターでは、事業主体である国土交通省山形河川国道事務所と調整を進め、第１次調査に係る経費積算調書を同事業に係る檜原遺跡・天王遺跡と合わせて平成18年２月に提出し、同年４月１日付けで「埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結した。続いて７月12日（第２次調査は平成19年４月６日）に、文化財保護法第92条に基づく「埋蔵文化財発掘調査の届出」を県教育委員会へ提出、同月18日（第２次調査は平成19年４月11日）付けで受理された旨の通知を受け取った。以上の諸手続きを経て、各年の発掘調査開始前には、南陽市教育委員会など関係機関との事前打ち合わせを行い、調査期間や方法等の実施計画と現状での問題点等について協議している。

参考文献

山形県教育委員会　1997　『分布調査報告書（24）』山形県埋蔵文化財調査報告書第198集
山形県教育委員会　2007　『分布調査報告書（33）』山形県埋蔵文化財調査報告書第207集
山形県教育委員会　2008　『分布調査報告書（34）』山形県埋蔵文化財調査報告書第208集

2　発掘調査の方法と経過

発掘調査の方法は、事業用地の確認、調査区の設定、重機による表土除去、遺構検出のための面整理・面精査と進め、遺構プランの検出後に平面図作成・遺構登録などの過程を踏んだ。遺跡範囲内に設定したグリッドの方角は、平面直角座標系第Ｘ系（世界測地系）に基づいた５×５ｍを単位とし、遺跡範囲の北西角に当たるＸ：－215490・Ｙ：－63189を０－０グリッドとした。標記は東西軸で西から東へ、南北軸は北から南に昇順する算用数字にて行った。グリッド名が示す範囲は、Ｘ軸とＹ軸の交点の第四象限となる５ｍ四方の25㎡である。座標値と番号を登録した遺構は、順次半截等の掘り下げを実施して断面精査を行い、実測図作成等の諸記録を経た後に完掘した。完掘後の遺構平面図は業務委託により作成しており、第１次調査では電子平板で、２次調査時は空撮による遺構測量を実施している。平面図は1/40縮尺で図化したが、第２次調査で検出した竪穴住居跡等に関しては、遺物出土地点を記録したため、平板測量により1/20スケールで個別に図化した。調査の各段階では写真撮影を実施し、一連の作業が記録としてたどれるように配慮した。以下には発掘調査の経過について、年次ごとにその概要を記述する。

＜第１次調査＞

現地調査は、平成18年８月21日から11月９日まで（実働56日間）の日程で実施した。対象面積1,800㎡の調査区設定後、重機による表土除去を調査区東端部より開始した。調査区は西半部を南北方向に縦断する農道により分割される。業務委託して調査区南東端と北西端に４級基準点を２点設置し、基準点から調査区に係る10ｍ単位の格子点（グリッド）を配置した。これらを基に遺構の位置や遺物出土地点を記録する５ｍ四方の方眼を組み、座標値を与えてグリッド区割りを行った。遺構検出作業と並行して、河岸段丘の縁辺に当たる調査区東・南端部の堆積層を掘り下げ、旧地形の復元に努めながら調査を進めていった。

９月上旬より検出遺構の精査を東半域から手がけ、土層断面図作成・写真撮影の諸記録を実施した。西半部に残した農道の扱いについては、周辺の遺構分布・密度や出土遺物の希薄さ等から、付け替え工事を経てまでの調査を不要と判断し、変わって出土遺物が多い東・南端部の拡張を９月下旬に行った。これら拡張範囲の掘り下げと並行しながら、10月中旬より半截遺構の完掘を開始した。なお、10月12・13日と20日の３日間に亘り、県教育委員会が翌19年度の調査対象範囲について試掘調査を行っている。10月28日（土）に隣接する天王遺跡と合同で調査説明会を開催し、翌週には平面図作成のための遺構測量を業務委託して実施した。拡張した調査区南端部からは多数の弥生土器が出土したため、掘り下げと記録作業は調査期間の終盤まで及んだが、11月９日に現地調査を終了した。

＜第２次調査＞

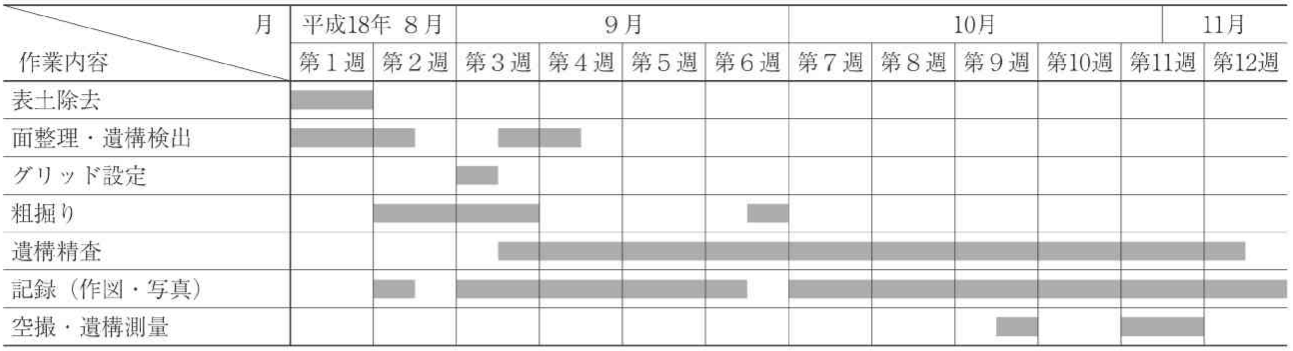
現地調査は、平成19年５月10日から７月27日まで（実働55日間）の日程で実施した。対象面積は昨年度の試掘調査により確定した4,000㎡である。調査区は工事用道路との関連から前・後半に分け、調査区設定後に前半に行う北半部（約2,300㎡）の表土除去を５月11日より開始した。１単位５×５ｍのグリッド設定は第１次調査を継承する方法で行い、３点の基準点を設けた後に格子点を配置した。調査区南半部に仮設してあった工事用道路を北端部への付け替えが必要なことから、これに係る幅10ｍの範囲の調査を優先して実施し、手取りによる遺構平面図作成後の６月上旬にこの部分を先行して引渡しを行った。

事業者側で付け替え工事を行い、６月中旬に供用されたのを受けて、翌週から南半部（約1,700㎡）の表土除去を行った。６月下旬にこの区域へのグリッド杭を設置し、面整理を経て７月より南半域検出遺構の精査に入った。調査区内は全体的に地下水位が高く、南西隅に設置した排水ポンプを常時稼動させて調査に当たったが、湧水により水没する遺構が幾つかあった。遺物が出土する遺構は竪穴住居跡など一部に限られ、すべてが小片であったため、出土箱数は３箱に止まった。住居跡は縄文時代早期末～前期初頭に属するもので、検出例が少ないことからも個別に実測図を作成した。

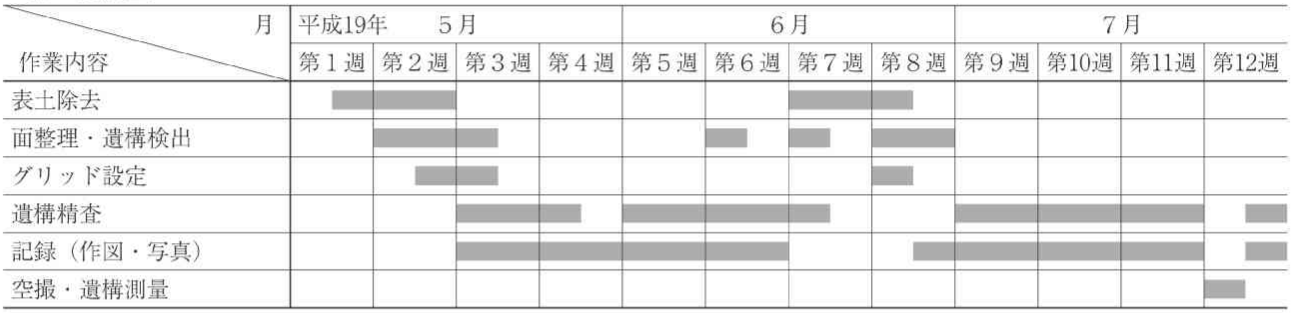
７月24日に遺構測量に係る空撮を実施し、同日午後には調査説明会を開催した。その後、事業者への現地引渡しを経て機材を撤収し、２ヵ年に及んだ発掘調査を終了した。

表１　発掘調査工程表

第１次調査



第２次調査



3　整理作業の経過

発掘調査を２ヵ年で行ったことから、報告書作成のための整理作業は３ヵ年にわたって実施した。出土遺物の整理工程は、洗浄→注記→分類→接合・復元→抽出→実測・拓本→トレース→写真撮影→収納の順に行った。

18年度は第１次調査出土資料について19年１月に遺物洗浄を開始し、乾燥後の注記を経て２月上旬より接合・復元に着手した。写真・図面等記録類の整理を並行して実施し、図面は番号を付加した上で図面台帳を作成し、遺構ごとに平面図と土層断面図の補整を行った。また、出土遺物により各遺構の所属時期を検討し、調査区における概略を把握した。

19年度は４月から継続して遺物の復元にあたり、５月上旬からは報告書掲載遺物を抽出した後、実測及び拓本の作業に入った。６月下旬に第２次調査で出土した遺物の一部を搬入して、調査説明会での展示のために洗浄と注記を行っている。２次調査が終了した７月下旬に残りの遺物について洗浄・注記を実施し、先の遺物と併せて接合・復元を行ったが、出土箱数が３箱と少ないことから、各１週間内で作業を終えた。その後、抽出を経て８月中に実測・拓本までを終了させた。実測に際しては、破片資料であっても図上復元可能なものについて、反転実測を行っている。また、１次調査分も含めた打製石器の成品38点については、実測及びトレース作業を外部に委託し、検査校正を行った上で実測素図とトレース原図、及びデジタルデータの成果品を得た。これらと並行して記録類の整理を進めたが、１次調査に比して遺構数が多かったことから、写真注記などに時間を要した。年度終盤には遺構データ表の作成と、報告書に掲載する個別遺構の抽出を行い、遺構図版の版下を作成した。

20年度は８月より作業を再開し、遺構と遺物実測図のトレースを行った。トレース後の遺物実測図には拓本を貼り付け、これらを順次版組みして、報告書の頁単位で割付を行った。また、報告書で取り上げた遺構を中心として写真図版の割付を行い、遺構写真のプリントを発注した。諸作業と並行して本文執筆に取り掛かり、11月には掲載遺物の写真を撮影した。これらの原稿を編集して報告書の版組見本を作成し、21年１月の入稿までに至った。

その後、写真・図面等の諸記録類を、出土遺物は報告書掲載と未掲載に区分して収納した。なお、報告書掲載遺物については後の検索・活用を考慮し、図版番号を追加して注記している。

表２　整理作業工程表

平成18年度

作業内容＼月	平成19年 1月	2月	3月
遺物洗浄・注記			
遺物接合・復元			
写真・図面等整理			

平成19年度

作業内容＼月	平成19年 4月	5月	6月	7月
遺物洗浄・注記				
遺物接合・復元				
遺物実測・拓本				

作業内容＼月	8月	9月	10月	11月
遺物接合・復元				
遺物実測・拓本				
写真・図面等整理				
石器実測委託				

作業内容＼月	12月	平成20年 1月	2月	3月
写真・図面等整理				
データ入力				
遺構図版原図作成				

平成20年度

作業内容＼月	8月	9月	10月	11月
トレース				
版組み				
遺物写真撮影				
原稿執筆				

作業内容＼月	12月	平成21年 1月	2月	3月
版組み				
編集・組見本作製				
原稿執筆				
入稿・校正				
記録・遺物収納				

発掘調査・整理作業状況

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　地理的環境

上大作裏遺跡（1）は山形県南東部の南陽市梨郷地区に所在し、赤湯市街地から西方約4.5kmに位置している。

米沢盆地の北縁にあたり、北方の白鷹山地から吉野川や織機川が南流して盆地へと注ぐ。山麓部では、それら中小河川が複合して宮内扇状地を形成し、扇端部に沿って北西流する最上川に合流する。本遺跡は宮内扇状地の扇央部に位置し、範囲は東西約550m・南北約270m、標高は約220mを測る。扇状地の下方へ放射状に広がる自然堤防は、その開析過程における河川の激しい流路変動を物語るものである。本遺跡は、そうした織機川の旧河道とみられる自然堤防上の微高地に立地しており、周囲には湿地性の河間低地や後背低湿地が広がっている。現況は、旧河道にあたる凹地が水田、その両岸の自然堤防にあたる微高地が畑地や果樹園として利用されている。

気候は盆地特有の内陸型に属し、平均風速は低いが寒暖の差がある。積雪も比較的多く、年間降水量は1500mm前後を測る。

本遺跡が立地する自然堤防上には、旧河道に沿った形で遺跡の分布が認められる。北東に隣接する掛在家遺跡（50）や高山原遺跡（51）では、本遺跡と同時期とみられる縄文・弥生土器片が採集されている。東方の旧河道対岸には、当センターが併行して調査を実施した天王遺跡（49）が位置し、4世紀の周溝墓（古墳）群や中世の方形館が検出されている。発達した長大な自然堤防の存在は、長期にわたる安定した河川の流入を示唆しており、河川あるいは、それに伴う低湿地を背景として、生活が営まれてきたであろうことが窺われる。

2　歴史的環境

本遺跡の周辺では、南陽市を中心に現在200箇所余りの遺跡が確認されている。以下では、周辺の主要・関連遺跡について時代ごとに概観し、この地域における歴史的な背景を考えていきたい。

旧石器時代

当該期の遺跡は希少であり、南陽市では稲荷森古墳（126）が立地する長岡山丘陵から石刃が採集されているにすぎない。

縄文時代

織機川上流に位置する大野平遺跡（3）では、早期中・後葉と前期末葉の竪穴住居跡が4棟検出されている。関東の田戸下層式に併行する沈線文土器は「須刈田式」として、山形県の早期における標式土器となっている。

白竜湖に臨む山麓斜面上の月ノ木B遺跡（150）でも、早期中葉～前期前葉の土器が多量に出土している。

高畠町の押出遺跡（116）は前期中葉の低湿地集落で、白竜湖周辺に広がる湿地帯「大谷地」の南西端に位置する。良好な保存状態を有する泥炭層からは、打込柱平地式住居、彩漆土器、クッキー状炭化物など全国的にも貴重な発見がなされた。

百刈田遺跡（89）の第1・2次調査では、中期後葉の複式炉を有する竪穴住居跡が6棟検出されている。

弥生時代

前述した百刈田遺跡の第3次調査では、墓跡とみられる十数基の遺構に伴い、中期後葉の土器がまとまって出土している。庚壇遺跡（99）では後期の竪穴住居跡が1棟、萩生田遺跡（83）からは中期後葉と見られる石包丁が見つかっている。

本遺跡が立地する旧河道沿いの自然堤防上には、上流から中期中葉の東高堰遺跡（55）、中期後葉の掛在家遺跡、後期の塩釜前遺跡（45）が位置しており、あたかも時代を追って低地へと変遷していったかのような様相を呈している。安定した自然堤防上の微高地を集落の拠点とし、背後に広がる低湿地を利用した初期稲作が行われていた可能性も考えられる。

※遺跡名の（　）には、第1図における遺跡番号を付記した。

古墳時代

稲荷森古墳は全長96mを測る県内最大の前方後円墳で、４世紀後半に比定される。

宮内扇状地の北方山麓には、奈良時代まで続く終末期古墳群が密集している。梨郷地区の経塚山古墳群（16）・天王山古墳群（24）、赤湯地区の蒲生田古墳群（74）・二色根古墳群（138）などがある。

近年の開発に係る緊急発掘調査によって、宮内扇状地の平野部における周溝墓（古墳）群の存在が明らかになってきている。前述した天王遺跡では４世紀の円形周溝が３基、大塚遺跡（94）では４世紀後半の方形（円形）周溝が15基、植木場一遺跡（105）では５世紀中頃の円形周溝が１基、さらには中落合遺跡（97）からも方形周溝が１基検出されている。周辺地域における古墳分布の広がりや集落跡の発見がさらに期待される。

奈良・平安時代

奈良時代の竪穴住居跡が複数検出された沢田遺跡（85）をはじめ、当該期の遺跡分布は宮内扇状地に集中している。

特に沖郷・宮内地区は、地名や地形などの研究によって古代置賜郡衙あるいは条里制の存在が推定されており、前述した終末期古墳の盛行にも裏付けられる。当該期の官衙関連遺跡と目される中落合遺跡では、南北軸に沿って計画的に配置される掘立柱建物群と区画施設が検出された。また、矢の目館遺跡（134）では、南北に走る条里制遺構の一部と考えられる大型の畦畔・水路跡が検出されている。

西方丘陵には、平安時代の須恵器を生産する平野窯跡（11）が立地しており、檜原遺跡（98）の事例に見られるように、周辺の消費集落へ供給されていたものと考えられる。

中・近世

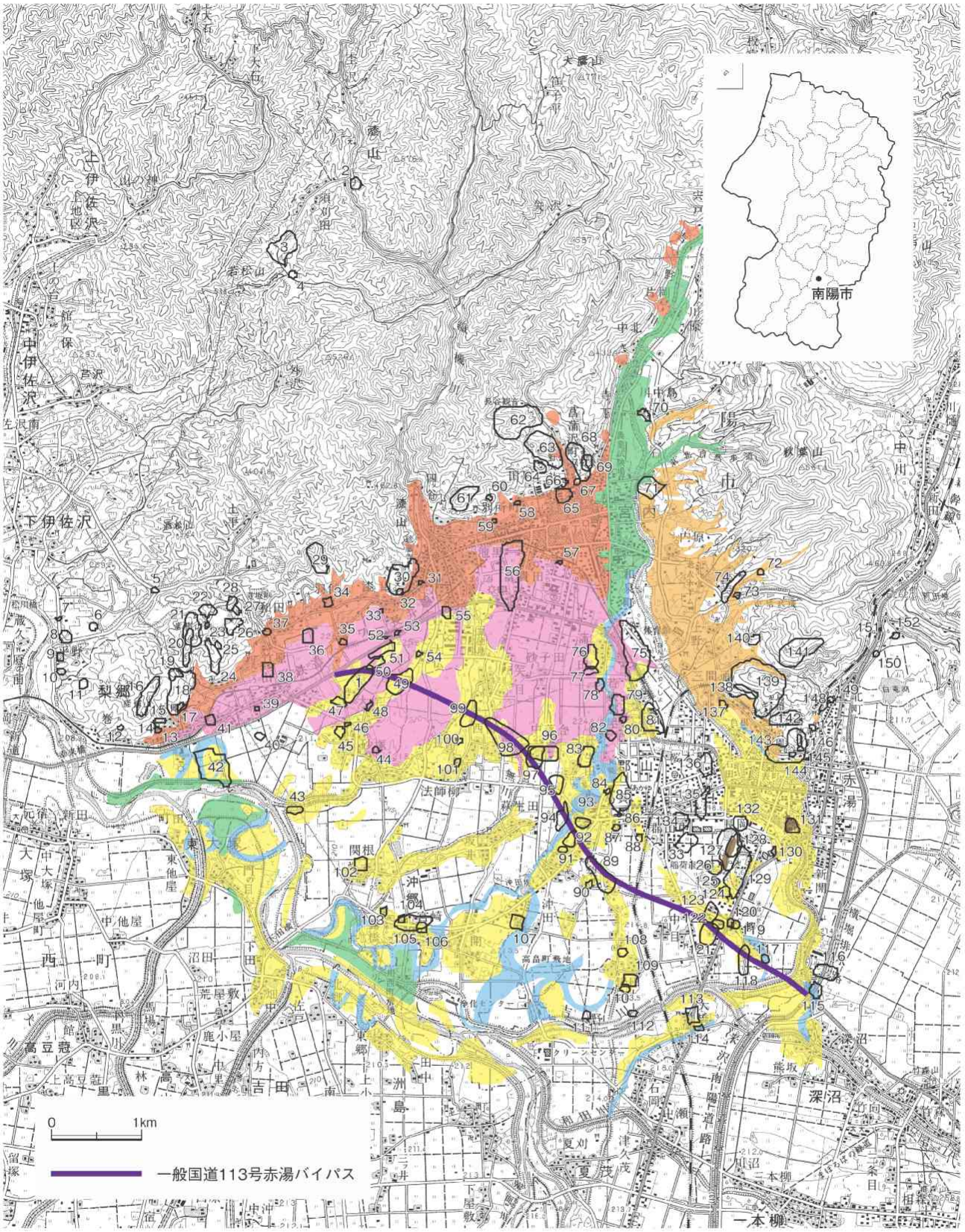
当該期の遺跡は中世城館遺跡が主体を占め、南陽市では62箇所にも及ぶ。そのうち発掘調査が実施された鵜の木館跡（121）からは、単郭式方形館と推定される屋敷跡が検出された。また、植木場一遺跡では、宮崎館（106）の一部とみられる掘・土塁跡が検出されており、上杉藩主が鷹狩り時の休み処とした「御殿跡」とも伝えられている。

当地には、県内最古の「正元元年大日板碑」をはじめとする数多くの板碑が造立されており、その背景には、置賜の地頭職であった大江長井氏の影響下において、鎌倉仏教文化の流入があったものと考えられる。

参考文献

南陽市教育委員会　1984　『郡山 矢ノ目館跡遺跡』南陽市埋蔵文化財調査報告書第１集
南陽市教育委員会　1986　『須刈田 大野平遺跡　第２次調査』南陽市埋蔵文化財調査報告書第２集
南陽市教育委員会　1989　『稲荷森古墳』南陽市埋蔵文化財調査報告書第４集
南陽市史編さん委員会　1987　『南陽市史 考古資料編』
南陽市史編さん委員会　1990　『南陽市史 上巻』
山形県　1983　『土地分類基本調査 赤湯・上山 ５万分の１』
山形県教育委員会　1985　『沢田遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第88集
山形県教育委員会　1989　『月ノ木Ｂ遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
山形県教育委員会　1990　『押出遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第150集
山形県教育委員会　1995　『山形県中世城館遺跡調査報告書 第１集（置賜地域）』
山形県埋蔵文化財センター　1998　『植木場一遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第59集
山形県埋蔵文化財センター　2006　『鵜の木館跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第150集
山形県埋蔵文化財センター　2007　『大塚遺跡 西中上遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第158集
山形県埋蔵文化財センター　2007　『庚壇遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集
山形県埋蔵文化財センター　2007　『檜原遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第165集
山形県埋蔵文化財センター　2008　『中落合遺跡 発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第168集

※現在、報告書作成中の百刈田・天王遺跡については、当センターの年報や調査説明会資料などを参考にした。



丘陵地　段丘（中位）　谷底平野　扇状地・崖錐
自然堤防　河間低地　後背低湿地　旧河道

第１図　遺跡分布図・地形分類図（国土地理院発行５万分の１地形図「赤湯」に土地分類基本調査「赤湯・上山」の地形分類図を重ねて80％に縮小し、宮内扇状地を中心に一部修正を加えて記載した。）

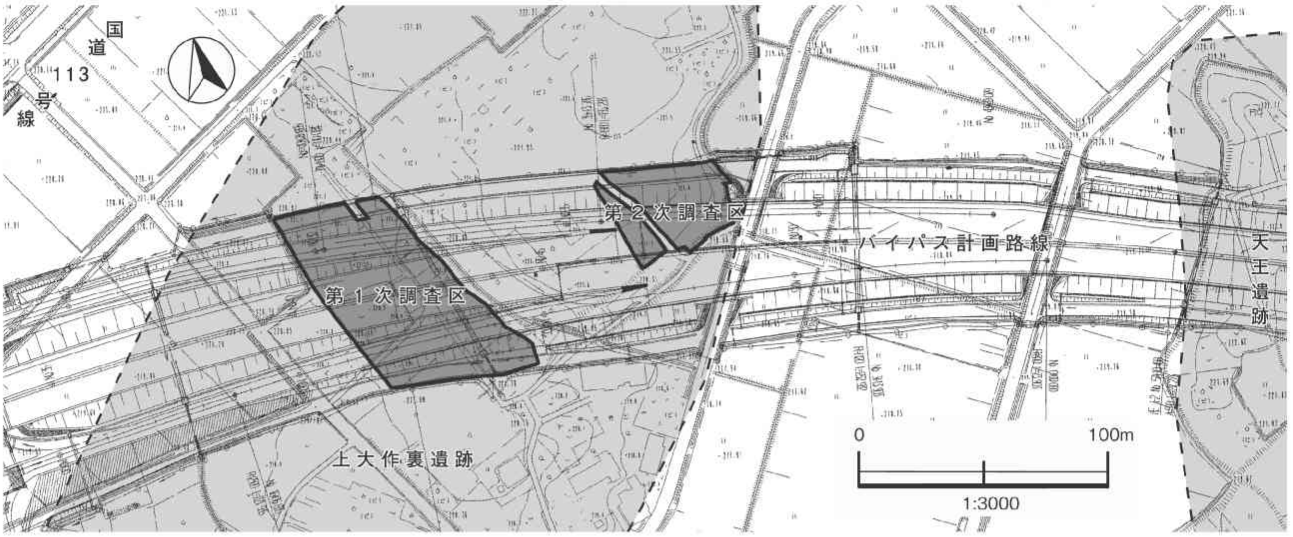
番号	遺跡名	種　別	時　代	番号	遺跡名	種　別	時　代
1	上大作裏	集落跡	縄文(早～前期)・弥生(中期)・奈良・平安・中世	51	高山原	集落跡	縄文(前期)・平安
2	備後館	館跡	中世	52	四百刈	散布地	縄文
3	大野平	集落跡	縄文(早・前・中期)	53	大根在家	散布地	平安
4	小須刈田	散布地	縄文(早・前期)	54	大仏	散布地	縄文(後期)
5	長峰	散布地	縄文	55	東高堰	散布地	弥生(中期)・平安
6	平野C	散布地	縄文	56	富貴田	集落跡	縄文・奈良
7	平野B	散布地	縄文	57	大清水	散布地	縄文・平安
8	平野A	集落跡	縄文	58	別所A	散布地	平安
9	中島平	集落跡	縄文(前期)	59	別所B	散布地	縄文
10	梨郷古墳群	古墳群	古墳(終末期)	60	別所山経塚	経塚	平安
11	平野古窯	古窯跡	奈良・平安	61	別所館	館跡	中世
12	経塚山南	散布地	縄文	62	北館	館跡	中世
13	小山B	散布地	縄文(晩期)	63	宮沢城	館・城館跡	中世
14	小山西	散布地	平安	64	宮内南館	館跡	中世
15	小山A	散布地	縄文	65	宮内小学校敷地内	集落跡	縄文(中期)・平安
16	経塚山古墳群	古墳群	古墳	66	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文(中・後期)・平安
17	宮城墳墓	火葬墳墓	平安	67	久保	集落跡	縄文(中期)
18	梨郷上館	館・城館跡	中世	68	慶海山館	館跡	中世
19	稲荷山古墳群	古墳群	古墳	69	双松公園内	散布地	縄文
20	竜樹山古墳群	古墳群	古墳	70	平館	館跡	中世
21	龍樹山館	館跡・哨堡	中世	71	丸山館	館跡	中世
22	蕗畑	集落跡	縄文・奈良・平安	72	山居沢山A	散布地	平安
23	雨沼B	集落跡	縄文(後・晩期)・奈良・平安	73	山居沢山B	散布地	平安
24	天王山古墳群	古墳群	古墳	74	蒲生田古墳群	古墳群	古墳(終末期)
25	ヌゲッポ	集落跡	縄文(早・前期)	75	観音堂	散布地	縄文・平安
26	石ヶ窪A	集落跡	縄文(前・中期)・奈良・平安	76	蒲生田館	館跡	中世
27	金山	散布地	縄文(早期)	77	南館館ノ内	散布地	縄文・奈良・平安
28	牛ヶ首A	集落跡	平安～中世	78	当時作	散布地	縄文・奈良・平安
29	赤松山館	館跡	中世	79	若狭郷屋敷	館跡	中世
30	漆山館	館跡	中世	80	中屋敷	散布地	奈良・平安
31	漆山	集落跡	縄文(中期)	81	唐越	散布地・集落跡	縄文(中期)・奈良・平安
32	漆山(学校下)	集落跡	縄文(中～後期)	82	西田	散布地	平安
33	前田	散布地	縄文	83	萩生田	集落跡・散布地	弥生・奈良
34	片岸館	館跡	中世	84	鳥貫	集落跡	古墳～奈良・平安
35	西高田	散布地	平安	85	沢田	集落跡	弥生・古墳(中期)・奈良・平安
36	梨郷新館	館跡	中世	86	郡山中堀	散布地	奈良・平安
37	羽黒堂	散布地	縄文	87	沢口	集落跡	奈良・平安
38	割田館	館跡	中世	88	間々ノ上	散布地	奈良
39	蔵庭	散布地	奈良	89	百刈田	集落跡・墓跡	縄文(中期)・弥生(中期)・古墳・奈良・平安・中世
40	松木壇	散布地	平安	90	前小屋	散布地	縄文
41	梨郷小館	館跡	中世	91	将監屋敷	散布地	奈良・平安
42	梨郷南館	館跡	中世	92	西中上	集落跡	奈良・平安
43	北徳田	散布地	縄文	93	古屋敷	散布地	平安
44	下八ツ口	散布地	縄文	94	大塚	集落跡・墓跡	縄文・古墳・奈良・平安
45	塩釜前	散布地	縄文(晩期)・弥生	95	梅ノ木	散布地	奈良・平安
46	塩釜	集落跡	縄文(中期)	96	中落合館	館跡	中世
47	清水ノ下	散布地	古墳(後期)	97	中落合	集落跡	古墳・奈良・平安・近世
48	中野	散布地	縄文(中期)・平安	98	檜原	集落跡	奈良・平安・中世・近世
49	天王	墓跡・集落跡	古墳・奈良・平安・中世	99	庚壇	集落跡	縄文・弥生(後期)・古墳・奈良・平安・近世
50	掛在家	集落跡	縄文(前期)・弥生・古墳(後期)・奈良	100	北前	散布地	縄文(晩期)

番号	遺跡名	種　別	時　代	番号	遺跡名	種　別	時　代
101	長瀞館	館跡	中世	127	長岡山	集落跡	旧～中石器・縄文(中期)・古墳
102	関根館	館跡	中世	128	長岡館	館跡	中世
103	露橋A館	館跡	中世	129	長岡山東	散布地	中世
104	露橋B館	館跡	中世	130	太子堂	散布地	平安
105	植木場	墓跡・集落跡・館跡	古墳・平安・中世・近世	131	椚塚館	館跡	中世
106	宮崎館	館跡	中世	132	李の木	包蔵地	縄文・平安
107	沖田館	館跡	中世	133	早稲田	散布地	奈良
108	大屋敷	散布地	平安	134	矢の目館	館跡	平安？・中世
109	畿内城館	館跡	中世	135	東六角	集落跡	縄文(中期)・平安
110	畿内田	散布地	平安	136	諏訪前	散布地・集落跡	縄文(中期)・古墳(前期)・平安
111	大野原館	館跡	中世	137	横沢	散布地	縄文(中・後期)・奈良
112	窪田尻	散布地	平安	138	二色根古墳群	古墳群	古墳(終末期)
113	大橋城	城館跡	中世	139	二色根館	城館跡	中世
114	御殿跡	館跡	中世	140	狸沢山古墳群	古墳群	古墳(終末期)
115	舟入	散布地	縄文・平安	141	上野山古墳群	散布地・古墳群	弥生・古墳(終末期)
116	押出	集落跡	縄文(前期)	142	中野山館	館跡	中世
117	東畑B	散布地	平安	143	上野山館	城砦・砦	中世
118	東畑A	集落跡	奈良・平安・近世	144	鳥帽子山古墳	古墳	古墳(終末期)
119	水上	散布地	奈良・平安	145	鳥帽子山経塚	経塚	平安
120	熊の前館	館跡	中世	146	上ノ山	散布地	縄文
121	鵜の木館	集落跡・城館跡	古墳・平安・中世・近世	147	稲荷前	散布地	縄文(前期)
122	内城館	館跡	中世	148	北町	散布地	縄文(前期)
123	中ノ目下	散布地	奈良・平安	149	夷平	散布地	縄文(晩期)・中世？
124	長岡南森	散布地	縄文(中期)・古墳(前・中期)	150	月ノ木B	集落跡	縄文(早～中期)・弥生(中期)
125	長岡西田	散布地	縄文(中期)	151	月ノ木A	散布地	平安
126	稲荷森古墳	散布地・古墳	旧石器・縄文(中世)・古墳(前期)	152	十分の一山	集落跡	縄文(中期)

大野平遺跡

稲荷森古墳

Ⅲ　遺跡の概要



遺跡範囲　調査区

第２図　調査概要図

上大作裏遺跡は南陽市大字砂塚字大作前ほか（北緯38度03分28秒・東経140度06分43秒）に所在する。

遺跡の発見は、昭和58年の遺跡分布調査で縄文土器片と石器剥片を収集したことによる。縄文土器片はいずれも細片で、時期の判別は困難であった。（佐藤1987）一般国道113号赤湯バイパス改築事業に係る平成８年度の分布調査によって、縄文・平安時代の複合遺跡として登録された。遺跡範囲は東西550m・南北270mほどと推定され、標高は220mを測る。（山形県教委1997）

遺跡は宮内扇状地の扇央部、織機川の旧河道とみられる自然堤防上の微高地に立地する。事業予定地に係る遺跡範囲の北東部が調査の対象となり、現況は自然堤防上の微高地を利用した畑地や果樹園であった。第１次調査区は旧河道右岸の自然堤防東縁にあたる約1800㎡の範囲である。第２次調査区は第１次調査区から西方へ70mほど離れた約4000㎡の範囲である。自然堤防の段丘縁辺にあたる第１次調査区に対し、自然堤防内部の第２次調査区は河川からやや離れた比較的安定した微高地に位置していたと言えよう。

1　遺跡の層序

事前の試掘調査におけるトレンチ層序を基に、遺跡の層序について概略を述べる。

第１次調査区の北縁辺にあたる試掘トレンチ（第７図ＴＴ１）によると、Ⅰ層が暗褐色シルト、Ⅱ層が黒褐色砂質シルト、Ⅲ層がにぶい黄褐色シルトとなる。Ⅲ層上面が遺構確認面と思われ、地表下60～80cmを測る。（山形県教委2007）第１次調査では、調査区東・南端の段丘縁辺の落ち込みにおいて、人為的な埋め立てによると考えられる堆積層が確認されている。

第２次調査区の南縁辺にあたる試掘トレンチ（第７図ＴＴ２）によると、１層が盛土、２層が暗褐色シルトで現況の桜桃果樹園の耕作土と思われる。３層が黒褐色シルト、４層が青灰色シルト、５層が暗黄褐色砂質シルトとなる。第２次調査における検出面は、５層上面に相当するものと思われる。第２次調査では重機による表土除去の際、調査区南東域において河川氾濫に由来するとみられる褐色系砂礫の間層が確認されており、試掘調査において「遺跡南東域の一部は洪水等の影響を受けた」と判断された所見と矛盾しない。（山形県教委2008）なお、調査区内は全体的に地下水位が高く、地山の砂質土層の影響もあってか、湧水のため水没する遺構が多く見受けられた。

2　遺構・遺物の分布

第１・２次調査における遺構・遺物の分布について、それぞれ概要を記す。

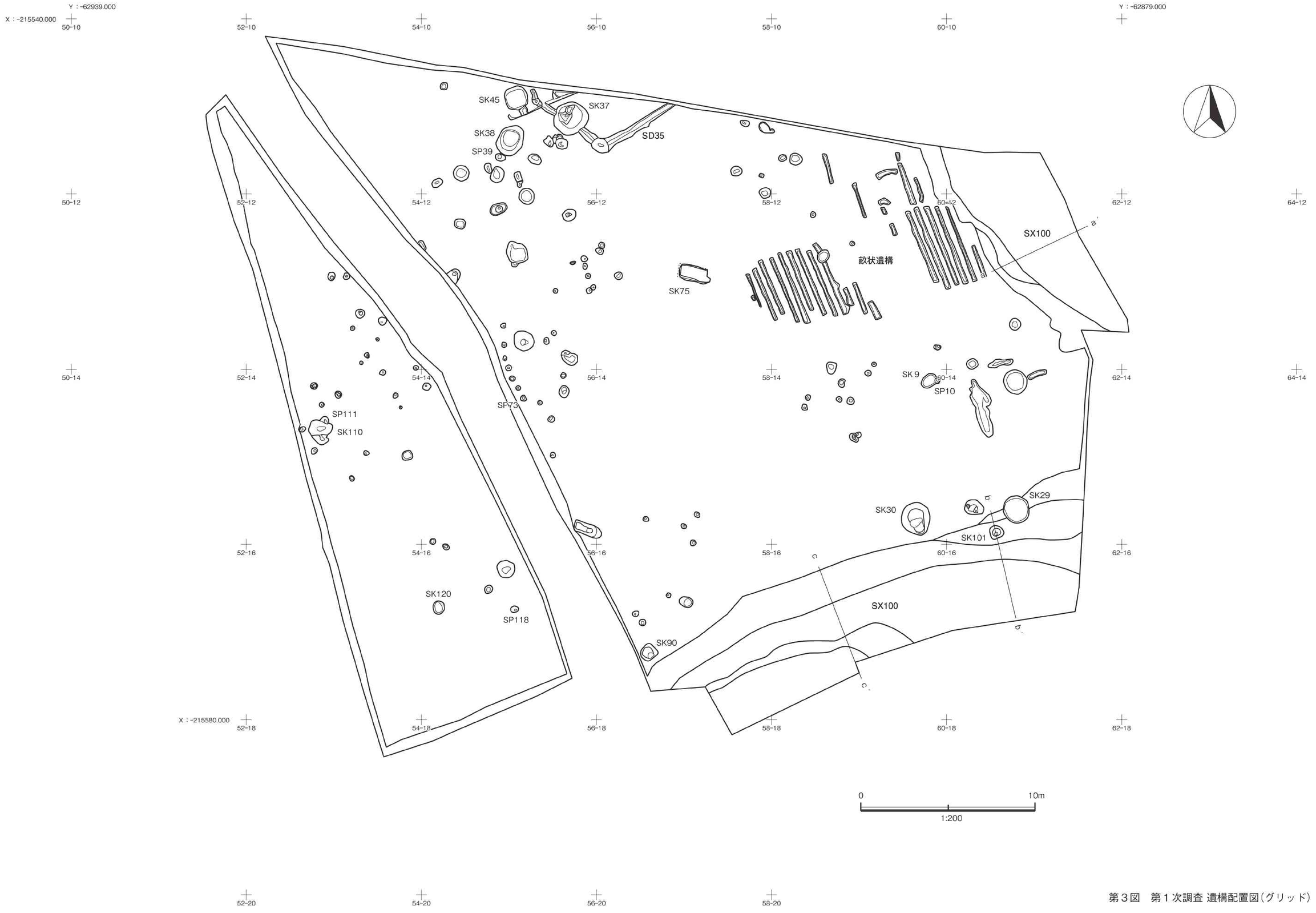
第１次調査では120基の遺構が検出され、整理箱にして20箱の遺物が出土した。主な遺構としては、中央部北側に縄文時代前期末葉の陥穴１基（ＳＫ75）、北東部に畝状遺構がある。この他に土坑・ピットなどもあるが、出土遺物などによって帰属時期が明らかなものは一部に限られる。特に南縁辺において、奈良・平安時代の土坑・ピット（ＳＫ30・90・101・ＳＰ118）と焼土堆積土坑（ＳＫ30・120）が集中して分布する傾向が窺える。また、前述した東・南端の段丘堆積層（ＳＸ100）内から、縄文・弥生・平安時代などの遺物が混在して出土している。これらは第１次調査における出土遺物の98.7％をも占め、その主体となるのは弥生時代中期後半の土器群である。土器以外には、縄文時代の石器（石鏃・石匙・石箆）や古墳時代以降と考えられる木製品（鍬）などがある。調査区内に住居跡は認められず、他の遺構や遺物、地形の状況からも、当地は集落域の外縁として狩猟場や畑地に利用されたものと推察される。

第２次調査では500基を超える遺構が検出され、整理箱にして３箱の遺物が出土した。遺構は調査区のほぼ全域に幅広く分布するが、地形に即した形で地盤の低い南西域において希薄となる。また、自然地形に関わって、北西部の縁辺では倒木痕が目立ち、南半部の東縁では河川跡（ＳＧ340）とみられる褐色系砂礫の厚い堆積が確認された。なお、中央部東側（35～39－13～15グリッド）において、地山の上層面から溝跡・土坑数基を検出しており、ある時期における生活面と目される。主な遺構の分布については、竪穴住居跡が北西域を中心に５棟検出されている。そのうち２棟（ＳＴ242・290）は縄文時代早期後葉、２棟（ＳＴ240・300）は前期初頭に属する。早期の住居跡２棟の間には、当該期に属する墓壙１基（ＳＫ251）が位置している。また、ＳＴ290周辺（ＳＫ271・272・339）、ＳＴ300内（ＥＫ344）とその周辺（ＳＫ314・315・324・325）において袋状土坑の分布がまとまって認められ、縄文時代の住居跡に付随する貯蔵穴群とみられる。なお、これらの住居跡（ＳＴ240・242・290）には、土製品の有孔円板が複数伴出しており、留意される。その他の遺構としては、北辺部に溝跡３条（ＳＤ209・210・243）と北東・南西部に井戸跡２基（ＳＥ327・285）がそれぞれ分布している。これらは概ね中世に属するものと思われる。第２次調査における出土遺物は整理箱にして３箱だが、遺構に伴う遺物の割合は87.8％と高く、その帰属時期を判断する有効な資料となっている。したがって、遺物の分布についても、遺構と相関した状況を示している。

調査全体の成果を概括すると、総じて第１次調査では弥生時代の遺物、一方、第２次調査では縄文時代の遺構を主体とする結果が得られた。第１次調査で出土した弥生時代中期後半の土器および第２次調査で検出された縄文時代早期の竪穴住居跡は、いずれも県内では資料数や調査例が少なく、貴重な発見と言えよう。今回の調査によって上大作裏遺跡は、主に縄文時代（早期・前期）・弥生時代（中期）・平安時代（９世紀）・中世（13世紀）の複合遺跡であることが明らかとなった。遺跡の北東には、当該期の土器片が採集された掛在家遺跡（縄文時代前期初頭・弥生時代中期後葉）さらには高山原遺跡（縄文時代前期初頭）が隣接している（佐藤1987・1990）。また、第１次調査からは、集落として定着を見せ始める弥生時代の住居跡が、周囲に存在することも予測される。旧河道右岸の自然堤防に沿って、遺跡はさらに広がる可能性がある。

引用文献

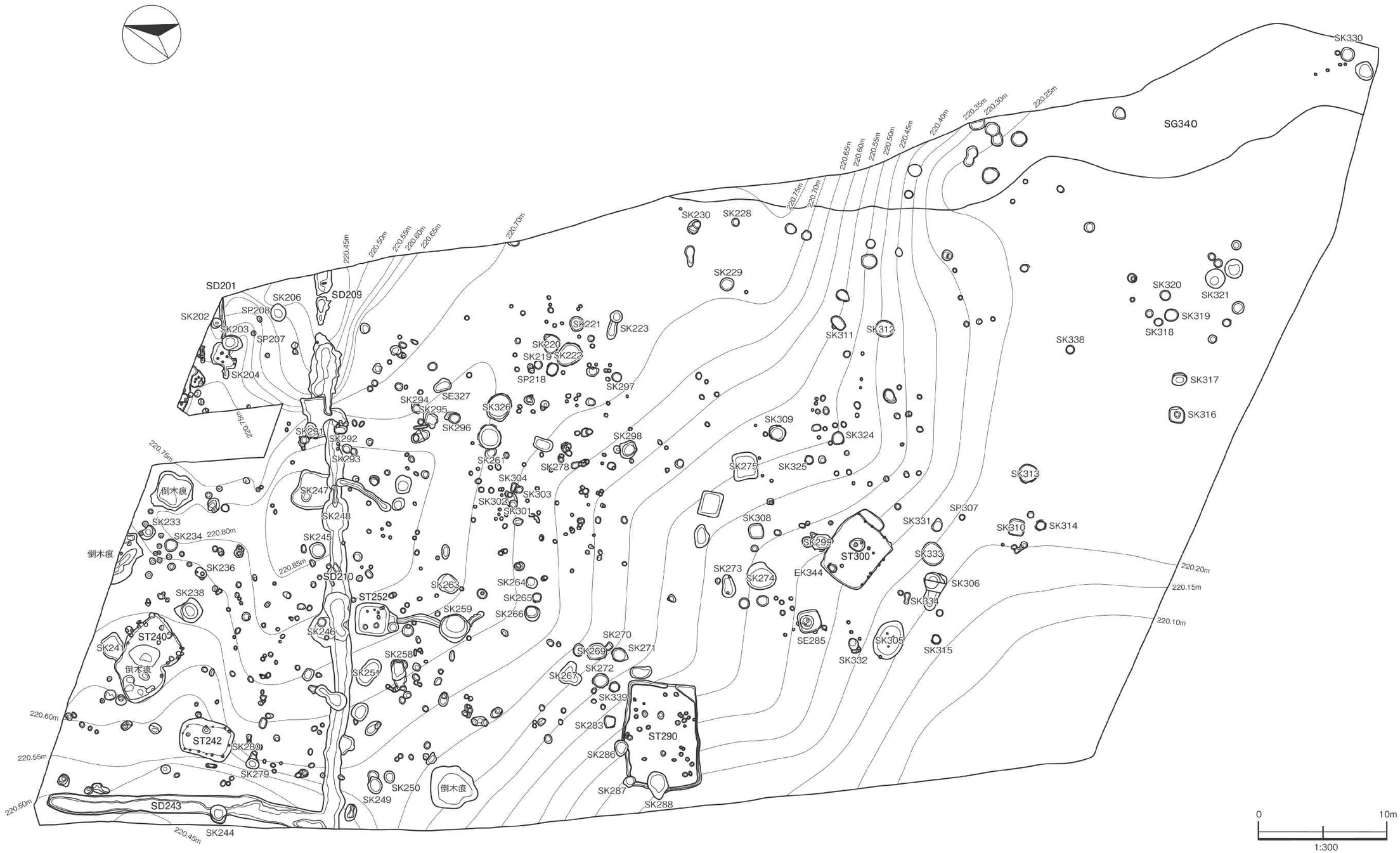
佐藤鎮雄　1987　『南陽市史 考古資料編』南陽市史編さん委員会
佐藤鎮雄　1990　『南陽市史 上巻』南陽市史編さん委員会
山形県教育委員会　1997　『分布調査報告書（24）』山形県埋蔵文化財調査報告書第198集
山形県教育委員会　2007　『分布調査報告書（33）』山形県埋蔵文化財調査報告書第207集
山形県教育委員会　2008　『分布調査報告書（34）』山形県埋蔵文化財調査報告書第208集



第３図　第１次調査 遺構配置図（グリッド）

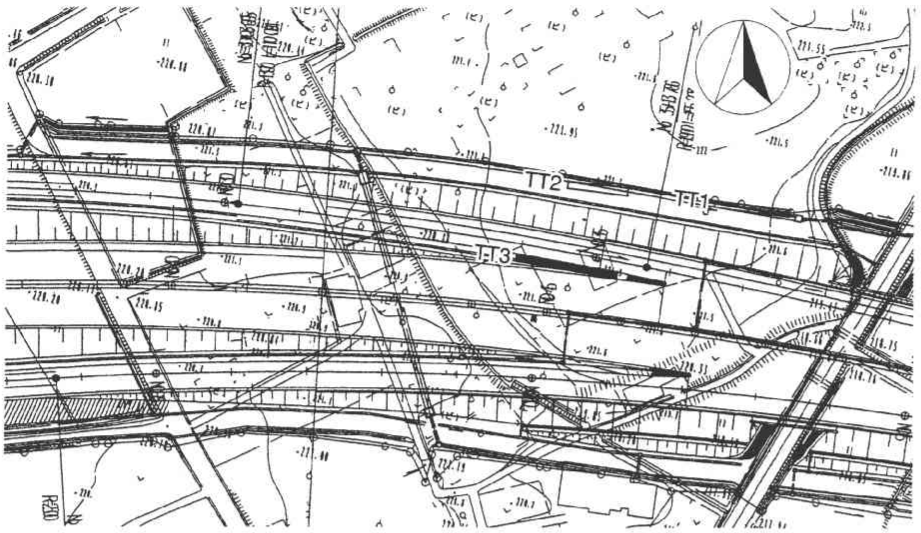
第４図　第１次調査 遺構配置図（等高線）

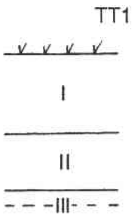
第５図　第２次調査　遺構配置図（グリッド）



第６図　第２次調査　遺構配置図（等高線）

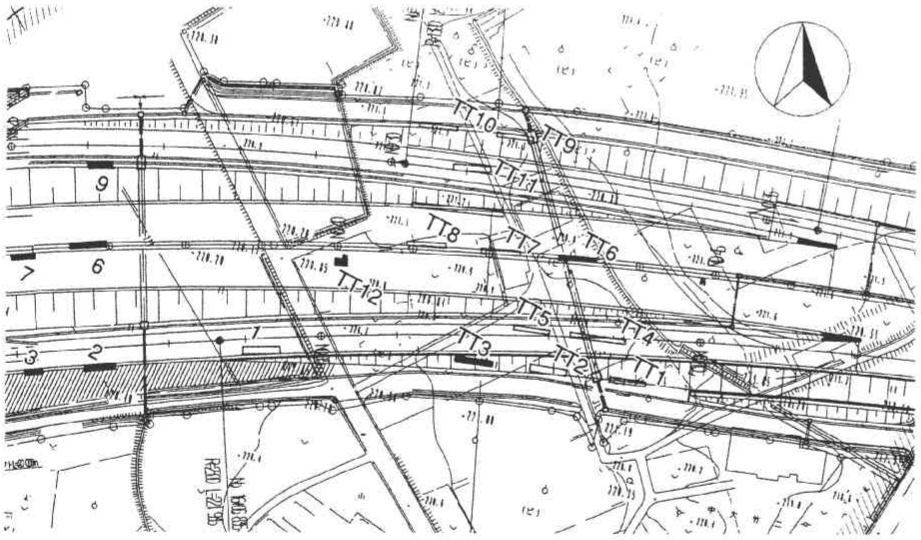
平成17年　試掘調査（第１次調査区）

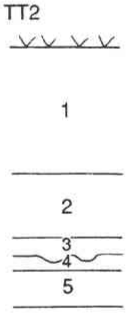




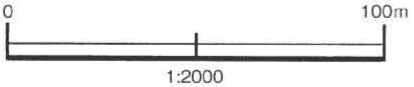
Ⅰ　暗褐色シルト
Ⅱ　黒褐色砂質シルト
Ⅲ　にぶい黄褐色シルト

平成18年　試掘調査（第２次調査区）





1　盛土
2　暗褐色シルト（耕作土）
3　黒褐色シルト
4　青灰色シルト
5　暗黄褐色砂質シルト



遺構・遺物の検出トレンチ

遺構・遺物の未検出トレンチ

第７図　試掘調査　概要図･断面略図

Ⅳ　検出遺構

1　第１次調査の遺構

第１次調査では120基の遺構が検出された。主な遺構としては、縄文時代の陥穴、焼土堆積土坑、畝状遺構などがある。この他に遺構ではないが、調査区東・南端の段丘縁辺において多量の遺物を混在する堆積層が確認された。

以下に、種別ごと主要な遺構の概要を記す。

（1）土坑・ピット

100基余りの土坑・ピットが検出された。出土遺物などから帰属時期が明らかなものは一部に限られるが、概ね縄文時代、弥生時代、奈良・平安時代に属するものと思われる。調査区北西部において土坑・ピットが密集する様相を呈しており、中には柱穴とみられるピット群もあるが、遺構を構成する規則的な配置は認められなかった。また、調査区南縁辺に沿って、奈良・平安時代の土坑・ピットと焼土堆積土坑が集中して分布する傾向が窺えた。

以下では、陥穴１基・焼土堆積土坑２基、その他に主要な遺物が出土した土坑・ピットなどを取り上げて概説する。

陥　穴

ＳＫ75（第９図　写真図版19・21・23）

調査区中央部北側（56・57－12グリッド）に位置し、東に畝状遺構が近接する。他に並列するような陥穴は認められず、単独的な在り方を示している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、長軸は等高線の傾斜に沿った方向を示している。壁面は垂直あるいはややオーバーハングぎみに立ち上がり、底面は平坦で開口部に即した不整長方形を呈する。底部に逆茂木痕と考えられるようなピット状の掘り込みは認められなかった。規模は長径1.7m・短径0.9m、検出面からの深さ70cmを測る。覆土は黒色系シルトと黄褐色系砂礫がほぼ水平な状況で交互に重なり、自然堆積によるものと考えられる。出土遺物は、覆土から弥生時代中期中葉の土器片（遺物：261）やフレイクのほか、縄文土器片（遺物：前期末葉の１・２を含む）が多く出土した。規模や形状、出土遺物から、縄文時代前期末葉に属する陥穴と判断され、段丘縁辺の旧河川へと向かう獣道に配されたものと推測される。

焼土堆積土坑

ＳＫ30（第10図　写真図版４・19・21・23）

調査区南東部（59－15グリッド）に位置し、ＳＸ100南端に近接する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面は南東に段を形成して緩やかに立ち上がる。規模は長径1.9m・短径1.6m、検出面からの深さ53cmを測る。底面において焼土の堆積が確認されている。出土遺物は、覆土から弥生土器片（遺物：257～259）、平安時代の須恵器片（遺物：278）、磨り痕のある礫片、砥石片、フレイクのほか、縄文土器片が多く出土した。帰属時期は、概ね平安時代と考えられる。

ＳＫ120（第８図　写真図版23）

調査区南西部（54－16グリッド）に位置し、東に古代の土師器片を伴出するＳＰ118が隣接する。平面形は楕円形で、底面が浅く平らな皿状を呈している。規模は長径0.8m・短径0.6m、検出面からの深さ20cmを測る。検出面の表層にあたる覆土１層において、ブロック状の焼土の堆積が確認されている。出土遺物はなく、帰属時期は不明である。

その他の土坑・ピット

ＳＫ９（第８図　写真図版21・23）

調査区東部中央（59－14グリッド）に位置し、南東をＳＰ10に切られる。平面形は楕円形を呈し、緩やかに湾曲して浅く掘り込まれる。規模は長径１m・短径0.7m、検出面からの深さ12cmを測る。出土遺物は、覆土から石匙（遺物：68）が出土した。帰属時期は、概ね縄文時代と考えられる。

ＳＰ73（第８図　写真図版４）

調査区を横断する農道の中央部東側（55－14グリッド）に位置し、農道に沿って並列するピット群の一部である。平面形は不整円形を呈し、壁面は急に立ち上が

り、底部はやや丸みをおびる。規模は直径32cm前後、検出面からの深さ18cmを測る。出土遺物は、覆土から弥生時代中期後半の土器片（遺物：260）とフレイクが出土した。帰属時期は、概ね弥生時代中期後半と考えられる。

ＳＫ90（第８図　写真図版４・21・23）

調査区南縁の農道東側（56－17グリッド）に位置し、ＳＸ100南端に近接する。平面形は不整隅丸方形を呈し、壁面は急に立ち上がり、底部は南東に傾いている。規模は両径とも0.9m前後、検出面からの深さ62cmを測る。出土遺物は、覆土から平安時代の須恵器片、砥石片、フレイクのほか、縄文土器片と弥生土器片（遺物：中期中葉の262・264と263を含む）が多く出土した。帰属時期は、概ね平安時代と考えられる。

ＳＫ101（第８図　写真図版４・21・23）

調査区南東端（60－15グリッド）に位置し、ＳＸ100南端の東側ベルト内から検出された。重複関係は、ＳＸ100の覆土１・２層の下面において堆積層を切っている。平面形は不整円形で、底部が狭まる擂鉢状を呈し、段丘面に沿って開口部が傾いている。規模は直径0.8m前後、検出面からの深さ38cmを測る。出土遺物は、覆土から奈良・平安時代の土師器片と平安時代（９世紀）の須恵器片（遺物：274）が出土した。帰属時期は、概ね平安時代と考えられる。

ＳＰ118（第８図）

調査区南縁の農道西側（55－16グリッド）に位置し、西に焼土を堆積するＳＫ120が隣接する。平面形は楕円形を呈し、緩やかに湾曲して浅く掘り込まれる。規模は長径46cm・短径36cm、検出面からの深さ22cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文土器片と奈良・平安時代の土師器片が出土した。帰属時期は、概ね奈良・平安時代と考えられる。

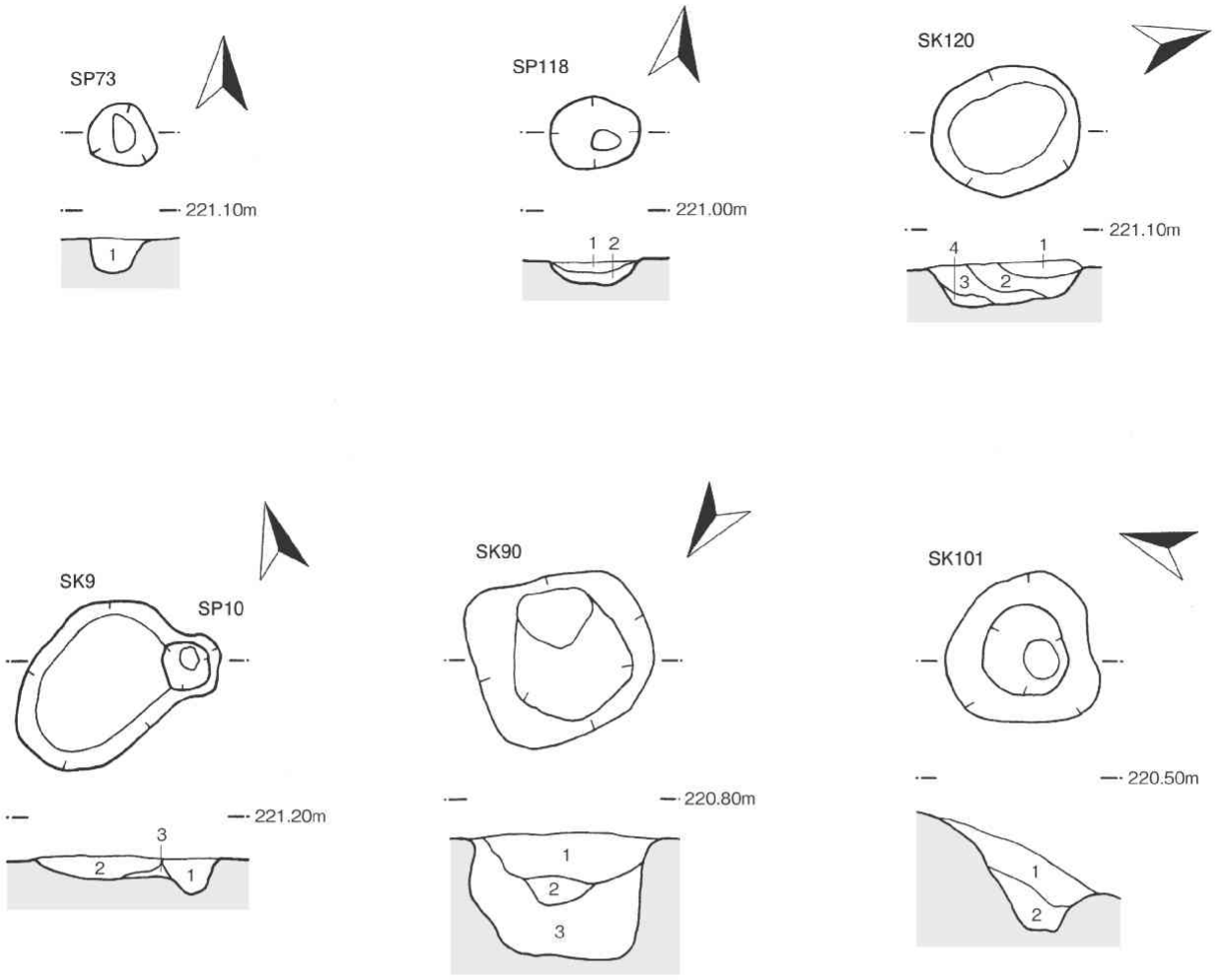
（２）畝状遺構（第３図　写真図版９）

調査区北東部（57～60－11～13グリッド）の南北9.8m×東西13.6mの範囲内で検出された。28cm前後の間隔で、南北方向に並行する畝状の溝跡群である。各溝跡の規模は、長さ４m・幅24cm前後を測る。溝跡の大きさや方向・間隔が一様であることから判断して、畑の畝跡と思われる。出土遺物はなく、帰属時期は判然としないが、概ね近世以降の比較的新しい時代のものであろう。

（３）段丘堆積層

ＳＸ100（第11図　写真図版９～11）

調査区東端（59～62－11～13グリッド）および南端（57～61－15～18グリッド）に位置し、自然堤防の縁辺にあたる段丘の落ち込み部分で確認された堆積層である。堆積層に近接する調査区南縁辺には、重複するＳＫ101をはじめ、ＳＫ30・90といった平安時代の土坑がまとまって分布する。規模はＳＸ100南端の東側ベルトにおいて、現地形における段丘上端までの幅4.8m、現地表面からの深さ1.8mを測る。土層観察からは、地山に由来するとみられる黄色粘土ブロックを覆土に多く含むなど、人為的な埋め立てによる堆積であることが看取された。特にＳＸ100南端においては、均質な土層が幾重にもわたって水平に堆積することから、表面を均しながら埋め立てる行為がくり返し行われたものと考えられる。堆積層内からは第１次調査における全出土量の98.7％にも及ぶ遺物が出土しており、縄文～平安時代の遺物が層全体に混在する状況を呈していた。なお、下層において主体を占めたのは、弥生土器（中期後半）であった。これらのことから、本堆積層の堆積が始まったのは弥生時代中期以降で、遅くとも平安時代には旧地形における段丘上端のレベルまで、ほぼ埋め立てが完了していたものと推定される。



SK9・SP10
1　10YR2/1　黒色　　シルト　(粗砂混入 SP10覆土)
2　10YR2/2　黒褐色　　シルト　(粗砂混入 SK9覆土)
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　粗砂　(地山)

SP73
1　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR4/3砂をブロック状で10%含む)

SK90
1　10YR2/1　黒色　　シルト　(2～5mm大の小礫を含む　土器片包含)
2　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR4/3シルト・砂をブロック状で20%含む)
3　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR4/3細砂をブロック状で10%含む)

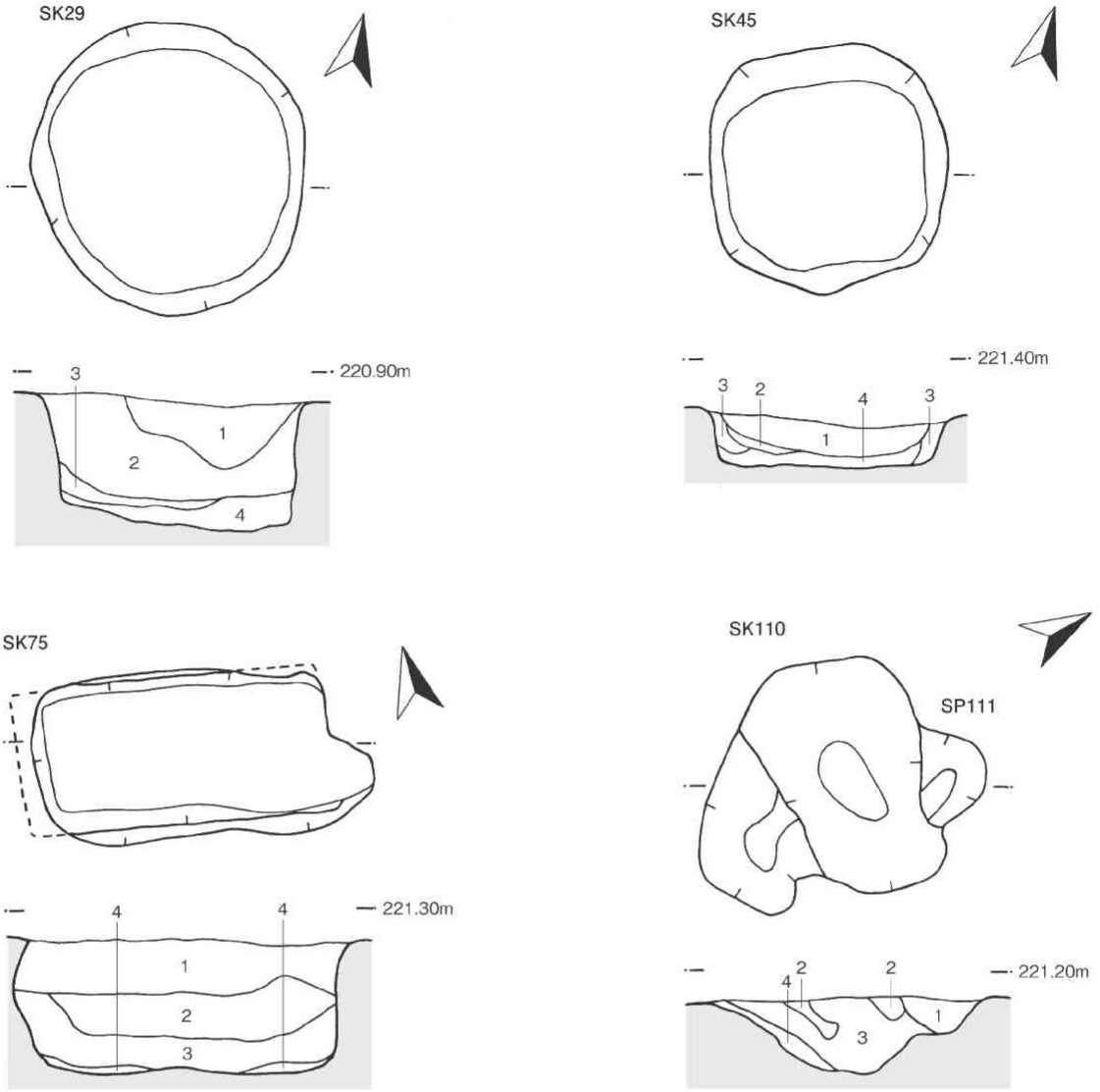
SK101
1　7.5YR3/1　黒褐色　　シルト　(10YR4/3シルト・砂をブロック状で10%含む)
2　2.5Y2/1　黒褐色　　シルト　(2～5mm大の小礫を含む)

SP118
1　10YR2/2　黒褐色　　シルト　(ほぼ純層　土器片包含)
2　10YR3/3　暗褐色　　シルト　(10YR2/2シルトをブロック状で10%含む)

SK120
1　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR3/3シルトを縞状で40%含む 焼土をブロック・塊で混入)
2　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR3/3シルトを縞状で20%含む)
3　10YR2/1　黒色　　シルト　(10YR3/3シルトをブロック状で10%含む　10YR5/3粘土のブロックあり)
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂　(10YR2/1シルトをブロック状で5%含む)

0　1m
1:40

第８図　第１次調査　土坑(SK9・90・101・120　SP10・73・118)



SK29

1	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂～粗砂	(10YR3/1シルトをまだら状に含む 小礫混入)
2	10YR3/1	黒褐色	シルト	(10YR4/3細砂をブロック状で５％含む)
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	粗砂	
4	10YR2/1	黒色	シルト	(粗砂混入)

SK45

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR3/3砂をブロック状で10％含む)
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	(ほぼ純層)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR3/3シルトをブロック状で20％含む)
4	10YR3/1	黒褐色	シルト	(粗砂～小礫混入)

SK75

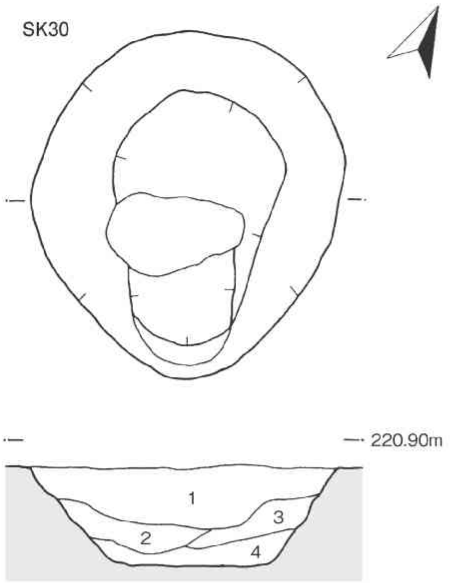
1	10YR2/1	黒色	シルト	(小礫・樹根を含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/3細砂をブロック状で5％含む 砂礫の塊あり)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/3細砂をブロック状で20％含む)
4	10YR5/3	にぶい黄褐色	砂	(地山)

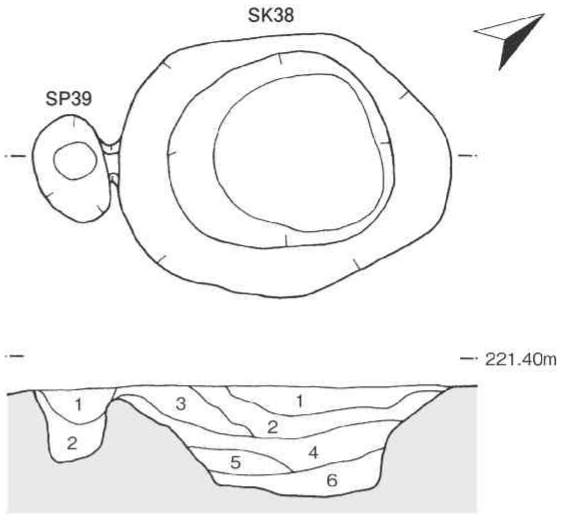
SK110・SP111

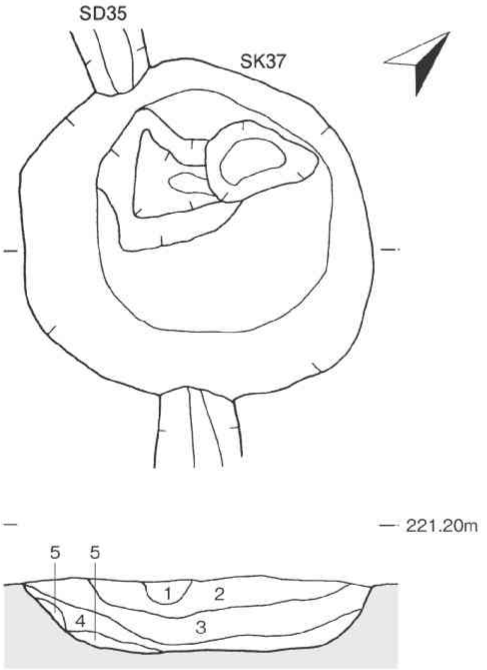
1	10YR2/1	黒色	シルト	(小礫混入 SP111覆土)
2	砂～小礫のブロック塊			
3	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/3砂をブロック状で5％含む)
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	(10YR2/1シルトをブロック状で20％含む)

0　1m
1:40

第９図　第１次調査　土坑(SK29・45・75・110　SP111)







SK30
1　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（小礫混入）
2　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（10YR4/3細砂混入 10YR5/3粘土塊あり）
3　10YR3/2　黒褐色　　シルト
（10YR4/3細砂をブロック状で5％含む）
4　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（10YR4/3細砂をブロック状で10％含む 一部に焼土あり）

SD35・SK37
1　10YR2/1　黒色　　シルト
（SD35覆土）
2　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（2～5mm大の小礫を含む　以下ＳＫ37覆土）
3　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（10YR3/3砂をブロック状で3％含む）
4　10YR2/1　黒色　　シルト
（10YR3/3砂をブロック状で5％含む）
5　10YR5/3　にぶい黄褐色 粗砂

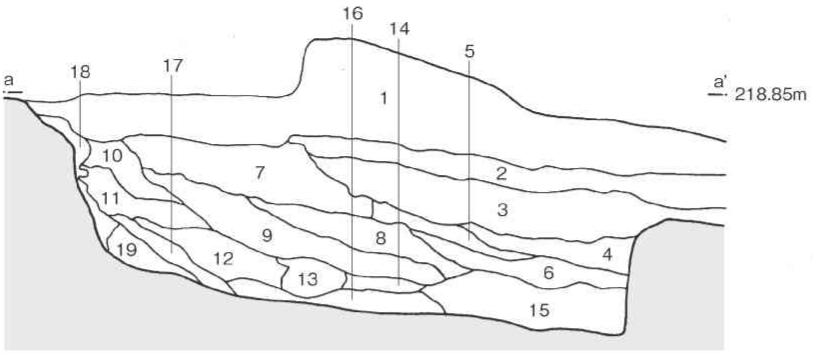
SK38
1　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（10YR3/3細砂をブロック状で5％含む）
2　10YR2/2　黒褐色　　シルト
（10YR3/3細砂をブロック状で40％含む）
3　10YR2/1　黒色　　シルト
（粗砂～小礫混入）
4　10YR2/1　黒色　　シルト
（10YR3/3細砂をブロック状で30％含む）
5　10YR3/3　暗褐色　　細砂
（小礫混入 10YR2/1シルトを帯状で20％含む）
6　10YR3/3　暗褐色　　細砂
（粗砂～小礫混入 10YR2/1シルトをブロック状で5％含む）

SP39
1　10YR2/1　黒色　　シルト
（2～5mm大の小礫を含む）
2　10YR3/3　暗褐色　　砂
（10YR2/1シルトをブロック状で20％含む）

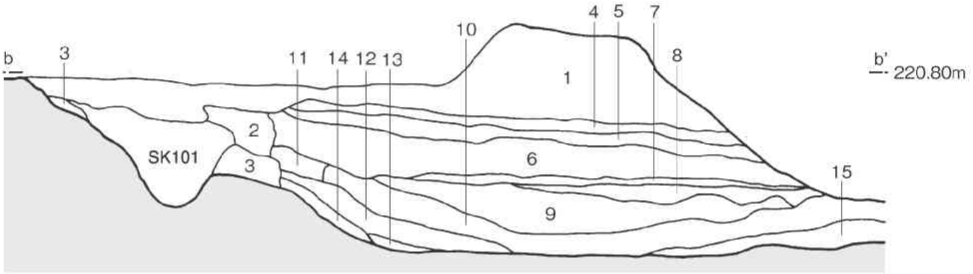
0　1m
1:40

第10図　第１次調査　土坑（SK30・37・38　SP39　SD35）

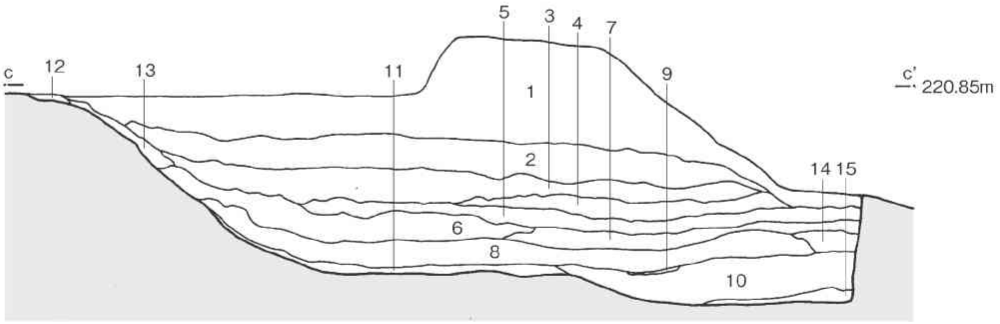
SX100東端のベルト（第３図a－a'）

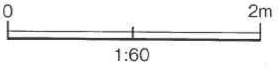


SX100南端の東側ベルト（第３図b－b'）



SX100南端の西側ベルト（第３図c－c'）





第11図　第１次調査　SX100ベルト断面

SX100東端のベルト（第3図 a－a'）

1	10YR3/2	黒褐色	シルト	（しまりを欠く 砂礫混入）
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 2mm大の炭化粒を少し含む）
3	10YR2/3	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 2mm大の炭化粒をわずかに含む）
4	10YR4/1	褐灰色	粘質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 10YR7/8粘土ブロックを多く含む）
5	10YR4/1	褐灰色	粘質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 10YR7/8粘土ブロックを多く含む　風化礫を多く含む）
6	10YR4/1	褐灰色	粘質土	（ややしまりを欠く 砂粒混入 10YR7/8粘土ブロックを多く含む）
7	10YR3/1	黒褐色	シルト	（しまりを欠く 砂粒混入 2mm大の炭化粒をわずかに含む）
8	10YR3/1	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 風化礫をやや多く含む）
9	10YR2/1	黒色	シルト	（ややしまりを欠く 砂粒混入 風化礫をやや多く含む）
10	10YR3/1	黒褐色	砂質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 風化礫をやや多く含む）
11	10YR3/1	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 10YR4/2砂質土を混入するため、色調が明るい）
12	10YR3/1	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 20mm大の10YR7/8粘土ブロックを少し含む）
13	10YR5/1	褐灰色	粘質土	（しまりを欠く 砂粒混入 酸化鉄溶脱）
14	10YR5/1	褐灰色	シルト	（ややしまりを欠く 13よりも砂粒の混入が多い）
15	10YR1.7/1	黒色	粘質土	（しまりを欠く 砂粒混入 20mm大の10YR5/1粘土ブロックを少し含む）
16	5Y4/1	灰色	砂質土	（しまりを欠く 粒子の細かい砂質土 上位は暗褐色を帯び、粘質土が混じる）
17	10YR2/2	黒褐色	粘質土	（しまりを欠く 砂粒がやや多く混じる）
18	10YR4/2	灰黄褐色	砂質土	（しまりを欠く 地山との漸移層）
19	10YR2/2	黒褐色	砂質土	（ややしまりを有す 上位に粘質土が混じる）

SX100南端の東側ベルト（第3図 b－b'）

1	10YR2/1	黒色	シルト	（砂礫が多く混じる 植物根を含む 表面の乾燥が速く、灰色を呈する）
2	7.5YR3/1	黒褐色	粘質土	（ややしまりを有す 砂礫混入 砂質土との撹拌状態）
3	7.5YR3/2	黒褐色	砂質土	（しまりを有すが、崩落が著しい 砂礫と10YR4/4粘土のブロックを含む 地山の漸移層）
4	2.5Y2/1	黒褐色	粘質土	（ややしまりを有す 砂礫混入 1に比して黒色が強く、帯状に堆積 植物根を含む）
5	5YR3/1	黒褐色	シルト	（しまりを有す 砂礫混入 4に比して色調が明るく、帯状に堆積 植物根を含む）
6	7.5YR3/1	黒褐色	シルト	（しまりを有す 砂礫混入 5に比して若干色調が暗い 植物根を含む）
7	5YR3/1	黒褐色	シルト	（しまりを有す 砂礫混入 6に比して若干色調が明るい 金雲母を多く含む）
8	10YR3/2	黒褐色	砂質土	（しまりを有す 砂粒混入 7に比して灰色が強い 10YR7/8粘土のブロックを含む）
9	5Y3/1	オリーブ黒色	砂質土	（しまりを有す 砂粒混入 20mm大の10YR7/8粘土のブロック・金雲母を多く含む）
10	2.5Y4/1	赤黒色	粘質土	（しまりを欠く 砂粒混入 30mm大の10YR7/8粘土のブロック・金雲母を多く含む）
11	10YR3/1	黒褐色	粘質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 10と同層位であるが、根による撹乱が見られる）
12	10YR3/2	黒褐色	砂質土	（ややしまりを欠く 酸化鉄により部分的に赤化している）
13	2.5Y2/1	黒褐色	粘質土	（しまりを欠く 10に比して砂粒の混入が多い 10YR7/8粘土のブロックを多く含む）
14	10YR3/2	黒褐色	砂質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 同色の粘土が少し混じる）
15	10YR4/1	褐灰色	砂質土	（しまりを有す 砂粒混入）

SX100南端の西側ベルト（第3図 c－c'）

1	10YR3/2	黒褐色	シルト	（ややしまりを欠く 砂粒混入 根の混入が著しい 現表土）
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 根の混入が著しい）
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	（ややしまりを有す 砂粒混入 2に比して色調が暗く、砂質土が混じる）
4	10YR4/1	褐灰色	砂質土	（しまりを有す 砂粒混入 10YR3/1粘土のブロックを含む）
5	10YR4/1	褐灰色	砂質土	（しまりを有す 砂粒混入 4に比して色調がやや暗い）
6	10YR3/1	黒褐色	粘質土	（しまりを有す 砂粒混入 10YR7/8粘土のブロックを多く含む 炭化物を少し含む）
7	10YR2/1	黒色	粘質土	（しまりを有す 砂粒混入 6に比して10YR5/4粘土のブロックの粒が小さい）
8	10YR2/1	黒色	粘質土	（ややしまりを欠く 10YR7/8粘土のブロックを多く含む 酸化鉄溶脱）
9	7.5YR4/4	褐色	砂質土	（ややしまりを欠く 酸化鉄により部分的に赤化している）
10	10YR2/1	黒色	粘質土	（ややしまりを欠く 8に比して砂質土が混入が多い 炭化物を含む）
11	10YR5/4	にぶい黄褐色	砂質土	（ほぼ純層 しまりを有するが、もろく崩落が著しい）
12	10YR6/6	明黄褐色	砂質土	（ややしまりを欠く 5mm以下の砂粒からなる 10YR3/2粘土を含む）
13	10YR2/1	黒色	シルト	（ややしまりを欠く 砂粒混入 10YR7/8粘土・10YR5/4砂質土のブロックを含む）
14	10YR4/1	褐灰色	粘質土	（ややしまりを有す 砂粒混入 風化礫を含む）
15	10YR5/1	褐灰色	粘質土	（しまりを欠く 10YR7/8粘土のブロックを多く含む 酸化鉄により部分的に赤化している）

2　第２次調査の遺構

第２次調査では500基を超える遺構が検出された。主な遺構としては、縄文時代の竪穴住居跡・墓壙・袋状土坑、中世の溝跡・井戸跡、焼土堆積土坑などがある。

以下に、種別ごと主要な遺構の概要を記す。

（1）竪穴住居跡

長方形・方形プランの竪穴住居跡が５棟検出された。地形に即した分布を示し、地盤の低い南辺域からは検出されていない。プランの形状は縄文時代において早・前期の特徴を有するもので、出土遺物からは早期後葉２棟（ＳＴ242・290）・前期初頭２棟（ＳＴ240・300）と判断された。ＳＴ252については、時期・性格ともに判然としない。炉跡はいずれからも検出されず、付属施設としては、ＳＴ300内の貯蔵穴とみられる袋状土坑１基のみである。全体的に出土遺物も少なく、季節などによる短期的な住居としての性格が想定される。

ＳＴ240（第12図　写真図版12～14）

調査区北西部（28～30－７・８グリッド）に位置し、南西にＳＴ242が隣接する。西側2/3以上が倒木痕による撹乱を受けたため全体は不明であるが、平面形は概ね隅丸長方形あるいは隅丸方形を呈するものと推測される。残存する東側の南北径で約４ｍ、検出面からの深さは13cmを測る。東側の壁面に沿って、壁柱穴とみられる複数のピットが認められる。北側の壁際では径25cmほどの範囲に焼土の堆積が確認されたが、その位置や規模からみて炉跡と判断されるものではない。なお、貼床などは認められなかった。出土遺物は、覆土から縄文時代前期初頭の有孔円板（遺物：42）やフレイクのほか、縄文土器（遺物：早期後葉の13と前期初頭の14・15を含む）が多く出土した。帰属時期は、概ね縄文時代前期初頭と考えられる。

ＳＴ242（第12図　写真図版12～14）

調査区北西部（28・29－９・10グリッド）に位置し、北東にＳＴ240が隣接する。平面形は南北方向を長軸とする隅丸長方形を呈し、長径5.2ｍ・短径2.8ｍ、検出面からの深さ35cmを測る。周壁に壁柱穴とみられる複数のピットが廻らされる。なお、貼床や炉跡などは認められなかった。出土遺物は、覆土から縄文時代早期後葉の土器片（遺物：16～21）と前期初頭の有孔円板（遺物：43）、石鏃の未成品（遺物：65）、石匙（遺物：75）、フレイクが出土した。帰属時期は、概ね縄文時代早期後葉と考えられる。

ＳＴ252（第13図　写真図版14）

調査区北西部（30・31－11・12グリッド）に位置し、平面形は隅丸方形を呈する。南側に段を形成して張り出し、さらに溝状の浅い掘り込みがＳＫ259まで延びる。張り出し部分を除く規模は、両径とも2.5ｍ前後、検出面からの深さは22cmを測る。覆土２層の一部において斑紋状を呈し、固く締まる粘土層が検出されており、貼床の可能性も考えられる。規模や配置などから柱穴と考えられるような土坑・ピットは認められず、炉跡なども検出されていない。出土遺物は、覆土から縄文土器片と石皿（遺物：91・92）が出土した。この他に平安時代（９世紀）の須恵器片（遺物：275）もあるが、検出面の表層から採取されたものであり、帰属時期を特定するものかどうかは判然としない。本遺構は、他の住居跡に比して小規模で、プランや構造にも差異が認められる。住居としての性格についても、不明瞭と言わざるを得ない。

ＳＴ290（第14図　写真図版８・15・16）

調査区中央部西側（29～31－15～17グリッド）に位置し、北東周辺には住居跡に付随する貯蔵穴とみられる複数の袋状土坑（ＳＫ271・272・339）が分布する。重複関係は、北側をＳＫ286・西側をＳＫ288に切られ、北西でＳＫ287を切っている。平面形は東西方向を長軸とする隅丸長方形を呈し、長径8.2ｍ・短径5.8ｍ、検出面からの深さ10cm前後を測る。当初の検出段階では、その規模の大きさから２棟重複の可能性も考えられたが、土層断面や完掘状況からみて単一の住居跡と考えられる。周壁に壁溝が浅く掘り廻らされているが、東側で一部途切れる箇所については入口施設との関連も示唆される。規模や配置などから柱穴と考えられるような土坑・ピットは認められず、貼床や炉跡なども検出されなかった。なお、ＳＫ287の覆土から焼土が検出されているが、土層観察から周溝の構築以前のものと判断され、住居跡との関連については判然としない。出土遺物は、覆土から石匙（遺物：73）や削器（遺物：85）のほか、縄文土器片（遺物：前期初頭の28と早期後葉～

前期初頭の27・29～33）と有孔円板（遺物：早期後葉の44～47と48）、フレイクが多く出土した。帰属時期は、概ね縄文時代早期後葉と考えられる。

ＳＴ300（第13図　写真図版８・16）

調査区南半部中央（33～35－17・18グリッド）に位置し、北側でＳＫ299に切られる。平面形は北西－南東方向を長軸とする隅丸長方形を呈し、北東に一段高く張り出したテラス状の平坦面を有する。張り出し部分を除く規模は長径５ｍ・短径4.2ｍ、検出面からの深さ11cmを測る。南東・南西の壁面に沿って、壁柱穴とみられる複数のピットが検出されている。貼床や炉跡は認められなかったものの、北西隅において貯蔵穴とみられる袋状土坑（ＥＫ344）が検出されている。なお、本住居跡の北東・南側周辺においても、住居跡に付随する貯蔵穴とみられる複数の袋状土坑（ＳＫ314・315・324・325）の分布が認められる。出土遺物は、覆土から石匙のミニチュア品（遺物：77）と削器（遺物：84）のほか、縄文時代前期初頭の土器片（遺物：35・36）とフレイクが多く出土した。帰属時期は、概ね縄文時代前期初頭と考えられる。

（2）溝　跡

調査区北辺部において、大小合わせて３条の溝跡が検出された。ＳＤ209・210については連続する同一の溝跡と考えられるが、別番号を付してある。また、ＳＤ243は南端をＳＤ210に接し、ＳＤ210と直交する形で北側に延びる。接点ではＳＤ210に切られており、構築時期はＳＤ210よりは古いと思われるが、出土遺物が少なく、詳細については不明である。

ＳＤ209・210（第15図　写真図版17）

調査区北辺部（27～36－９～11グリッド）を東西に横切る形で検出され、ほぼ直線状を呈している。調査区の両端からさらに調査区外へ延びるものと思われるが、調査区内における長さ約43m・幅1.3m前後、検出面からの深さ30cm前後を測る。断面形は概ね船底状を呈し、底面のレベルは221.3m前後でほぼ水平となる。重複関係は、前述したＳＤ243を切り、ＳＫ91・92に切られる。覆土は黒色シルトに砂・小礫を多く含み、レンズ状あるいは水平な堆積状況を呈することから、溝跡の埋没は自然堆積によるものと考えられる。覆土には、流れ込みとみられる縄文～中世の遺物が混在する様相を呈していた。主な出土遺物としては、縄文時代前期初頭の土器片（遺物：12）、弥生時代中期中葉の土器片（遺物：266）、奈良・平安時代の土師器片（遺物：286・300・301）と須恵器片（遺物：８世紀前葉の299と279・282・298）、中世（13世紀）の陶器片（遺物：291）、石匙（遺物：69・70）、石箆（遺物：79・80）、磨製石斧の基部（遺物：87）、磨石（遺物：90）、砥石（遺物：313）がある。本溝跡は中世に属し、屋敷の周囲に廻らす区画溝として機能したものと考えられる。

（3）井 戸 跡

井戸跡は２基検出され、調査区北東部と南西部にそれぞれ位置する。いずれも素掘りの状態で検出されたが、土坑の規模や堆積状況、出土遺物などから井戸跡と判断した。時期を特定できる有効な資料に乏しいものの、これらは概ね中世に属するものと思われる。

ＳＥ285（第16図　写真図版18・26）

調査区南西部（33－17・18グリッド）に位置し、南東にＳＴ300が隣接する。開口部は隅丸方形を呈し、底部の中央部で段を形成して円筒状に掘り込まれる。開口部は両径とも1.7ｍ、不整円を呈する中央部の直径が１ｍ前後、検出面からの深さ40cmを測る。土層観察からは、中央部の黒色系シルトの堆積層とその周りを囲む褐色系の砂礫層とが明瞭に区別された。なお、検出面では、中央部の黒色シルト層の平面形は方形を呈していた。これらのことから、井戸枠に即した隅丸方形の掘り方の側面に方形の井戸枠、あるいは底部には円形の井戸眼が付設された可能性も考えられる。その後、覆土４層にみられる砂礫で周囲を埋め戻すといった構築状況が推定される。井戸の用材は残存しなかったが、恐らくは腐蝕してしまったか、あるいは、廃絶時に抜き取られたものと思われる。井戸内の覆土は自然堆積によるものとみられるが、その過程で投棄されたと考えられる甕や擂鉢の欠けら、20cm大の礫がまとまって出土している。出土遺物は、覆土から縄文土器片、須恵器片、中世（13世紀）の陶器片（遺物：306～308）、フレイクが出土した。帰属時期は、概ね中世と考えられる。

ＳＥ327（写真図版18）

調査区北西部（34・35－11グリッド）に位置し、北西に袋状を呈するＳＫ294が隣接する。平面形は不整長楕円

形を呈し、長径1.4m・短径0.8m前後を測る。当初、地山と目された褐色系の砂礫層をさらに掘り込んだところ、底部から井戸眼と推定される曲物の断片（遺物：312）が出土した。残存する湾曲面が地面から垂直に立ち上がる状態で検出され、ちょうど底面の中央に据え置かれていた状況が看取された。概ね底部は平坦で円筒状に掘り込まれおり、遺物取り上げの際に人が屈むとすっぽり隠れてしまうほどの深さがあった。規模や形状、出土遺物からみて、素掘りあるいは木組の井戸跡の可能性が考えられる。出土遺物は、覆土から平安時代の土師器片、底面から前述した木製品が出土した。帰属時期は、概ね平安時代～中世と考えられる。

（4）土　坑

500基を超える土坑・ピットが検出された。遺物を伴うものが比較的多く、その帰属時期は概ね縄文・平安時代・中世に属するものと思われる。土坑・ピットの分布は、調査区南西端を除く、ほぼ全域にわたる。特に縄文時代の貯蔵穴あるいは廃棄穴と考えられる袋状土坑は、ＳＴ290・300の周辺においてまとまった分布が認められる。それらの中には袋状土坑には含めていないものの、やや大型で上部の崩落により本来の形状を留めていないとみられるものもあった。

以下では、墓壙１基・袋状土坑９基・焼土堆積土坑１基、その他に主要な遺物が出土した土坑などを取り上げて概説する。

墓　壙

ＳＫ251（第20図　写真図版19・25）

調査区北西部（30－11グリッド）に位置し、東にＳＴ252が隣接する。平面形は北西－南東方向を長軸とする長楕円の小判形で、底面が浅くほぼ平らな皿状を呈している。規模は長径2.3m・短径1.2m、検出面からの深さ16cm前後を測る。覆土は黒色シルトに砂礫が混じる単層で、人為的な埋め戻しであるかどうかは判然としない。出土遺物は、覆土から縄文時代前期初頭の土器片（遺物：25）のほか、中央部よりやや西側に散在する状況で副葬品と推定される14点もの石鏃（遺物：50～63）が出土した。人骨などは検出されなかったものの、規模や形状、出土遺物からみて墓壙である可能性が高い。一括出土した石鏃は、縄文時代早期に特徴的な平基の形態を有するもので、当該期の住居跡との位置関係からも、帰属時期は縄文時代早期と判断される。

袋状土坑

ＳＫ222（第18図　写真図版20）

調査区中央部東側（35・36－13グリッド）に位置し、他の袋状土坑群とは孤立した状況を示している。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直あるいはオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径２m・短径1.5m、検出面からの深さ62cmを測る。覆土には粘土ブロックや炭化物が混じる。出土遺物は、覆土から縄文土器片と二次加工のある石器剥片が出土した。袋状土坑群には含まれていないものの、規模や形状、出土遺物から、縄文時代の貯蔵穴と判断される。

ＳＫ271（第22図　写真図版25）

調査区中央部西側（31－15グリッド）に位置し、南西にＳＴ290が隣接する。平面形は不整楕円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は長径1.2m・短径１m、検出面からの深さ29cmを測る。覆土に炭化物が混じる。出土遺物は、覆土からフレイクが出土した。縄文時代早期後葉の竪穴住居に付随する貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ272（第22図　写真図版20・26）

調査区中央部西側（31－15グリッド）に位置し、南西にＳＴ290が隣接する。平面形は円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は直径1.1m前後、検出面からの深さ34cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文土器片が出土した。縄文時代早期後葉の竪穴住居に付随する貯蔵穴と考えられる。

ＳＫ314（第26図　写真図版20）

調査区南部中央（35－20・21グリッド）に位置し、北西にＳＴ300が近接する。平面形は円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は直径0.7m、検出面からの深さ40cmを測る。出土遺物はないものの、当該期の住居跡との位置関係や土坑の形状から、縄文時代前期初頭の竪穴住居に付随する貯蔵穴と判断される。

ＳＫ315（第26図）

調査区南部西側（33－19・20グリッド）に位置し、北東にＳＴ300が近接する。平面形は円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は直径0.7m、検出面からの深さ24cmを測る。覆土に炭化物が混じる。出土遺物はないものの、当該期の住居跡との位置関係や土坑の形状

から、縄文時代前期初頭の竪穴住居に付随する貯蔵穴と判断される。

ＳＫ324（第26図　写真図版27）

調査区南半部中央（35・36－17グリッド）に位置し、西にＳＴ300が近接する。平面形は円形を呈し、壁面は垂直あるいは一部オーバーハングして立ち上がり、底面はほぼ平坦である。規模は直径0.9m前後、検出面からの深さ62cmを測る。覆土に炭化物が混じる。出土遺物はないものの、当該期の住居跡との位置関係や土坑の規模・形状から、縄文時代前期初頭の竪穴住居に付随する貯蔵穴と判断される。

ＳＫ325（第28図　写真図版27）

調査区南半部中央（35－17グリッド）に位置し、南西にＳＴ300が近接する。平面形は円形を呈し、壁面はややオーバーハングぎみに立ち上がり、底面は平坦である。規模は直径0.6m前後、検出面からの深さ52cmを測る。底部から20cm大の礫が検出された。出土遺物はないものの、当該期の住居跡との位置関係や土坑の規模・形状から、縄文時代前期初頭の竪穴住居に付随する貯蔵穴と判断される。

ＳＫ339

調査区中央部西側（31－15グリッド）に位置し、南西にＳＴ290が隣接する。平面形は円形を呈し、直径0.8mを測る。概ね袋状に広がる形状を呈している。出土遺物は、覆土から縄文土器片が出土した。縄文時代早期後葉の竪穴住居に付随する貯蔵穴と考えられる。

ＥＫ344

調査区南半部中央（34－18グリッド）に位置し、ＳＴ300内、北西の壁際で検出された。平面形は楕円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は長径0.7m・短径0.5m、住居跡の床面からの深さ32cmを測る。出土遺物はないものの、住居内における袋状土坑であることから、縄文時代前期初頭の竪穴住居に付設された貯蔵穴と判断される。

焼土堆積土坑

ＳＫ306（第25図）

調査区南西部（33・34－19グリッド）に位置し、北にＳＴ300が隣接する。検出面の表層から焼土の堆積が確認されたため、ベルトをそのまま残した半截状況における平面記録となっている。したがって、平面の詳細は判然としないが、土層断面とベルト上面に残る焼土の分布状況からみた概略を以下に記す。土坑の平面形は概ね楕円形を呈し、北側の壁面がオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径1.6m・短径1.4m前後、検出面からの深さ43cmを測る。焼土の分布範囲は、概ね直径１m前後の円形の範囲内と推定される。重複関係は、ＳＫ306が西でＳＫ334を切っているものと考えられる。覆土に砂・細砂ブロックが多く混じる特徴を有する。出土遺物は時期不明の土器片１点のみで、帰属時期については判然としない。

その他の土坑

ＳＫ206（第17図　写真図版24）

調査区北東端（35－８グリッド）に位置し、南にＳＤ209・210が近接する。平面形は楕円形を呈し、壁面は急に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径1.1m・短径0.9m、検出面からの深さ50cmを測る。出土遺物は、覆土から奈良・平安時代の土師器片（遺物：284）が出土した。帰属時期は、概ね奈良・平安時代と考えられる。

ＳＫ220（第17図　写真図版20・21・24）

調査区中央部東側（35・36－12・13グリッド）に位置し、南西に袋状を呈するＳＫ222が隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径1.4m・短径1.1m、検出面からの深さ60cmを測る。出土遺物は、覆土から中世（13世紀）の陶器片（遺物：303）が出土した。帰属時期は、概ね中世と考えられる。

ＳＫ236（第19図　写真図版24）

調査区北部中央（31－８グリッド）に位置し、北西にＳＴ240が近接する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がり、底面で大小２箇所が円形に浅く掘り込まれる。規模は長径0.9m・短径0.6m、検出面からの深さ18cmを測る。出土遺物は、覆土から弥生時代中期後半の土器片（遺物：156）と奈良・平安時代の土師器片が出土した。帰属時期は、概ね奈良・平安時代と考えられる。

ＳＫ249（第21図　写真図版25）

調査区北西部（28・29－12グリッド）に位置し、北にＳＤ210が隣接する。平面形は不整長楕円形を呈し、底面は平坦で北東に一段高く張り出している。規模は長径

1.8m・短径１m、検出面からの深さ18cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文土器片と石鏃（遺物：49）が出土した。帰属時期は、概ね縄文時代と考えられる。

ＳＫ266（第21図　写真図版22・25）

調査区中央部（31・32－13グリッド）に位置し、南西に奈良・平安時代の土器片を伴出するＳＫ269が近接する。平面形は円形を呈し、西側の壁面が段を形成して緩やかに立ち上がり、底部は平坦である。規模は直径1.2m、検出面からの深さ42cmを測る。出土遺物は、覆土から中世（13世紀）の陶器片（遺物：294）が出土した。帰属時期は、概ね中世と考えられる。

ＳＫ269（第22図　写真図版20・25）

調査区中央部西側（31－14・15グリッド）に位置し、南西にＳＴ290が隣接する。重複関係は、南東をＳＫ70に切られる。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直あるいはオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径1.4m・短径1.2m、検出面からの深さ36cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文土器片と平安時代（９世紀）の須恵器片（遺物：276）が出土した。帰属時期は、概ね平安時代と考えられる。

ＳＫ274（第22図　写真図版22・26）

調査区中央部（33－16・17グリッド）に位置し、南西にＳＥ85が近接する。平面形は不整楕円形を呈し、東側の壁面が緩やかに立ち上がり、底部で平坦となる。規模は長径2.4m・短径２m、検出面からの深さ54cmを測る。出土遺物は、覆土から奈良・平安時代の土師器片（遺物：285）が出土した。帰属時期は、概ね奈良・平安時代と考えられる。

ＳＫ275（第23図　写真図版22・25）

調査区中央部（34・35－16グリッド）に位置し、南東に中世の陶器片を伴出するＳＫ309が隣接する。平面形は隅丸方形で、底面が浅く平らな皿状を呈している。規模は両径とも２m前後、検出面からの深さ16cmを測る。出土遺物は、覆土から須恵器片や中世（13世紀）の陶器片（遺物：307）が出土した。帰属時期は、概ね中世と考えられる。

ＳＫ293（第24図）

調査区北東部（33－10グリッド）に位置し、北にＳＤ210が隣接する。平面形は大小２つの円がやや重なって並び、小円が南側に一段高く張り出している。土層観察からは、円形を呈する２つの掘り込みの間に切り合い関係は認められない。規模は長径1.2m・短径0.3m、検出面からの深さ44cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文土器片と中世（13世紀）の陶器片（遺物：304）が出土した。帰属時期は、概ね中世と考えられる。

ＳＫ305（第25図　写真図版22・26）

調査区南西部（33－19グリッド）に位置し、北東にＳＴ100が近接する。平面形は楕円形を呈し、緩やかに湾曲して浅く掘り込まれる。底面の３箇所において、直径14cmの円形を呈するピット状の浅い掘り込みが認められる。規模は長径3.1m・短径2.2m、検出面からの深さ20cmを測る。出土遺物は、覆土から縄文時代前期初頭の土器片（遺物：34）と二次加工のある石器剥片が出土した。帰属時期は、概ね縄文時代と考えられる。

ＳＫ309（第27図　写真図版26）

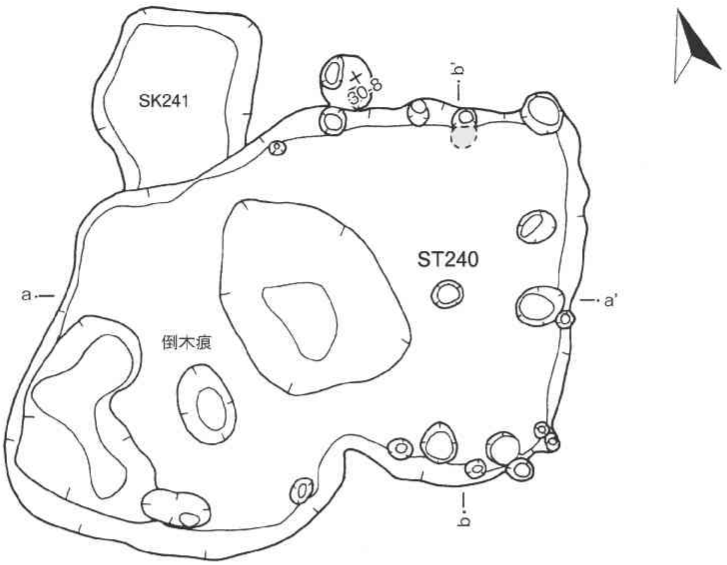
調査区中央部（35－16グリッド）に位置し、北西に中世の陶器片を伴出するＳＫ275が隣接する。平面形は楕円形で、内部が広がる袋状を呈している。規模は長径1.3m・短径1.1m、検出面からの深さ58cmを測る。覆土に炭化物が含まれ、底部からは10～20cm大の礫がまとまって検出された。出土遺物は、覆土から須恵器もしくは中世陶器片（遺物：295）が出土した。当該期に属するＳＫ275との位置関係からみて、中世に属するものと考えられる。

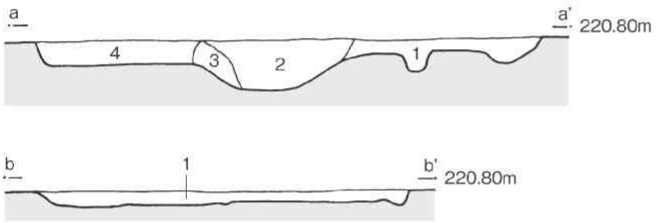
ＳＫ313（第25図　写真図版22・27）

調査区南部中央（36－20グリッド）に位置し、南西に袋状を呈するＳＫ314が隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直あるいはややオーバーハングぎみに立ち上がり、底面は平坦である。規模は長径1.5m・短径1.3m、検出面からの深さ60cmを測る。出土遺物は、覆土から土師器片と砥石（遺物：314）が出土した。帰属時期は、概ね奈良・平安時代と考えられる。

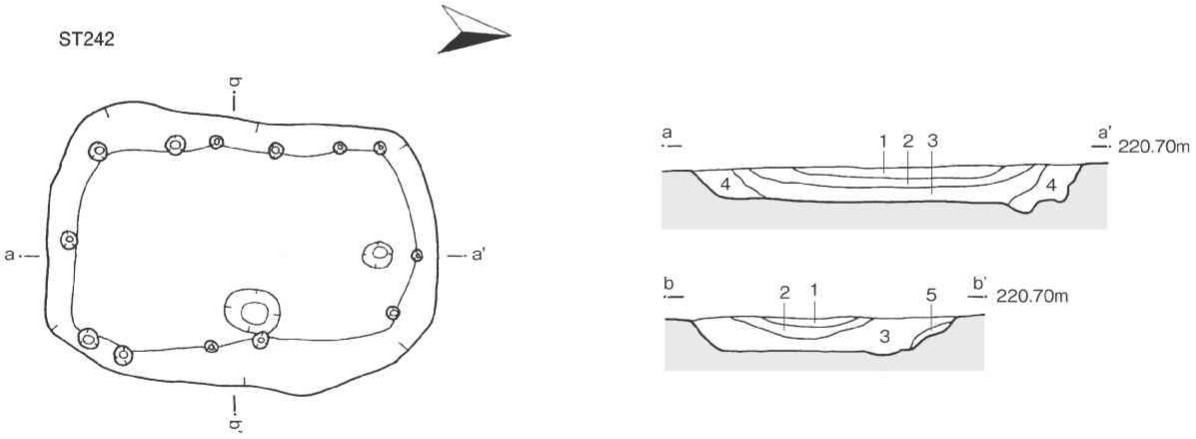
ＳＫ320（第28図　写真図版22・27）

調査区南東部（39－21グリッド）に位置し、東にＳＧ140が近接する。平面形は円形を呈し、壁面は急に立ち上がり、底面は平坦である。規模は直径0.7m前後、検出面からの深さ38cmを測る。覆土１層に炭化物が多く含まれる。出土遺物は、覆土から奈良時代（８世紀）の須恵器片（遺物：271）が出土した。帰属時期は、概ね奈良時代と考えられる。



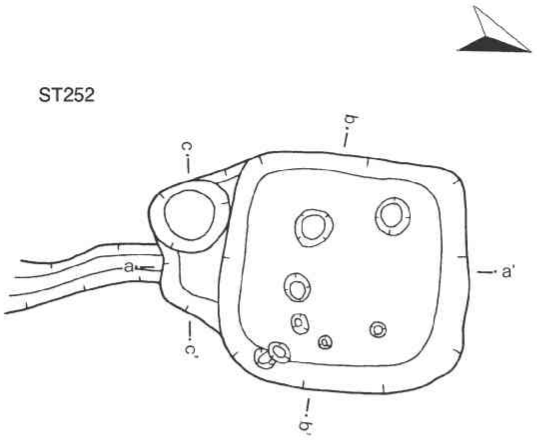


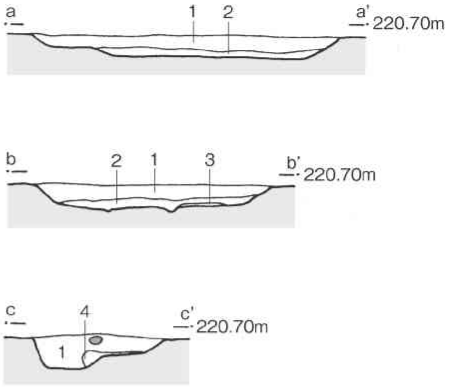
ST240
1　10YR2/1　黒色　　シルト
（10YR2/2シルトを全体に含有する）
2　10YR1.7/1　黒色　　シルト
（砂～小礫を多量に混入 風化礫を含む 倒木痕）
3　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂～粗砂
（10YR1.7/1シルトのブロックを20%含む 倒木痕）
4　10YR4/3　にぶい黄褐色　砂～粗砂
（10YR1.7/1シルトのブロックあり 倒木痕）



ST242
1　10YR1.7/1　黒色　　シルト　（砂・5～10mm大の小礫を多量に混入）
2　10YR4/3　にぶい黄褐色　粘土　（5mm大の小礫を多く含む）
3　10YR2/1　黒色　　シルト　（5～20mm大の小礫を多量に混入 しまるが、崩れやすい 10YR4/4砂をブロック状で混入）
4　10YR2/1　黒色　　シルト　（5～20mm大の小礫を多量に混入 しまるが、崩れやすい 10YR4/4砂をブロック状で混入）
5　10YR4/4　褐色　　砂　（礫混在の地山）

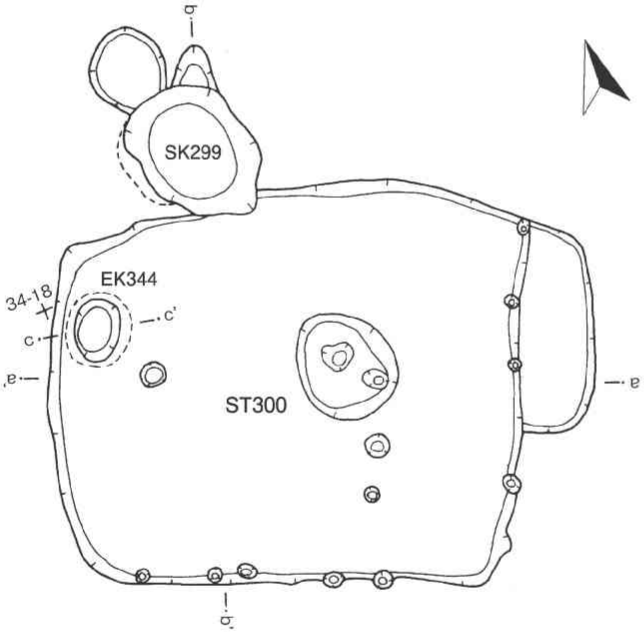
第12図　第２次調査　竪穴住居跡（ST240・242）





ST252

1	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化物を含む　砂～小礫混入)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR5/4細砂をブロックまたは帯状で20%含む　部分的に粘土質)
3	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	(10YR2/1のブロックあり)
4	10YR3/4	暗褐色	砂～粗砂	(小礫を含み、10YR1.7/1シルトを混在)



ST300

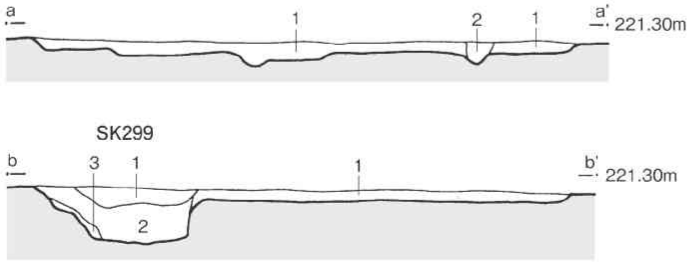
1　10YR2/2　黒褐色　シルト
(砂～5mm大の小礫を含む)
2　10YR2/1　黒色　シルト
(撹乱)

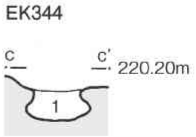
SK299

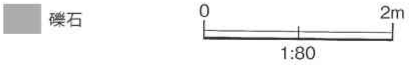
1　7.5YR2/1　黒色　シルト
(10YR6/3細砂をブロック状で5%含む)
2　10YR2/1　黒色　シルト
(10YR6/3細砂を斑文状で3%含む)
3　10YR3/2　黒褐色　砂
(10YR2/1シルトをブロック状で5%含む)

EK344

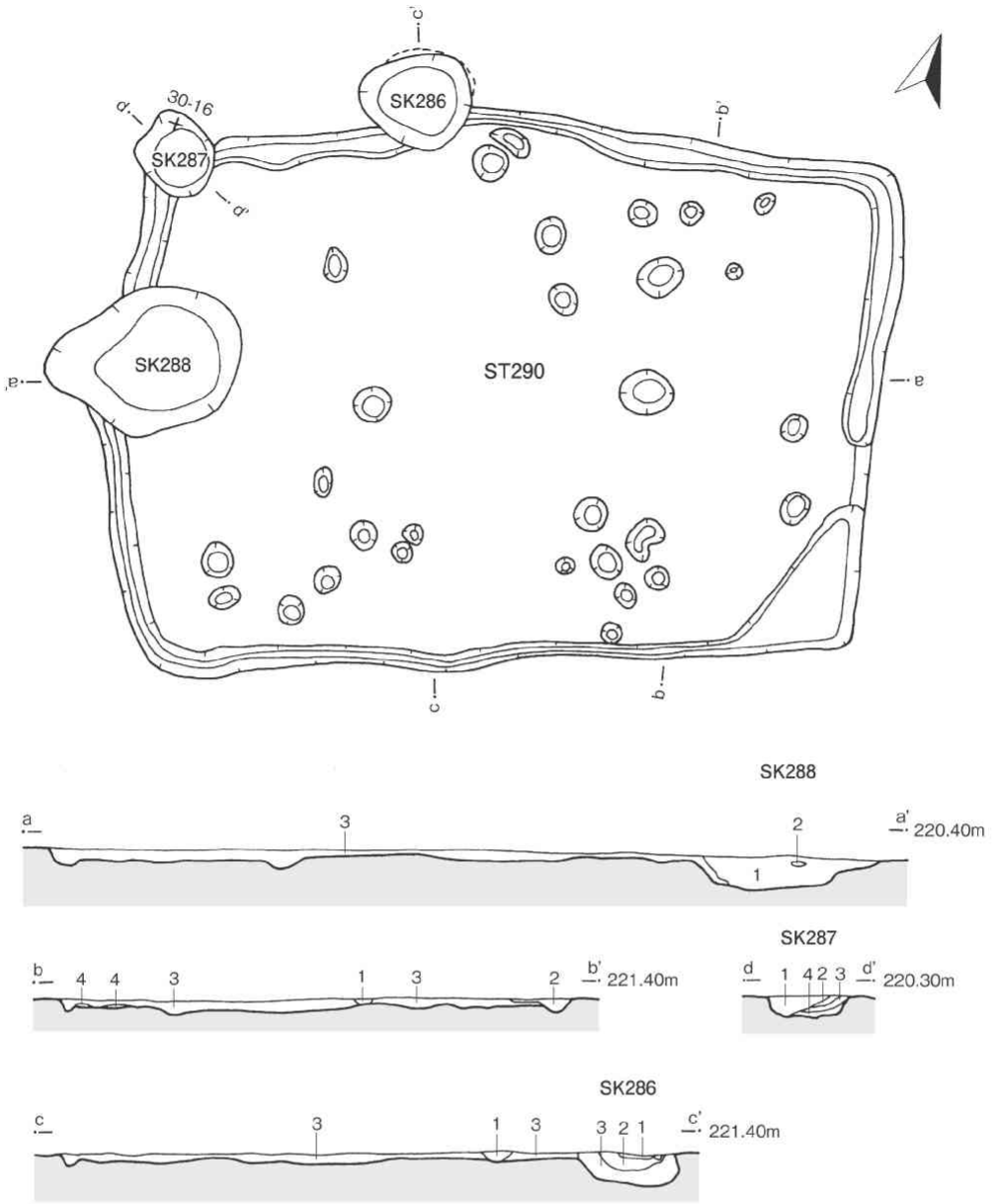
1　10YR1.7/1　黒色　シルト
(砂混入)







第13図　第２次調査　竪穴住居跡(ST252・300　SK299　EK344)



ST290

1	10YR5/2	灰黄褐色	粘土	
2	10YR2/1	黒色	シルト	(砂～小礫を含む)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫を含む 10YR5/3砂をブロック状で20%含む)
4	地山			

SK286

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	
2	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化土を帯状で混入 5～10mm大の小礫を含む)
3	10YR2/1	黒色	シルト	

SK287

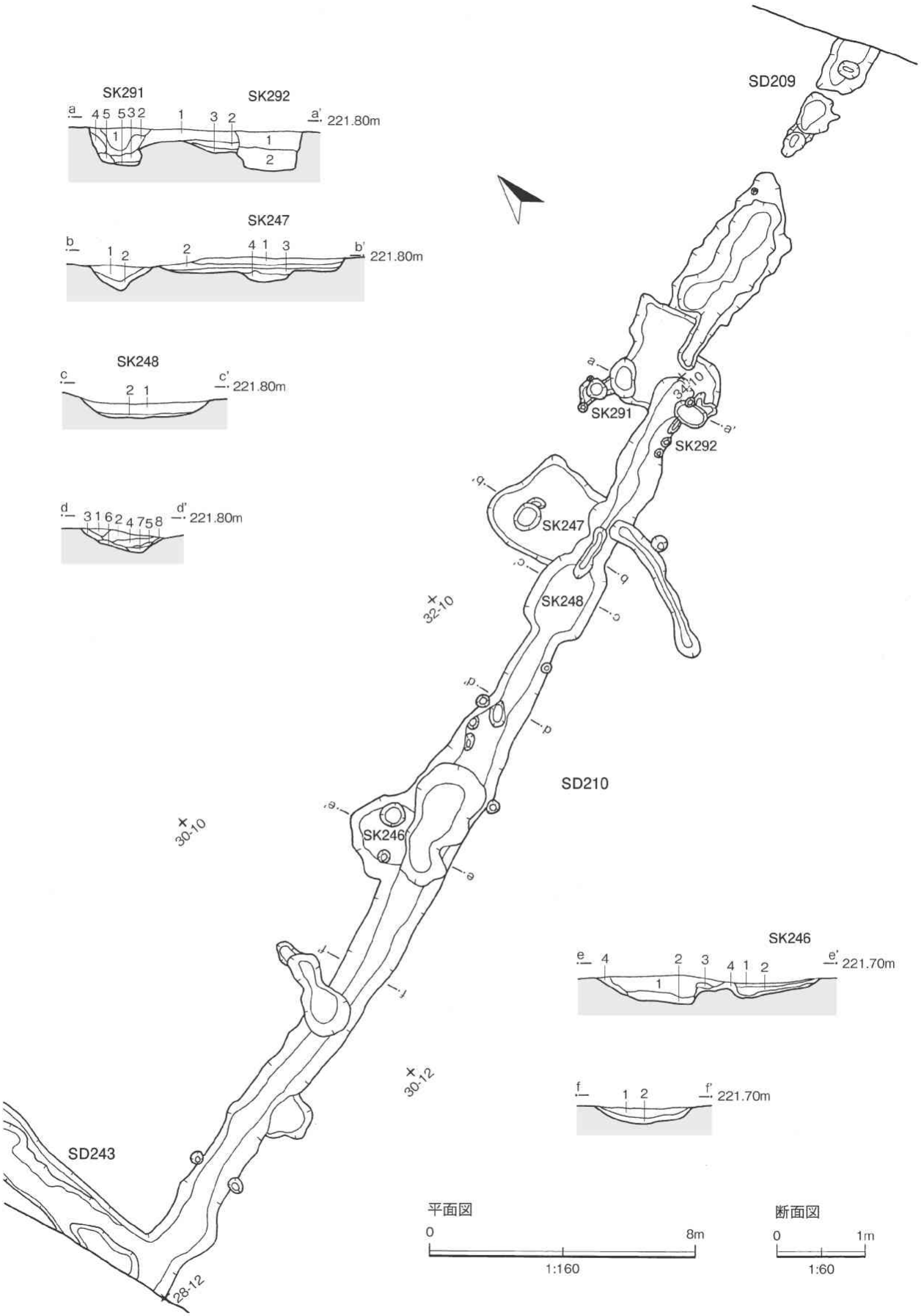
1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR4/2粘土質シルトを帯状で20%含む)
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	(5YR4/6焼土あり 10YR1.7/1シルトをブロック状で10%含む)
3	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	(炭化土を帯状に混入 5YR4/6焼土ブロックあり)
4	10YR4/2	灰黄褐色	粘土	(5YR4/6焼土あり)

SK288

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	
2	10YR4/2	灰黄褐色	粘土質シルトの塊	

0　2m
1:80

第14図　第２次調査　竪穴住居跡(ST290　SK286・287・288)



第15図　第２次調査　溝跡(SD209・210・243　SK246・247・248・291・292)

〈a－a'〉

SD210

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(粘土質でしまる 7.5YR4/2シルトのブロックあり)
2	10YR2/2	黒褐色	砂	
3	10YR2/1	黒色	シルト	(砂混じり)

SK291

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂混じり 炭化物あり 10YR4/3シルトをブロック状で5%含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/3砂をブロック状で3%含む)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂を多量に混入 10YR4/3砂をブロック状で10%含む)
4	10YR2/2	黒褐色	砂～粗砂	
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	シルト	(砂質 10YR2/2シルトをブロック状で20%含む)

SK292

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入 10YR4/3細砂をブロック状で5%含む)

〈b－b'〉

SD210

1	10YR2/1	黒色	シルト	(5mm大の小礫を多く含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(粗砂～小礫を多量に混入)

SK247

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(炭化物あり 小礫を含む)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	
3	10YR4/4	褐色	粗砂	(10YR2/2シルト混在 5～10mm大の小礫を多く含む)
4	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR3/4粗砂を帯状に10%含む)

〈c－c'〉

SK248

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(粗砂～小礫を含む)
2	10YR4/4	褐色	粗砂	(地山)

〈d－d'〉

SD210

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR2/1シルトをブロック状で20%含む)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(やや粘土質 10YR3/3砂をブロック状で10%含む)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(小礫を含む 10YR4/4砂～粗砂をブロック状で10%含む)
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂を全体に混入 小礫を含む)
5	酸化した砂層			
6	10YR3/2	黒褐色	砂	(小礫を含む 下部は酸化)
7	10YR2/1	黒色	砂	(小礫を含む)
8	地山			

〈e－e'〉

SD210

1	10YR2/1	黒色	シルト	(5mm大の小礫を多く含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(粗砂～小礫を多量に混入)
3	10YR2/2	黒褐色	砂～粗砂	(10mm大の礫層)
4	地山			

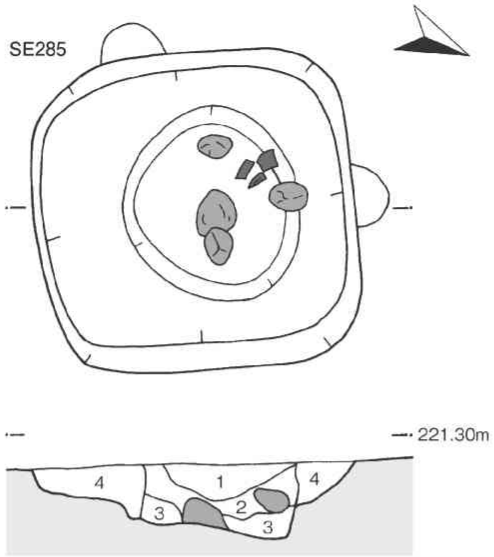
SK246

1	10YR2/1	黒色	シルト	(砂～粗砂混入)
2	10YR3/4	黒色	シルト	(10YR3/4砂～粗砂を帯状で20%含む)

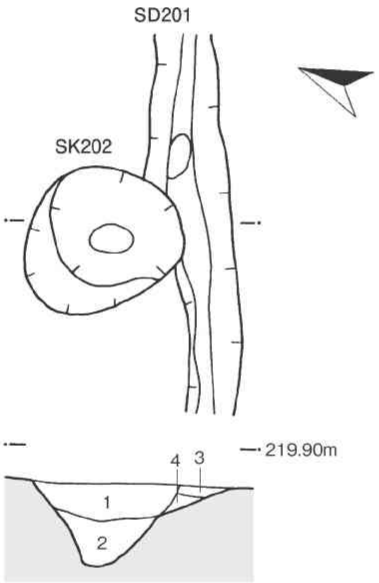
〈f－f'〉

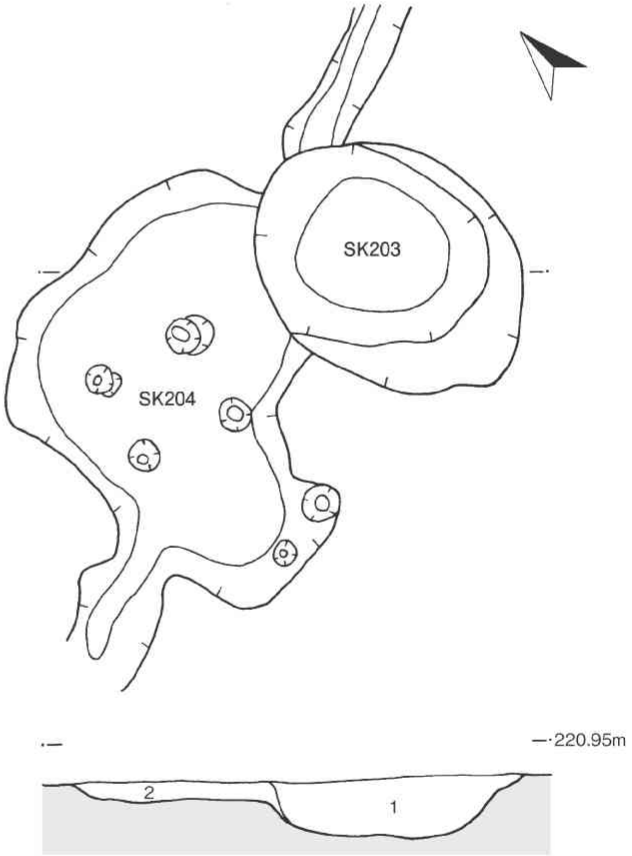
SD210

1	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR3/4砂～粗砂をブロック状で30%含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(砂～小礫を含み、一部酸化する)



SE285
1　10YR2/2　黒褐色　シルト
（粗砂～10mm大の礫を混入）
2　10YR2/1　黒色　　シルト
（10YR3/2粗砂をブロック状で5%含む）
3　10YR3/2　黒褐色　砂
（10YR2/1シルトをブロック状で10%含む）
4　10YR3/2　黒褐色　砂～粗砂
（10YR5/4細砂をブロック状で3%含む）





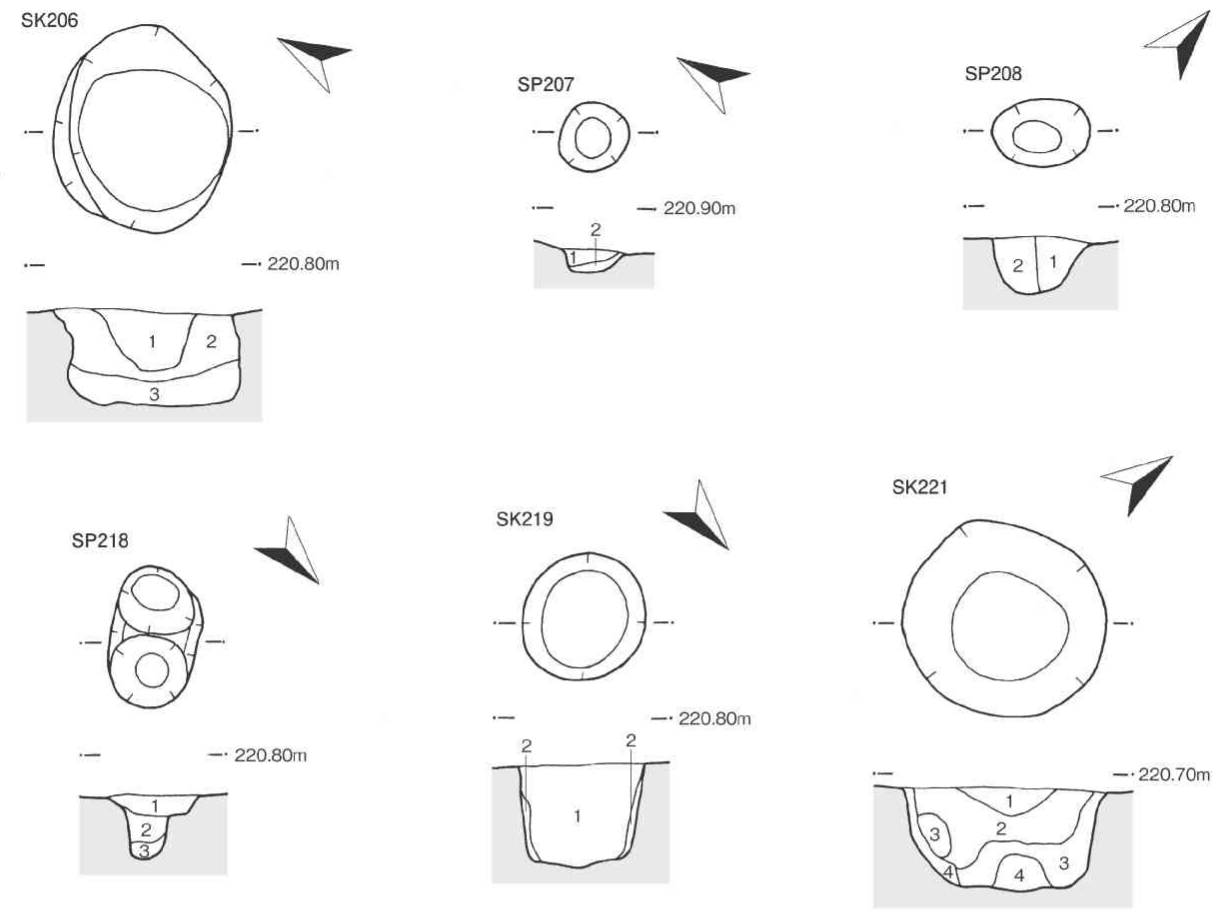
SD201・SK202
1　10YR1.7/1 黒色　　シルト
（5mm大の小礫を多く含む 風化礫あり 以下SK202覆土）
2　10YR2/1　黒色　　シルト
（5mm大の小礫を多く含む 風化礫あり）
3　10YR2/1　黒色　　シルト
（10YR4/4シルトをブロック状で5%含む 以下SD201覆土）
4　10YR4/4　褐色　　砂
（10YR2/1シルトをブロック状で10%含む）

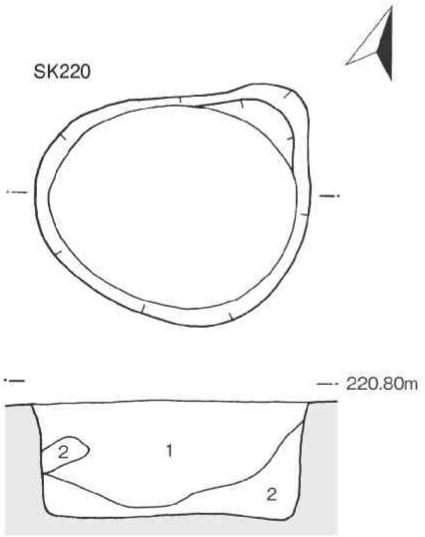
SK203・204
1　10YR2/1　黒色　　シルト
（砂混じり　5～10mm大の小礫を多量に混入　SK203覆土）
2　10YR1.7/1 黒色　　シルト
（砂～小礫を多く含む　SK204覆土）

礫石　土器

0　1m
1:40

第16図　第２次調査　井戸跡・土坑（SE285　SK202・203・204　SD201）





SK206

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR4/6砂をブロック状で10%混入)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/6砂をブロック状で10%混入)

SP207

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂～小礫を多く含む)
2	10YR4/4	褐色	砂	(1をブロック状で10%混入)

SP208

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/6砂をブロック状で10%含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	

SP218

1	10YR2/1	黒色	シルト	(5mm大の小礫を含む)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4砂をブロック状で5%含む)
3	10YR3/4	暗褐色	細砂～砂	(10YR2/2シルトをブロック状で20%含む)

SK219

1	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/4シルトをブロック状で10%含む)
2	10YR4/4	褐色	シルト	(砂混じり 10YR2/1シルトをブロック状で5%含む)

SK220

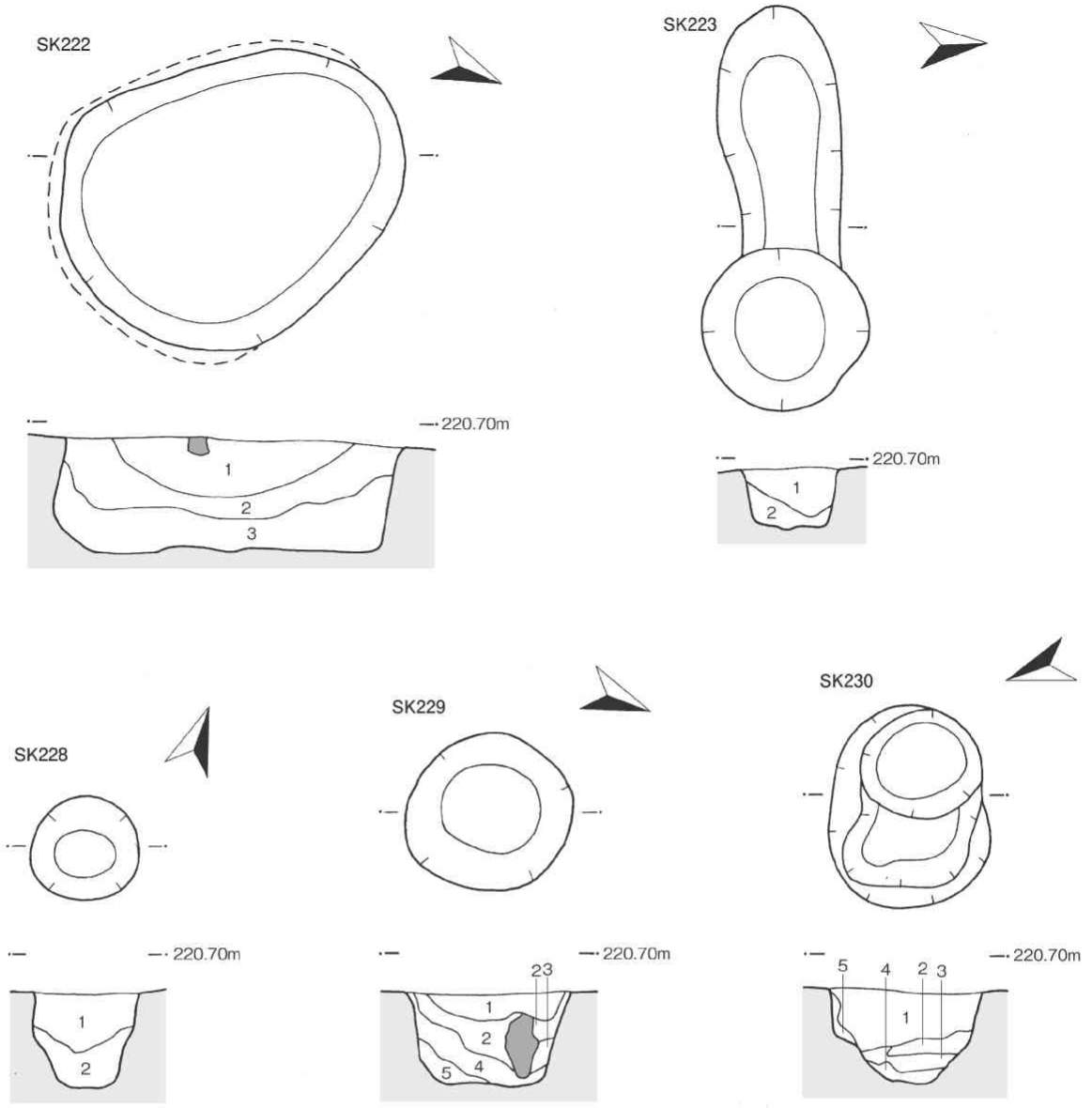
1	10YR2/1	黒色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/4砂をブロック状で10%含む)

SK221

1	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化物あり)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂～小礫を混入)
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR4/4砂をブロック状で10%含む)
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4砂をブロック状で5%含む)

0　1m
1:40

第17図　第２次調査　土坑(SK206・219・220・221　SP207・208・218)



SK222

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR5/3粘土をブロック状で5%含む 炭化物あり)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/3シルトとほぼ炭化した層を帯状に混入 小礫を多く含む)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR5/3粘土を塊状で20%含む　酸化鉄溶脱)

SK223

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR3/4	暗褐色	砂	(10YR2/2シルトをブロック状で20%含む)

SK228

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(炭化物を含む 10YR4/4細砂をブロック状で10%含む)
2	10YR3/4	暗褐色	砂	(10YR2/2シルトをブロック状で10%含む 小礫混入)

SK229

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(5mm大の小礫混入)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4細砂をブロック状で5%含む)
3	10YR4/4	褐色	細砂の塊	
4	10YR2/1	黒色	シルト～細砂	(10YR3/4砂をブロック状で30%混入)
5	10YR2/1	黒色	シルト	(砂質)

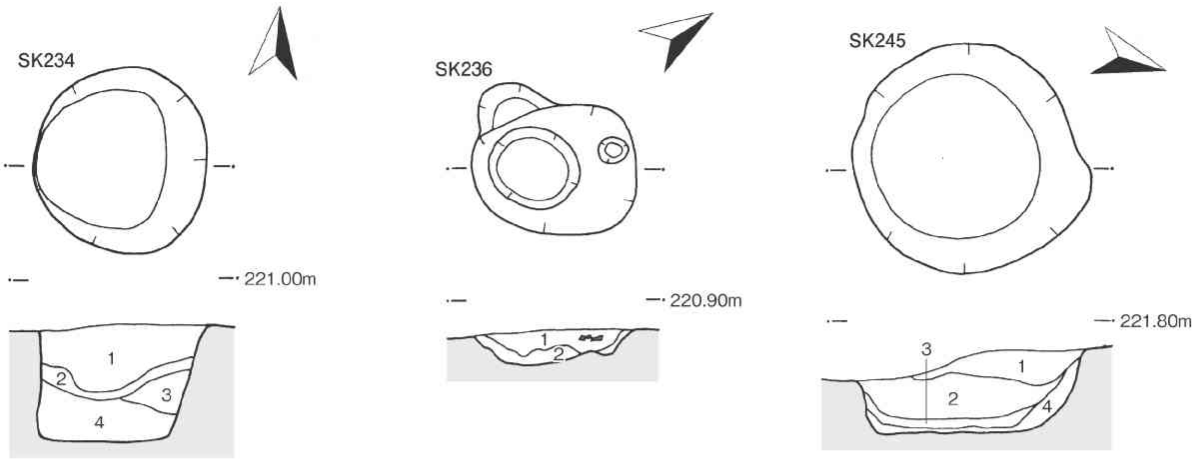
SK230

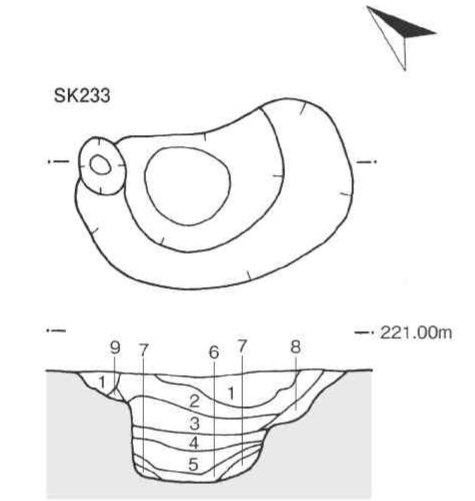
1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR3/2細砂をブロック状で20%含む 人為的埋土)
2	10YR3/2	黒褐色	細砂～砂	(小礫混入 10YR1.7/1シルトをブロック状で10%含む)
3	10YR3/2	黒褐色	砂	(小礫混入)
4	10YR3/2	黒褐色	砂	(10YR4/3砂をブロック状で10%含む)
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂	

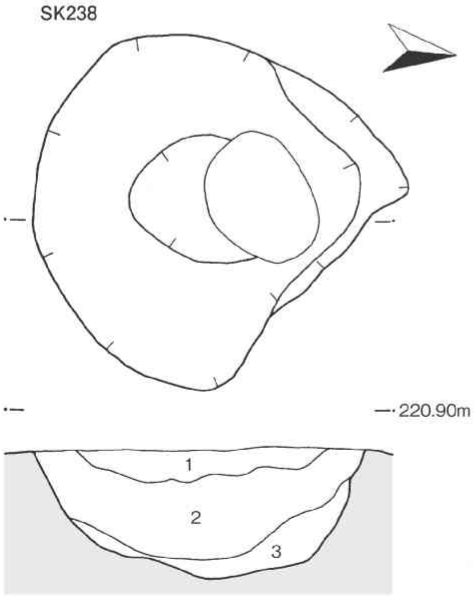
礫石

0　1m
1:40

第18図　第２次調査　土坑(SK222･223･228･229･230)







SK233
1　10YR1.7/1　黒色　　シルト
(5～10mm大の小礫混入　細根を含む)
2　10YR2/1　黒色　　シルト
(10YR4/3細砂をブロック状に20%混入)
3　10YR2/1　黒色　　シルト
(5～10mm大の小礫混入　細根を含む)
4　10YR4/2　灰黄褐色　　砂～粗砂
(10YR2/1シルトをまだら状に40%混入)
5　10YR2/1　黒色　　シルト
(砂～小礫を多く含む)
6　10YR4/2　灰黄褐色　　砂～粗砂
(帯状)
7　10YR2/1　黒色　　シルト
(砂～小礫を多く含む)
8　10YR4/3　にぶい黄褐色 砂
(10YR1.7/1シルトをブロック状で30%混入)
9　地山

SK234
1　10YR1.7/1　黒色　　シルト
(5～10mm大の小礫を多量に混入)
2　10YR1.7/1　黒色　　シルト
(5Y4/3シルトブロックを5%含む 10YR4/2細砂を縞状で20%含む)
3　2.5YR2/1　黒色　　シルト
(軟らかいが、しまりあり)
4　10YR2/1　黒色　　シルト
(10YR5/2シルト～細砂をブロック状で10%含む)

SK236
1　10YR1.7/1　黒色　　シルト
(小礫と細根を多く含む 土器片包含)
2　10YR3/4　暗褐色　　粗砂～小礫
(10YR1.7/1シルトをブロック状で10%含む)

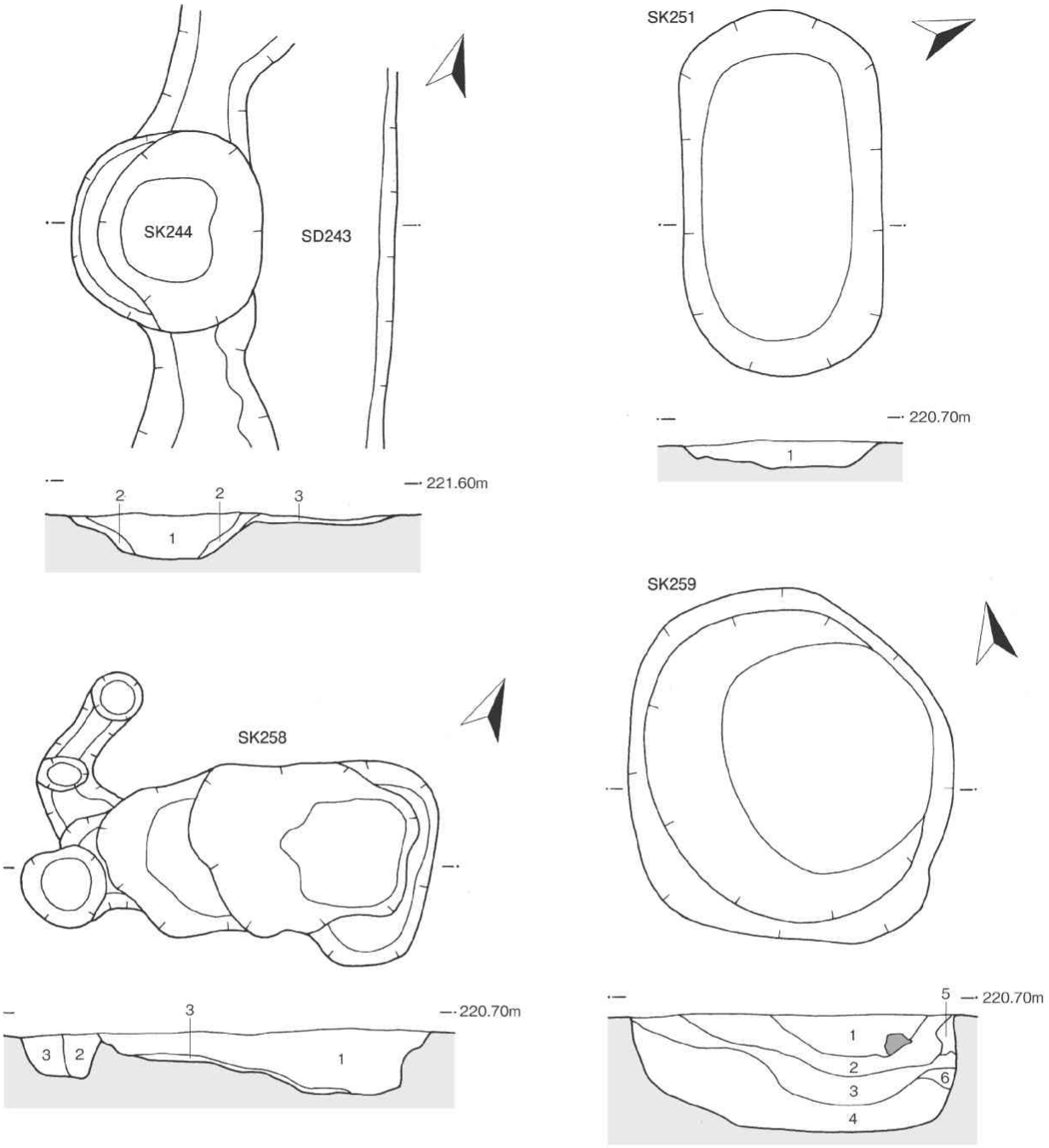
SK238
1　10YR1.7/1　黒色　　シルト
(粗砂～小礫を混入)
2　10YR2/1　黒色　　シルト
(10YR4/2細砂のブロックあり 小礫を多く含む)
3　10YR2/1　黒色　　シルト
(5～10mm大の小礫を多量に混入)

SK245
1　10YR2/1　黒色　　シルト
2　10YR2/1　黒色　　シルト
(10YR3/4砂～粗砂を縞状に30%含む)
3　10YR3/4　暗褐色　　砂～粗砂
(10YR2/1シルトをブロック状で20%含む)
4　10YR3/4　暗褐色　　砂～粗砂
(地山)

土器

0　1m
1:40

第19図　第２次調査　土坑(SK233・234・236・238・245)



SD243・SK244

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫を多量に含む 以下ＳＫ244覆土)
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫を多量に含む)
3	10YR3/3	暗褐色	砂～粗砂	(10YR2/1シルトをブロック状で20%含む SD243覆土)

SK251

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂混じり 小礫混入 下部は10YR2/2)

SK258

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(小礫・風化礫を含む)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	
3	地山			

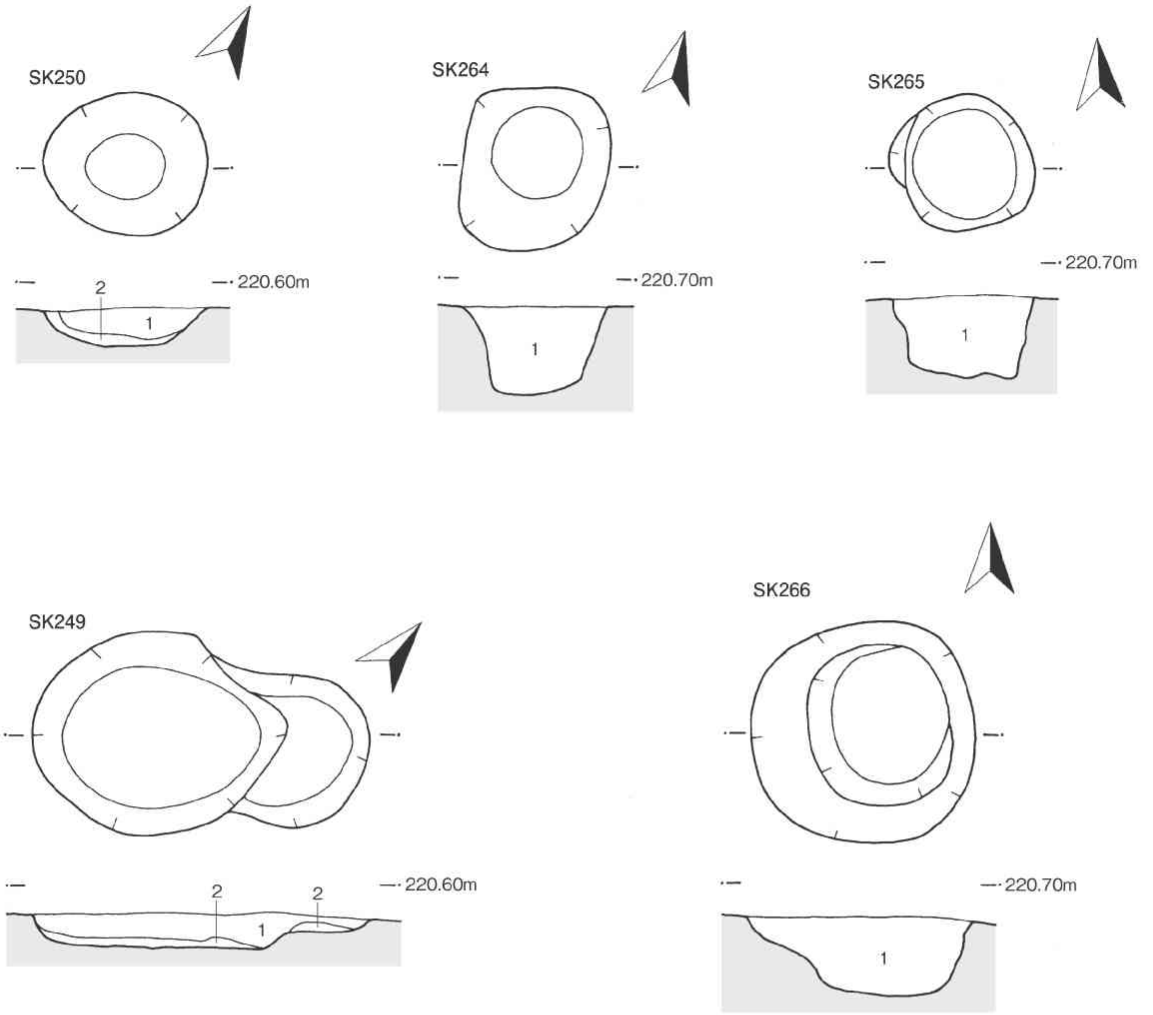
SK259

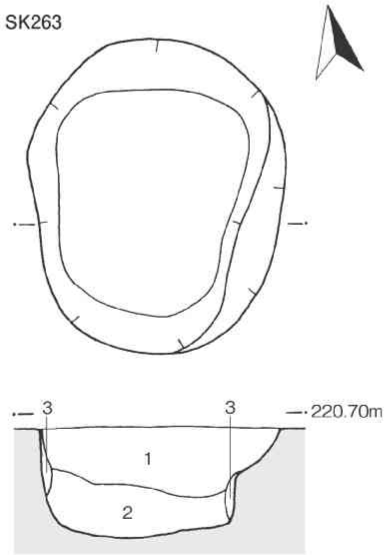
1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(7.5YR4/3褐色粘土のブロックあり)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を帯状に混入)
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR5/3細砂をブロック状で10%含む)
4	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR5/3細砂・10YR4/2粘土をブロック状で20%含む)
5	10YR4/4	褐色	砂～粗砂	
6	7.5YR4/4	褐色	粗砂	

礫石

0　1m
1:40

第20図　第２次調査　土坑(SK244・251・258・259　SD243)





SK249

1	10YR2/1	黒色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR4/4	褐色	砂～粗砂	(地山)

SK250

1	10YR2/1	黒色	シルト	(粗砂～小礫を多く含む)
2	10YR4/4	褐色	砂	(10YR2/1シルトをブロック状で10%含む)

SK263

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(5～10mm大の小礫を多量に混入)
3	10YR3/4	暗褐色	砂	(地山)

SK264

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)

SK265

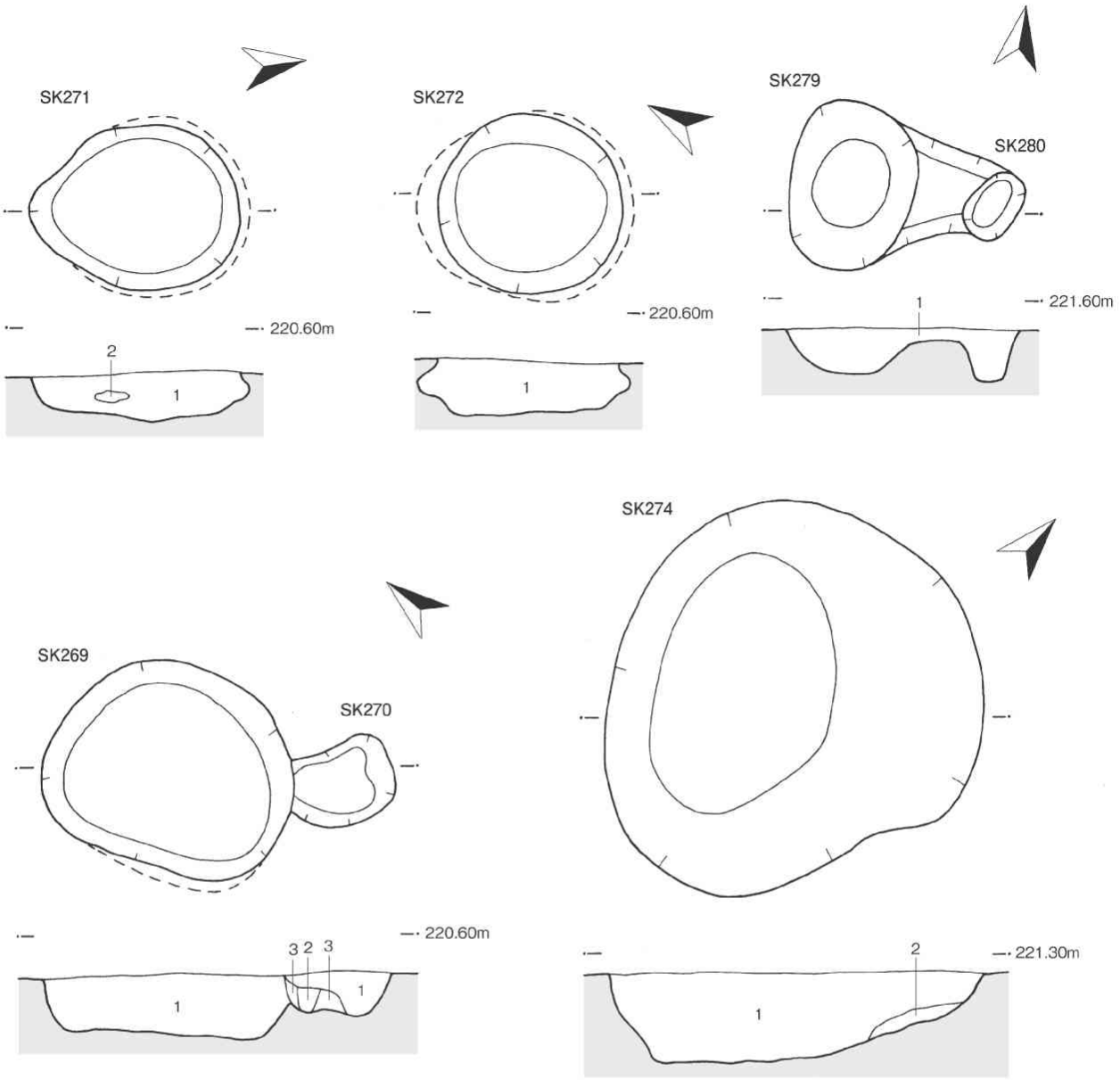
1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)

SK266

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂～小礫混入)

0　1m
1:40

第21図　第２次調査　土坑(SK249・250・263・264・265・266)



SK269
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　（砂～小礫混入）

SK270
1　7.5YR2/1　黒色　シルト　（小礫に富む）
2　10YR3/2　黒色　粗砂～小礫
3　7.5YR4/4　褐色　粗砂～小礫

SK271
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　（炭化物あり 砂～小礫混入）
2　粗砂～小礫ブロック

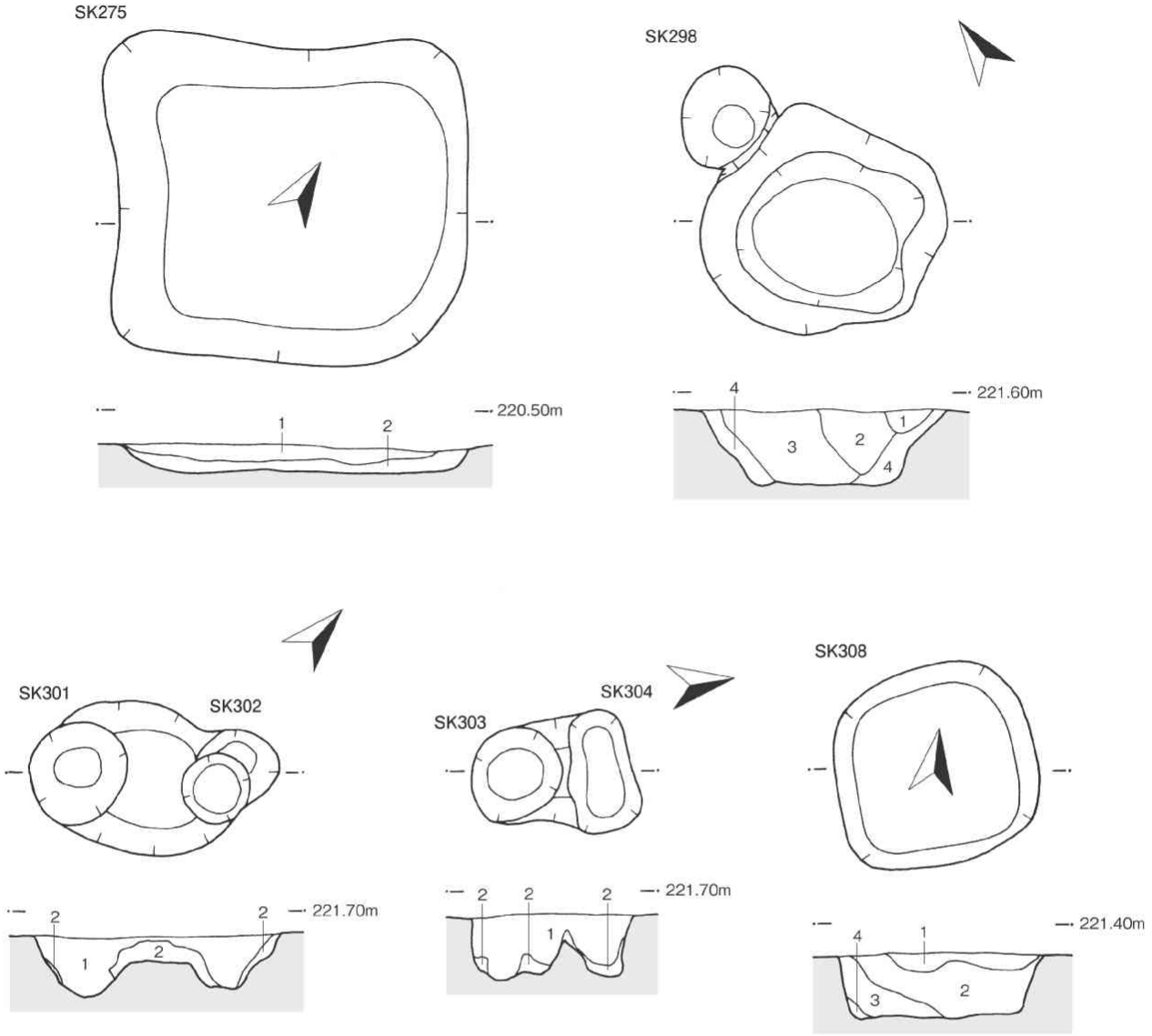
SK272
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　（砂～小礫混入）

SK274
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　（10YR5/3細砂をブロック状で10％含む 粗砂～小礫あり）
2　10YR5/3　にぶい黄褐色　砂～粗砂　（10YR1.7/1シルトをブロック状で20％含む）

SK279・280
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　（砂～小礫を多く含む）

0　1m
1:40

第22図　第２次調査　土坑（SK269・270・271・272・274・279・280）



SK275

1	10YR3/2	黒褐色	粘土	(7.5YR2/1シルトをブロック状で5%含む)
2	7.5YR2/1	黒色	シルト	(やや粘土質 砂混じり 10YR4/4砂をブロック状で10%含む)

SK298

1	10YR2/3	黒褐色	シルト	(砂～小礫混じり)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(ほぼ純層 よくしまる 炭化物あり)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混じり)
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4細砂をブロック状で10%含む)

SK301・302

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(5mm大の小礫を多く含む)
2	10YR4/6	褐色	砂～粗砂	(10YR1.7/1シルトをブロック状で20%含む)

SK303・304

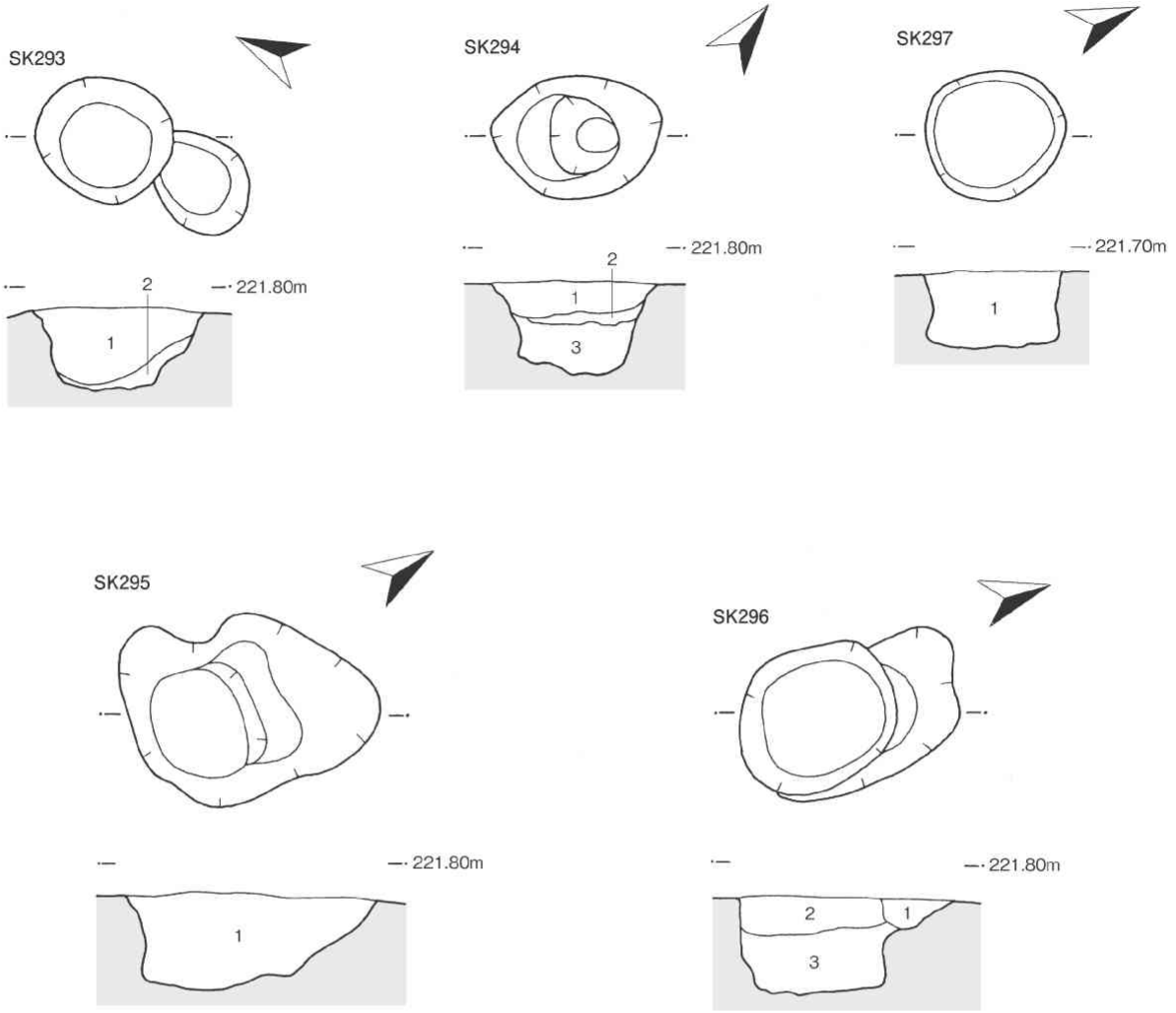
1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(5mm大の小礫を多く含む)
2	10YR4/6	褐色	砂～粗砂	(地山)

SK308

1	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR4/3細砂をブロック状で5%含む)
2	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR5/6粘土質シルト・5YR4/4シルトをブロック・斑文状で10%含む)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR5/4粘土をまだら状に40%混入)
4	10YR4/3	にぶい黄褐色	細砂	

0　1m
1:40

第23図　第２次調査　土坑(SK275・298・301・302・303・304・308)



SK293
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　(砂混じり 5mm大の小礫を含む)
2　10YR2/2　黒褐色　砂

SK294
1　10YR2/1　黒色　シルト　(砂混じり 10YR5/3細砂の斑文あり)
2　10YR2/1　黒色　シルト　(10YR3/4砂～粗砂を多量に混入)
3　10YR2/1　黒色　シルト　(砂混じり 5mm大の小礫を含む)

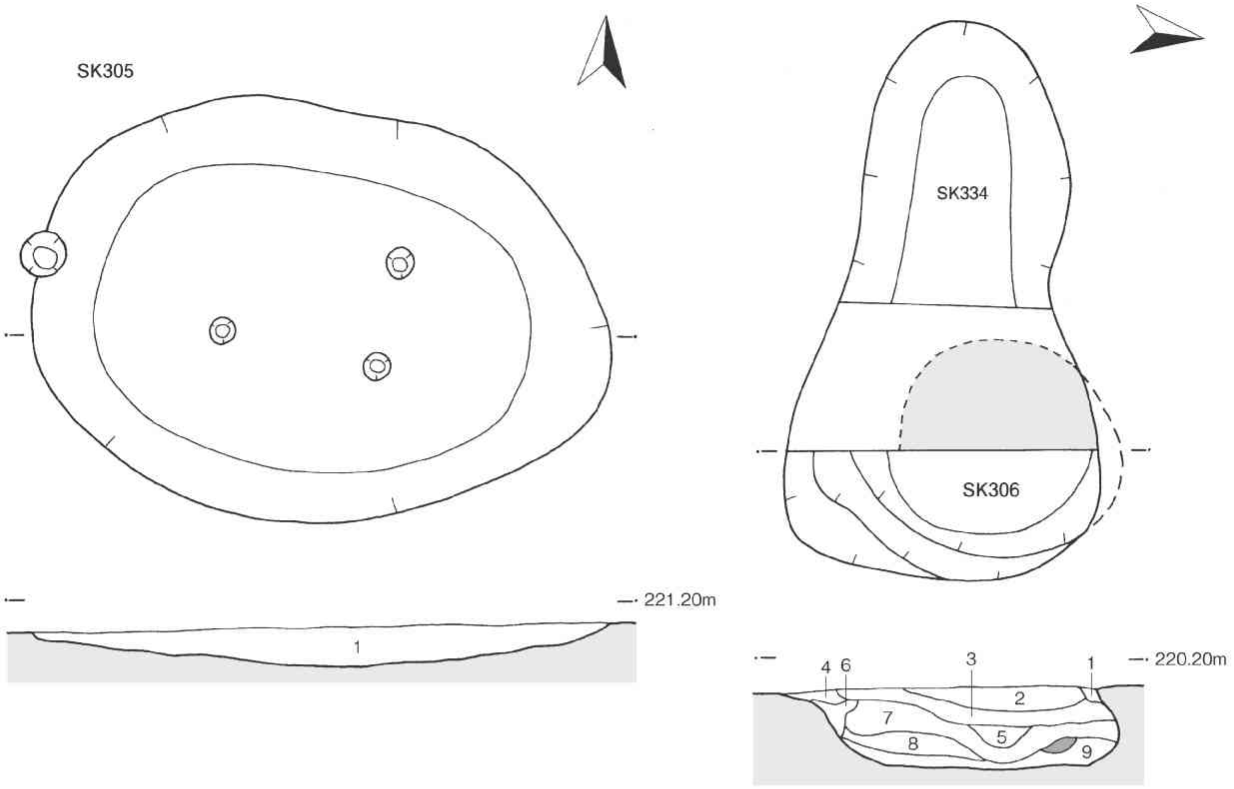
SK295
1　10YR2/1　黒色　シルト　(砂～小礫混入 炭化物を含む)

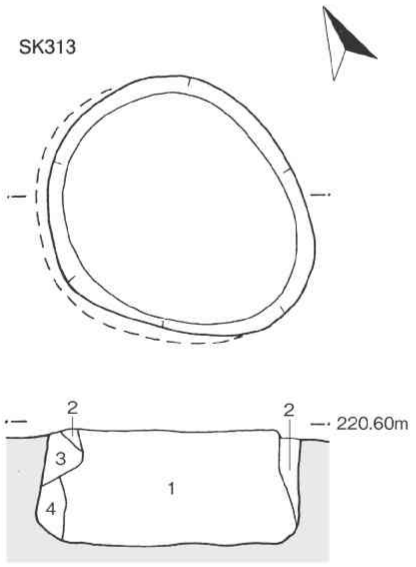
SK296
1　10YR2/1　黒色　シルト　(10YR4/3細砂の斑文あり 砂混じり)
2　10YR2/2　黒褐色　シルト　(7.5YR4/3粘土質シルトをブロック状で5%含む 砂～小礫混入)
3　10YR2/2　黒褐色　シルト　(10YR4/3シルト・細砂をブロック状で20%含む)

SK297
1　10YR1.7/1　黒色　シルト　(10YR4/3砂をブロック状で5%含む 砂混じり)

0　1m
1:40

第24図　第２次調査　土坑(SK293・294・295・296・297)



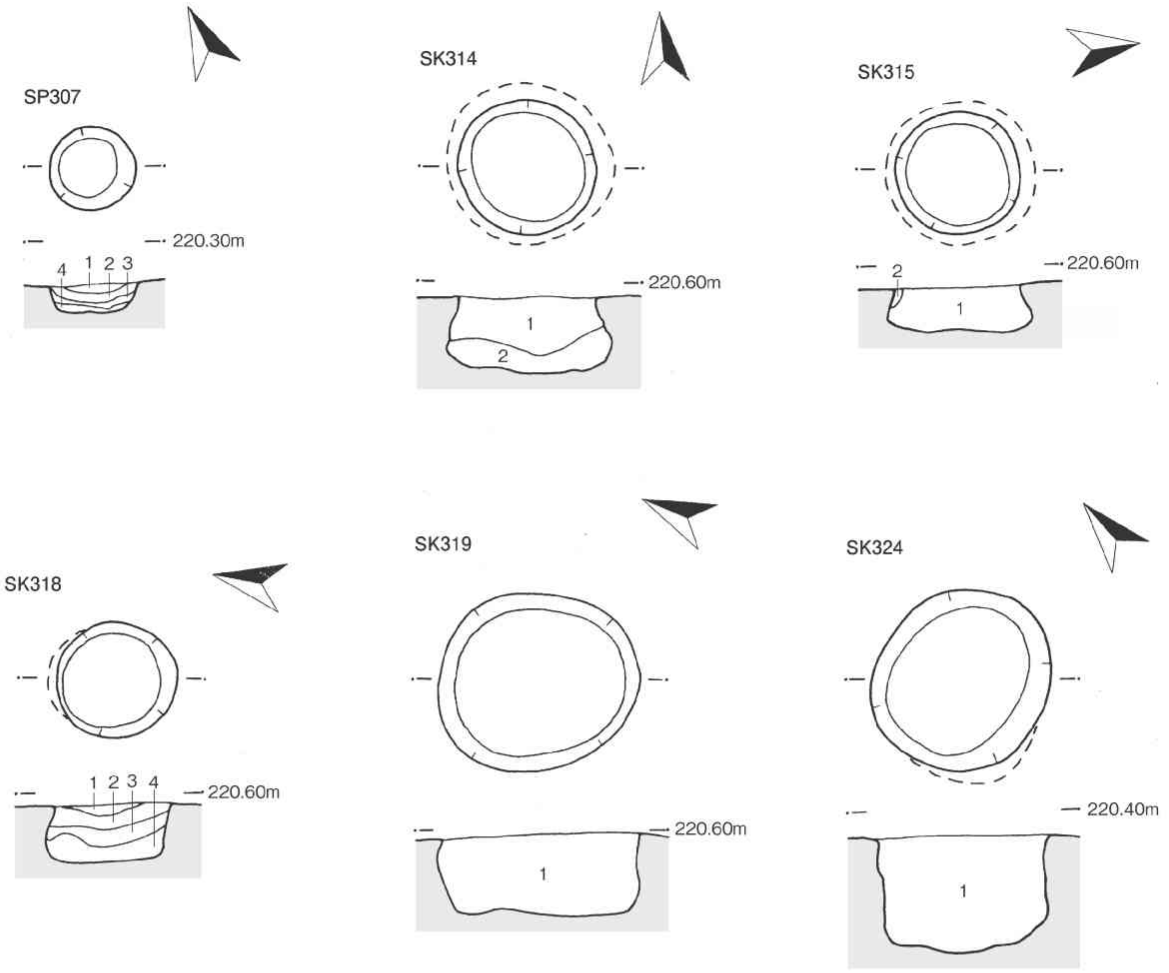


SK305
1　10YR2/1　黒色　シルト
（砂～5mm大の小礫を含む 10YR4/3砂のブロックあり）

SK306
1　10YR3/3　暗褐色　シルト
（砂混じり）
2　10YR2/2　黒褐色　シルト
（10YR1.7/1シルト・10YR3/3細砂ブロックをまだら状で30％混入）
3　7.5YR3/2　黒褐色　砂
（7.5YR4/4砂を帯状に含む 10YR2/2シルトのブロックあり）
4　10YR4/2　灰黄褐色　細砂
5　10YR3/2　黒褐色　細砂
（7.5YR4/4砂のブロックあり）
6　10YR4/4　褐色　細砂
（10YR4/2細砂のブロックあり）
7　10YR1.7/1　黒色　シルト
（7.5YR4/4シルトをブロック・縞状に含む）
8　10YR3/2　黒褐色　シルト
（7.5YR4/4シルトを斑文状で3％含む）
9　10YR1.7/1　黒色　シルト
（粗砂混じり）

SK313
1　10YR1.7/1　黒色　シルト
（10YR5/3細砂をブロック状で10％含む）
2　7.5YR3/1　黒褐色　シルト
（やや粘土質）
3　10YR3/3　暗褐色　砂
4　10YR1.7/1　黒色　シルト
（10YR4/4砂をブロック状で10％含む）

第25図　第２次調査　土坑（SK305・306・313）



SP307

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR3/2シルトを縞状で20%含む)
3	10YR3/4	暗褐色	粗砂	(10YR1.7/1シルトのブロックあり)
4	10YR2/1	黒色	シルト	(細砂混じり)

SK314

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂混じり)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR5/3シルトをブロック状で5%含む)

SK315

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を含む 未分解有機物あり)
2	地山			

SK318

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を含む)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR3/2砂を帯状で30%含む)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(純層)
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4粗砂を多量に混入)

SK319

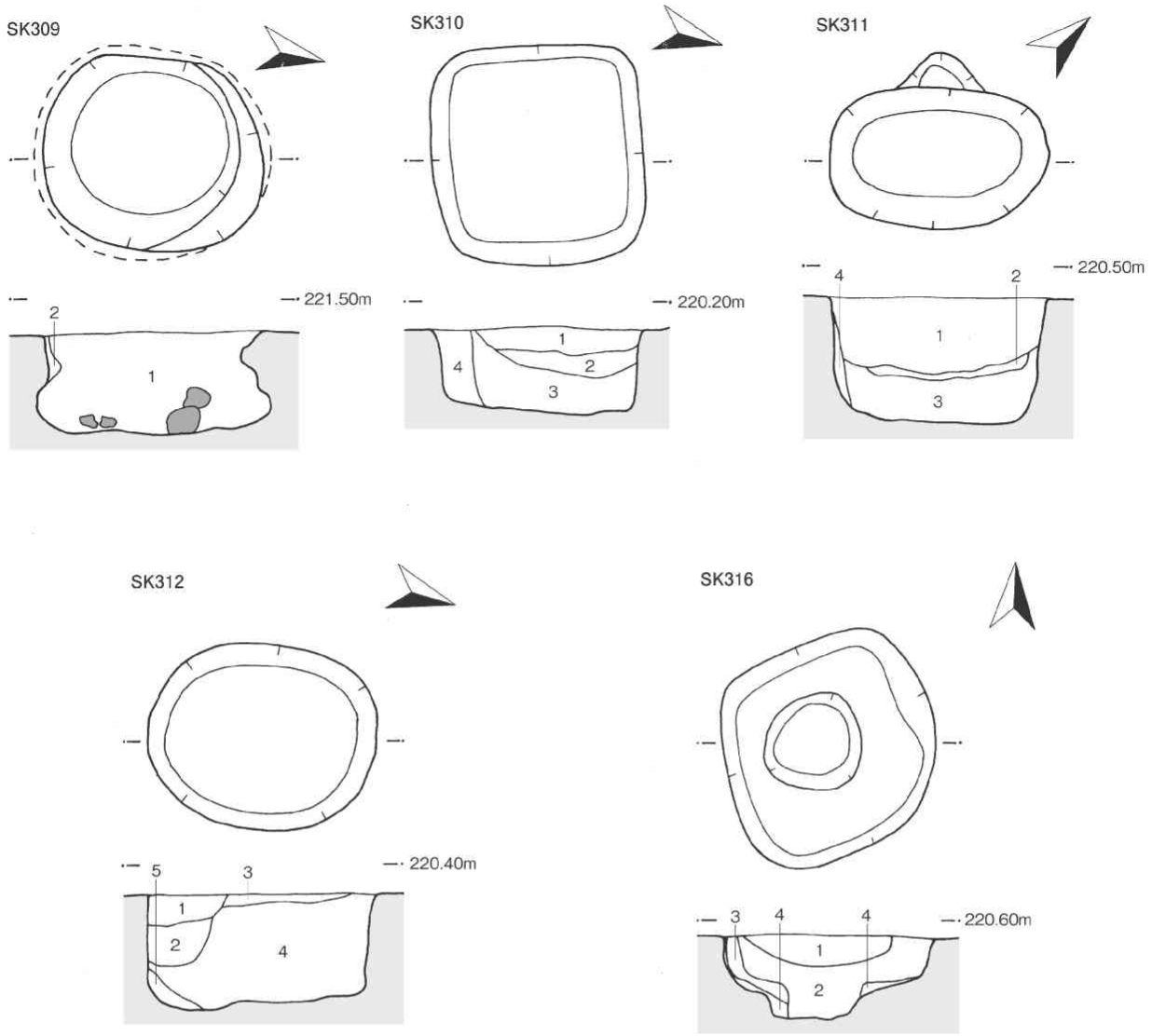
1	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR5/3細砂のブロックあり 7.5YR4/4砂を縞状に含む)

SK324

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を含む 小礫あり ほぼ純層)

0　1m
1:40

第26図　第２次調査(SK314･315･318･319･324　SP307)



SK309

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を含む 粗砂～小礫混入)
2	7.5YR3/3	暗褐色	粗砂～小礫	(10YR1.7/1シルトをブロック状に混入)

SK310

1	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化物を含む 10YR3/3砂のブロックと未分解有機物を含む)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR3/2シルトをブロック状で20%含む)
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	(ほぼ純層)
4	10YR3/2	黒褐色	シルト	(砂～粗砂を多く含む 未分解有機物あり)

SK311

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR5/3砂をブロック状で5%含む 小礫混入)
2	10YR2/2	黒褐色	砂	
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR2/2砂をブロック状で5%含む)
4	10YR3/3	暗褐色	砂	(10YR1.7/1シルトをブロック状で10%含む)

SK312

1	10YR3/2	黒褐色	シルト	(小礫混入)
2	10YR3/3	暗褐色	砂～小礫	
3	10YR2/1	黒色	シルト	
4	10YR1.7/1	黒色	シルト	(炭化物を含む)
5	10YR4/3	にぶい黄褐色	砂	

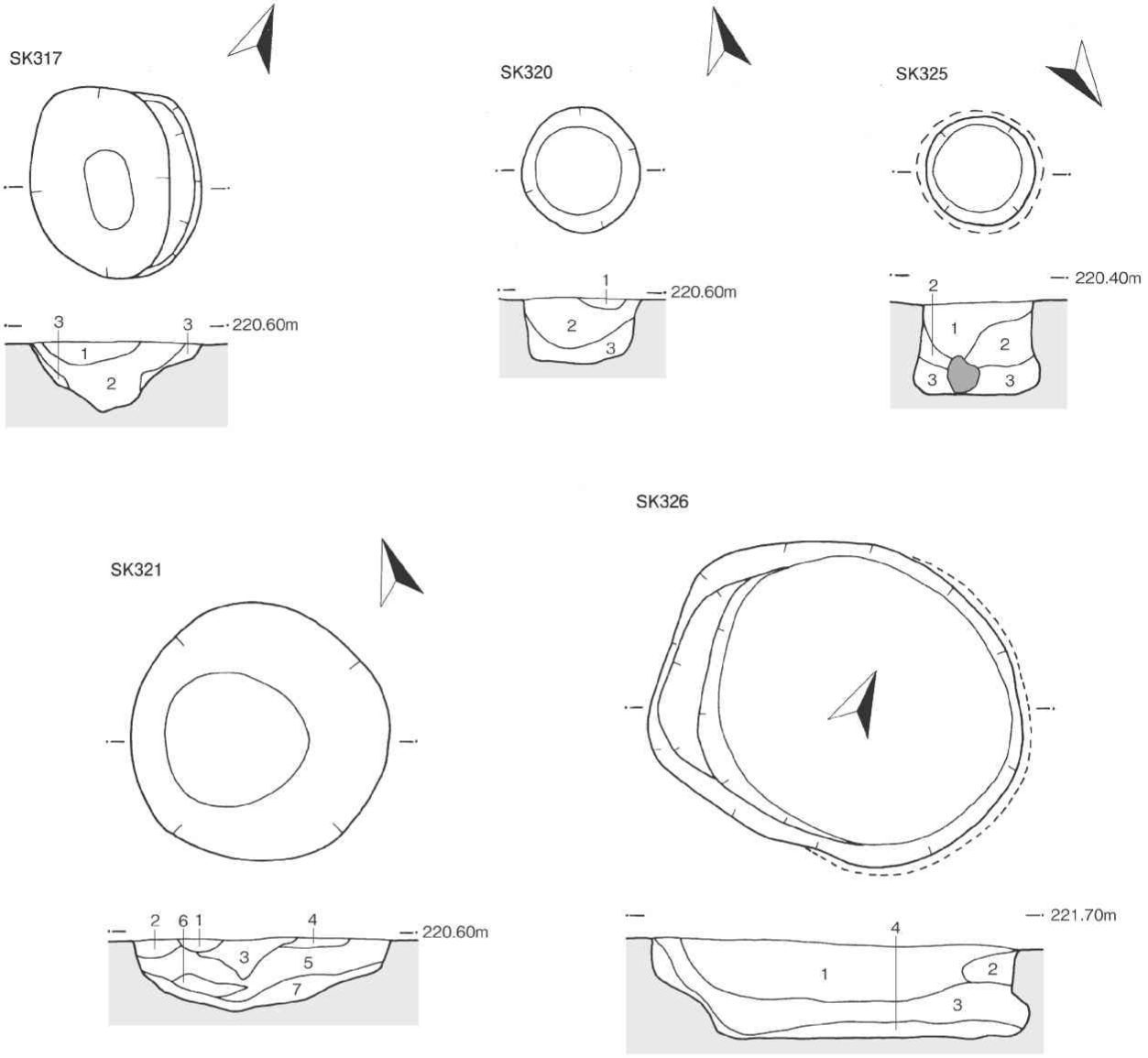
SK316

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(砂～小礫混入)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂～小礫混入)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR5/3砂・7.5YR4/4砂をブロック状で20%含む)
4	砂～粗砂の地山			

礫石

0　1m
1:40

第27図　第２次調査　土坑(SK309・310・311・312・316)



SK317

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	(酸化鉄溶脱)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(小礫を含む)
3	10YR3/4	暗褐色	砂～粗砂	(10YR1.7/1シルトのブロックあり)

SK320

1	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化物に富む)
2	10YR2/2	黒褐色	シルト	(純層)
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/4砂をブロック・帯状で20%含む)

SK321

1	10YR2/2	黒褐色	シルト	
2	10YR3/2	黒褐色	シルト	(やや粘土質)
3	10YR2/1	黒色	シルト	(未分解有機物を含む)
4	10YR2/1	黒色	シルト	(10YR3/2粘土質シルトのブロックと10YR3/3砂を帯状に含む)
5	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR3/3・7.5YR4/4砂を縞状に10%含む)
6	7.5YR4/4	褐色	粗砂～小礫	(酸化鉄溶脱)
7	10YR3/1	黒褐色	シルト	(砂混じり)

SK325

1	10YR1.7/1	黒色	シルト	(砂～小礫を含む)
2	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR4/4シルトを塊状で30%含む)
3	10YR1.7/1	黒色	シルト	(10YR4/3砂をブロック状で10%含む)

SK326

1	10YR2/1	黒色	シルト	(炭化物を含む 10YR3/4細砂をブロック状で10%含む)
2	10YR3/4	褐色	砂	
3	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR3/4砂をブロック状で20%含む)
4	10YR2/2	黒褐色	シルト	(10YR4/3砂をブロック状で20%含む 粗砂混入)

礫石

0　1m
1:40

第28図　第２次調査　土坑(SK317・320・321・325・326)

Ⅴ　出土遺物

第１次・２次合わせて整理用コンテナ23箱分量の遺物が出土し、その主だったものを第29～47図に示した。遺物は土器（土製品を含む）が大半を占め、その他の種別として石器（石製品）・中世陶器・金属製品・木製品がある。これらを縄文時代、弥生時代、古墳時代以降の遺物に３大別して掲載した。

１　縄文時代の遺物

（１）　土器･土製品

縄文土器の分布は、同時代の竪穴住居跡の存在等から第２次調査区に集中している。全てが小破片で出土しており、数量は整理箱にして0.5箱程度である。掲載にあたっては遺構単位で扱ったが、時期的には早期中葉～末葉、前期初頭、前期後葉～末葉、及び中期に大別される。以下では時期ごとの分類基準を示した後に、主要なものについて個々に説明を加えたい。

第Ⅰ群土器（早期中葉～末葉）

１類：沈線文＋貝殻腹縁圧痕文により文様構成されるもの（39・40）

２類：沈線文により文様構成されるもので、a：棒状工具あるいは竹管状工具により太い沈線文を施文するもの（26・38・41）と、b：間隔の密な沈線文を異方向から交互に施文するもの（18）に細分できる。

３類：棒状工具等による連続刺突文が重層的に施文されるもの（16）。

４類：器の表裏両面に条痕文を施文する、いわゆる条痕文土器（３）。

５類：表面には縄文、裏面に条痕文を施文する、いわゆる縄文条痕文土器（13・20・21・44）。

６類：器表裏面とも縄文が施文される、いわゆる表裏縄文土器（17・19・45～47）。

第Ⅱ群土器（前期初頭）

１類：撚糸圧痕文が施されるもの（28・34）。

２類：ループ文を施すもの（14・15・25・42・43）。

３類：羽状縄文を施文するもの（12・35～37・43）。

４類：組紐回転文が施文されるもの（29）。

第Ⅲ群土器（前期後葉～末葉）

１類：口縁部に粘土紐を鋸歯状に貼り付けるもの（11）。

２類：口縁部に貼り付けた細い粘土紐上に細かな刻み目を施文する、いわゆる結節浮線文土器（1）。

３類：口縁部に結節回転による綾絡文を施文するもの（２）。

４類：口縁部に楕円や斜沈線などによる連続した刻み目を施文する類（４・５）。

第Ⅳ群土器（中期）

１類：口縁部の区画内に沈線による文様を充填するもの（24）。

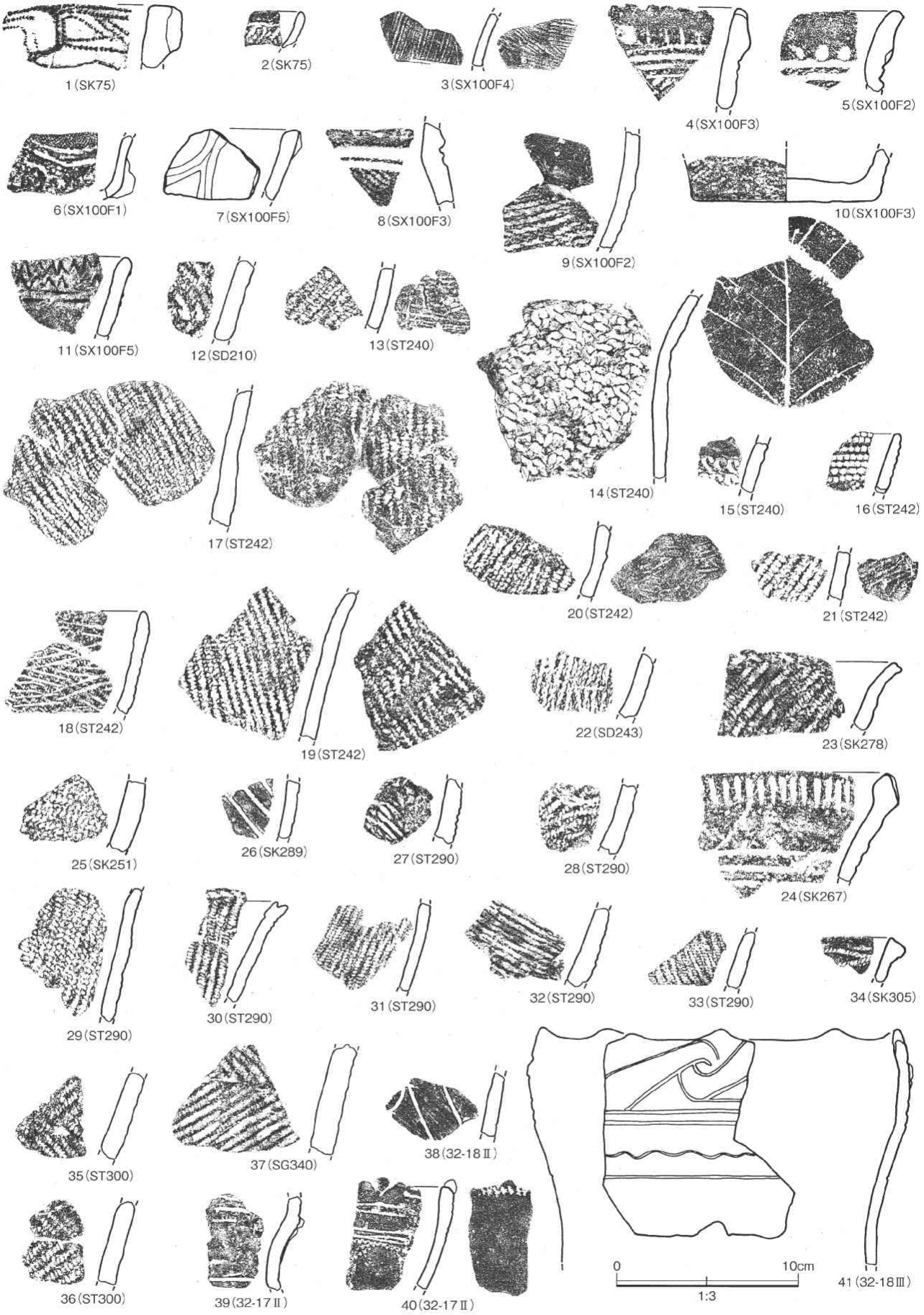
２類：隆・沈線によって囲んだ区画内に地文を充填するもの（６～９）。

第Ⅴ群土器：表面に縄文や撚糸文の地文のみを施文する一群（22・23・27・30～33）。

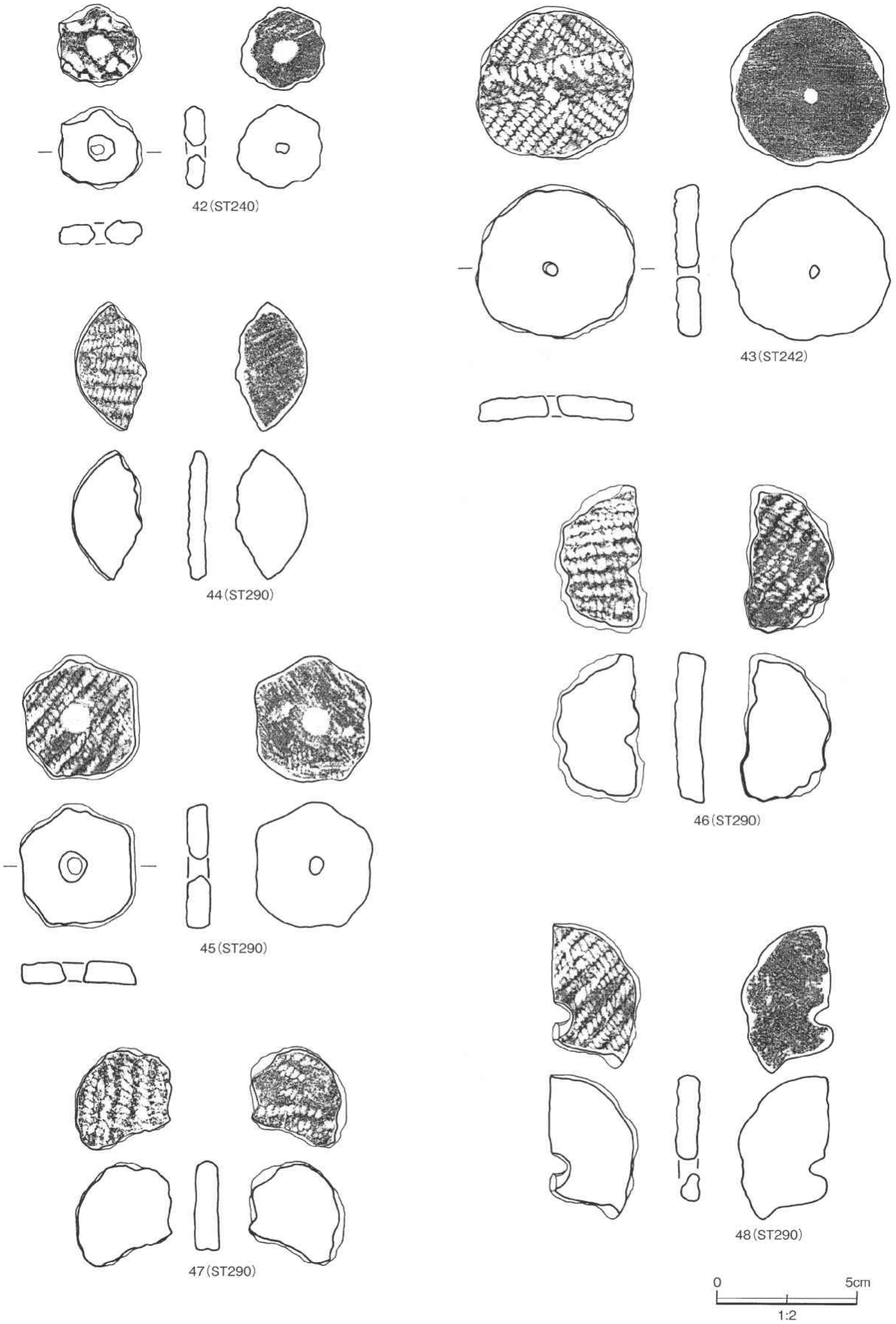
以上の５群16類に分類した。

1・2はＳＫ75から出土した深鉢口縁部片で、第Ⅲ群2・3類に属する。1は口縁部に粘土紐で方形の文様帯を作り、その区画内にも粘土紐の貼り付けにより文様構成される。これらの粘土紐上には、半截竹管状の工具で左から右へ、または下から上へ向かって連続した刻み目が施文される。

３～11はＳＸ100からの出土土器で、第Ⅰ群～Ⅴ群までの内容を包括している。薄手の３は条痕文土器で、表裏面とも研磨調整した後の器面に条痕文が施文される。４は口唇にV字形のスリットを入れ、さらに肥厚した口縁部下端にも刻み目状の沈線を施している。５も肥大する口縁部が特徴的で、頸部に平行沈線を引いた後、その直上に刺突による円文が廻らされる。６は裾広がりで頂部に稜をもつ隆線を貼り付け、隆線内側には線引き後に磨きを加えた調整沈線を伴っている。７の口縁部片には、稜の低い微隆起線による囲みを形成している。8は隆帯沿いに太くて抉りの深い沈線を引き、その内部に地文が施文される。9は稜のない低い隆線によって囲


1(SK75)
2(SK75)
3(SX100F4)
4(SX100F3)
5(SX100F2)
6(SX100F1)
7(SX100F5)
8(SX100F3)
9(SX100F2)
10(SX100F3)
11(SX100F5)
12(SD210)
13(ST240)
14(ST240)
15(ST240)
16(ST242)
17(ST242)
18(ST242)
19(ST242)
20(ST242)
21(ST242)
22(SD243)
23(SK278)
24(SK267)
25(SK251)
26(SK289)
27(ST290)
28(ST290)
29(ST290)
30(ST290)
31(ST290)
32(ST290)
33(ST290)
34(SK305)
35(ST300)
36(ST300)
37(SG340)
38(32-18Ⅱ)
39(32-17Ⅱ)
40(32-17Ⅱ)
41(32-18Ⅲ)
0
10cm
1:3

第29図　縄文土器


42(ST240)
43(ST242)
44(ST290)
45(ST290)
46(ST290)
47(ST290)
48(ST290)
0
5cm
1:2

第30図　有孔円板

んだ区画内部に、ＲＬＲ原体の複節縄文を充填している。11は波状縁を呈す口縁直下に、細い粘土紐を鋸歯状で２段に貼り付けて文様帯を構成する。ＳＤ210出土の12は、撚りの異なる２本の原体を結束した羽状縄文が施文される。

13～15・42はＳＴ240から出土した遺物で、第Ⅰ群５類と第Ⅱ群２類とにより組成される。13の表面の地文は０段多条の斜縄文である。14はループ文の原体を崩れたまま回転させたことによる文様と解され、本来的には15と同様の多段形態を呈したと考えられる。42の有孔円板は、小破片を利用したものであるため表面の文様を判別し難いが、裏面が研磨される点や胎土などは14と共通しており、同一個体の可能性が高い。

16～21・43はＳＴ242の出土遺物で、第Ⅰ群２類ｂ・３類・５類・６類、第Ⅱ群２類（３類併用）の各類で組成される。16の口縁部には、棒状工具の先端を使用したと思われる円形の連続刺突文が、口縁直下から７段に亘って施文される。18は地文の上から平行沈線を交互施文した口縁部片である。表裏縄文土器の17・19は器壁が10㎜前後の厚手で、胎土には多量の繊維を含んでいる。20・21は縄文条痕文土器で、胎土中に繊維の混入が認められる。43はループ文と非結束羽状縄文により文様構成されるもので、裏面は精緻な研磨がなされる。

22～26は各遺構から単発的に出土した土器である。22は地文として撚糸文が施された深鉢の体部片である。23は口縁直下からＬＲの斜縄文が施文され、口唇にも同じ原体による回転文が付されており、胎土には多量の繊維が混入する。24の口縁部資料は、肥厚する口縁に連続してスリットを入れ、頸部上に横位沈線を引いて文様帯を区画している。器面が摩滅しており観察し難いが、文様帯には撚糸圧痕文の痕跡が微かに見て取れる。25は多段に施されたループ文と認識できるが、14同様に原体が崩れた状態での施文と思われる。第Ⅰ群２類aの26は、表裏面とも丁寧に研磨調整される。

27～33と44～48はＳＴ290出土の一括資料で、組成には第Ⅰ群５類・６類及び第Ⅱ群１類・４類の内容を含んでいる。有孔円板が５点出土しているが、46は側縁の加工が未完了なことから、製作途中で破損したものと考えられる。これらは裏面への施文の有無により、44が縄文条痕文土器、45～47が表裏縄文土器に分類される。第Ⅴ群に属するもののうち27・32は無節、29・31・33が単節の縄文である。30は23と同様、平坦な面を有する口唇にも施文されており、口縁が外反する形態も共通する。

34はＳＫ305出土で、口縁直下に撚糸圧痕文を施している。35・36はＳＴ300から出土した土器片で、撚りの異なる２本の原体を使用した非結束羽状縄文が施文される。38～40は包含層取り上げの資料で、第Ⅰ群１類及び２類aの土器である。胎土中に繊維を含まず、色調は赤褐色を呈する。口縁部片の40は瘤状の小突起を口縁に付し、口縁の裏面には貝殻腹縁による連続した刻み目を廻らす。表面の施文は横位の平行沈線と楕円状に施した貝殻腹縁圧痕により描出され、裏面は刻み目直下から精緻に研磨される。39も区画文的な沈線間に貝殻腹縁圧痕が認められる。41は器形が窺える唯一の資料で、ＳＫ332と包含層出土破片が接合した深鉢の上半部である。口縁部が内弯ぎみに立ち上がる器形で、口縁形態は波状縁となる。横位平行沈線で口縁部文様帯を区画し、鍵手状を呈する数条の沈線により文様構成され、鍵手状沈線の連結部には小突起が付される。

なお、第Ⅴ群土器として一括したものは各遺構での伴出関係から、第Ⅰ～Ⅱ群土器に属するものと判断される。

（２）　石　器

石器の種類は打製石器・磨製石器（石斧）と礫石器の別がある。38点図化した打製石器には、石鏃・石槍・石匙・石篦・掻器・削器の定形的器種が存在する。また、礫石器には磨石と石皿の２種が認められる。

＜石鏃＞折損品や未成品を含めて18点が出土した。内訳は基部の形状による分類で、平基鏃15点、凹基鏃２点、有茎鏃１点である。

49～63は平基鏃で、このうち14点はＳＫ251から出土した一括資料である。細身を呈し、基部は細かい押圧剥離により調整加工されている。完形品から知られる全長が40㎜を超える大型品と、25㎜前後を測る小型品の二種が存在するようだ。これらは、縄文時代早期に特徴的な形態の石鏃と認識できる。凹基鏃２点のうち、64は基部を深く抉り出すことで脚部が作出され、右脚部が折損しているものの左右対称形となる。65は基部に凹弧状の僅かな抉り込みが入るが、全体の形状が整わないことから整形加工途中の未成品と思われる。有茎鏃の66は尖頭部の下半から丸みを帯びて茎に至り、尖頭部と基部

の長さの比は約７：３を測る。

＜石槍＞67の１点のみが出土した。横長剥片を素材とし、主要剥離面側に施された押圧剥離によって尖頭部を作出しているが、全体的に形態が整わないので未成品と考えられる。

＜石匙＞相対する二つのノッチを入れることによって作出されたツマミをもつ石器で、10点出土した。全て縦長剥片を素材としており、主要剥離面側の調整加工によって基部を作出している。

68～73は、主要剥離面側右辺に微細な剥離で刃部を作出し、そこから背面側の左辺に主要剥離面より大きな剥離を施して整形する、いわゆる松原型石匙である。形態的には左右の側縁が非対称形で、正面(背面側)の右側縁が直線状をなし、左側縁が弧を描くかあるいは「く」の字状に屈曲するタイプである。なお、68･69は使用痕を示す刃部の光沢が肉眼でも確認できる。74は縦長であるが、直線状をなす下端の縁辺に刃部が作出される。小型品の75は正面右側縁が弧を描き、左側縁が「く」の字状に曲がって肩を張る形態のもので、刃部の押圧剥離は背面側にのみ施される。これらには松原型石匙特有の打面調整が認められないことから、上記の一群とは区別される。幅広剥片を素材とした76は、素材の末端側にツマミが作出され、調整加工は主要剥離面側に集中している。時代的に松原型石匙は前述の平基鏃と対応するが、76は有茎鏃等と共伴していることから、縄文時代早期以降のものと思われる。77は鉄石英製のミニチュア品であり、両側縁とも「く」の字状に屈曲した形態を呈し、下端の縁辺を刃部としている。

＜石箆＞素材となった剥片の両面に調整加工が施され、その長軸の末端が刃部になる石器で、３点出土している。

78は撥形で両刃状の刃部をもち、丸みを帯びた刃部先端の一部に磨耗が確認できる。大型品であり、打製石斧の用途が考えられる。79は方形様の短冊形を呈し、丸みを帯びた掻器状の刃部をもつ。主要剥離面側は側縁部だけに周辺加工が認められ、背面側にのみ施された縦に伸びる正方向の剥離によって刃部が作出される。80は撥形で刃部が片刃状となり、直線状をなす刃部には微小な剥離痕が見られる。

＜掻器＞急角度の調整加工によって刃部を作出した石器で、２点出土した。

81は素材末端が刃部となり、微小な押圧剥離によって整形される。左右両側縁にも調整加工が認められるが、角度が浅く掻器の刃部とはならない。82は全縁辺が押圧剥離で加工されており、素材末端と右側縁が刃部となり得るものである。刃部は79同様に微小な押圧剥離で作出される。

＜削器＞剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出した石器で、４点が出土した。

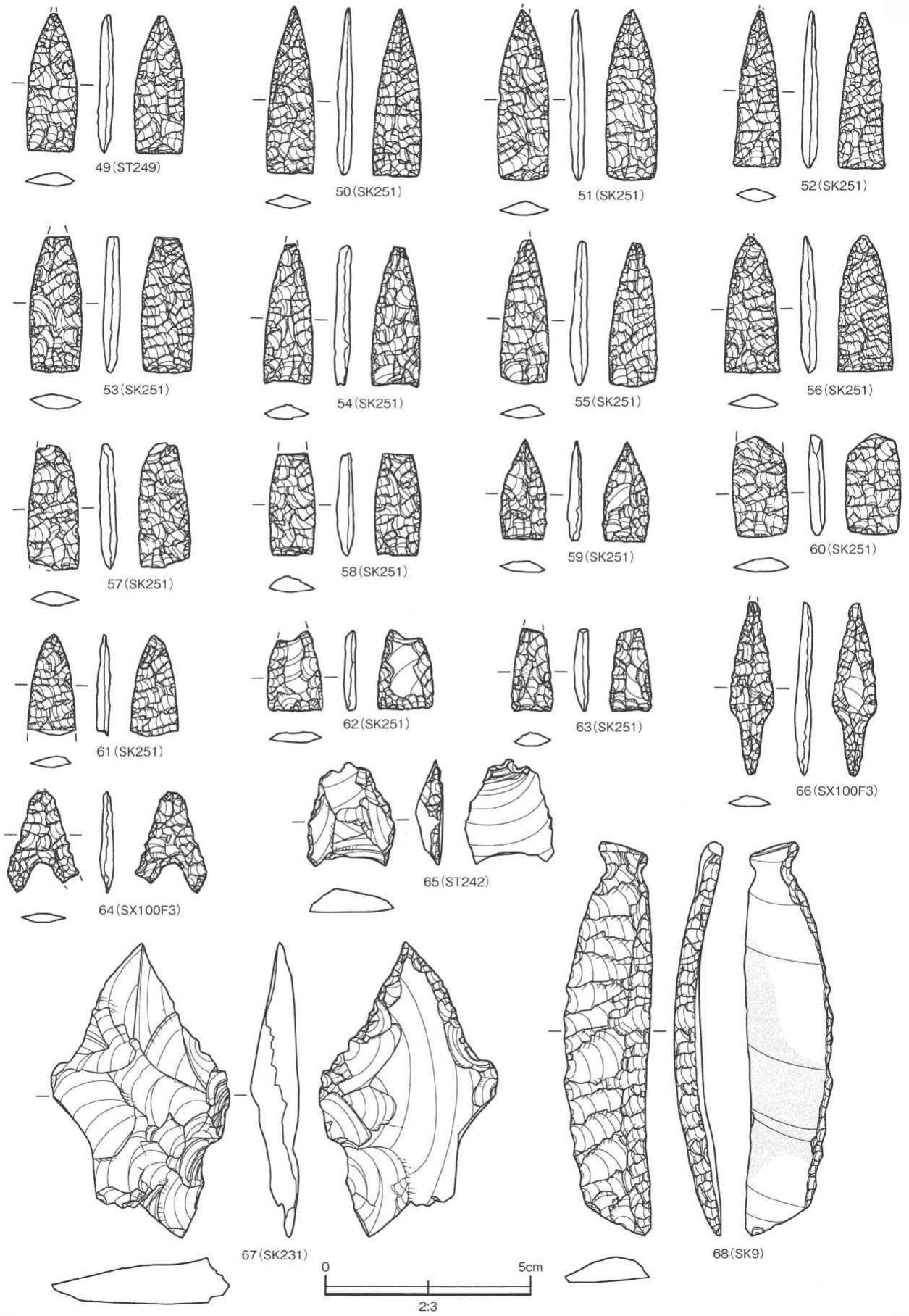
83は調整打面から剥離した分厚い縦長剥片を素材としている。右側縁に鋸歯状の刃部が作出され、左側縁を敲打で潰している。84は調整打面から剥離した縦長剥片を素材として、素材の両側縁が主要剥離面側の片面加工、末端が両面加工の刃部となるものである。85は平坦打面から剥離した縦長剥片を素材とし、左側縁に片面加工による刃部を作出している。84・85は打面開始部にコーンが見られることから、ハードハンマーによる直接打撃で素材剥片が剥離されたと考えられる。86は両側面を折り取ることで成形し、素材剥片の両端に両面加工の刃部が作出される。

＜磨製石斧＞折損した基部側と見られる87が１点出土している。両側縁が面取りされる定角式のものであるが、研磨されていないことから、製作途中で破損した可能性が高い。先端下の一面には敲打痕が観察されるため、折損後に敲石として利用されたとも考えられる。

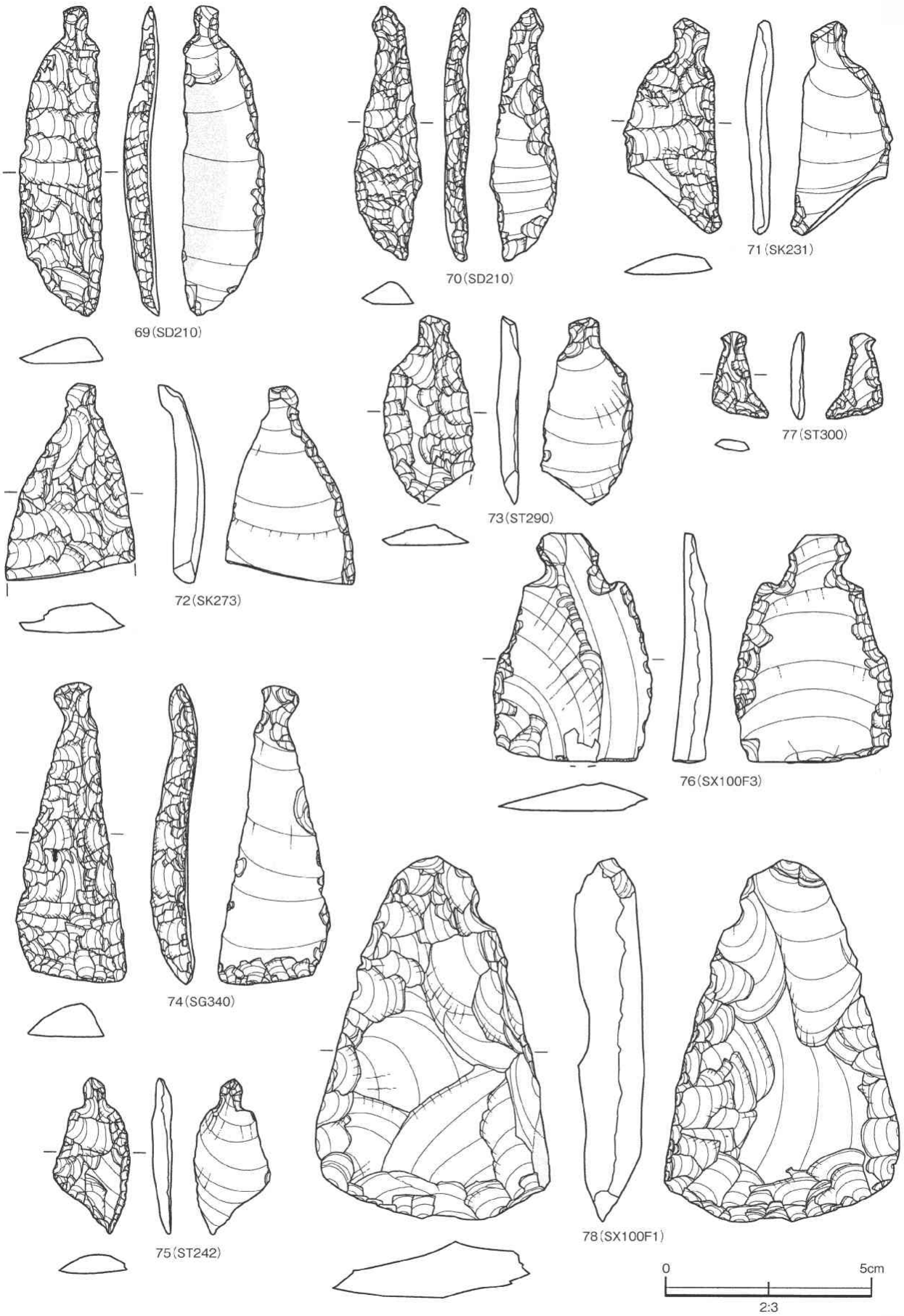
＜磨石＞河原石の礫面に磨痕をもつ石器で、３点を図化した。形状は棒状または板状を呈するもので、礫面のほぼ全体を磨面として使用している。

棒状形態の88は先端部を含めた礫面全体が平滑であり、楕円柱を呈する磨石である。末端に凹痕があり、亀裂を生じていることから、敲石としての用途も兼ね備えたものであろう。89は板状の扁平礫で、横断面形が蒲鉾形を呈する。側面を含めてほぼ全面が使用されており、特に末端部は凹部ができるほど磨痕が顕著である。90は三角形様の横断面を呈する柱状礫で、破断面を含めた全面を磨面として使用しており、三角形状の一側面には磨痕跡を示す斜方向の線上痕が明瞭に残る。

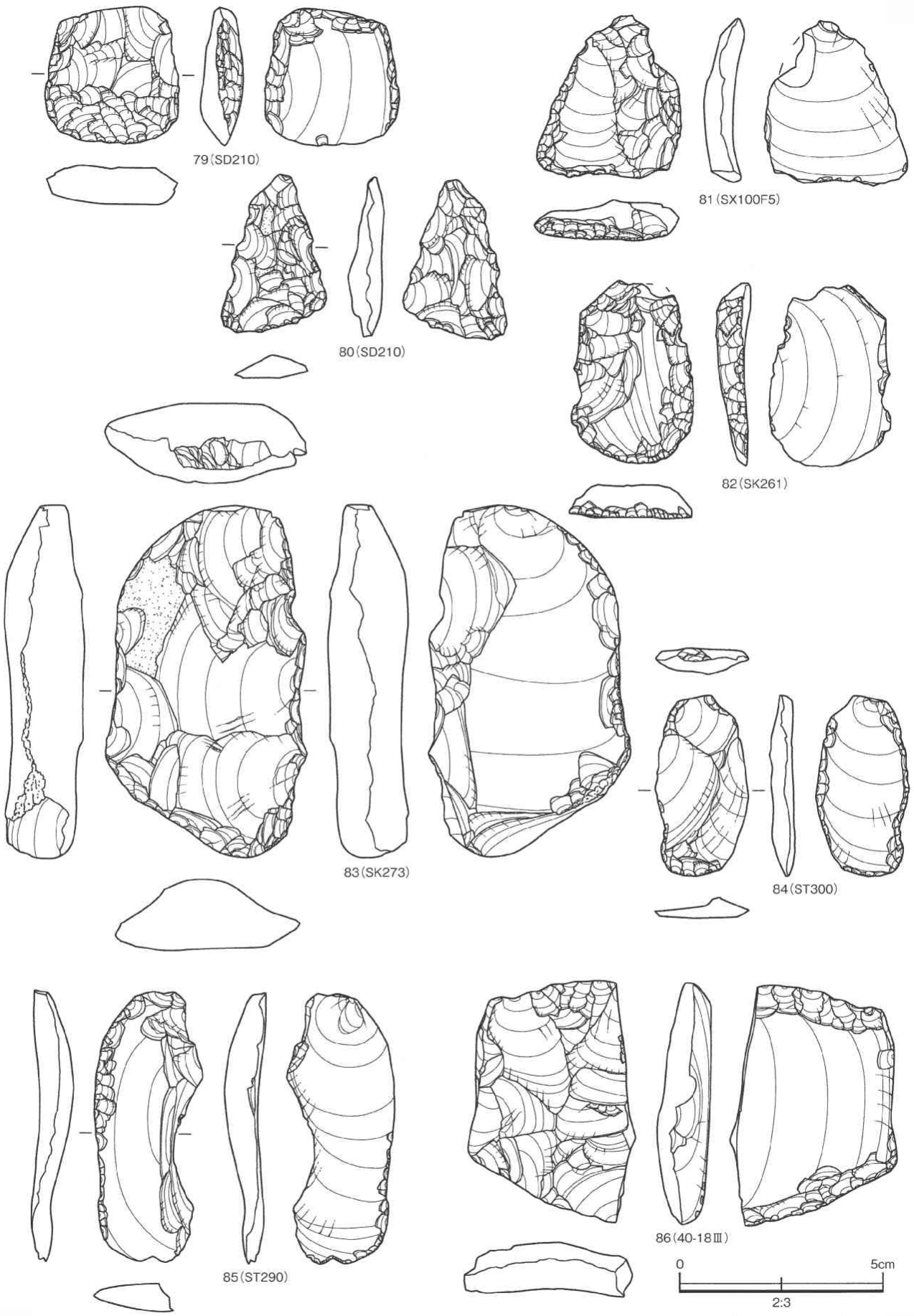
＜石皿＞91は扁平な河原石の両面を敲打と磨きにより水平に仕上げた石皿で、全体の約１/４は欠損している。被熱により両面とも淡い赤黒色を帯びる。91と同一遺構から出土した92は、研磨によって一面が浅く窪む状態から、石皿に分類して掲載した。方形の立方体を呈し、平滑な磨面を形成している。


49(ST249)
50(SK251)
51(SK251)
52(SK251)
53(SK251)
54(SK251)
55(SK251)
56(SK251)
57(SK251)
58(SK251)
59(SK251)
60(SK251)
61(SK251)
62(SK251)
63(SK251)
66(SX100F3)
64(SX100F3)
65(ST242)
67(SK231)
68(SK9)
0
5cm
2:3

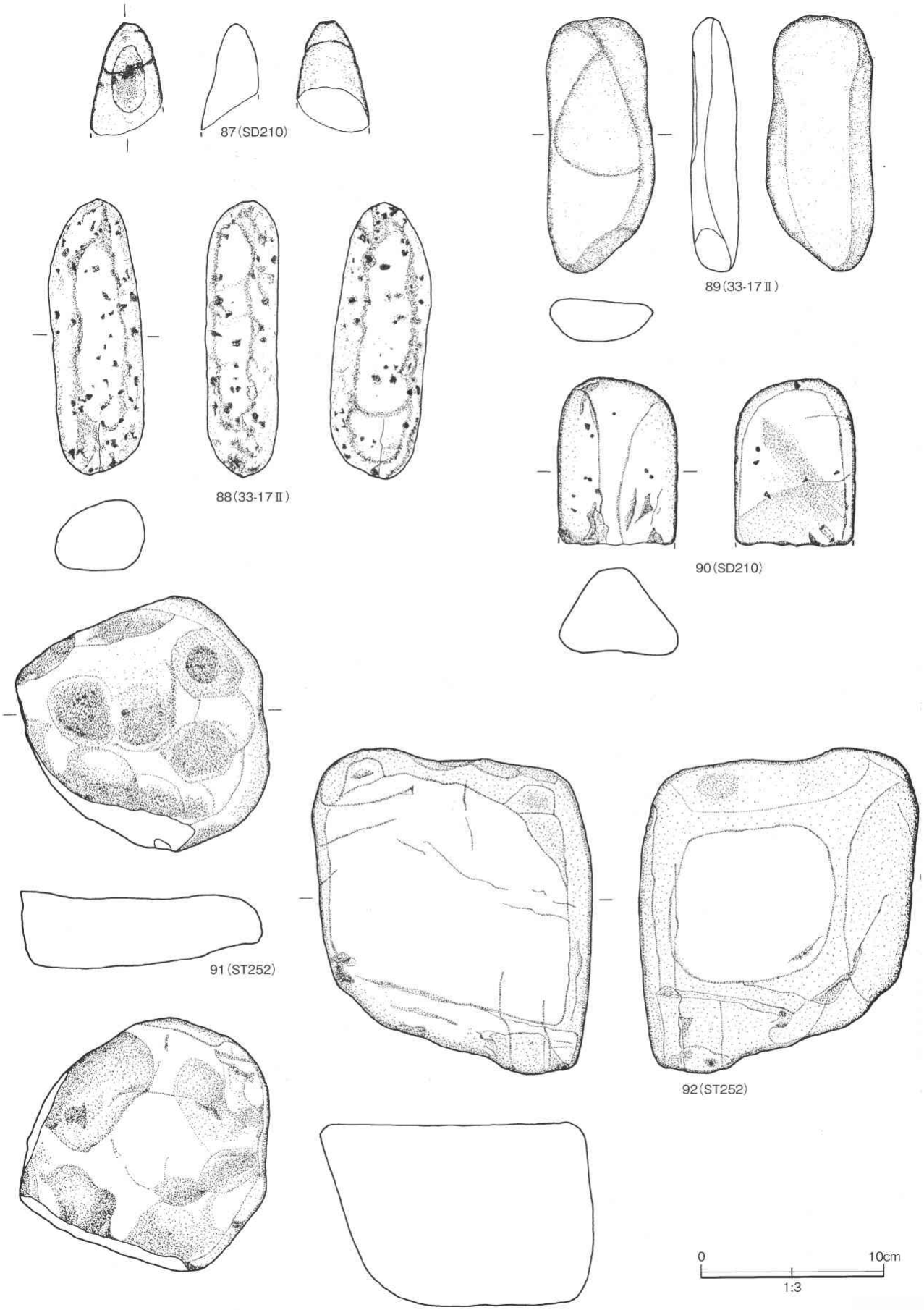
第31図　石鏃・石槍・石匙


69(SD210)
70(SD210)
71(SK231)
72(SK273)
73(ST290)
74(SG340)
75(ST242)
76(SX100F3)
77(ST300)
78(SX100F1)
0
5cm
2:3

第32図　石匙・石篦


79(SD210)
81(SX100F5)
80(SD210)
82(SK261)
83(SK273)
84(ST300)
85(ST290)
86(40-18Ⅲ)
0
5cm
2:3

第33図　石箆・掻器・削器



第34図　磨製石斧・磨石・石皿

表３　打製・磨製石器属性表

遺物番号	器種	出土地点	石材	刃部形態	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
49	平基鏃	ST249	珪質頁岩	—	33.7	12.4	3.7	1.5	
50	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	41.0	12.0	3.9	1.7	
51	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	41.7	12.6	3.7	2.0	
52	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	38.3	11.5	4.1	1.5	
53	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	33.2	12.9	4.2	1.8	先端欠
54	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	34.1	12.1	3.9	1.6	先端欠
55	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	35.2	11.8	4.5	1.7	先端欠
56	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	33.3	13.6	3.9	1.8	
57	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	30.7	12.8	4.2	1.8	先端・基部一部欠
58	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	25.0	11.4	4.4	1.3	先端欠
59	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	24.5	11.4	3.6	0.9	
60	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	24.7	13.6	3.8	1.5	先端欠
61	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	24.7	11.8	3.3	0.9	基部欠
62	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	19.5	13.6	3.3	0.9	先端欠
63	平基鏃	ST251	珪質頁岩	—	20.2	10.2	3.7	0.7	先端欠
64	凹其鏃	SX100F3	珪質頁岩	—	24.7	17.5	3.6	0.9	右脚欠
65	凹基鏃	ST242	珪質頁岩	—	25.5	21.6	6.8	3.4	未成品
66	有茎鏃	SX100F3	珪質頁岩	—	42.2	10.8	4.1	1.2	先端欠
67	石槍	SK231	珪質頁岩	—	72.0	43.8	11.8	22.3	未成品
68	石匙	SK9	珪質頁岩	外弯	96.2	22.1	11.9	13.7	松原型石匙
69	石匙	SD210	珪質頁岩	外弯	75.4	20.5	8.9	10.8	松原型石匙
70	石匙	SD210	珪質頁岩	外弯	61.8	16.7	6.2	5.9	松原型石匙
71	石匙	SK231	珪質頁岩	外弯	52.3	24.5	6.7	5.9	松原型石匙
72	石匙	SK273	珪質頁岩	外弯	48.4	31.7	11.8	10.5	松原型石匙
73	石匙	ST290	珪質頁岩	外弯	45.8	22.4	5.7	4.7	松原型石匙
74	石匙	SG340	珪質頁岩	直線	73.2	27.7	11.1	16.2	
75	石匙	ST242	珪質頁岩	外弯	38.1	19.0	5.1	2.9	
76	石匙	SX100F3	珪質頁岩	直線	55.9	38.8	9.4	16.4	
77	石匙	ST300	鉄石英	外弯	21.3	14.0	3.6	0.8	ミニチュア石匙
78	石篦	SX100F1	珪質頁岩	外弯	88.7	57.3	17.5	73.4	打製石斧か？
79	石篦	SD210	珪質頁岩	外弯	34.0	33.5	10.5	13.4	
80	石篦	SD210	珪質頁岩	直線	39.5	25.9	8.6	6.2	
81	掻器	SX100F5	珪質頁岩	直線	40.4	35.6	10.0	10.2	
82	掻器	SK261	珪質頁岩	外弯	45.1	30.1	8.4	9.9	
83	削器	SK273	珪質頁岩	鋸歯状	87.1	49.9	19.9	101.4	
84	削器	ST300	珪質頁岩	外弯	44.8	23.0	6.4	5.6	
85	削器	ST290	珪質頁岩	外弯	66.9	27.0	10.4	13.6	
86	削器	40-18Ⅲ	珪質頁岩	直線	59.9	41.3	13.1	32.2	
87	磨製石斧	SD210	安山岩	—	59.5	37.5	25.0	78.2	刃部欠

表４　礫石器属性表

遺物番号	器種	出土地点	石材	素材形態	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
88	磨石	33-17Ⅱ	安山岩	棒状	149.8	50.1	38.2	446.6	
89	磨石	33-17Ⅱ	安山岩	棒状	138.2	57.3	24.4	265.0	
90	磨石	SD210	安山岩	棒状	91.3	65.2	45.5	376.4	
91	石皿	ST252	安山岩	略円形	131.5	138.4	40.5	1109.1	被熱
92	石皿	ST252	安山岩	立方体	176.2	148.7	95.3	410.0	

2　弥生時代の遺物

当該期の出土遺物は弥生土器であり、その大半が第１次調査区東・南端部の段丘堆積層であるＳＸ100から集中的に出土している。数量は整理箱にして18箱で、第１次・２次を合わせた全体出土量の約８割を占める。時期的には中期後半の川原町口式に併行するものが主体と認識できる。

弥生土器の器種には点数の多い順に、壺・甕・蓋・高坏・鉢が認められる。図上復元にて全形が窺えるものは３点のみで、他は部分的な破片資料であるが、文様描出方法の相違や器種構成の差異などから２群に分類し、検討の対象とする。なお、掲載にあたっては出土遺構と器種を優先させており、２群に分類した土器が混在していることを断っておく。

第Ⅰ群土器

細い沈線により重層する文様が、１本の串状・ヘラ状工具で描かれるものを本群とする（95・99・101～104・114・126・129・132・134～137・141・142・144～147・150～152・157・160・162～164・166・168～171・175・178・179・182・184・185・190・191・193・196・206・207・209～216・218～221・223・224・226～228・230・231・238・239・244・246・248・250・252・253・255・256・259・261・262・264・266）。器種構成では壺が圧倒的に多く、長頸壺と無頸壺が存在する。体部が球形を呈し、文様は主に口縁部～体部上半に施文される。沈線文様には渦巻文・連弧文・重三角文や重山形文などがあり、これらを組み合わせて描出する例や、沈線間が赤彩されるものも存在する。また、甕では頸部下に結節回転文を施すものが多く見られる。

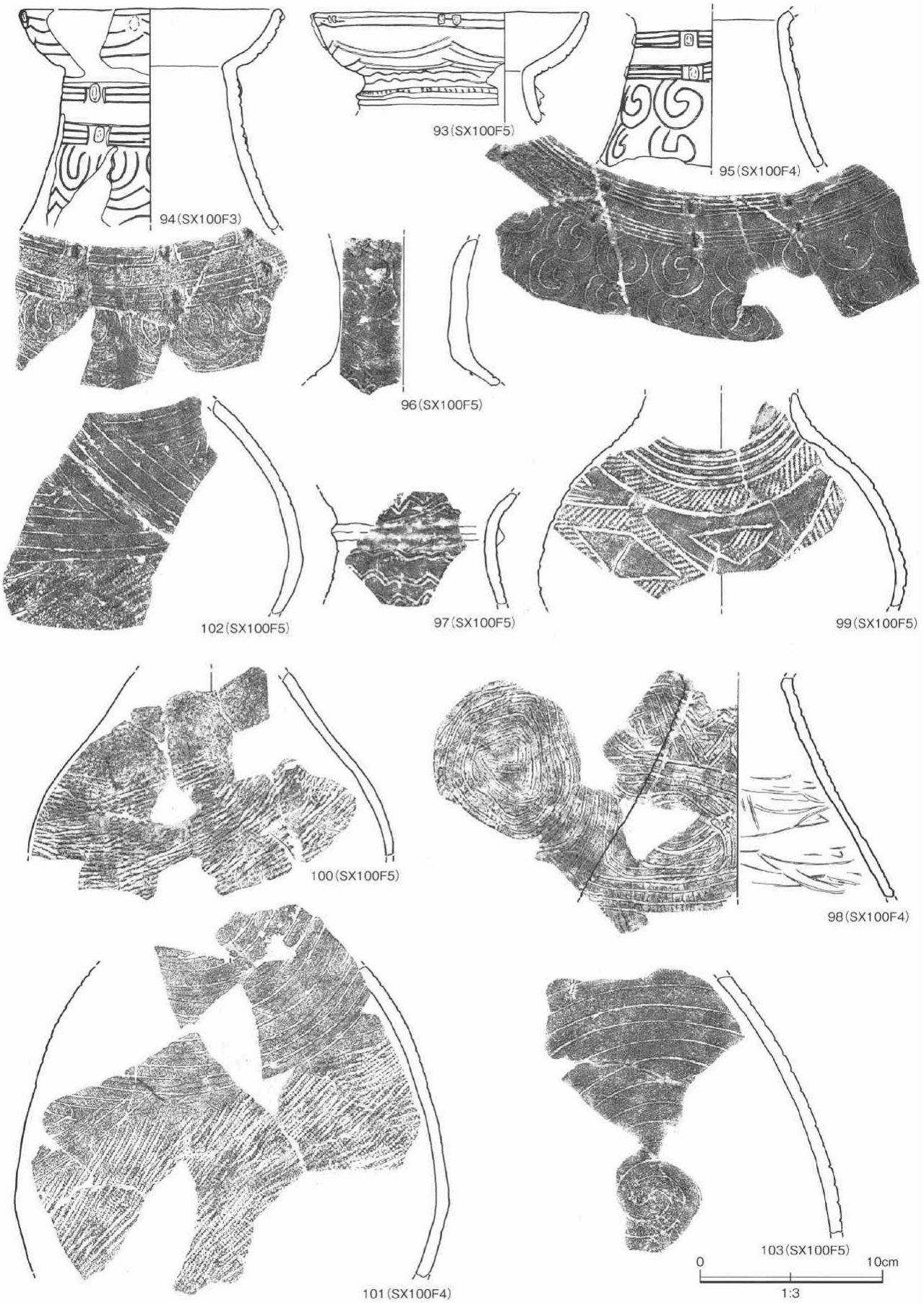
第Ⅱ群土器

前群同様の沈線文様が、固定された２本の串状工具もしくは半截竹管を縦に割った工具などで、２本一対の平行する沈線が引かれるものを本群とする（93・94・97・98・109・116・122・124・128・131・133・138～140・143・148・149・154～156・158・159・165・173・176・177・181・186・187～189・194・197・202～205・208・240～243・251・254・258・260・261）。土器の組成は沈線が観察されるものに限れば壺と甕からなり、描かれる文様は前群と同じく多様なものがある。壺では口縁部や頸部に貼瘤を付すものが多く認められ、頸部上端に断面三角形の突帯が廻らされる。

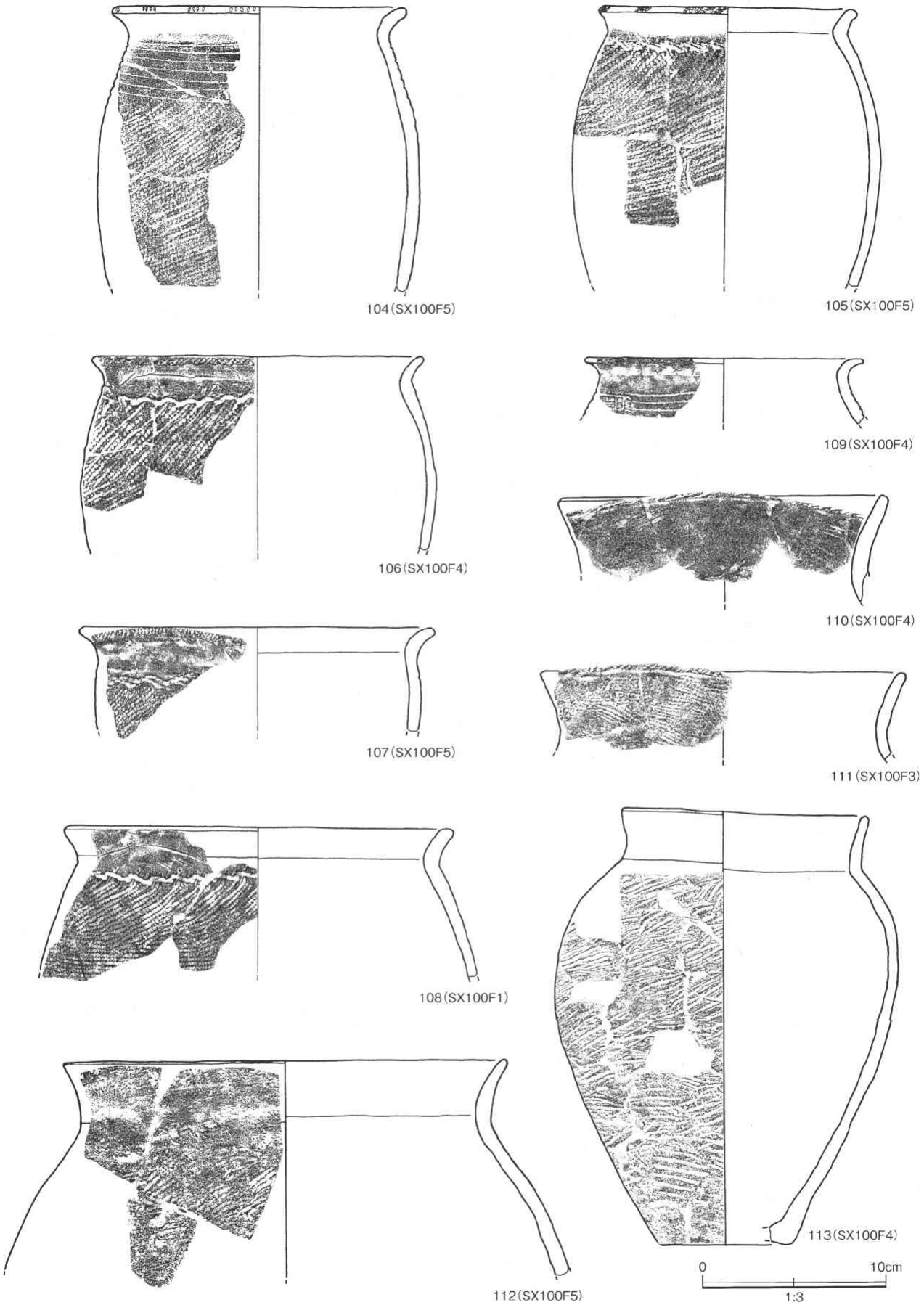
以下に図化した資料についての概要を記す。

93・94は大形長頸壺の口縁～頸部が窺える資料である。93は口縁部に２本同時引きで描かれた重連弧文や小波文様が施される。口縁直下には平行沈線施文後に２個一対の貼瘤がなされ、貼り付け箇所が連弧文の山形を形成する箇所に対応していることから、一周のうち６箇所に付されたことが知られる。また頸部には、連続して刻み目を施した突帯を廻らす。94も口縁部が連弧文＋貼瘤によって文様構成され、頸部上半には区画された集合沈線文が二段にわたり描かれる。横位の集合沈線は、後に引いた縦位沈線により不均等に区画されるが、縦線間は先の横線をナデ消した上で、ここにも貼瘤が付けられる。頸部下半は渦巻文を描いた下位に連弧文を施している。95も同様の文様構成を有した頸部資料で、渦巻文が二段に施文される。96・97は頸部の資料である。細身の筒状を呈する96は器壁が厚く、内面に胎土を盛り上げて成形している箇所があり、不均等な器厚となる。体部との境界付近に１本の波状沈線が認められる以外は無文である。97は太い頸部に断面三角形の突帯を廻らし、波状の平行沈線文が多段に施文される。98は長頸壺の頸部～体部上半、99～103は体部上半にあたる資料である。98は渦巻文や重山形文が規則性のない稚拙なタッチで描出される。器壁の薄い作りで、内面を多方向からヘラナデによって整形している。99は頸部下に多条の横位沈線を廻らせて体部と区画し、体部文様は菱形文や三角文の組み合わせにより描出される。文様帯では、斜縄文の充填とミガキが行われる区間を一間おきに作出している。100は全面に撚糸文が施文されるもので、内面に輪積痕が残り、器面は全体が赤褐色を呈する。101は体部上半に渦巻文と重三角文が、下半にＬＲ斜縄文が施文される。破片のために図上復元できなかった102は上半に重三角文、下半部にＬＲ斜縄文の、103には渦巻文の施文が観察される。

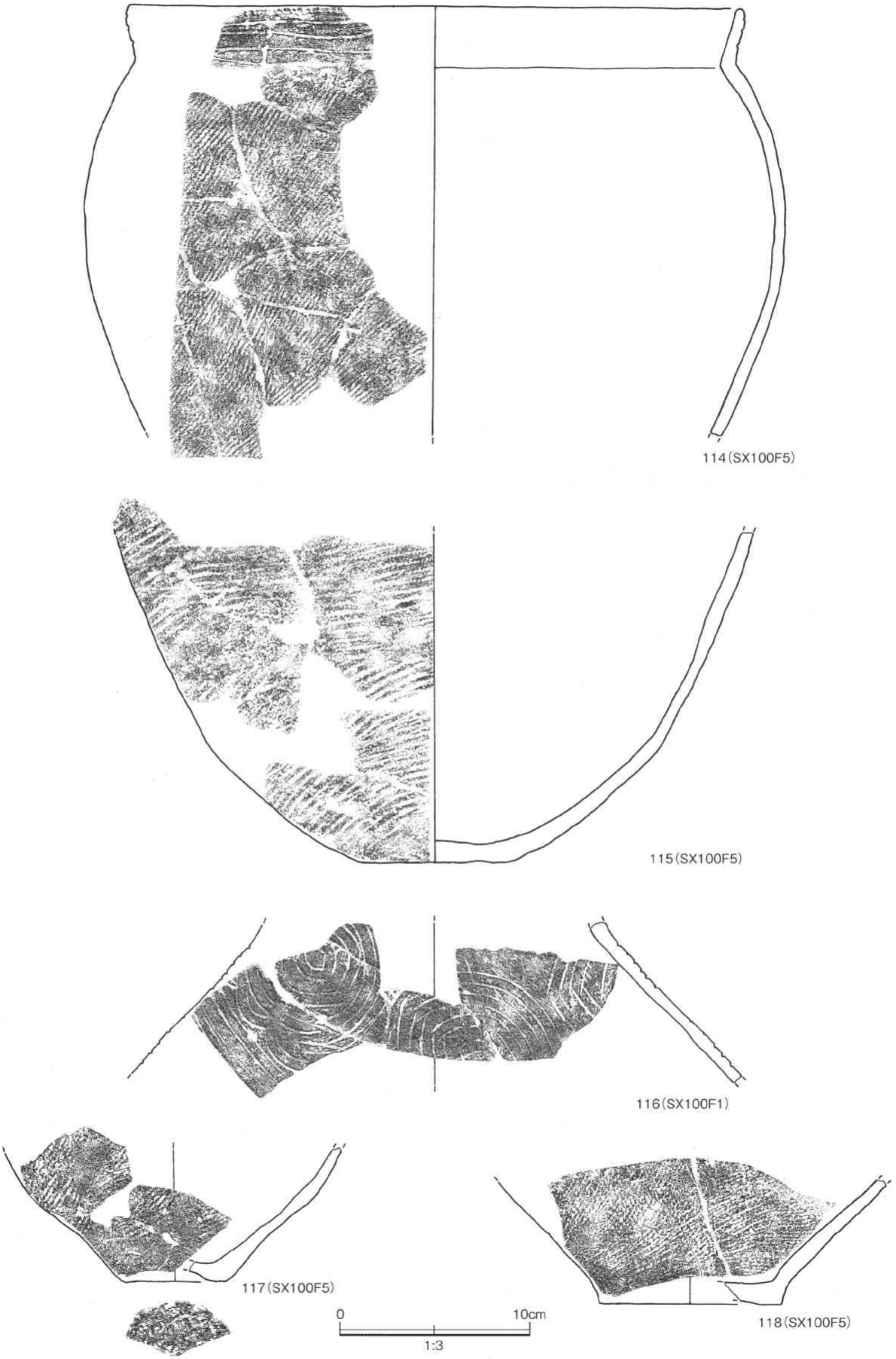
104～109は図上復元できた甕の口縁～体部上半部の資料である。これらは器形的に口縁部形態の相違や、法量の差異などが認められるが、ここでは文様構成に主眼をおいて分類の基準とする。104は口縁に刻み目を入れ、横ナデを施した口縁部下に７条からなる集合沈線を引い


94(SX100F3)
93(SX100F5)
95(SX100F4)
96(SX100F5)
102(SX100F5)
97(SX100F5)
99(SX100F5)
100(SX100F5)
98(SX100F4)
101(SX100F4)
103(SX100F5)
0
10cm
1:3

第35図　弥生土器(1)


104(SX100F5)
105(SX100F5)
106(SX100F4)
109(SX100F4)
110(SX100F4)
107(SX100F5)
111(SX100F3)
108(SX100F1)
113(SX100F4)
112(SX100F5)
0
10cm
1:3

第36図　弥生土器(2)


114(SX100F5)
115(SX100F5)
116(SX100F1)
117(SX100F5)
118(SX100F5)
0
10cm
1:3

第37図　弥生土器(3)

て縄文を施文している。沈線間及び内面は、丁寧なミガキによって器面調整される。105～108は縄文を施した口縁と、頸部に見られる結節回転による綾絡文を特徴とする。口縁部が大きく外反する109は、頸部に縦線で区画した沈線文を施している。110～113は広口の無頸壺である。110・111は口唇に縄文を施す類で、後者では口縁部にも施文されるのに対し、前者は無文となる。113は全形が窺い知れるもので、ほぼ直立する口縁部を無文とし、体部には全面に撚糸圧痕文が施文される。112も同類である。

114は甕に分類した大形品で、口唇に刻み目が入り、４条の沈線が蛇行しながら口縁部を廻っている。115は大形壺もしくは甕の体部下半～底部の資料で、狭い平底から大きく内弯して立ち上がる器形が知られる。長頸壺の頸部下にあたる116には、渦巻文と連弧文の施文が認められる。117・118の底部資料に見られる施文はいずれも撚糸文であり、117は底部中央が上底風に窪んでいる。

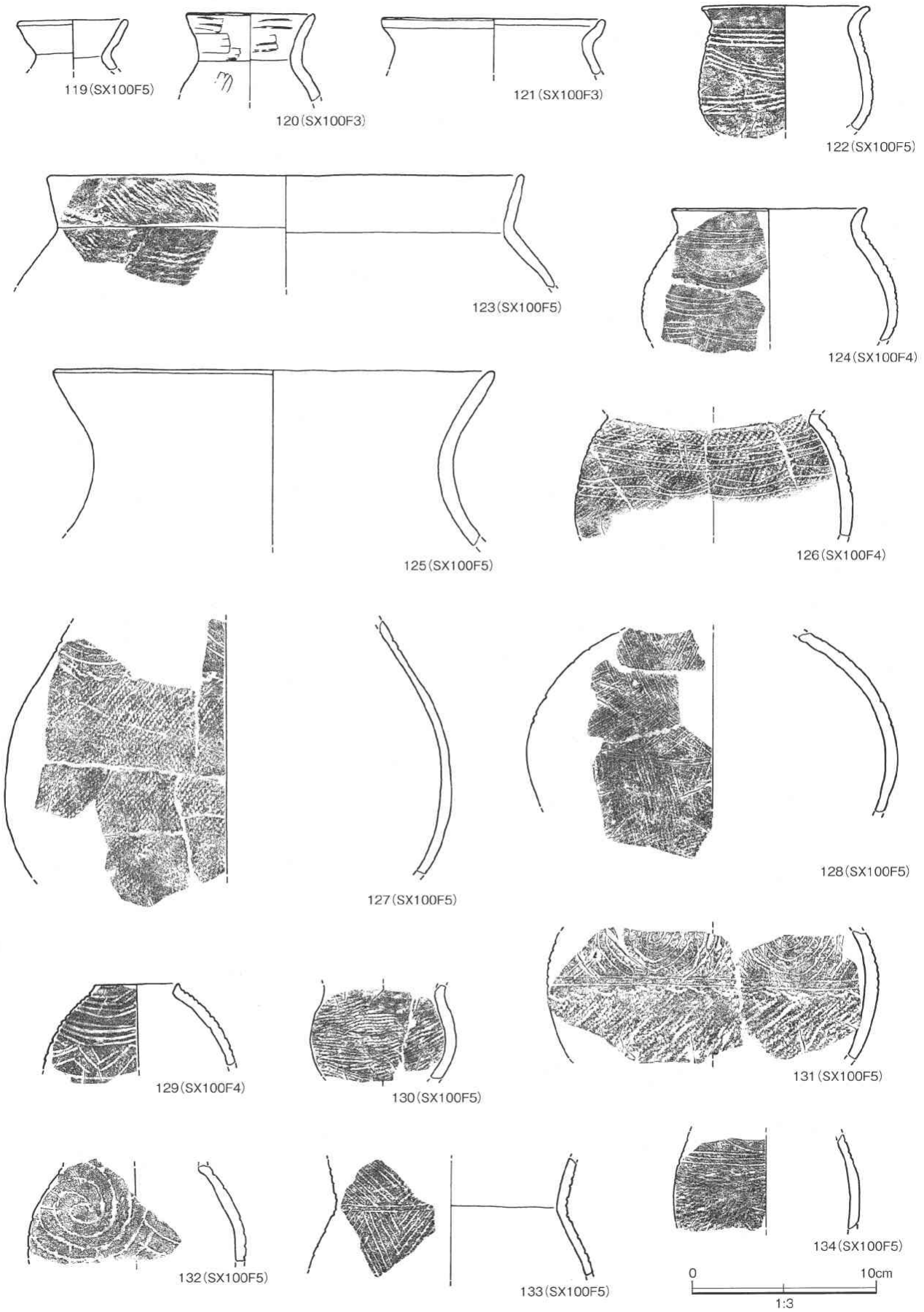
第38図（119～134）には、壺・甕の体部上半の破片から図上復元できた遺物を掲載した。文様構成が窺えるものの中で、122・124・126の小形甕には、頸部下の集合沈線と体部に施した重連弧文が共通して見られる。127の壺体部片に引かれた沈線は渦巻文と察せられ、その下には結節縄文を施文している。128は上半部に、間隔が狭く細い平行沈線によって重山形文や重菱文が描出される。129は体部から短くつまみ上げた口縁形態をもつ無頸壺で、集合沈線＋重山形文の文様構成が知られる。131は128同様、体部中央に引かれた平行沈線により文様帯を区画している。文様帯には渦巻文が、区画線下には結節縄文が施文される。132は抉りの深い沈線による渦巻文を施す。133は重山形文が描かれた頸部片で、区画線付近は赤色塗彩の顔料が残る。134の体部地文は、網目状撚糸文かと思われる。

第39図（135～155）は壺の口縁部資料を集めて採録した。これらの中で、135・142・144～147・149・154・155は口唇に刻み目を有し、139・152は口唇に縄文を施文する。文様は重連弧文（135・136・138・141・142・144～146・151）、重波状文（137・139・143・147・149・150・154・155）、重山形文（140・148）が主流であり、その他では区画沈線文＋縦線文を施すもの（152）と、無文で口縁に貼瘤を行うもの（153）が存在する。147では口縁の内面にも波状文が施文される。146と152は文様描出前に縄文を施文しており、文様を描いた後に沈線間またはその一部にミガキを施すことによって地文を磨消している。

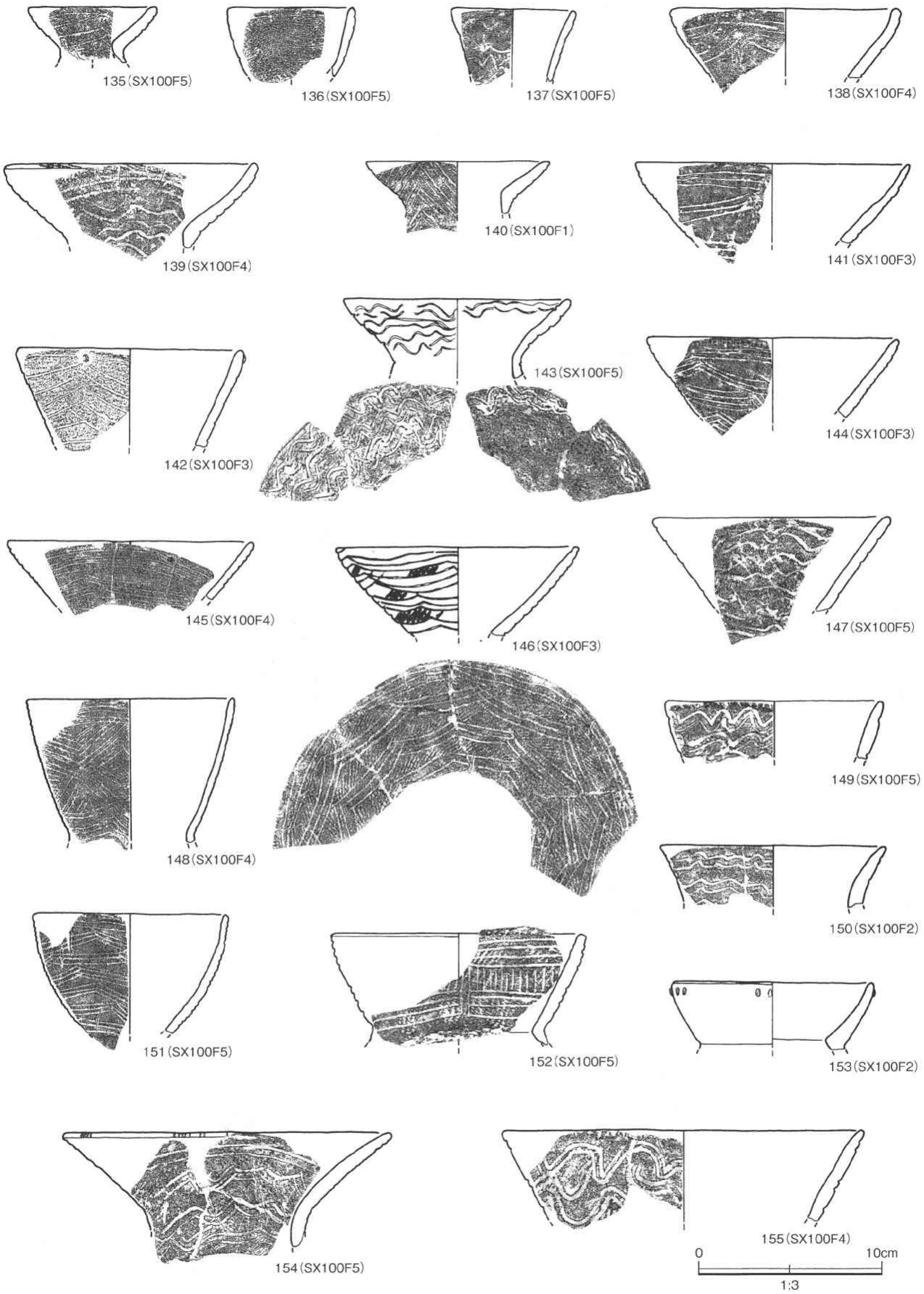
第40図（156～177）は壺と甕の口縁部や頸部の破片資料である。口唇に刻み目を付すものは157・168・169・175で、164・167・172は縄文を施文する。文様は159・162・163・168・169に重連弧文が、156・173・175に重波状文、176に重山形文、171に縦線文が認められる。集合沈線文が施されるもの（157・158・160・164～166・170・177）の中で、157・170には縦位の区画線が入る。168・169・177は、口縁内側に区画沈線文や波状文を伴っている。

第41図（178～210）も壺や甕の口縁部・頸部・体部の破片資料で、図上復元困難なものである。178～192までの口縁部片では、185・191が口唇に刻み目を有し、180・184は口唇に縄文が施文される。また、192は口縁に小突起を有し、178・181は口縁に貼瘤が付く。口縁内側の施文例で182は波状文、185が鋸歯状文、186には横位沈線文などのバリエーションが認められる。193は長頸壺の頸部片であり、稜に刻み目を付す突帯を二重に廻らす。199の沈線間は、ミガキ調整された上で赤彩が行われる。体部破片のうち、202と203及び204と205は同一個体である。描出される沈線文様は重連弧文や重山形文などが多用されるが、188は格子文、189・202・203では渦巻文もしくは連結円文、204・205には重菱文、209は半円文を施文する。196は頸部下の集合沈線文間に、Ｖ字状文を並べて施文している。

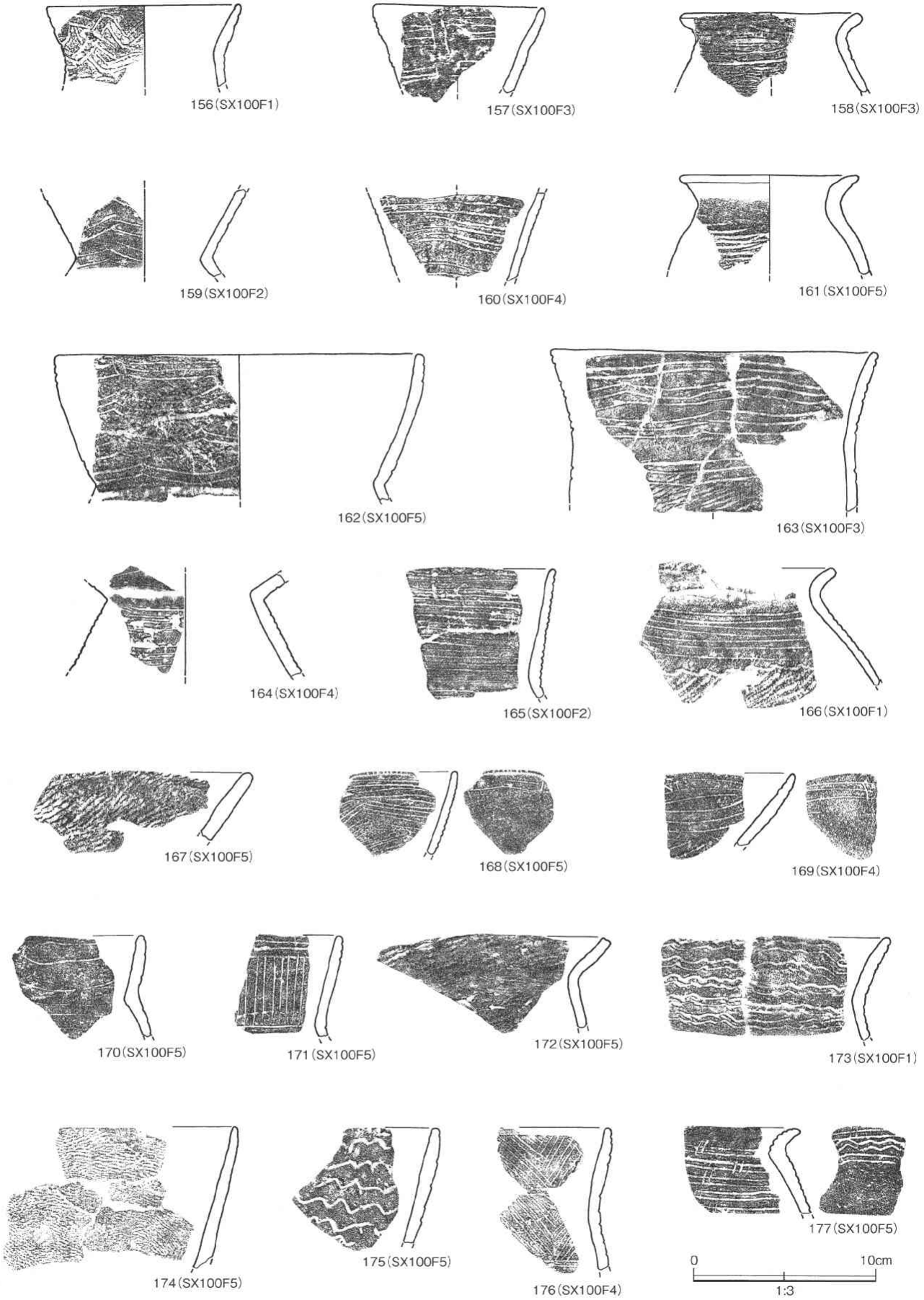
第42図には蓋（211～225）、高坏（226～229）、台付鉢（230）と、鉢や深鉢の体部下半～底部資料（231～236）を掲載した。蓋では211と225が復元にて全形の窺えるもので、他は鈕部や上半部の破片である。小形品の211は鈕部が短い筒状を呈し、鈕の天頂部が浅く窪み、筒状を呈する部分には指頭痕が観察される。体部は緩く内弯しながら口縁に至り、文様として５単位で周回する連弧文を描いている。212も筒形の鈕部を有し、天頂部が深く窪んで逆高台状の形態を呈する。鈕の口縁には対角線上の２箇所に穿孔があり、内側から外側へ向かって斜めに貫通させている。体部には重波状文を施文する。213も天頂部が抉られる短い筒状の鈕部をもつ。


119(SX100F5)
120(SX100F3)
121(SX100F3)
122(SX100F5)
123(SX100F5)
124(SX100F4)
125(SX100F5)
126(SX100F4)
127(SX100F5)
128(SX100F5)
129(SX100F4)
130(SX100F5)
131(SX100F5)
132(SX100F5)
133(SX100F5)
134(SX100F5)
0
10cm
1:3

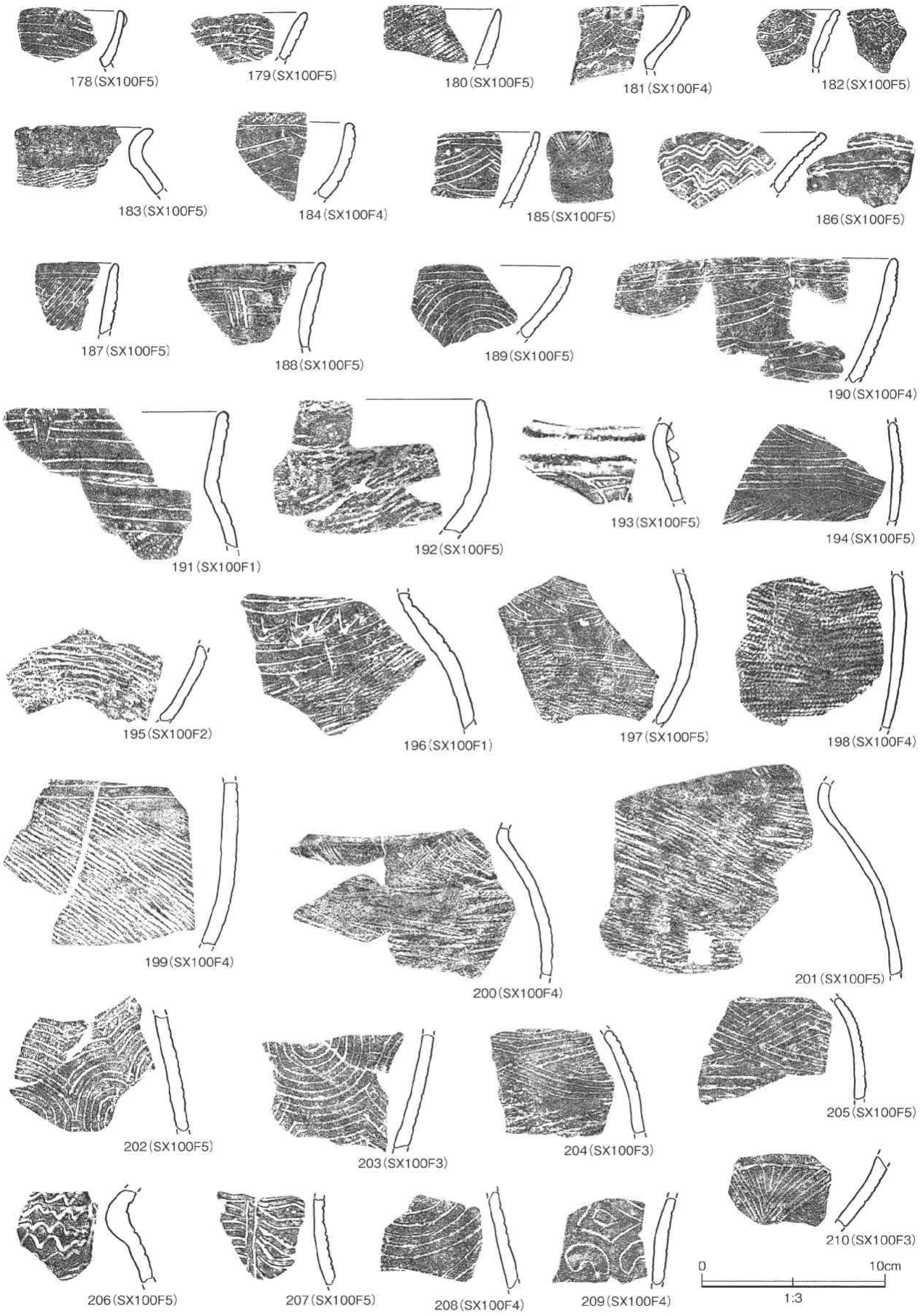
第38図　弥生土器(4)


135(SX100F5)
136(SX100F5)
137(SX100F5)
138(SX100F4)
139(SX100F4)
140(SX100F1)
141(SX100F3)
142(SX100F3)
143(SX100F5)
144(SX100F3)
145(SX100F4)
146(SX100F3)
147(SX100F5)
148(SX100F4)
149(SX100F5)
150(SX100F2)
151(SX100F5)
152(SX100F5)
153(SX100F2)
154(SX100F5)
155(SX100F4)
0
10cm
1:3

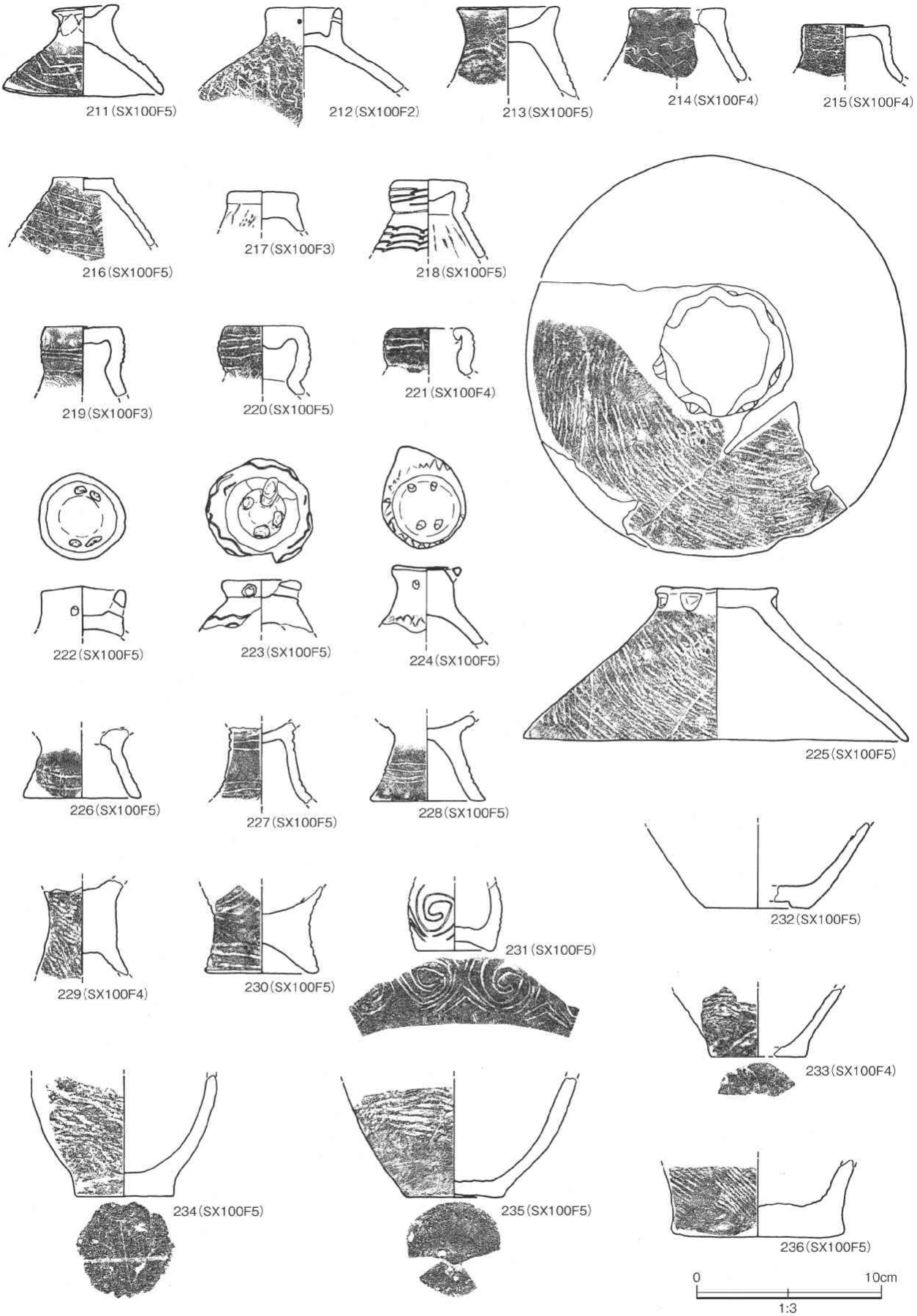
第39図　弥生土器(5)


156(SX100F1)
157(SX100F3)
158(SX100F3)
159(SX100F2)
160(SX100F4)
161(SX100F5)
162(SX100F5)
163(SX100F3)
164(SX100F4)
165(SX100F2)
166(SX100F1)
167(SX100F5)
168(SX100F5)
169(SX100F4)
170(SX100F5)
171(SX100F5)
172(SX100F5)
173(SX100F1)
174(SX100F5)
175(SX100F5)
176(SX100F4)
177(SX100F5)
0
10cm
1:3

第40図　弥生土器(6)


178(SX100F5)
179(SX100F5)
180(SX100F5)
181(SX100F4)
182(SX100F5)
183(SX100F5)
184(SX100F4)
185(SX100F5)
186(SX100F5)
187(SX100F5)
188(SX100F5)
189(SX100F5)
190(SX100F4)
191(SX100F1)
192(SX100F5)
193(SX100F5)
194(SX100F5)
195(SX100F2)
196(SX100F1)
197(SX100F5)
198(SX100F4)
199(SX100F4)
200(SX100F4)
201(SX100F5)
202(SX100F5)
203(SX100F3)
204(SX100F3)
205(SX100F5)
206(SX100F5)
207(SX100F5)
208(SX100F4)
209(SX100F4)
210(SX100F3)
0
10cm
1:3

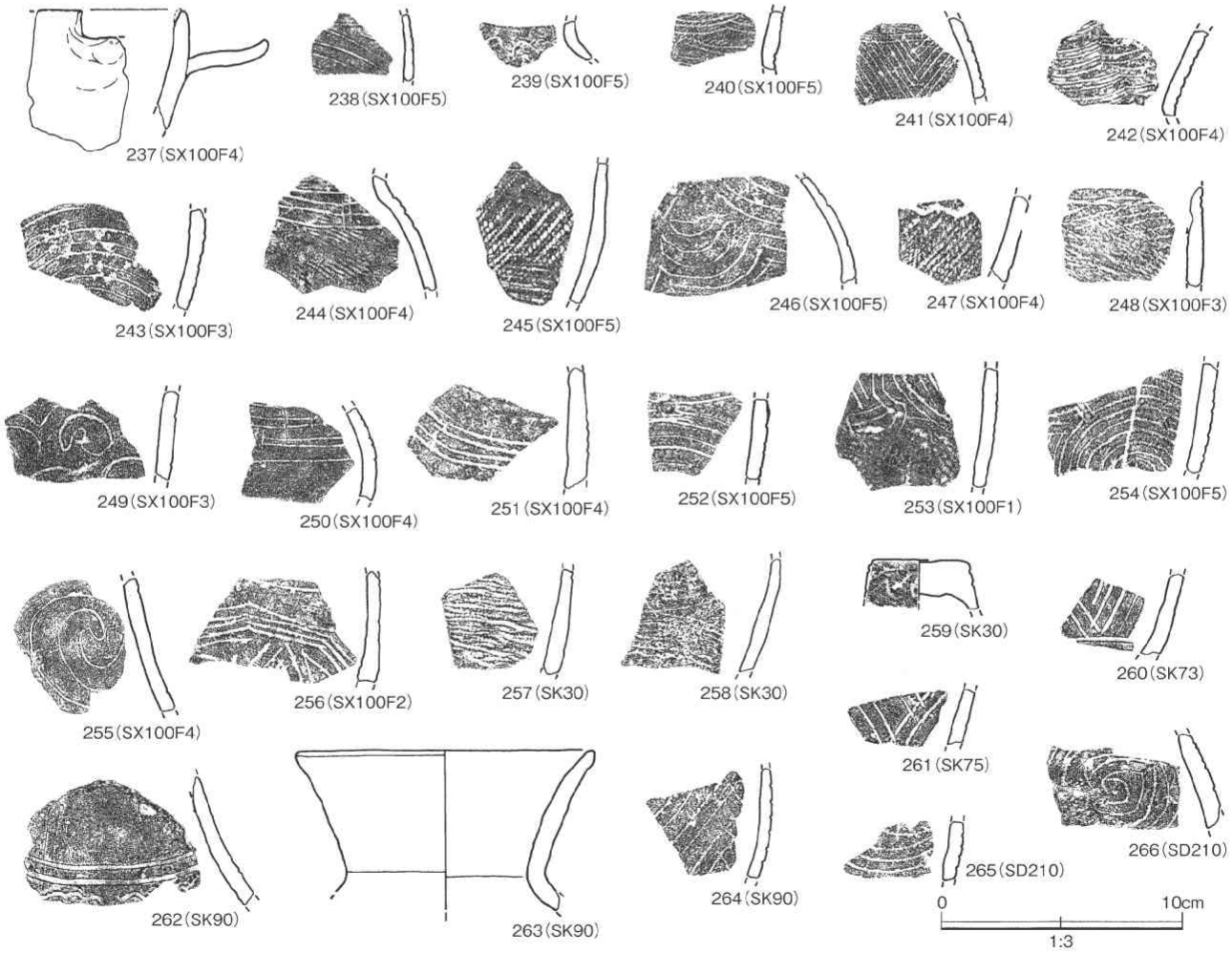
第41図　弥生土器(7)


211(SX100F5)
212(SX100F2)
213(SX100F5)
214(SX100F4)
215(SX100F4)
216(SX100F5)
217(SX100F3)
218(SX100F5)
219(SX100F3)
220(SX100F5)
221(SX100F4)
222(SX100F5)
223(SX100F5)
224(SX100F5)
225(SX100F5)
226(SX100F5)
227(SX100F5)
228(SX100F5)
229(SX100F4)
230(SX100F5)
231(SX100F5)
232(SX100F5)
233(SX100F4)
234(SX100F5)
235(SX100F5)
236(SX100F5)
0
10cm
1:3

第42図　弥生土器(8)

214～221は鈕部天頂が平坦面となる類で、218以降は体部との境が屈曲して凹部を有するため、鈕部が明瞭に識別できる形態で、鈕部にも体部と同じ文様が施文される。222～224は212同様、鈕の口縁部に穿孔が認められる例で、鈕部の形状は各々異なるがいずれも４孔を有している。222と224は対角線上に２孔一対で開けられるのに対し、223は円を四等分した位置に１孔ずつ開ける違いがある。225は口径約21cmを測る大形品で、扁平で低い鈕部から体部が直線的に外傾して開く笠形を呈する。鈕部の外縁には、指を掛けて持ち易くするための抉りを８箇所に入れている。文様は縄文による地文のみで、体部全面に撚糸文が施文される。226～229は高坏の脚部片である。229は棒状形態を呈する中実のもので、裾部が大きく開口すると思われる。その他は断面形がハの字状となる中空のもので、横位に引かれた平行沈線を廻らす。230は台付鉢の台部と認識され、短い筒状の形態を呈す。裾部には横位平行沈線を引き、これを区画する縦位の刺突文を破線で施しているが、一部を施文後にナデ消したらしく、無文部分が存在する。231は小形鉢か壺の下半資料と考えられ、体部には渦巻文が４単位描かれる。

第43図237の口縁部片は、長い注口状の張り出し部をもつことから、片口の鉢になるかと思われる。238・250・254の３点には赤色塗彩が認められる。238はほぼ全面、250は破片最上段の沈線間が、254では渦巻沈線の一間おきに彩色されている。器面はいずれもミガキが施され、254は内面にも精緻な研磨を受ける。257以降はＳＸ100以外の遺構内から出土した資料で、壺の口縁部片である263は口唇に刻み目を有するが、口縁部は無文である。



第43図　弥生土器(9)

3　古墳時代以降の遺物

（1）　土器・陶器

古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器、それ以降の中世陶器が出土している。そのほとんどが遺構内から出土しており、数量は整理箱にして２箱である。実測可能な資料の掲載にあたっては、時代別の器種ごとに扱っており、以下にその概要を述べる。

267・268の土師器坏は体部が内弯する丸底形態で、半球状を呈する。ケズリによる器面成形後に、内外面ともミガキにより調整される。267では口縁部に横方向の精緻なミガキが施されるため、体部との識別が明確にできる。これらは内面に黒色処理を受けないことと器形から判断して、５世紀中頃の所産と考えられる。

15点図化した奈良・平安時代の坏・蓋・高台付坏といった食膳器（269～283）には、約１世紀半の時期幅があると推察される。須恵器の坏で最も古手の269は底径の大きい低平な器形で、底部と体部の境界が不明瞭である。丸底風を呈する底部はナデにより整形されるが、部分的にヘラケズリ痕が残る。270～272は底部ヘラ切り無調整の坏で、法量の違いによる大小が認められる。底部が欠損する273・274のうち、273は法量・形態とも272に近似する。一方の274は、器高の増加と底径の縮小化から推定して、回転糸切りの坏であろう。高台付坏では、高台の貼り付けに伴うナデ調整のために切離法を判別し難いが、底径の大きい282を除けば回転糸切りと思われる。ＳＫ30から出土した278は約１/２が残存しているが、歪みが激しいうえ体部外面には自然釉が付着していることから、焼き損じ品であったと考えられる。山笠形を呈する277の蓋は、これら高台を有する坏とセットになるものである。283は黒色土器の口縁部片で、外面にも粗いミガキが観察される。

以上の食膳器に与えられる年代としては、形態的特徴から269が８世紀前葉まで遡るほかは、270・271が８世紀第４四半期、272が後続する９世紀第１四半期で、272より底径が小さく体部外傾の大きい273は第２四半期、糸切り離しと察知される274が第３四半期にそれぞれ属すると推測できる。また、口縁部を欠く275・276や高台付坏の一群は、糸切り離しであることから、９世紀第２四半期を中心とする中葉の所産と認識される。

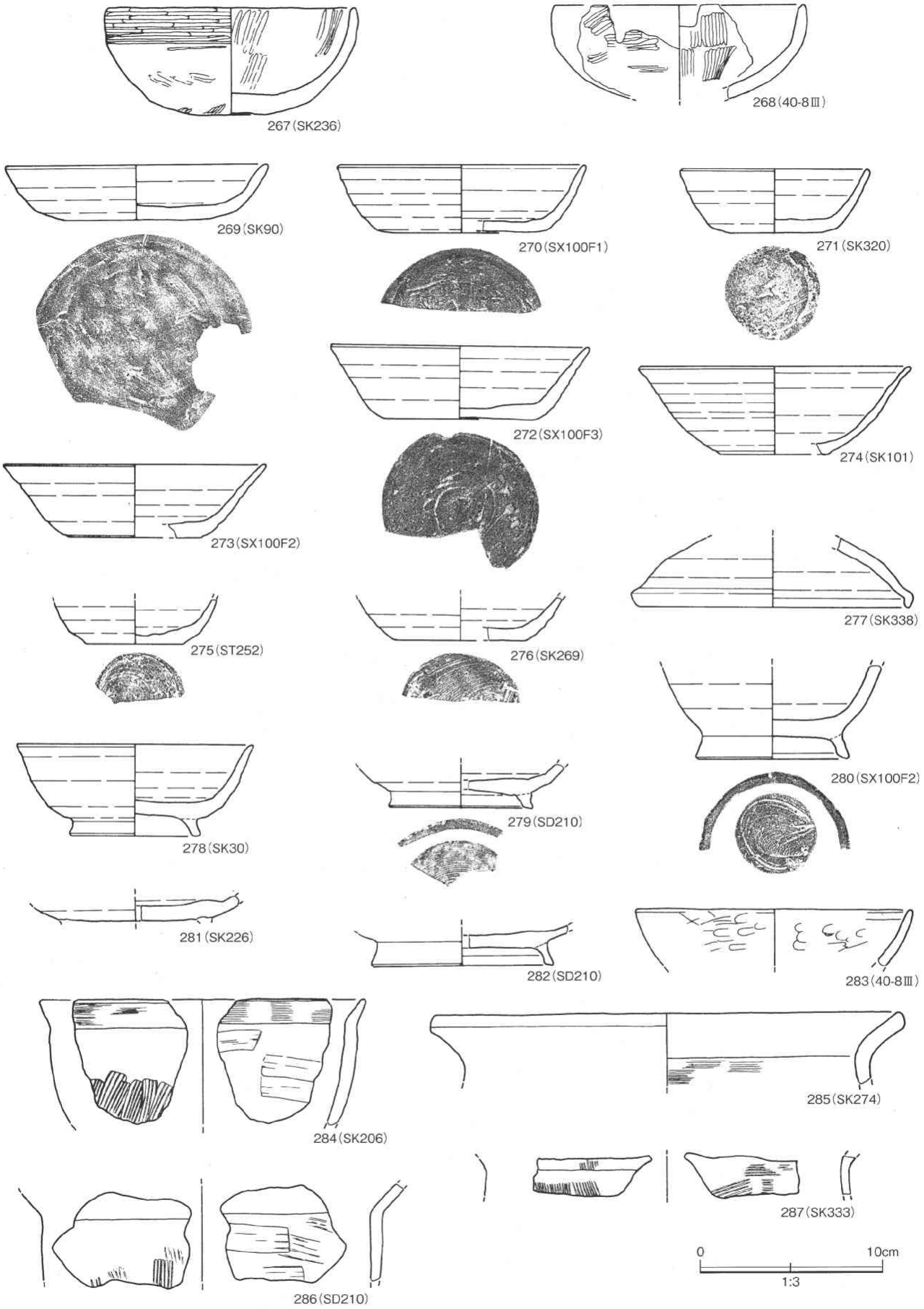
壺・甕・鉢等の貯蔵・煮沸・調理器の類（284～308）には、奈良・平安時代の土師器・須恵器と、中世陶器の種別がある。土師器甕（284～289、300～302）のうち、288・289は内外面の調整が判別し難いほど摩滅しており、体部片の289では成形段階のヘラケズリ痕を微かに留めるに過ぎない。底部に木葉痕や網代痕などが観察される底辺部資料の300～302は、いずれも小形品であるが、焼成はかなり堅牢と言える。須恵器短頸壺の口辺部片である290は、図上復元から口径約８㎝を測ることが知られ、頸部片の298もおそらく同様の法量を有するものであろう。頸部に櫛描波状文が施された299は、器壁の厚さから大形の須恵器壺と予想される。291～297は須恵器もしくは中世陶器甕の体部片であり、内面に青海波のアテ痕が認められる292は須恵器、厚手で内面のアテ具として小礫が用いられたと考えられる291等は、珠洲系陶器と理解される。294は肩部にハケメ状の押印が施文された、また297では菊花文が押印された、共に須恵器系陶器の甕片である。303～308は瓷器系陶器の擂鉢片で、内外面が赤褐色、胎土は暗灰色を呈するものが多く、306と308は同一個体である。卸し目を認める資料は303のみであるが、内面の使用された部位はいずれも平滑な擂面となる。

以上の中で奈良・平安時代の壺・甕は、前掲した食膳器の年代に対応した時期の所産と考えられよう。299は頸部に施した櫛描波状文の特徴から８世紀前葉に属するものかと思われるが、他の土器については時期を特定するだけの内容が検知できなかった。一方の中世陶器では、押印を付す297や294が新潟県北部の北越窯（五頭山麓古窯跡群）の製品に類例が知られることから、13世紀代の産物と判断される。

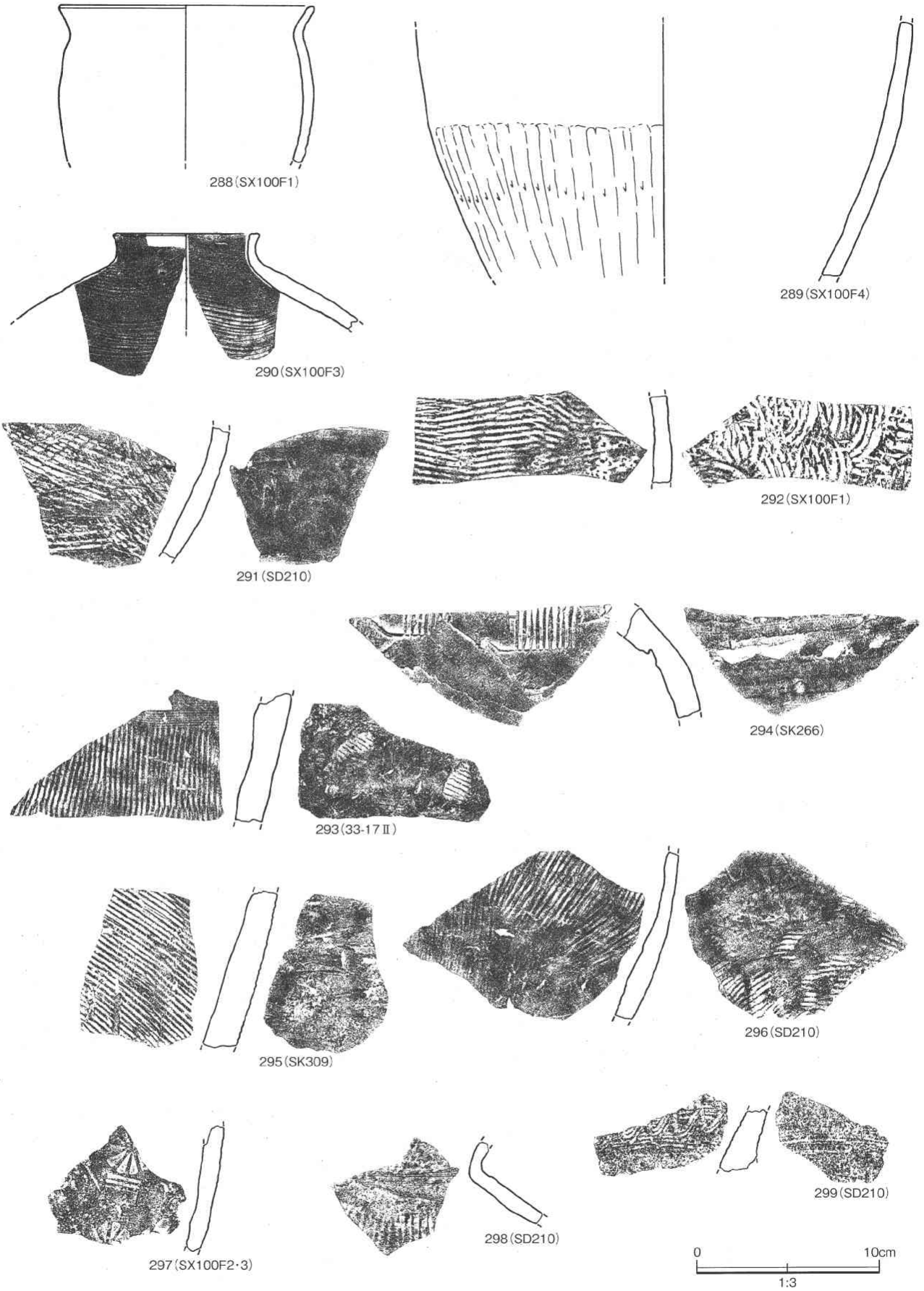
（2）　その他の製品

古銭が２点出土しており、309は北宋で鋳造された「皇宋通寶」である。11世紀中頃の鋳造年代が知られているが、この時期に該当する遺物は他に出土していない。

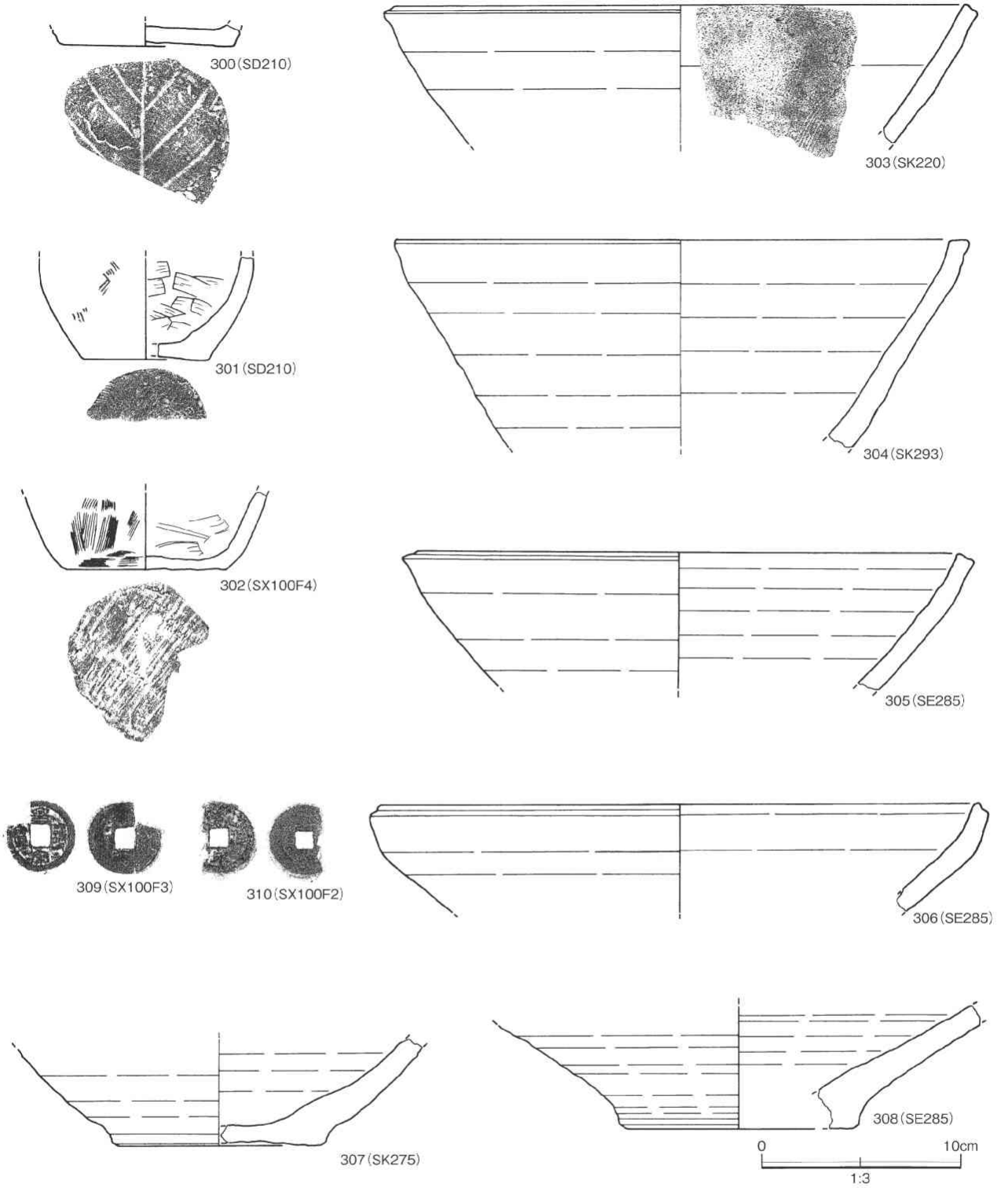
311はＳＸ100から出土した耕起具の鍬で、身部には直柄が挿入される。刃部の形態から平鍬に属し、身部の幅は約11㎝を測る。身部の中央に位置する柄孔は長方形で、表面から裏面に向かってほぼ垂直に開けられる。直


267(SK236)
268(40-8Ⅲ)
269(SK90)
270(SX100F1)
271(SK320)
272(SX100F3)
273(SX100F2)
274(SK101)
275(ST252)
276(SK269)
277(SK338)
278(SK30)
279(SD210)
280(SX100F2)
281(SK226)
282(SD210)
283(40-8Ⅲ)
284(SK206)
285(SK274)
286(SD210)
287(SK333)
0
10cm
1:3

第44図　土師器・須恵器



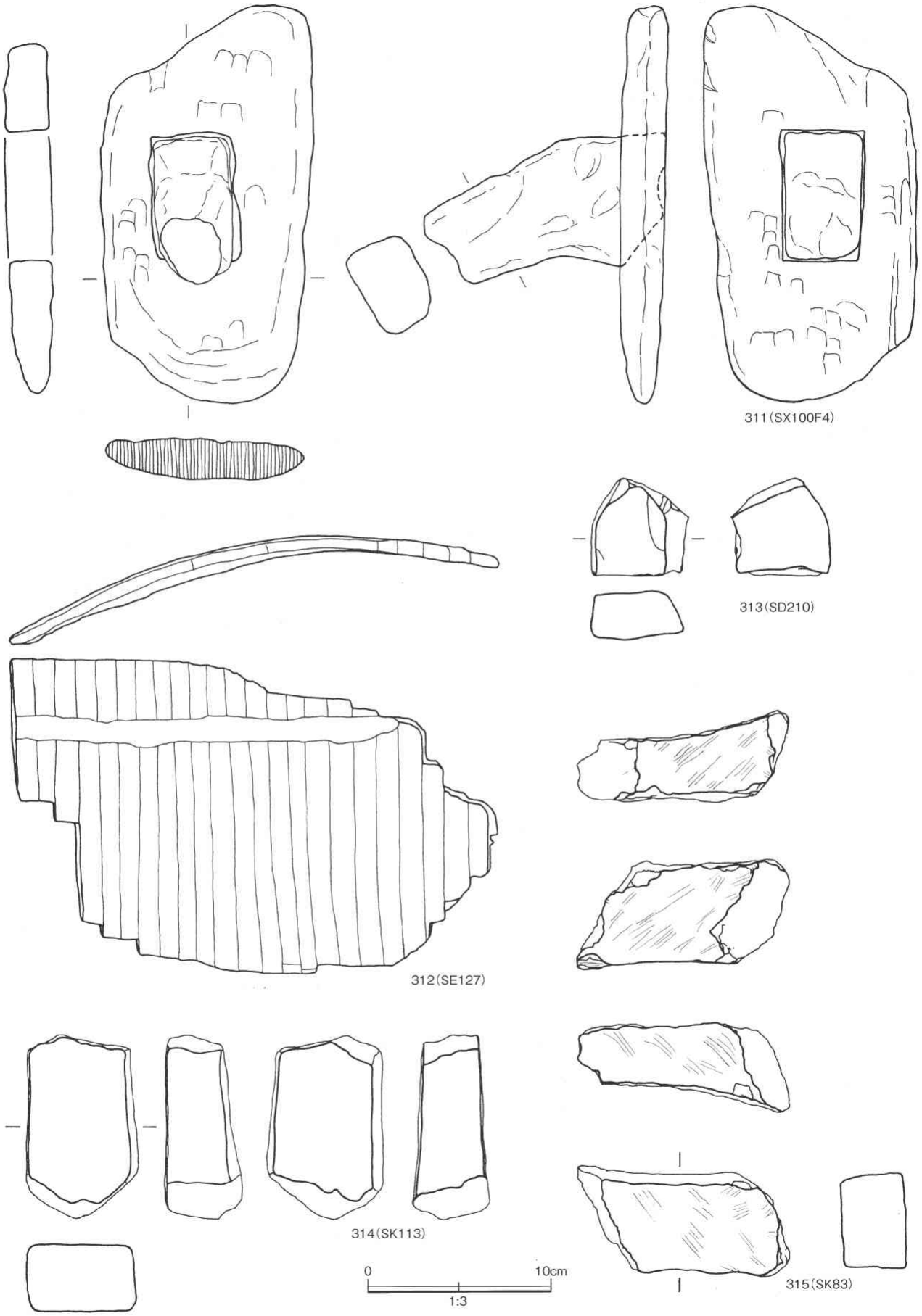
第45図　土師器・須恵器・中世陶器



第46図　土師器・中世陶器・貨幣

柄の着柄部は柄孔に合わせた長方形を呈し、握り部に向かって棒状に加工されている。ＳＸ100からは弥生土器が集中的に出土しているが、形態的に同時代の鍬とは異なることから、古墳時代以降の遺物として扱った。312はＳＥ327出土で、井戸眼の側板と推定される曲物の断片である。内面には約１cm間隔でケビキが入る。また、底板の上の部分に当たる箇所に、鉄錆が１cm幅の帯状で付着する。

３点図化した313～315は砥石である。いずれも断面が長方形を呈するもので、四面とも砥ぎ面として使用されている。



第47図　木製品・石製品

Ⅵ　総　　括

上大作裏遺跡は南陽市大字砂塚に所在し、平成８年度に縄文時代及び平安時代の遺物散布地として登録された遺跡である。旧織機川の河岸段丘上に立地し、遺跡の推定範囲は東西約550m・南北約270mの広がりを有する。今回の調査は一般国道113号赤湯バイパス改築事業に伴う緊急発掘調査で、遺跡に係る5,800㎡を対象として２ヵ年に亘り実施した。

検出された主な遺構は、縄文時代早期末～前期初めの竪穴住居跡と墓壙や土坑、同前期末葉の陥穴、平安時代～中世に属する井戸跡や土坑と溝状遺構など、計500基余を数えた。出土した遺物は整理箱23箱に相当し、量的には第１次調査区の段丘堆積層内から一括して出土した弥生土器が主体を占めた。他に縄文土器・石器、古墳時代の土師器、奈良・平安時代の土師器や須恵器、13世紀代の産物と目される中世陶器などがある。これら遺構・遺物の所在から、本遺跡は縄文時代～中世にかけて断続的に営まれた集落跡であることが判明した。

以下では、第２次調査区で明らかになった縄文時代早期中葉～前期初めの諸相と、近年の調査において周辺遺跡でも出土例が増加した弥生土器の様相について検証したい。

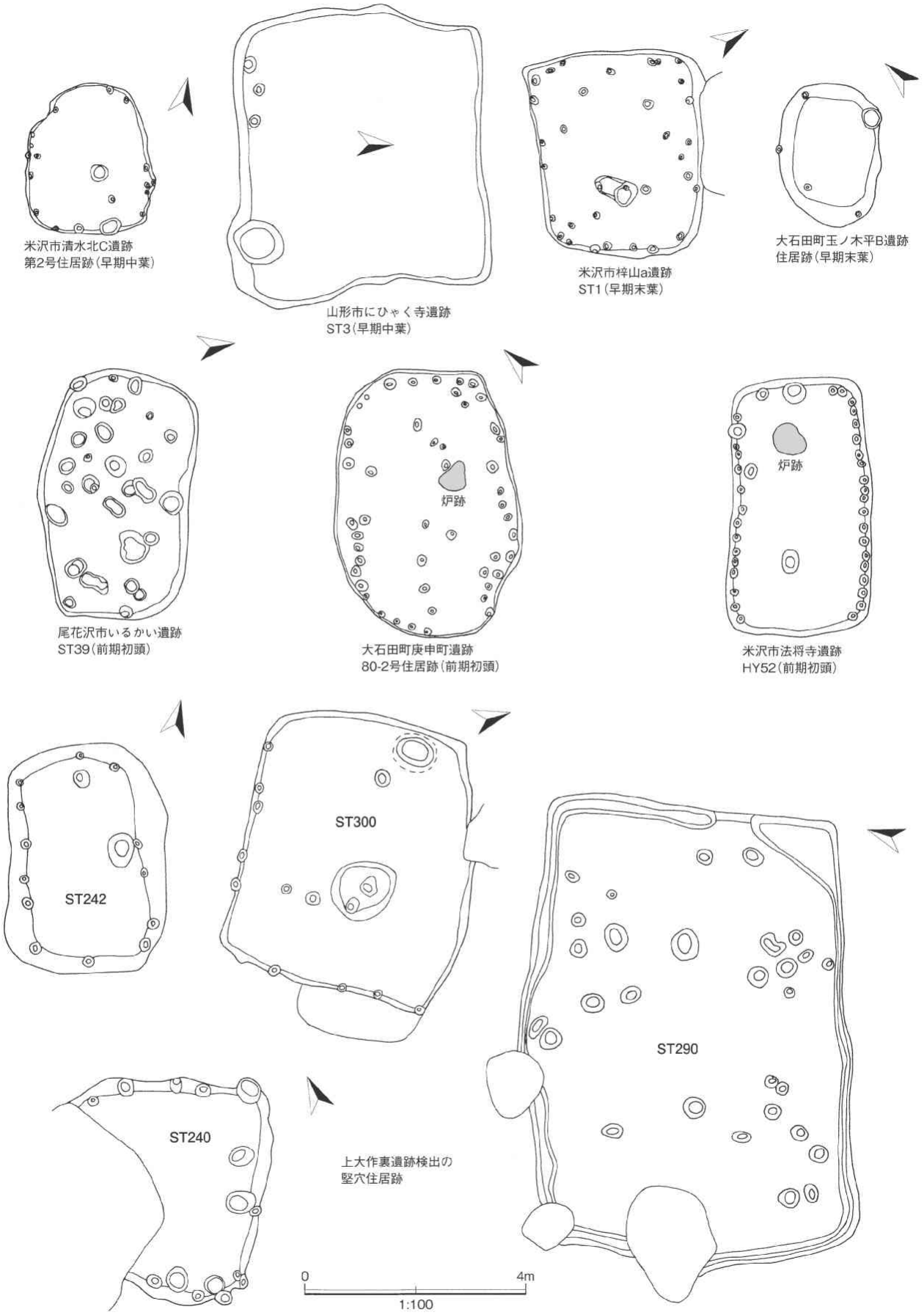
1　縄文時代早期末葉の集落

遺跡から出土した縄文時代の遺物の検討から、早期中葉～前期初頭と前期末葉～中期末葉の二時期に大別されることが判明し、断続的に集落が形成されたものと考えられる。大別した二時期に関しては、本遺跡より北方５㎞に位置する若松山の台地上に所在する須刈田大野平遺跡（南陽市教委1986）と全く一致する。ただ、これまでに県内で確認されている縄文時代早期・前期の集落遺跡は、その多くが丘陵地や山麓部に立地しているのに対し、本遺跡は北側に聳える白鷹丘陵からやや離れた沖積平野部に立地する点が大きな相違と言える。

第２次調査区から検出された竪穴住居跡５棟のうち、時期不明な１棟を除く４棟は早期末葉～前期初頭の住居跡である。このうち、ＳＴ240は重複により全形不明ながら、形態・規模や主軸方位などがＳＴ300とほぼ同一であることから、同時存在した可能性が考えられる。一方でＳＴ242とＳＴ290は規模と住居構造が異なるものの、同じ主軸方位をもつことから考えれば、こちらも同時存在したか近接した時期での構築と見なすことができる。各住居跡の遺物は床面密着で出土したものはなく、ＳＴ290において床面直上であった他は、覆土内に堆積したものである。したがって出土遺物は、住居が廃絶した直後からの廃棄物と判断される。住居跡４棟の掘り込みは、ＳＴ242で確認面からの深さが約35㎝を測る以外はいずれも浅く、地山直上層からの掘り込みであったにせよ、地山層を深く掘り込んでいないことが解る。この事象は大野平遺跡をはじめ、当該期の住居跡が検出された置賜地方の他の遺跡でも多く認められることから、この時期の住居跡は一般に地山を深く掘り込まないとの見解もある。

県内では前期初頭までに帰属する住居跡がこれまでに約50棟確認されており、最も古いものは米沢市八幡原№５遺跡検出の事例で、関東の稲荷台式に並行する早期前半に当たる。第48図には早期中葉～前期初頭までの時期に該当する住居跡で、全形・規模が明らかなものの一部を抽出し、本遺跡検出の４棟と併せて掲載した。平面形は隅丸方形ないし長方形と理解され、壁柱穴を廻らした住居が多いと言える。規模には大小の差異が認められるが、隅丸長方形の長辺または方形プランの一辺が４～５ｍを測るものが一般的と思われる。住居内に地床炉もしくは掘り込み炉を併設する例では、床面中央を避けて幾分外側に構築されるようだ。本遺跡ＳＴ290は大型の住居跡で、検出段階では２棟重複の可能性が示唆された。床面壁沿いに周溝を廻らしているため、他と異なり壁柱穴で上屋を支える構造ではない。壁溝が一周する状況から１棟の住居跡と認識したが、一般的な住居の２倍の床面積を有する。出土遺物中に紡績具と推測される有孔円板が5点含まれる点などから考察すれば、共同作業場としての施設と想定しておきたい。

竪穴住居跡の近辺には袋状形態を呈する土坑やピット等が配されるが、遺物を包含するものが少ないために、



第48図　縄文時代早期中葉～前期初頭の住居跡

住居跡と共存して集落を構成したと考えられる遺構は限られている。その中で、長軸約２ｍ規模の小判型を呈するＳＫ251は、早期に特徴的な形態の平基鏃14点が一括出土した。新潟県佐渡に所在する堂の貝塚（金井町教委1977）は石鏃の副葬例として著名であり、中期前半を主体とした土坑群の中に埋葬人骨を伴うものが７基確認された。このうちの１基の人骨頭部右脇に大形で画一性のある石鏃13点が束ねられた状態で出土したことから、副葬品と判断された。ＳＫ251では中央部よりやや西側での散在した出土状況ながら、堂の貝塚例と共通した内容であり、出土品を副葬品と見て墓壙と認識した。またＳＴ290等からは、これら平基鏃と共にこの時期に特有な形態の、いわゆる松原型石匙が出土している。調査区から窺い知れる当該期の集落は、竪穴住居跡４～５棟に貯蔵穴を含む土坑が30基前後から形成されたと考えられる。これらが一時期の所産と判断し得る資料は少ないが、住居跡は一部共存もしくは近接した時期での変遷と捉えて大過ないと思われる。墓壙は１基のみが単独的に検出されたことから察して特有なものと認識され、一括出土した石鏃の様相などから、この集落における特異な人物の埋葬墓と把握しておきたい。

２　縄文土器の型式

遺跡から出土した縄文土器は、早期中葉～中期末葉にかけての内容を包括している。これらの大半は小破片で、全体の器形や文様構成の察知できる資料はほとんどない。ここでは、先の第Ⅴ章－１に示した分類基準に対しての編年的な位置付けを行いたい。

第Ⅰ群土器は早期中葉～末葉に属する。県内で当該期の資料が出土した遺跡として大野平遺跡のほか、尾花沢市森岡北遺跡（大類1979）、同市いるかい遺跡（山形県教委1983）、大石田町大畑山遺跡（加藤1972）、同町玉ノ木平B遺跡（小向1976）、村山市赤石遺跡（山形県教委1981）、同市山ノ内遺跡（加藤1982）、西川町弓張平Ａ遺跡（西川町教委1980）、同町月山沢遺跡（山形県教委1980）、山形市にひゃく寺遺跡（山形県教委1985）、南陽市月ノ木B遺跡（山形県教委1989）、川西町千松寺遺跡（川西町教委1980）、米沢市清水北C（八幡原№24）遺跡（米沢市教委1976）、同市二タ俣Ａ（八幡原№５）遺跡（米沢市教委1983）、同市梓山a遺跡（山形埋文2006）、小国町市野々向原遺跡（山形埋文2000）、旧温海町大淵台遺跡（山形県教委1981）などが挙げられる。１～３類は貝殻沈線文系土器に属し、１類と２類は関東の田戸下層式に併行する一群である。県内での出土例のうち、赤石・大野平・二タ俣Ａ・市野々向原の４遺跡で略完形の鋭角的な尖底深鉢を認めており、沈線文や貝殻復縁圧痕文に加え、連続刺突文等により文様構成されることが知られる。３類は田戸上層式に併行するもので、東北地方南部の大寺・常世式に比定される。口縁部に描出された重層的な刺突文を文様要素とするが、連続した刺突文による意匠は前段階における貝殻復縁圧痕文の置換となったものであろう。４類の条痕文土器は、関東の子母口式～茅山上層式までの広い範疇で捉えられる。施文に使用された工具はサルボウ等の貝殻復縁によるものと思われ、異方向から施文することにより文様効果を高めている。５類・６類は茅山下層式以降の末葉期に伴うもので、東北南半ではこれと併行関係にある素山式～大畑G式に比定されよう。

第Ⅱ群土器は前期初頭に当てはめられ、当該期の土器がまとまって出土した遺跡には尾花沢市いるかい遺跡（前掲）、大石田町庚申町遺跡（大石田町教委1984）、東根市小林Ａ遺跡（東根市教委1975）、天童市上荒谷遺跡（山形埋文1996）、山形市にひゃく寺遺跡（前掲）、南陽市大野平遺跡（前掲）、米沢市法将寺遺跡（米沢市教委1985）、同市松原遺跡（山形埋文1994）、同市梓山a遺跡（前掲）、小国町墓窪遺跡（山形県教委1982）などがある。１類は上川名Ⅱ式に比定される。図化した資料は小片で文様構成が不明であるが、撚糸圧痕文に加えて沈線文や刺突文などを組み合わせた意匠をもつと察せられる。２～４類は上川名Ⅱ式～大木２a式の範疇で捉えられるが、３類の羽状縄文は撚りの異なる２本の原体を交互に回転させた非結束の事例が主体を占めることから、大方は大木１式に含まれるものと理解される。

以上は土器型式に相当させた場合の編年的な位置付けであり、ＳＴ240等の住居跡では早期末葉～前期初頭の土器が伴出している。これらは一時期の所産と目されるため、各文様の消長が影響した結果の共伴と思考している。

第Ⅲ群土器は前期後葉～末葉の所産である。１類は細い粘土紐を短く千切って折り重ねた鋸歯状の貼付文が特

徴で、大木５式に比定される。県内では尾花沢市いるかい遺跡（前掲）で当該期の住居跡１棟が検出されているほか、遊佐町吹浦遺跡（山形県教委1988）からまとまった出土例がある。２～４類は後続する大木６式に属するもので、２類の結節浮線文は関東の十三菩提式や北陸の朝日下層式に出自を求めることができる。３類の綾絡文は２類土器の地文となることが多いが、出土資料は口縁部に施文されており、文様帯をもたない事例と言える。４類とした２点の資料は肥厚する口縁部に特徴があり、太い数条の沈線と連続した刻み目を施文するもので、遊佐町吹浦遺跡（前掲）等に類例が知られる。

第Ⅳ群土器１類は、沈線による区画内に撚糸圧痕が充填される文様構成から、大木７b式に帰属するものと思われる。２類は中期末葉の所産で、大木10式に比定される。大木10式土器については、宮城県大梁川遺跡（宮城県教委1988）の調査における、遺物包含層からの層位的な出土資料を基にした三分案が定着している。本遺跡出土の４点は口辺部の小片であり、細分に照合させるまでの情報が少ないが、調整沈線を伴う第29図６と稜の低い微隆起線が描出される7・9は10式古相に、稜をもつ隆線と無調整の沈線を施す８を10式新相として位置付けておく。

３　弥生時代の様相

第１次調査区の東・南縁辺域を主として多数の弥生土器が出土したが、調査区内に当該期の遺構は見当たない。遺物の在り方から近隣に該期の集落が存在したことは当然考えられ、地形的に見れば付近で標高が最も高い１次調査区北側に面する畑地部分が該当すると目される。１次調査区東・南縁辺は旧河道の河岸段丘右岸に当たるが、この端部は幅約３ｍに亘る埋め立てによって形成された地形であると推察される。その堆積土内からは遺物総数の７割強に当たる数量が出土しており、主体を占めた弥生土器のほか、縄文時代や平安時代の遺物が混在した状態であった。調査に際しては東辺・南辺ともＳＸ100と命名して掘り下げを行ったが、断面観察から東辺部は西（手前）から東（奥）に向かって堆積している様相が看取されたのに対し、南辺部では水平堆積であった状況から、均しながら埋め立てられたと考えられる。

近年の発掘において県内でも弥生時代の調査事例が増え、竪穴住居跡の検出が３遺跡で報告されている。山形市河原田遺跡（山形市教委2004）では３棟の住居跡と６基の墓跡が検出され、墓跡のうち５基は東北地方で２例目となる木棺墓である。出土した土器は桜井式に併行することから、中期後半の年代が当てはめられる。山形市向河原遺跡（山形埋文2005）では中期末～後期の住居跡７棟を検出し、うち１棟は石器剥片が多量に出土したことから工房跡と推測されている。本遺跡の東南1.2kmに位置する南陽市庚壇遺跡（山形埋文2007）では、一辺５ｍ規模を測る隅丸方形の住居跡１棟が確認され、天王山式に併行する遺物が出土した。さらに、現在整理作業中の南陽市百刈田遺跡からは、2005年度の第３次調査で土坑墓に係わる16ヶ所の遺物集中ブロックが確認され、中期後半の復元完形土器が多数出土している（山形埋文2006）。

東北地方の弥生土器は地域性が顕著であり、中期には北部・中部・南部に加えて奥羽山脈の東西でも差異が認められる。基本的には河川に則した水系によって地域が形成されるようである。弥生中期には地域差が一層鮮明になり、①津軽地方、②下北半島と馬渕川流域、③八郎潟周辺と雄物川流域、④北上川流域、⑤仙台平野、⑥最上川流域、⑦阿武隈川流域、⑧相馬・磐城海岸、⑨会津地方といった諸地域に区分される（須藤1996）。

本遺跡出土土器は会津地方と密接な関連が指摘され、第Ⅰ群とした１本の工具で描かれる沈線文土器は、会津若松市一ノ堰B遺跡（福島県教委1988）出土土器や同市川原町口遺跡（会津若松市教委1994）第８群土器に類似しており、器種構成も壺・甕・鉢・高坏・蓋と共通する内容である。本遺跡では全形が窺える資料は極めて少ないが、上記遺跡出土例に照らせば、数的主体を占める壺には主に口縁形態の相違から４種の存在が知られる。このうち長頸壺と無頸壺では、口縁部から体部上半の最大径を測る位置まで文様が施文され、これを境に下半には地文となる縄文が付される。甕では体部上端に結節回転縄文を施すものが一般的で、本遺跡例とも共通するところである。第42図に示した蓋と高坏は全て１本引きによる沈線文で、川口町口遺跡では高坏脚部に切り込みによる窓を設けたものもある。218～221は蓋の鈕部資料と見なしたが、類例が見当たらず、鈕部にも沈線が引かれることを考慮すれば、あるいは下胴に

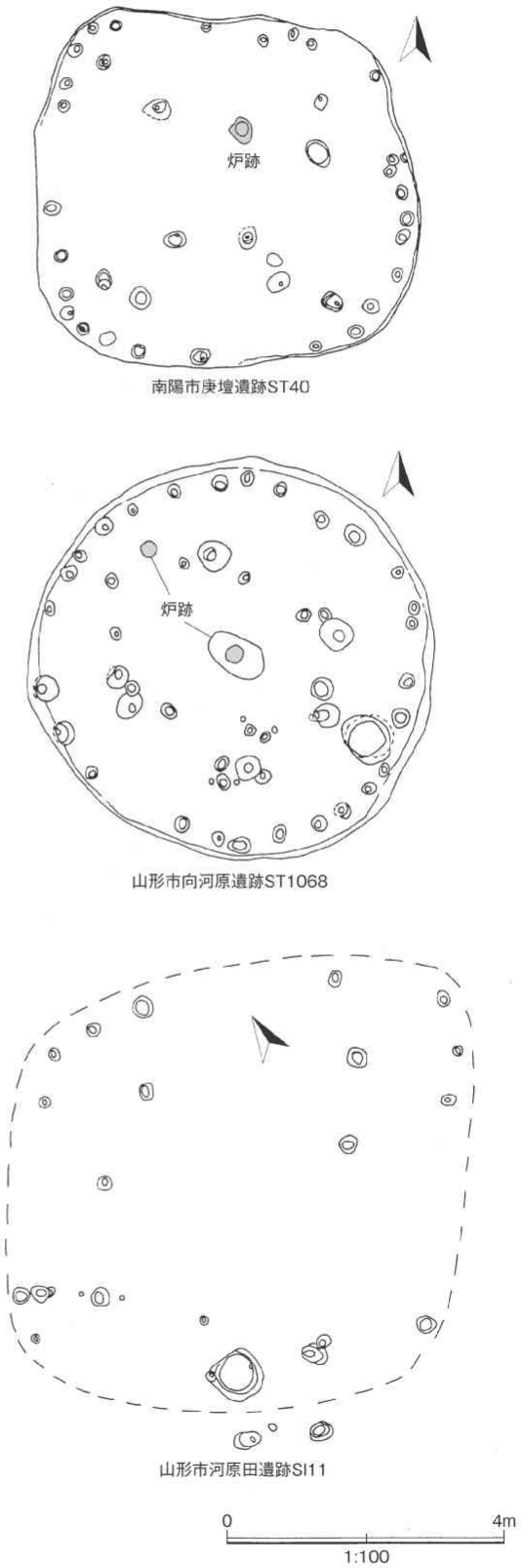
括れを有する坩状形態の小形鉢である可能性も否定できない。また、鈕の天頂部が窪む形態の蓋も報告されておらず、これらは仙台平野や北上川流域の影響を受けているものと思われる。

２本一対の平行沈線が施文される第Ⅱ群土器は、川原町口遺跡第９群土器や原町市桜井遺跡出土土器に類似性が求められる。同じ文様を重ねて繰り返す前段階の手法から、２本の沈線を同時に引くことで同じ形の文様を描く技法へと変化していく。この段階の土器組成は前段階を継承するものの、壺と甕は器形が近似するようになり、区別が困難なものが現れる。２本同時の平行沈線は第Ⅰ群の１本引きに比較すれば、一般に沈線の間隔が狭くなる傾向が指摘できる。桜井式土器は線間の広狭によってⅠ式とⅡ式に区別され、本遺跡の第Ⅱ群土器は３～５㎜程度の幅を有するためⅠ式に比定される。また、長頸壺の頸部に断面三角形の隆帯を廻らすものがあり、桜井式土器のメルクマールとなっている。

このように１本描きと２本描きが混在する状況であるが、１本描き沈線文は中期末葉まで共存することが知られるため、編年的な時期差はないと考えている。したがって、本遺跡出土土器は総じて川原町口式併行段階と認識してよいと判断される。また、同時期の所産と把握される山形市河原田遺跡や、同市境田D遺跡（山形県教委1984）出土土器には１本描線の事例を伴わないことから、山形盆地では２本描き手法が主流であったと思われる。

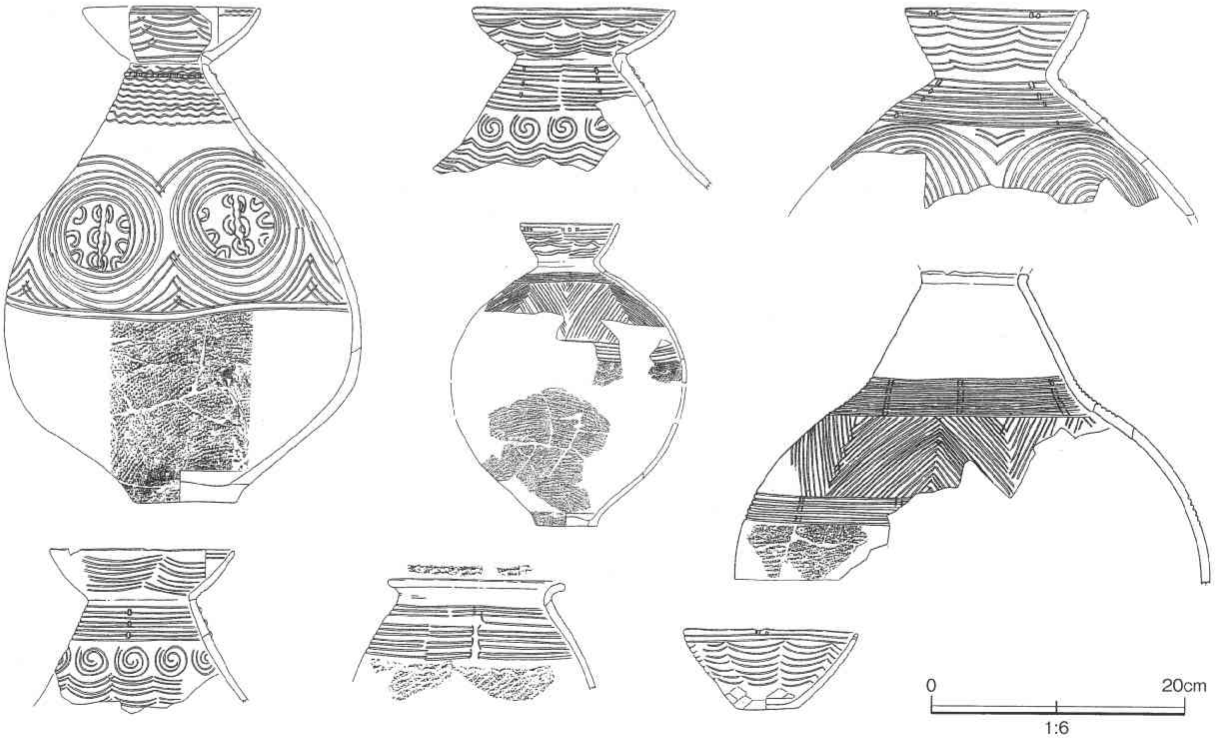
東北地方における弥生前期は地域間の土器様式の共通性が強く、最上川流域では酒田市生石２遺跡（山形県教委1987）や東根市蟹沢遺跡（加藤1989）等で知られるように、九州地方の遠賀川式土器が卓越している。すなわち、西日本の土器製作技術が伝播により持ち込まれ、東北地方の伝統的な土器作り技術と融合して受容されたことが窺われる。中期になると前述したように地域色が明確となるが、中期中葉は中・南部で奥羽山脈を境にした東西の地域差があまり見られず、土器分布が広範なことなどから、地域の交流が盛んであった時期とされている。また、仙台平野の遺跡を中心に多くの木製農耕具が出土し、貯蔵のための大形壺が製作されるなど、稲作を軸とする安定した農耕社会の基盤が確立した時期とも考えられている。後期には天王山式土器が広く発達し、これまで見られた地域色は消滅して統一的な様相が確立される（須藤 前掲）。

山形県では弥生時代の遺跡調査例はまだ少なく、前期から後期にかけての発展過程が明らかとは言えないが、近年の調査で集落や墓域の構成が徐々に解明されつつあることは確かである。



第49図　弥生時代の住居跡

1本描き沈線文土器(第Ⅰ群土器)



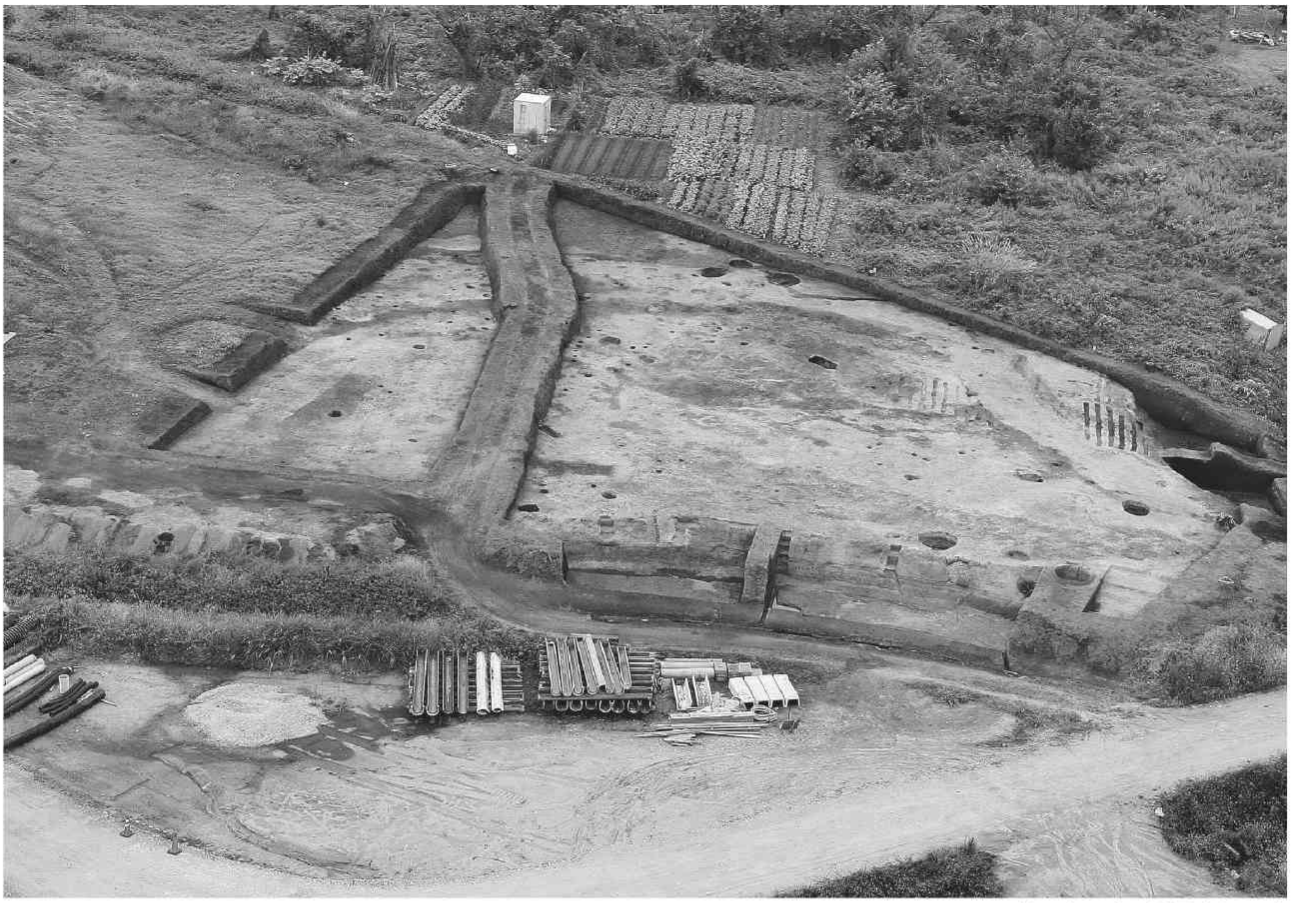
2本描き沈線文土器(第Ⅱ群土器)

第50図　川原口町遺跡出土土器

第Ⅴ・Ⅵの引用・参考文献

会津若松市教育委員会　1994　『川原町口遺跡』会津若松市文化財調査報告書第36集
大石田町教育委員会　1984　『庚申町遺跡発掘調査報告書』大石田町埋蔵文化財調査報告書第３集
大類誠　1979　「森岡北遺跡発掘調査概報」『さあべい』第３巻２号
小田由美子　1999　「五頭山麓古窯跡群」『新潟県の考古学』p.380～385　高志書院
加藤稔　1972　「山形県内の住居跡」『岡山』山形県教育委員会
加藤稔　1982　「縄文時代早期」『村山市史 別巻１ 原始古代編』p.128～228　村山市
加藤稔　1989　「蟹沢遺跡」『東根市史 別巻上 考古・民俗編』p.175～193　東根市
加藤稔　1996　「稲作りの北上」『図説山形県の歴史』p.50～53　河出書房新社
金井町教育委員会　1977　『堂の貝塚』金井町文化財調査報告書第Ⅱ集　金井町・佐渡考古歴史学会
川西町教育委員会　1980　『千松寺遺跡発掘調査報告書』川西町埋蔵文化財調査報告書第１集
菊地芳朗　1993　「土器のうつりかわり」『東北からの弥生文化』p.80～103　福島県立博物館
小向裕明　1976　「玉ノ木平B遺跡」『さあべい』第２巻１号
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1994　『松原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第11集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　1996　『上荒谷遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第37集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2000　『野向遺跡・市野々向原遺跡・千野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第71集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2005　『向河原遺跡第５・６次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第141集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2006　『梓山a遺跡・梓山d遺跡・町在家館跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第151集
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2006　「百刈田遺跡」『平成17年度年報』
財団法人山形県埋蔵文化財センター　2007　『庚壇遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第161集
須藤隆　1996　「東北地方の弥生土器」『日本土器辞典』p.536～538　雄山閣
永井久美男　2002　『新版中世出土銭の分類図版』　高志書院
南陽市教育委員会・南陽市須刈田大野平遺跡調査団　1986　『南陽市須刈田大野平遺跡第２次調査報告書』山形県南陽市埋蔵文化財調査報告書第２集
西川町教育委員会　1980　『弓張平Ａ遺跡発掘調査報告書』山形県西村山郡西川町埋蔵文化財発掘調査報告書第１集
東根市教育委員会・小林遺跡調査団　1975　『小林遺跡―縄文前期遺跡と平安時代集落跡―』
福島県教育委員会　1988　『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告書Ⅵ　一ノ堰Ａ・B遺跡』福島県文化財調査報告書第191集
宮城県教育委員会・建設省七ヶ宿ダム工事事務所　1988　『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ　大梁川遺跡・小梁川遺跡』宮城県文化財調査報告書第126集
山形県教育委員会　1980　『月山沢遺跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第29集
山形県教育委員会　1981　『赤石遺跡・北原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第35集
山形県教育委員会　1981　『大淵台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第42集
山形県教育委員会・山形県　1982　『墓窪遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第58集
山形県教育委員会・東北農政局　1983　『いるかい遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第69集
山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局　1984　『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第76集
山形県教育委員会・日本道路公団仙台建設局　1985　『にひゃく寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第92集
山形県教育委員会・山形県　1987　『生石２遺跡発掘調査報告書（３）』山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
山形県教育委員会・建設省東北地方建設局酒田工事事務所　1988　『吹浦遺跡第３・４次緊急発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第120集
山形県教育委員会・建設省東北地方建設局山形工事事務所　1989　『月ノ木B遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第135集
山形市教育委員会・山形市嶋土地区画整理組合　2004　『河原田遺跡・梅野木前２遺跡発掘調査報告書』山形県山形市埋蔵文化財調査報告書第22集
米沢市教育委員会　1976　「№24（清水北Ｃ）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内 埋蔵文化財調査報告書第２集』
米沢市教育委員会　1983　「№５（二タ俣Ａ）遺跡」『埋蔵文化財調査報告書 第Ⅱ集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第８集
米沢市教育委員会　1985　『法将寺遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集

写真図版



第１次調査区近景（南から）

第２次調査区近景（西から）

第１次調査区東部　遺構検出状況（北西から）

第１次調査区西部　遺構検出状況（南から）

第１次調査区東部　遺構完掘状況（北西から）

第１次調査区西部　遺構完掘状況（南から）

SP73付近
遺構完掘状況（東から）

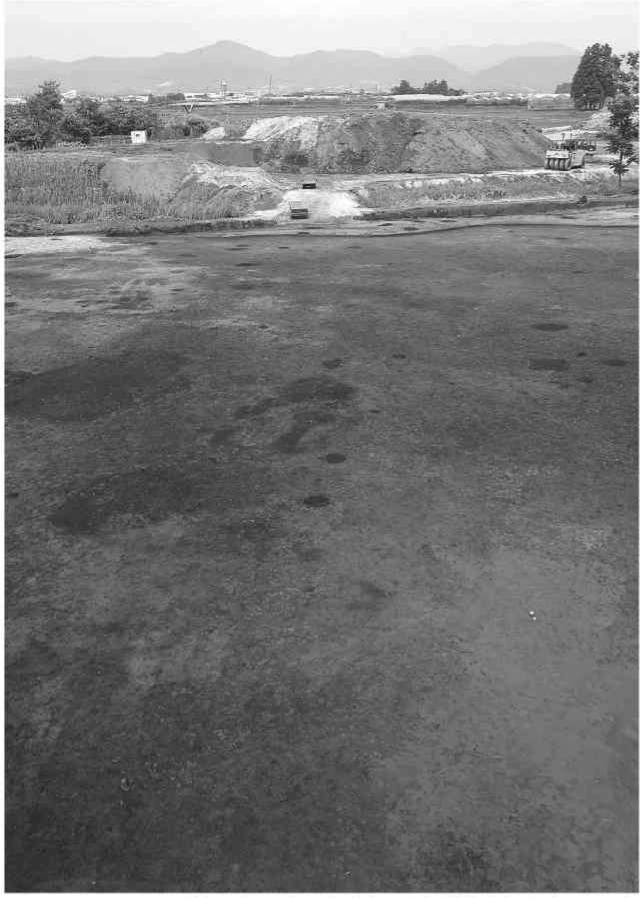
SK29・30・101付近
遺構完掘状況（北西から）

SK90付近
遺構完掘状況（北東から）

第２次調査区北半部
遺構検出状況（南から）

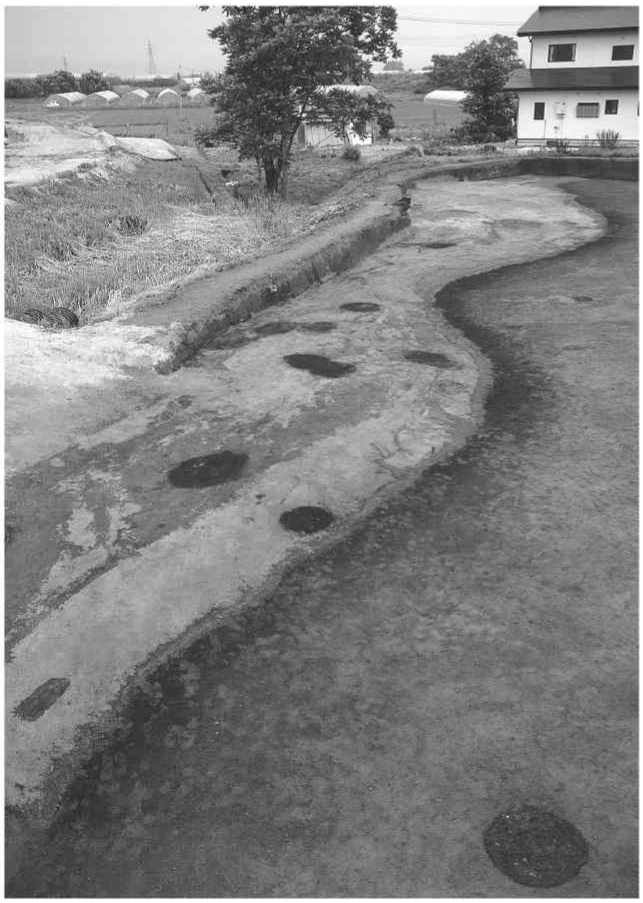
第２次調査区中央部
遺構検出状況（東から）

第２次調査区北辺部
遺構検出状況（東から）



第２次調査区南半部　遺構検出状況（西から）

第２次調査区南辺部　遺構検出状況（西から）



SG340検出状況（北から）

第２次調査区中央部東側上面　遺構完掘状況（南から）

第２次調査区中央部東側下面　遺構検出状況（南から）

第２次調査区北辺部　遺構完掘状況（東から）

第２次調査区北辺部　遺構完掘状況（西から）

第２次調査区北西部
遺構完掘状況（南東から）

ST290付近
遺構完掘状況（東から）

ST300付近
遺構完掘状況（北から）

畝状遺構完掘状況（南から）

SX100東端完掘状況（南から）

SX100南端完掘状況（西から）

SX100南端完掘状況（東から）

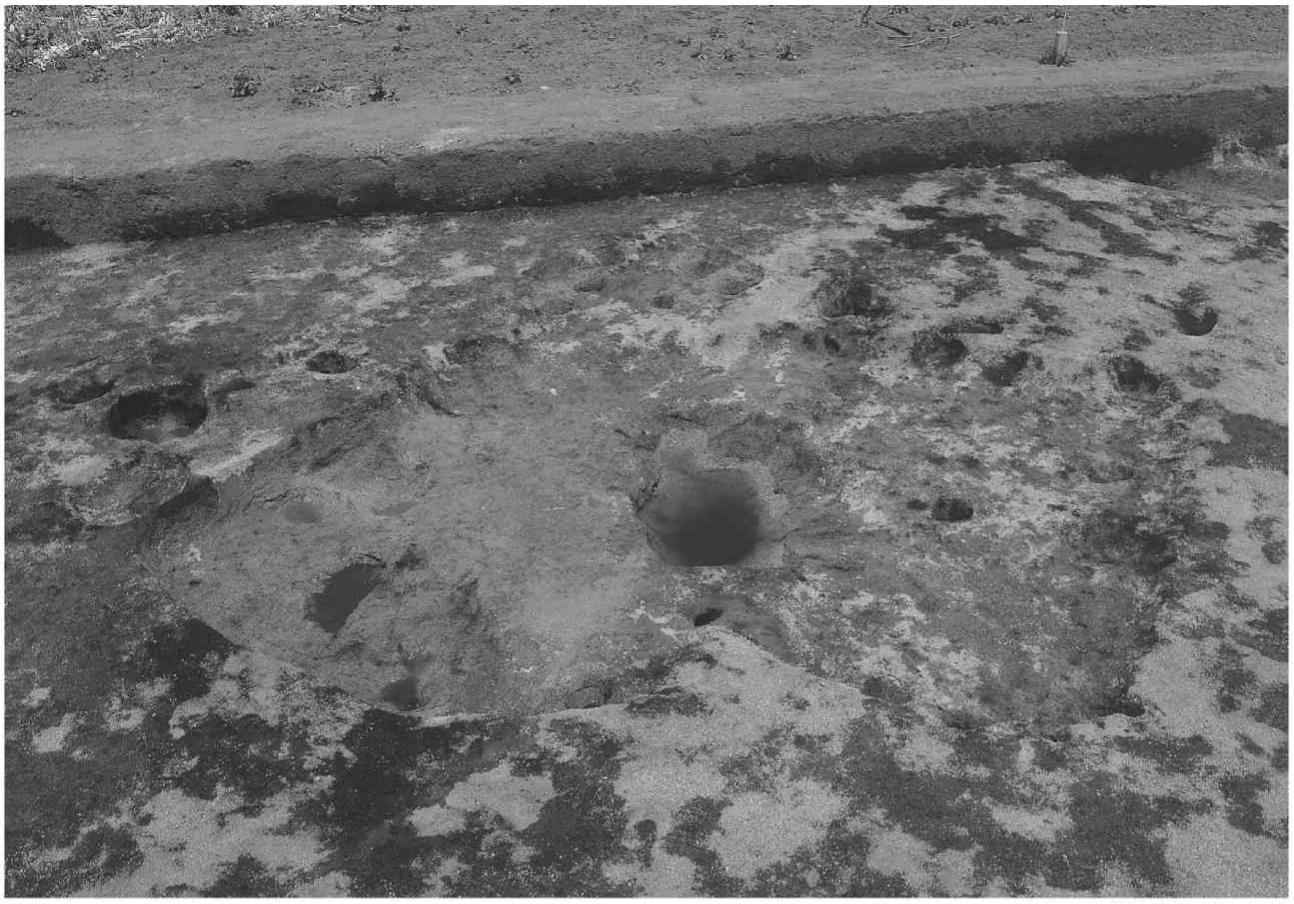
SX100　木製鍬出土状況（北から）

SX100ベルト断面　弥生土器出土状況（西から）

SX100東端のベルト
土層断面(南から)

SX100南端の東側ベルト
土層断面(西から)

SX100南端の西側ベルト
土層断面(西から)



ST240完掘状況（南から）

ST242完掘状況（東から）

ST240土層断面（南から）

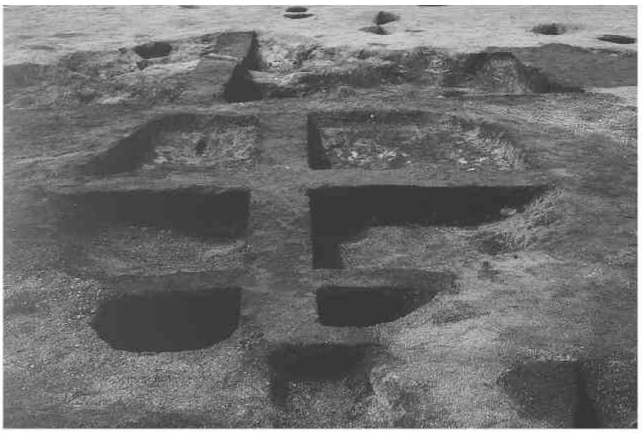
ST240・SK241土層断面（東から）

ST242土層断面（南から）

ST242土層断面（東から）

ST240・242検出状況（南西から）

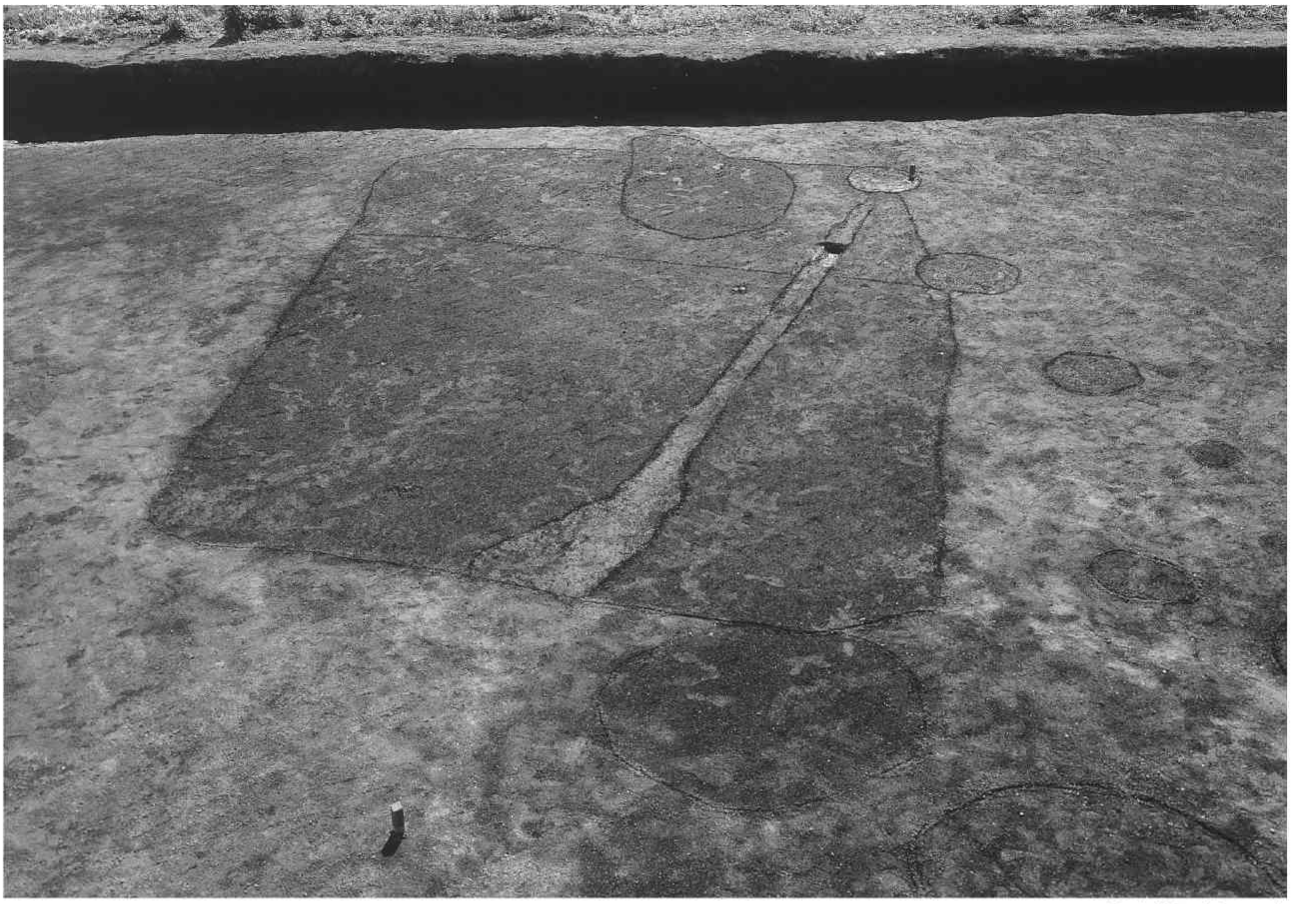
ST240・242完掘状況（南西から）



ST252土層断面（南から）

ST252土層断面（東から）

ST252完掘状況（東から）



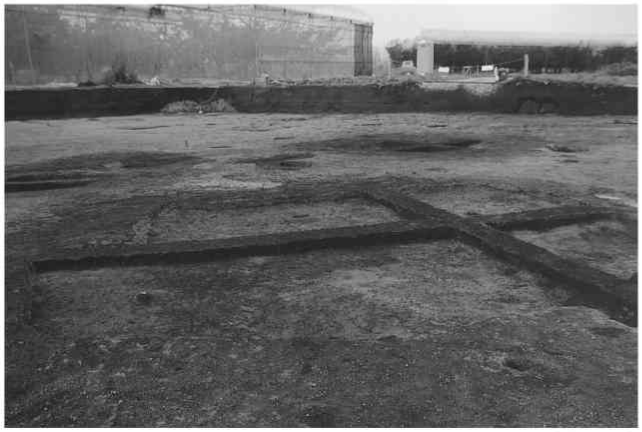
ST290検出状況（東から）

ST290完掘状況（南から）

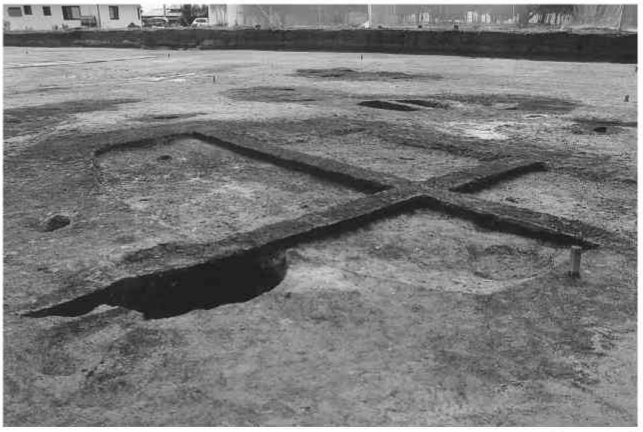
ST290・SK288土層断面（西から）

ST290土層断面（東から）

ST300完掘状況（南から）

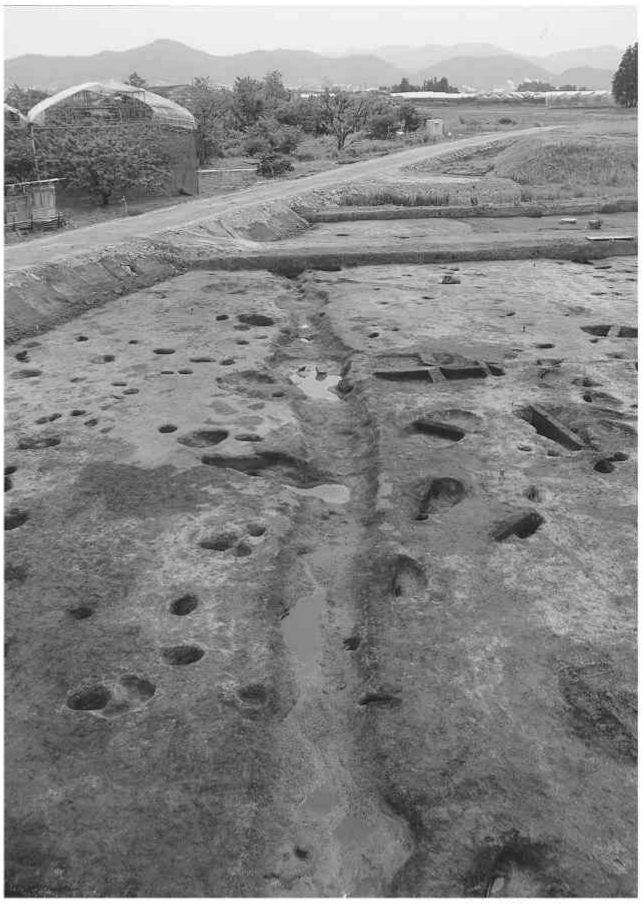


ST300土層断面（東から）



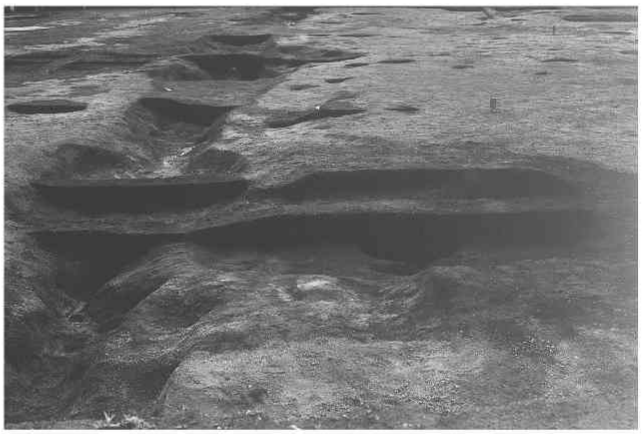
SK299・ST300土層断面（北から）

SD210完掘状況（東から）



SD210完掘状況（西から）

SD210・SK291・292土層断面（西から）



SD210・SK247・248土層断面（東から）

SD210・SK246土層断面（東から）

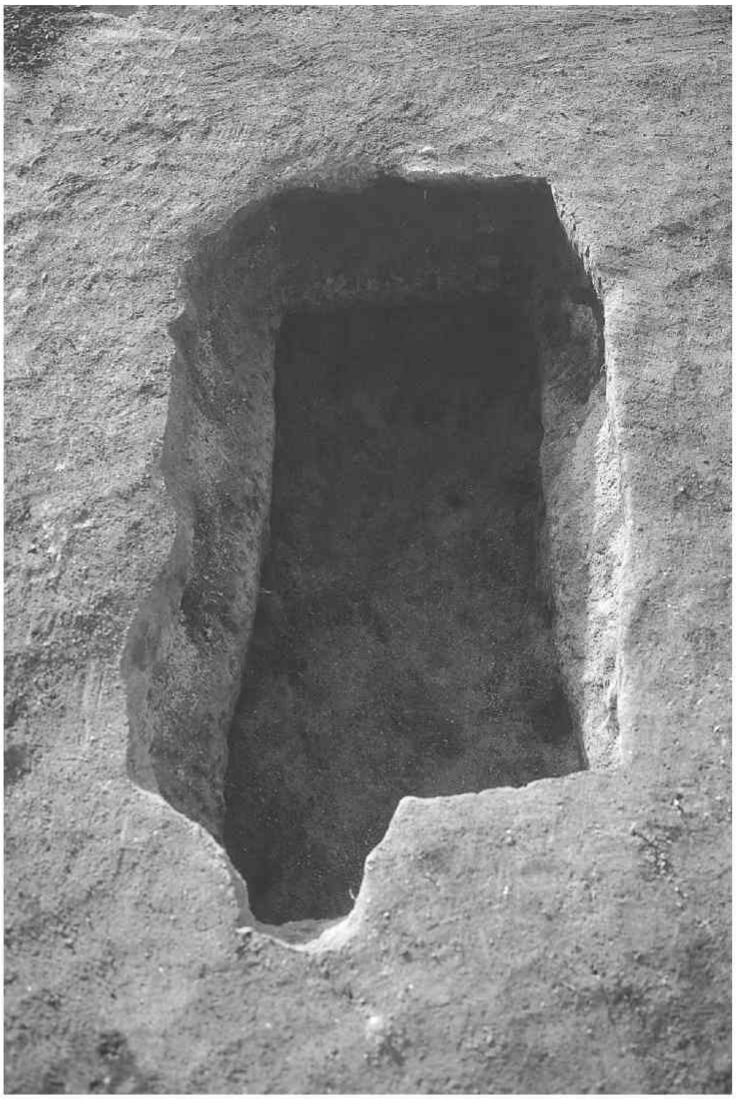
SD210土層断面（東から）

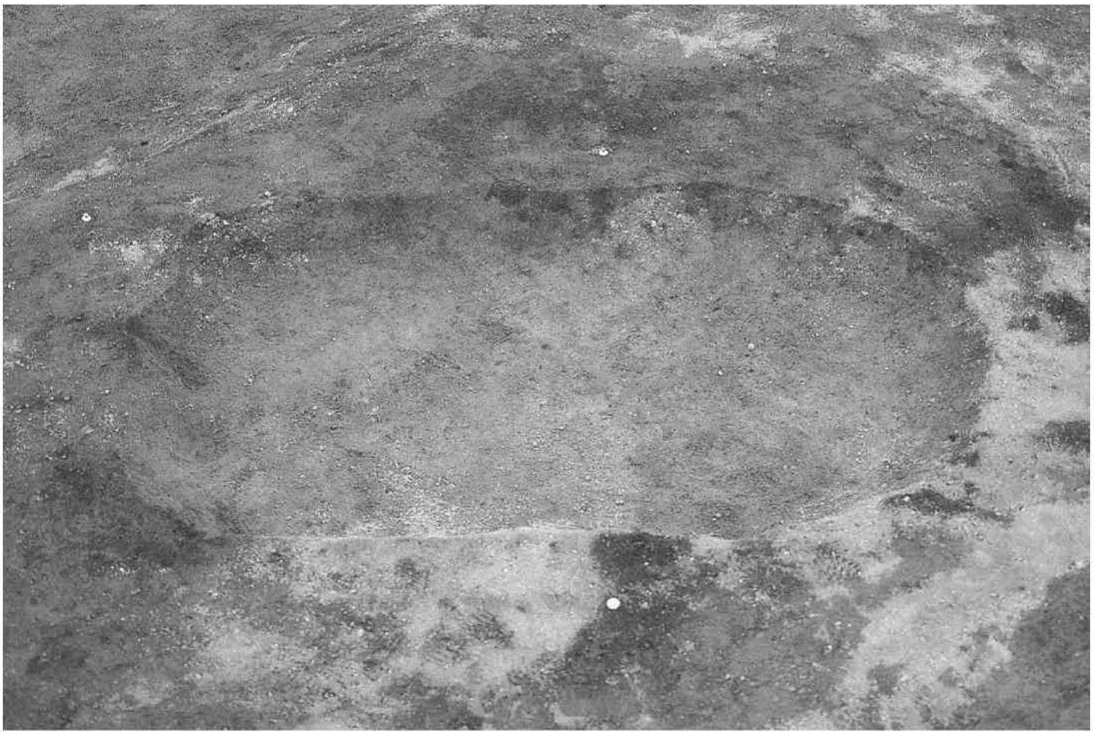
SD243・SK244土層断面
（南から）

SE285完掘・遺物出土状況
（北東から）

SE327完掘・遺物出土状況
（南東から）

SK75完掘状況（南から）

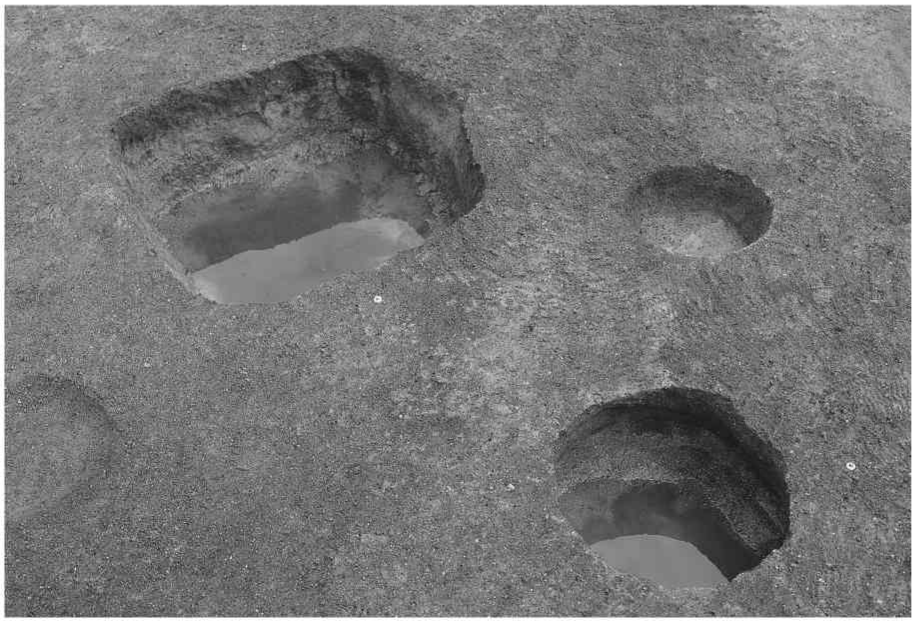




SK251完掘状況（南西から）

SK220・222完掘状況
（南東から）

SK267～269・272完掘状況
（東から）



SK310・314完掘状況
（南から）

SK9遺物出土状況（西から）

SK9・SP10完掘状況（南から）

SK30遺物出土状況（南西から）

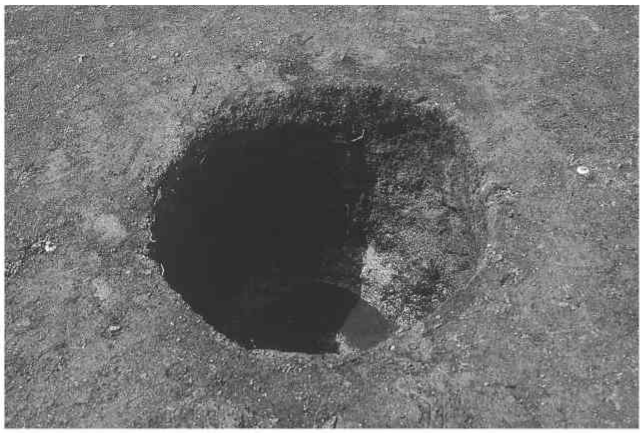
SK30底面焼土検出状況（西から）

SK75遺物出土状況（東から）

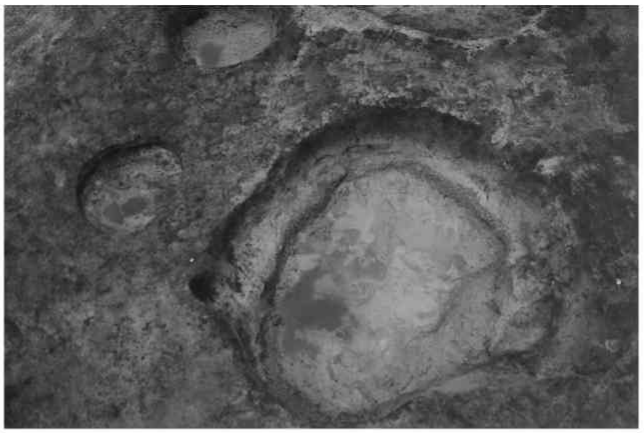
SK90完掘状況（東から）

SK101遺物出土状況（西から）

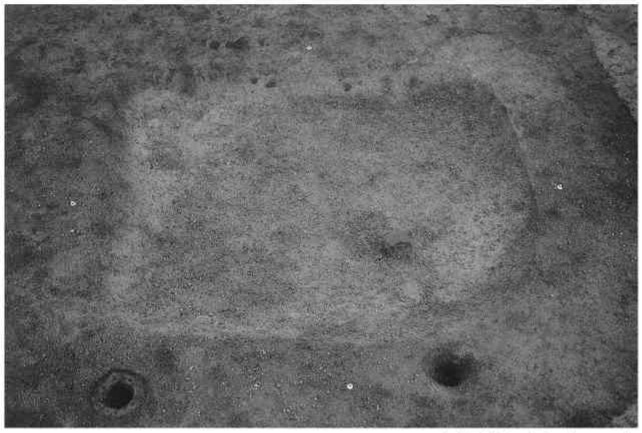
SK101完掘状況（西から）



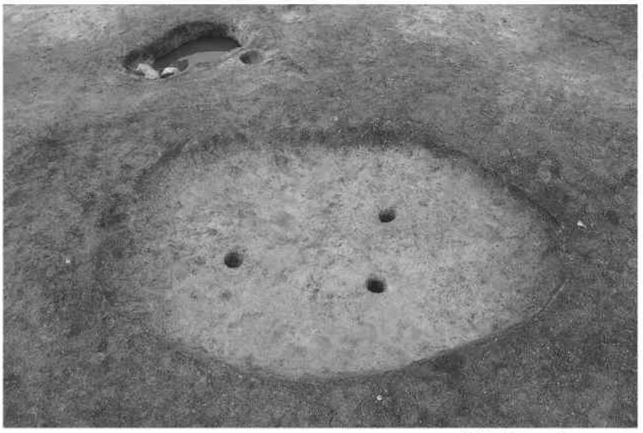
SK220完掘状況（南から）



SK274完掘状況（南東から）



SK275完掘状況（南東から）



SK305完掘状況（南から）

SK307完掘状況（東から）

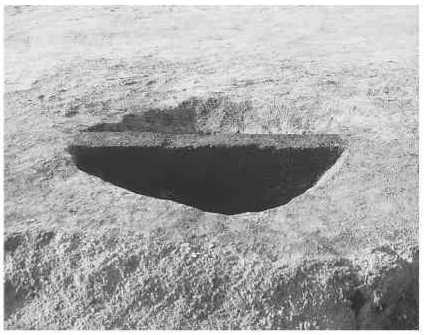
SK313完掘状況（南から）

SK320遺物出土状況（南から）

SK332完掘状況（南東から）

SK9・SP10土層断面（南から）

SK29土層断面（南から）

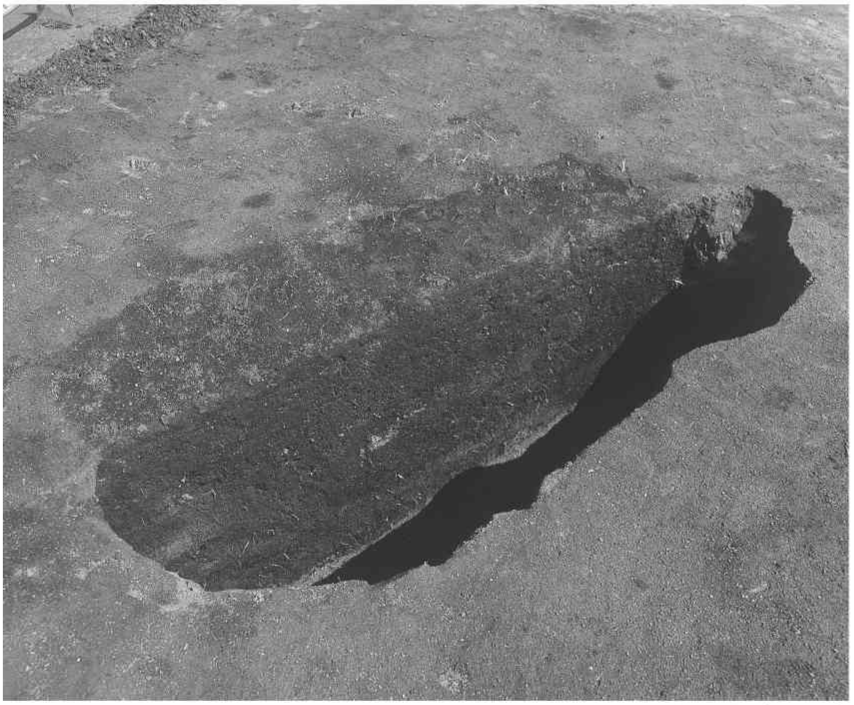


SK30土層断面（南から）

SK37土層断面（南東から）

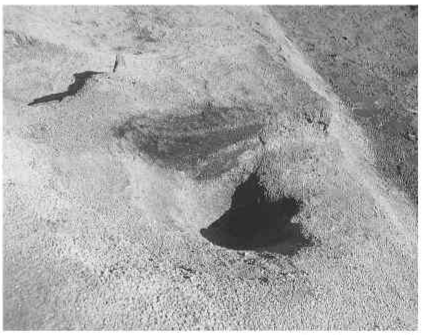
SK38・SP39土層断面（南から）

SK45土層断面（南から）



SK75土層断面（西から）

SK90土層断面（北から）



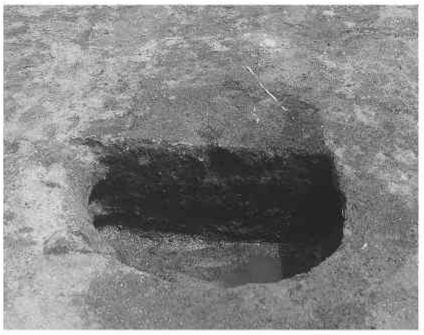
SK101土層断面（西から）

SK110・SP111土層断面（南から）

SK120土層断面（東から）

SD201・SK202～204土層断面（南西から）

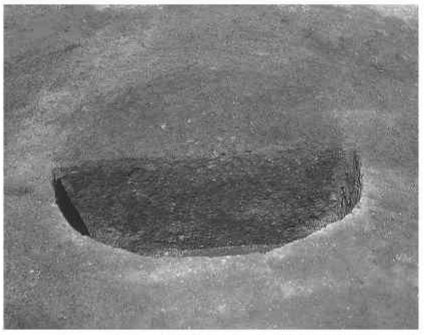
SD201・SK202土層断面（西から）



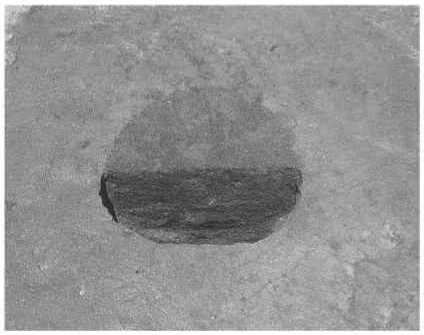
SK206土層断面（西から）

SP218・SK219土層断面（東から）

SK220土層断面（南から）



SK221土層断面（南から）



SK228土層断面（南から）

SK229土層断面（東から）

SK230土層断面（西から）

SK233土層断面（西から）

SK234土層断面（東から）

SK236土層断面（東から）

SK238土層断面（東から）

SK245土層断面（東から）

SK249・250土層断面（南から）

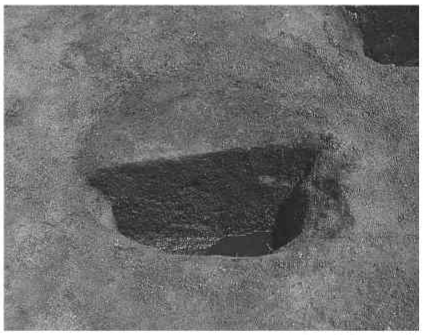
SK251土層断面（南東から）

SK258土層断面（南から）

SK259土層断面（南から）

SK263土層断面（南から）

SK264土層断面（南から）


SK265土層断面（南から）

SK266土層断面（南から）

SK269・270土層断面（南西から）

SK271土層断面（東から）

SK272土層断面（西から）

SK274土層断面（南東から）

SK275土層断面（南東から）

SE285土層断面（東から）

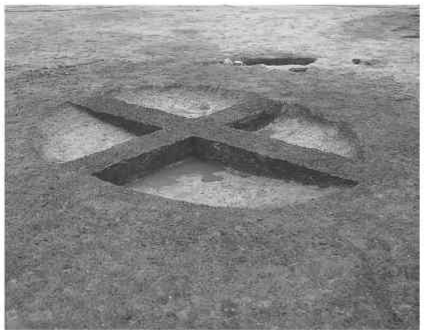
SK294・295土層断面（南から）

SK296土層断面（南西から）

SK297土層断面（南西から）

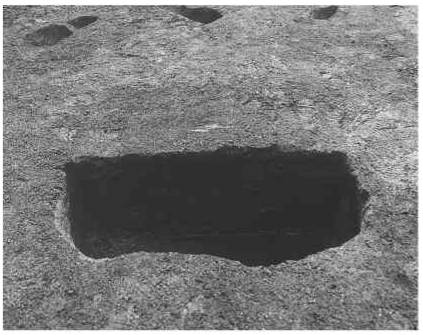
SK298土層断面（南から）

SK301～304土層断面（南東から）


SK305土層断面（南東から）

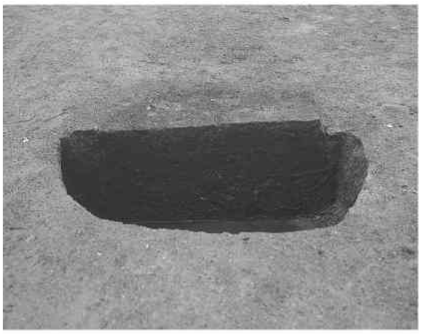
SK308土層断面（南から）

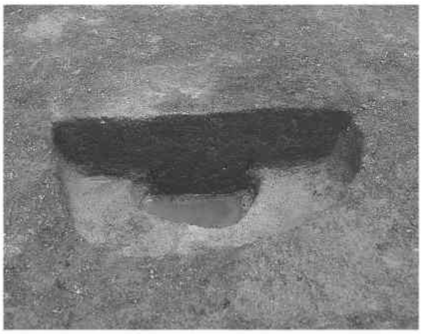
SK309土層断面（東から）

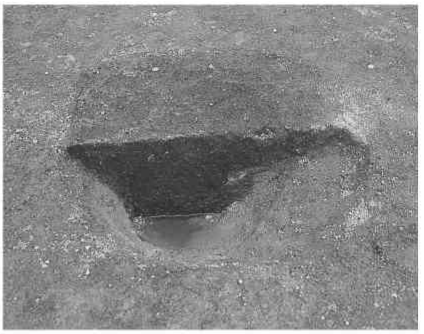

SK310土層断面（東から）

SK311土層断面（南東から）

SK312土層断面（東から）


SK313土層断面（南西から）


SK316土層断面（南から）


SK317土層断面（南から）

SK318土層断面（西から）

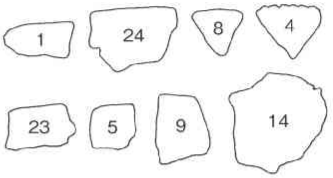
SK319土層断面（西から）

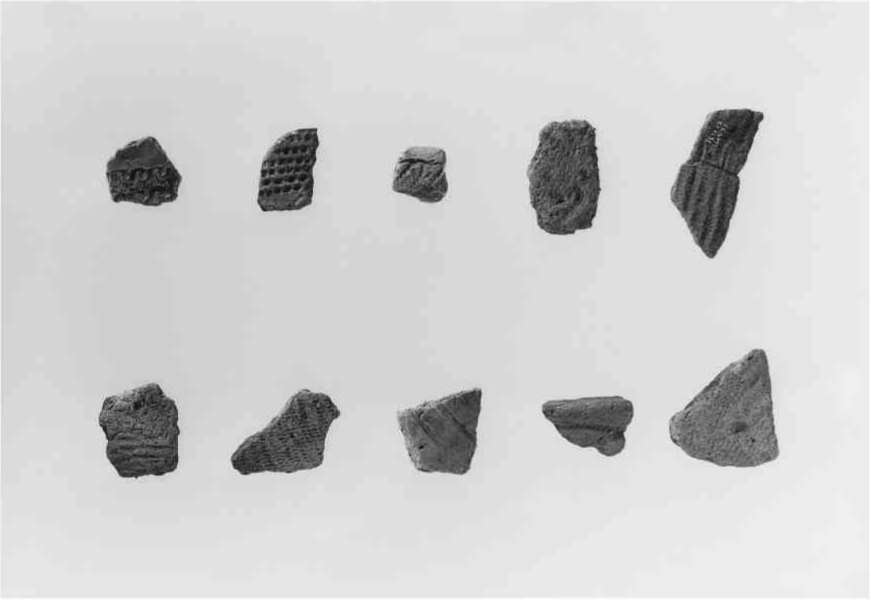
SK320土層断面（南から）

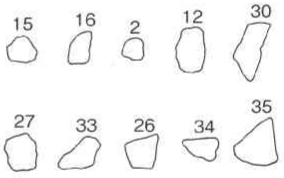
SK321土層断面（南から）

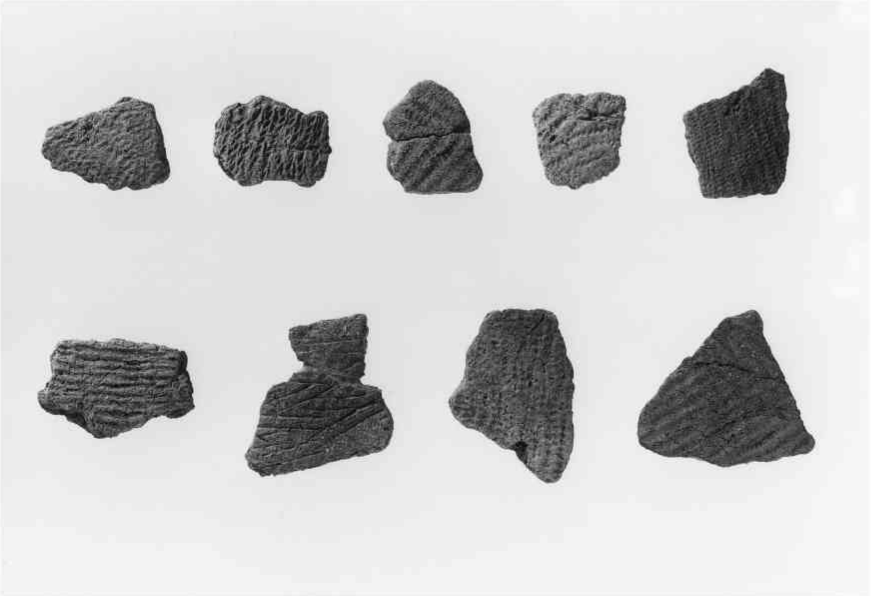
SK324土層断面（南西から）

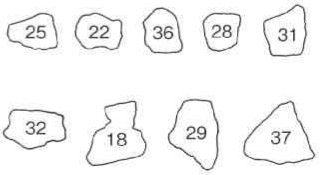
SK325土層断面（東から）



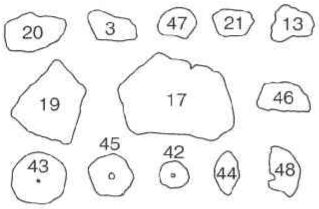


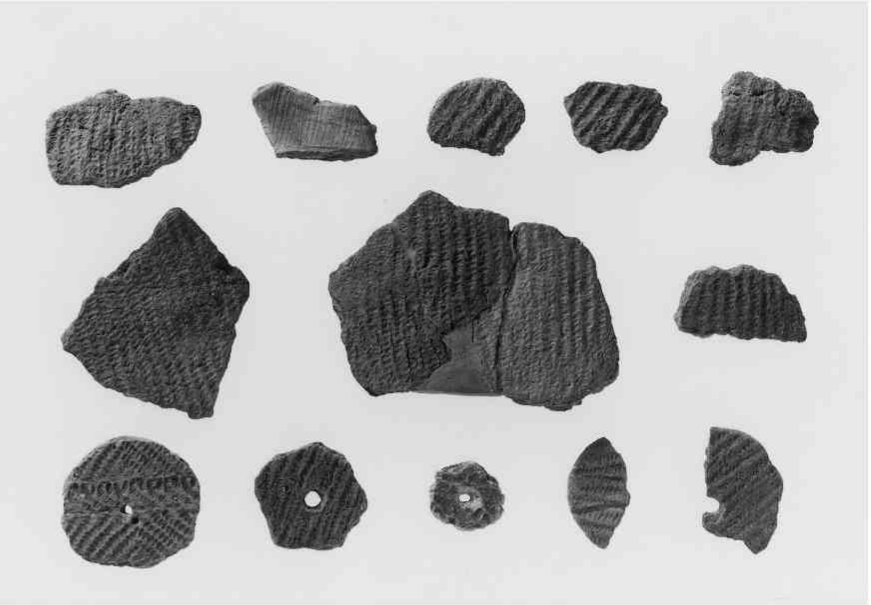


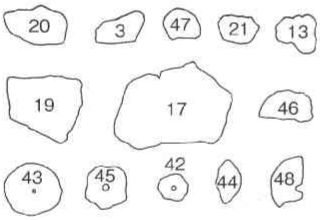


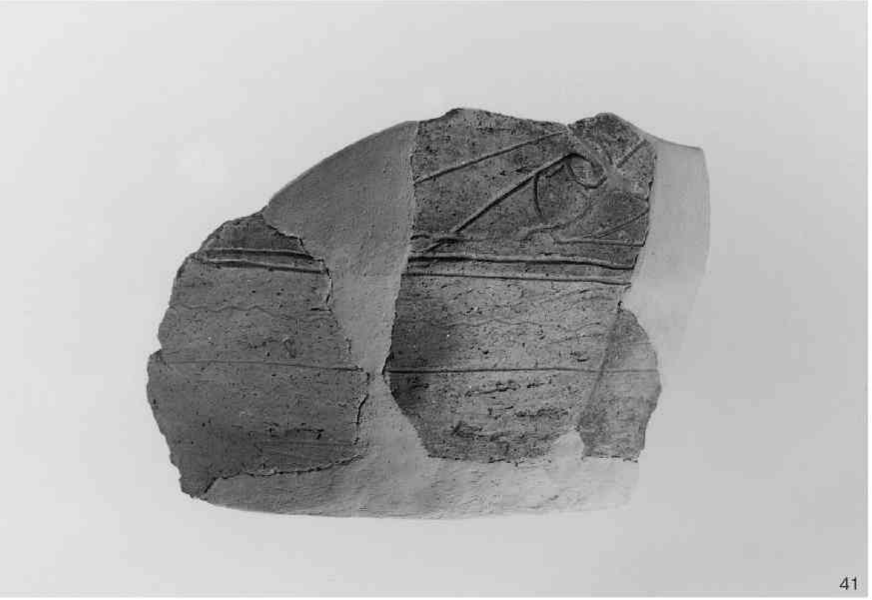


縄文土器


20
3
47
21
13
19
17
46
45
42
43
44
48

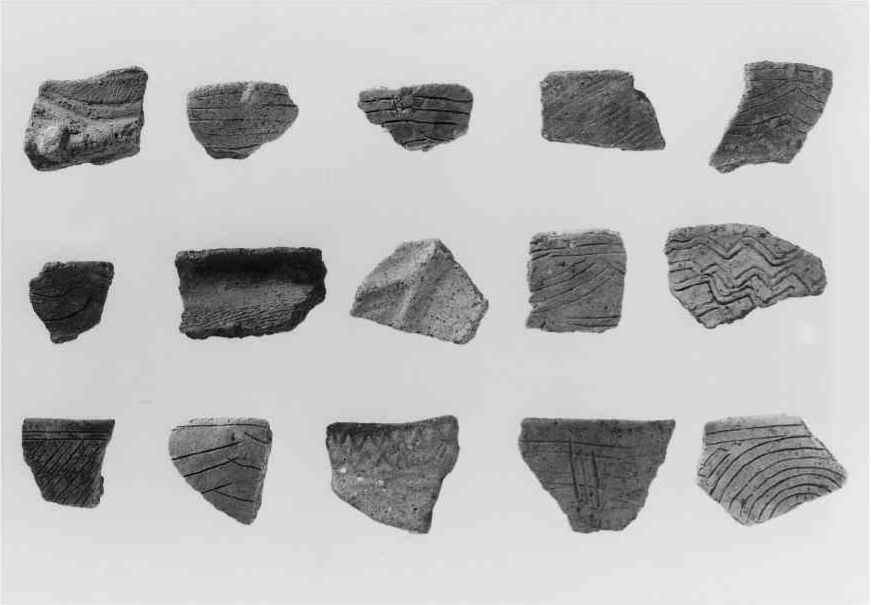


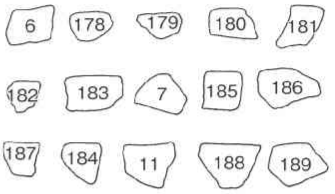

20
3
47
21
13
19
17
46
42
43
45
44
48

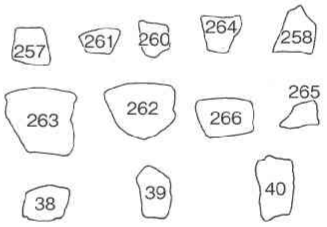


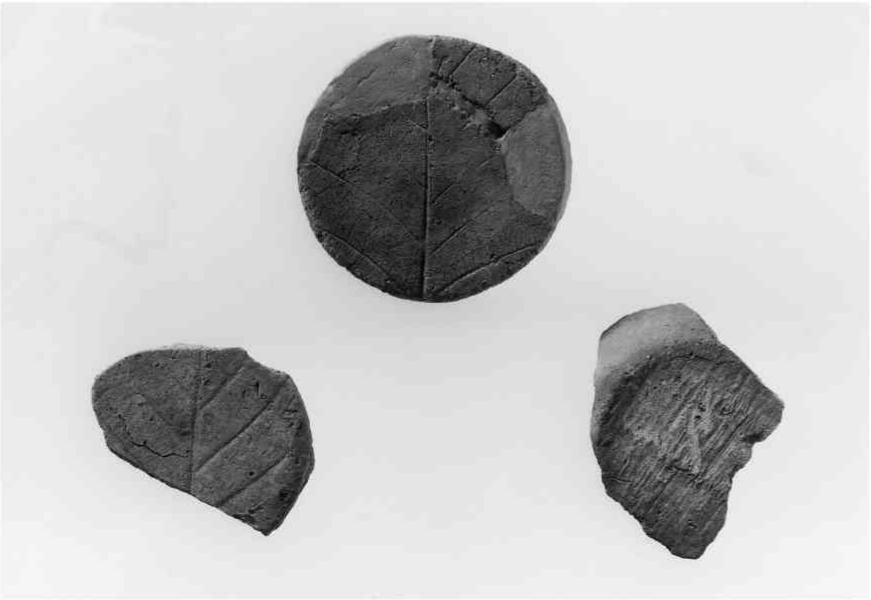
41

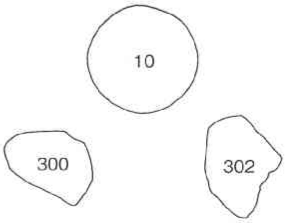
縄文土器・有孔円板



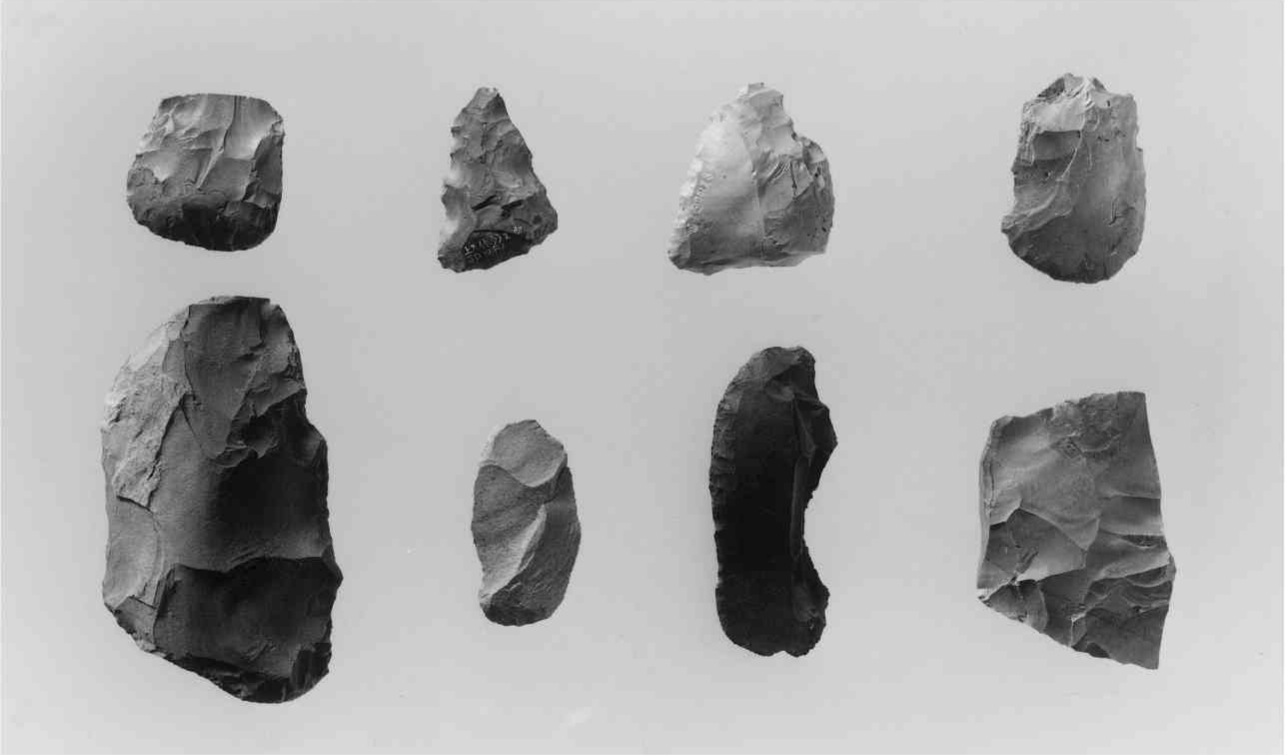


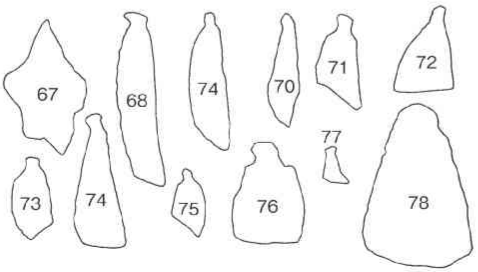


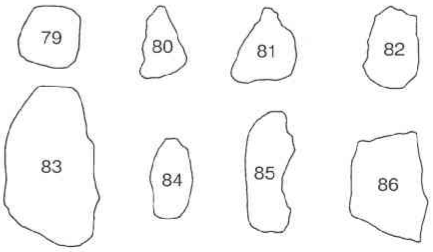




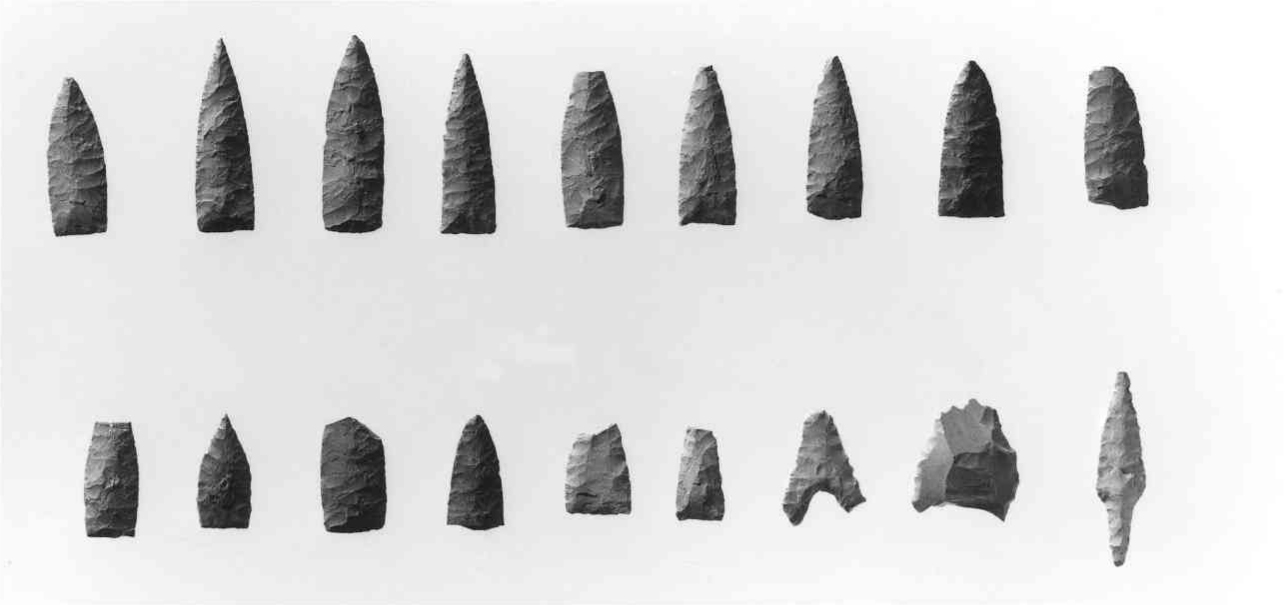
縄文土器・弥生土器・土師器

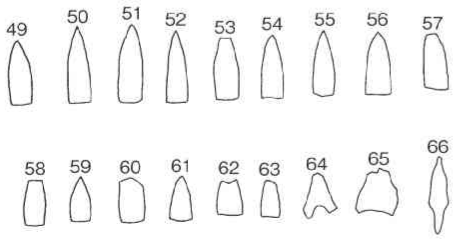


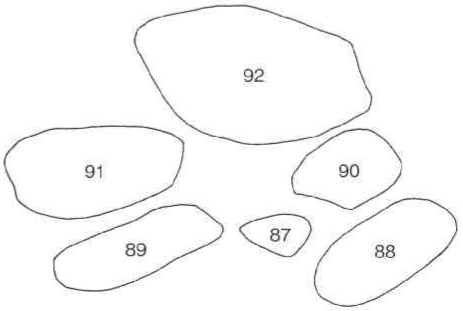




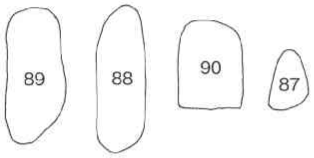
打製石器

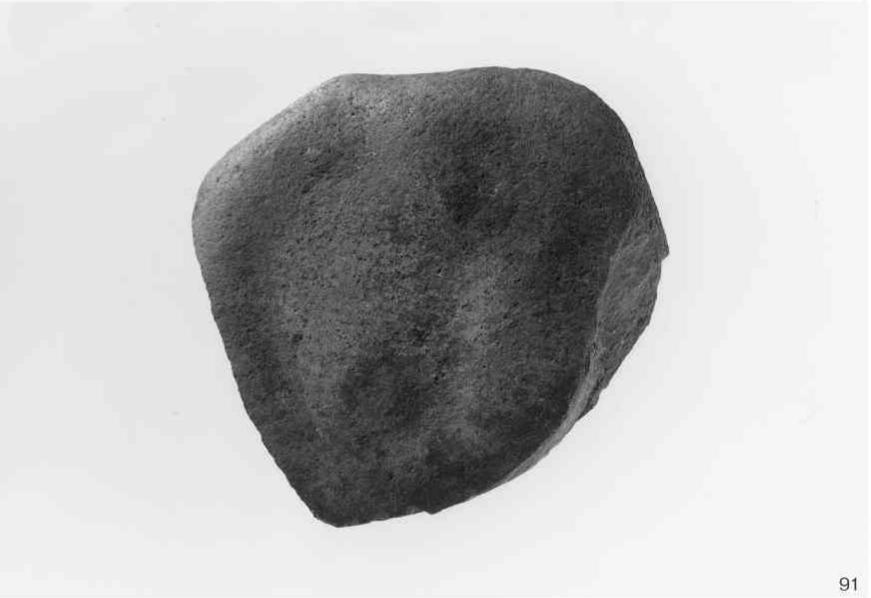






打製石器・磨製石器・礫石器





91

92

磨製石器・礫石器

94

95

96

105

234

301

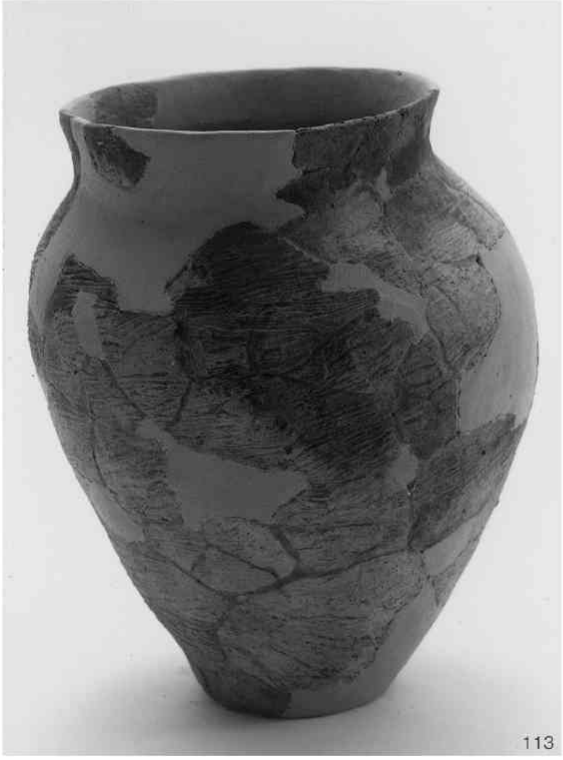
弥生土器・土師器

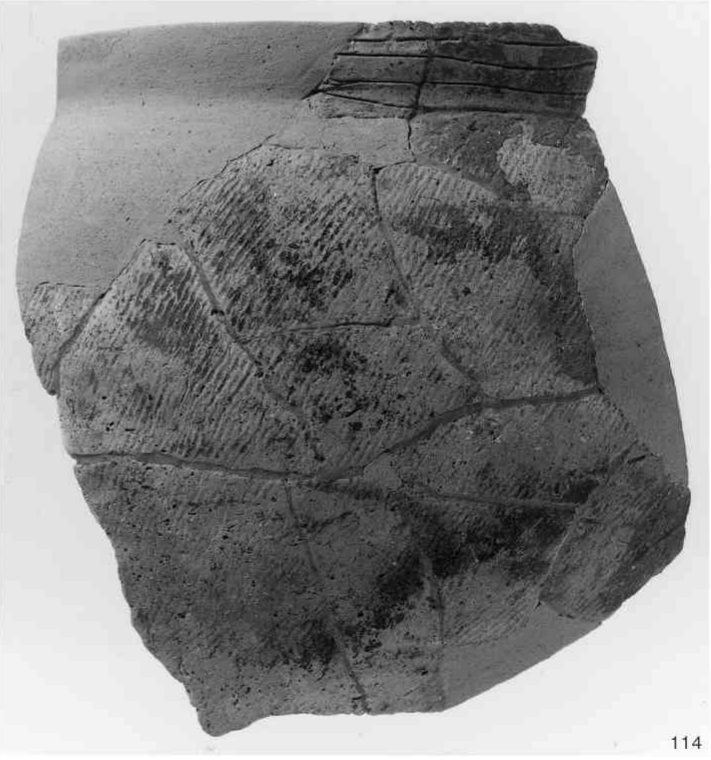
99

100

弥生土器

98


113


114

弥生土器

115

146

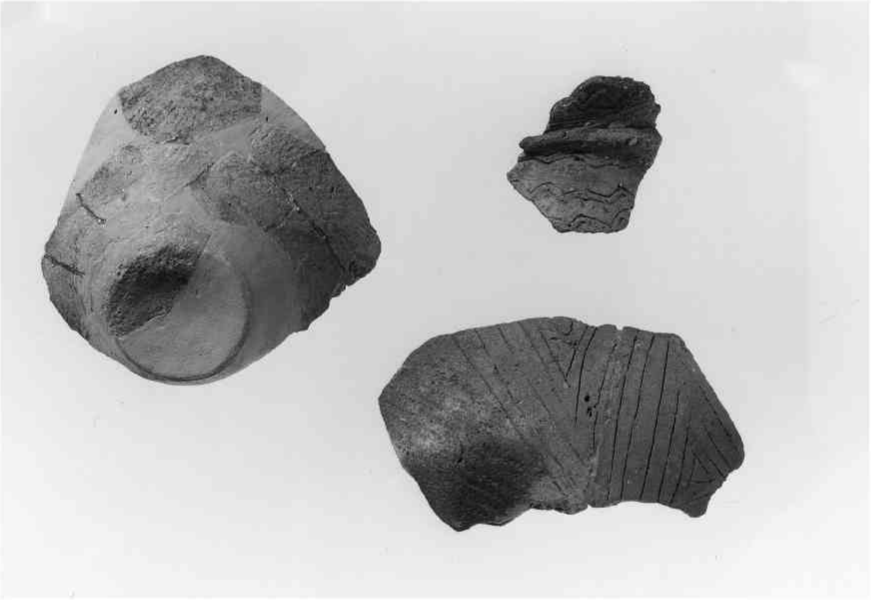
117

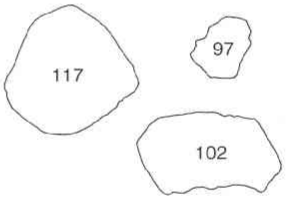
118

267

弥生土器・土師器

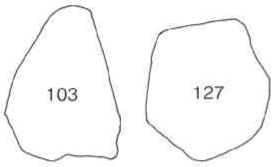
97

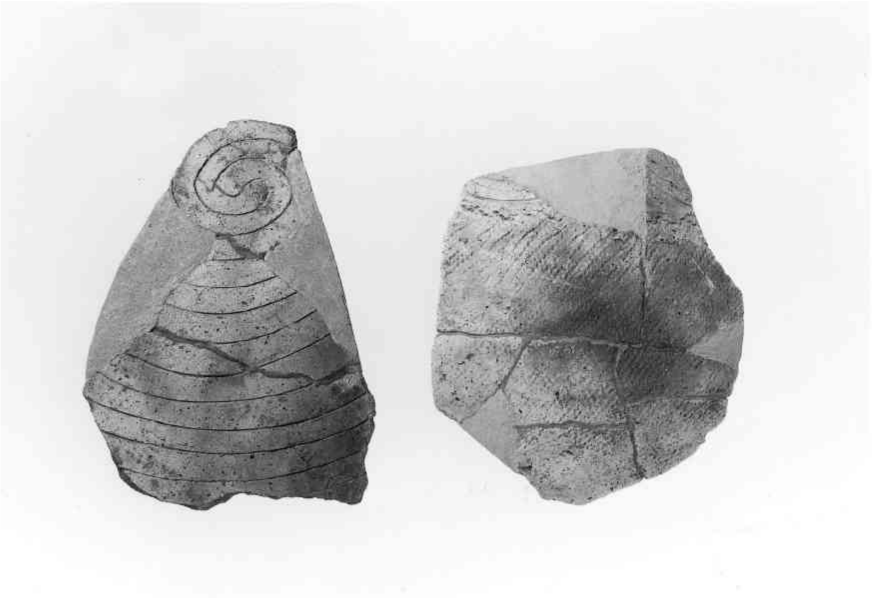


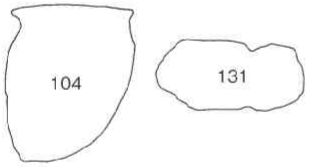


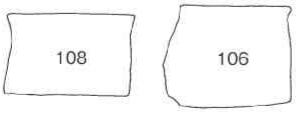
101

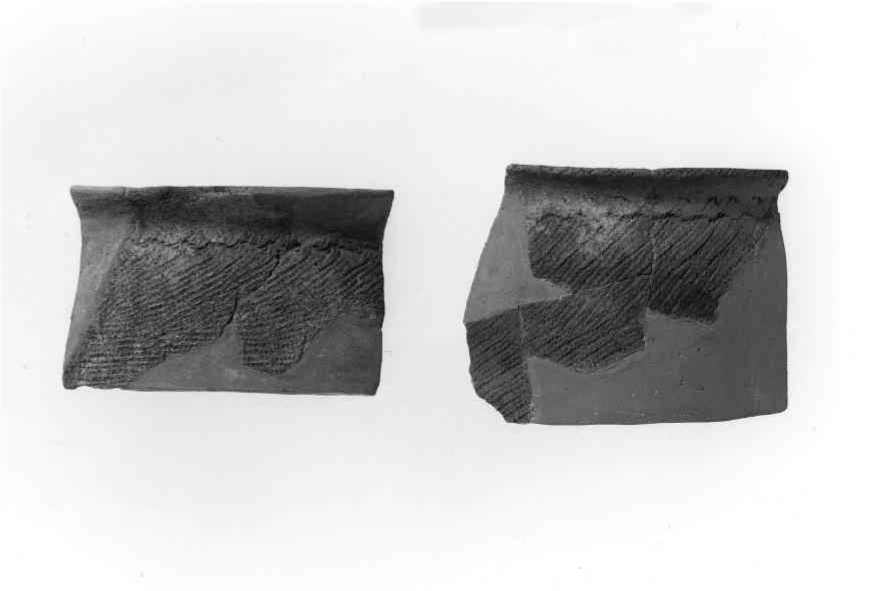
弥生土器



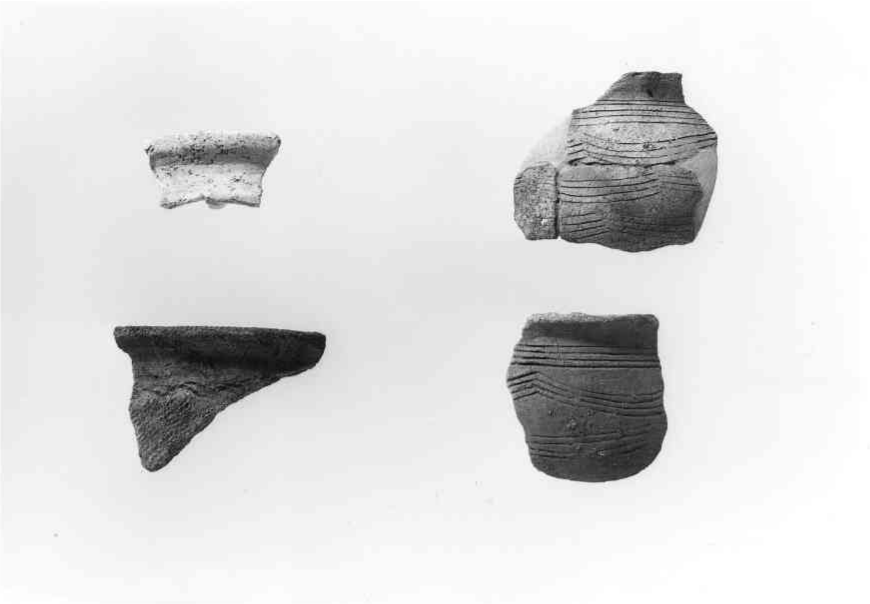


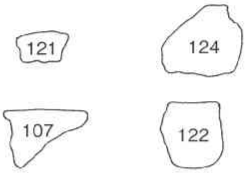


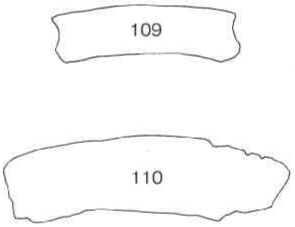




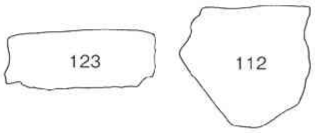
弥生土器

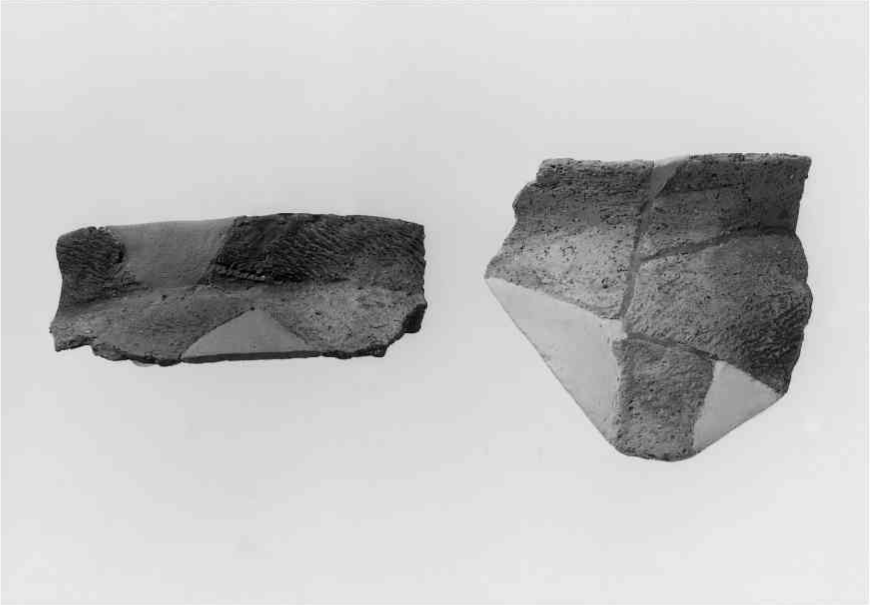


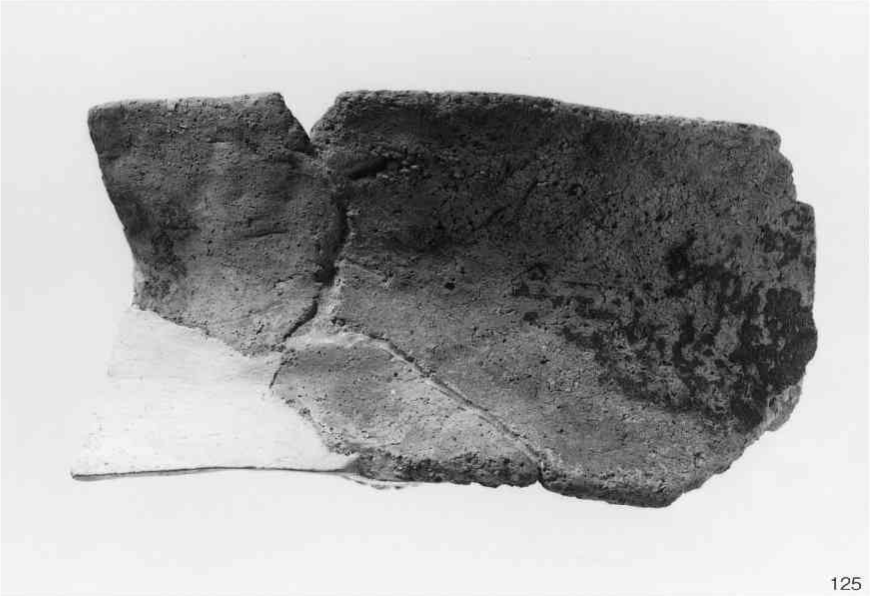




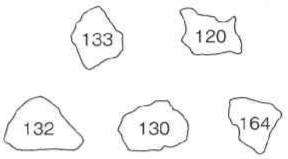
弥生土器

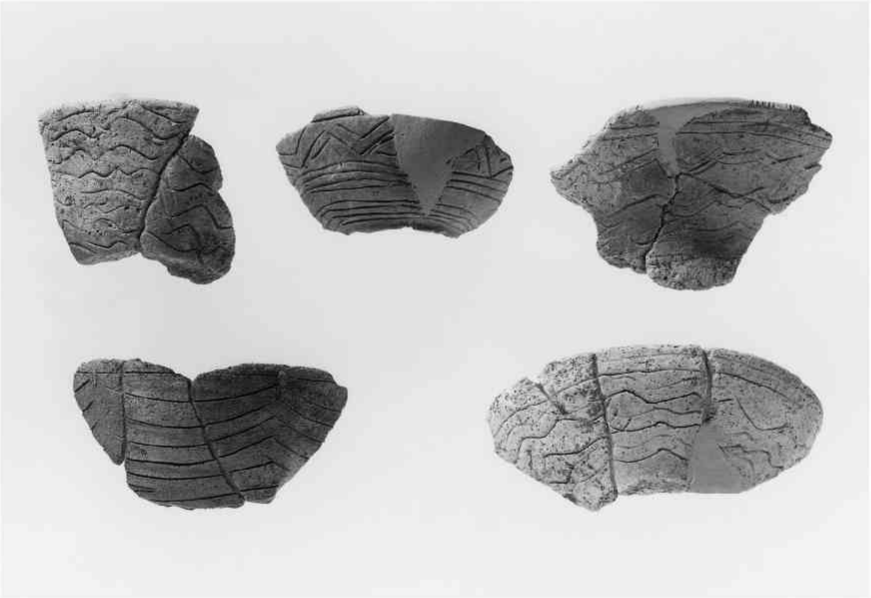


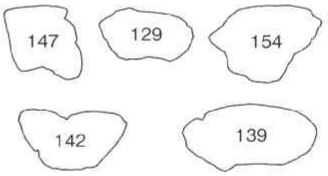


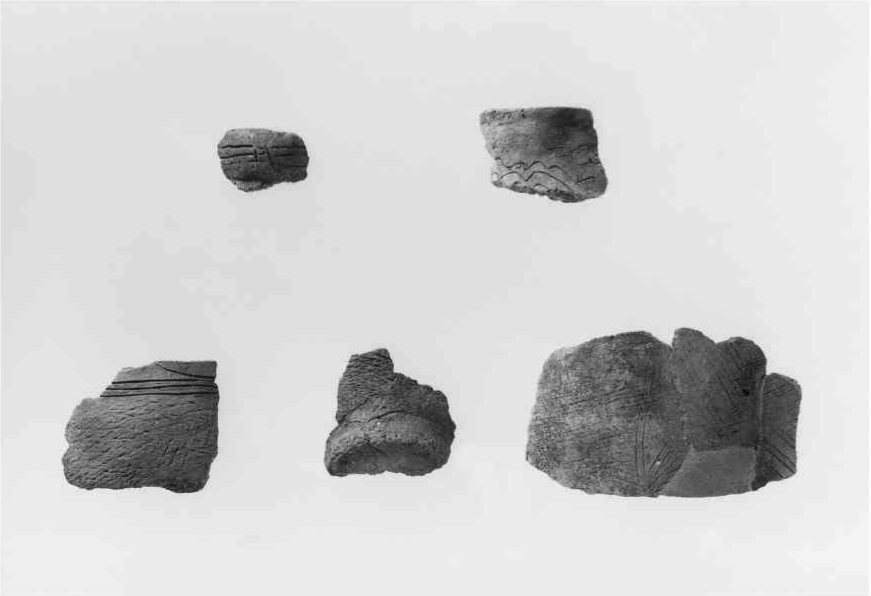


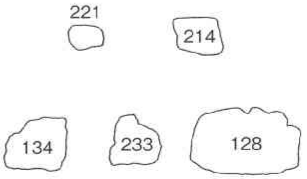
弥生土器



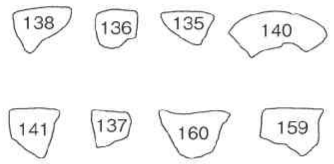


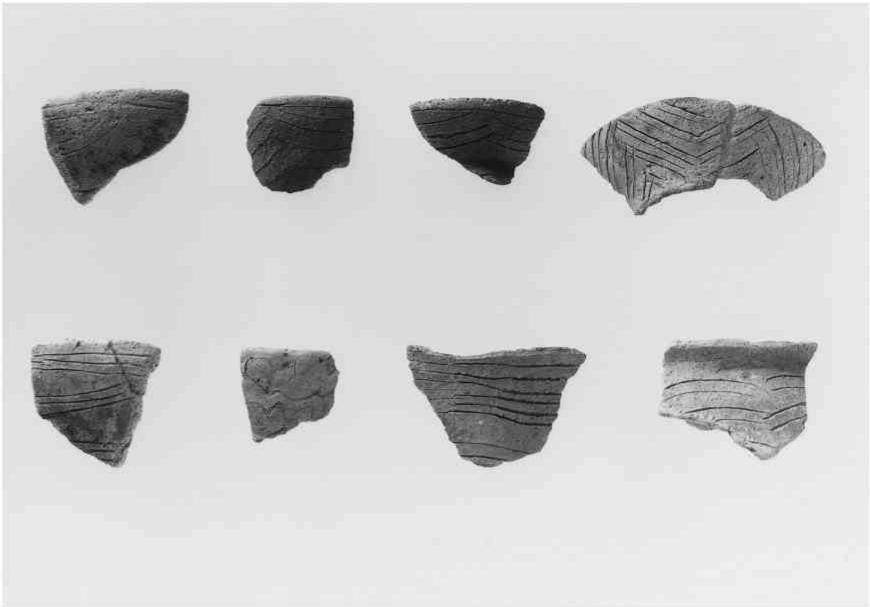


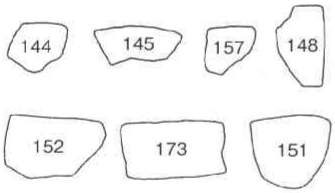


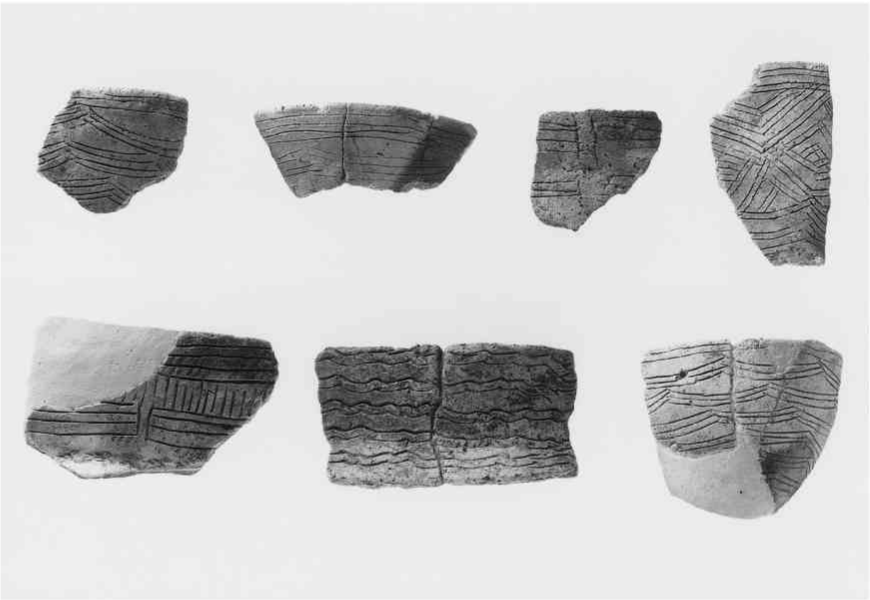


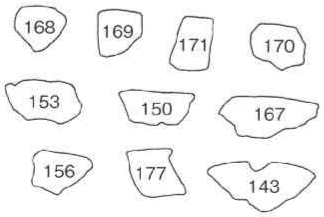
弥生土器


138
136
135
140
141
137
160
159

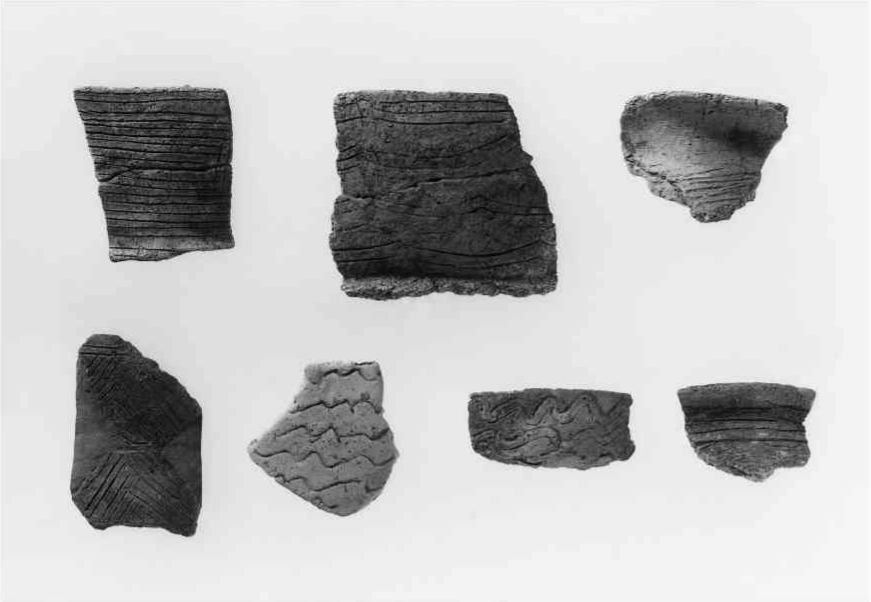


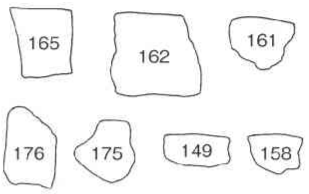

144
145
157
148
152
173
151

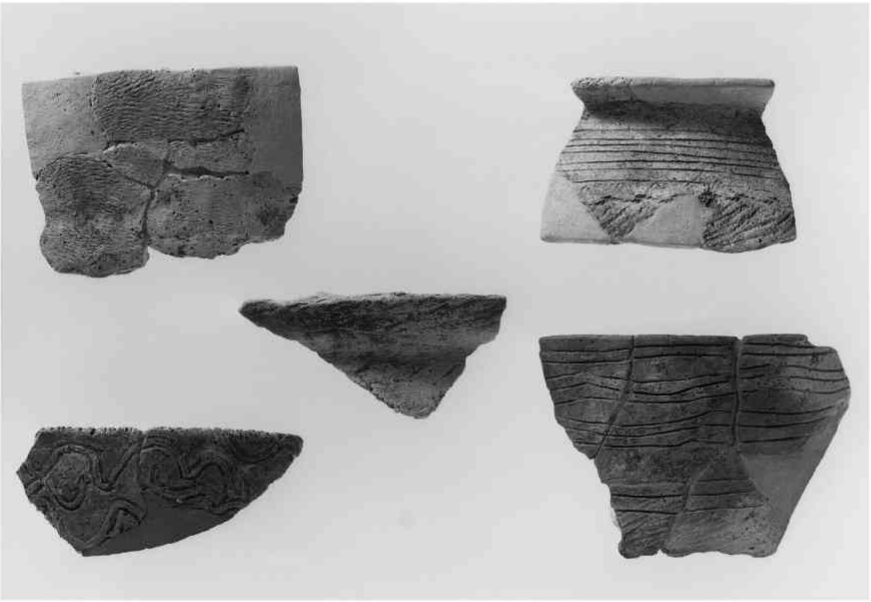


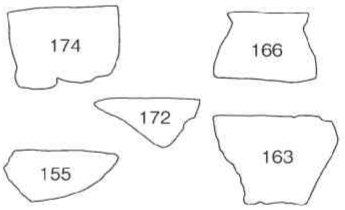

168
169
171
170
153
150
167
156
177
143

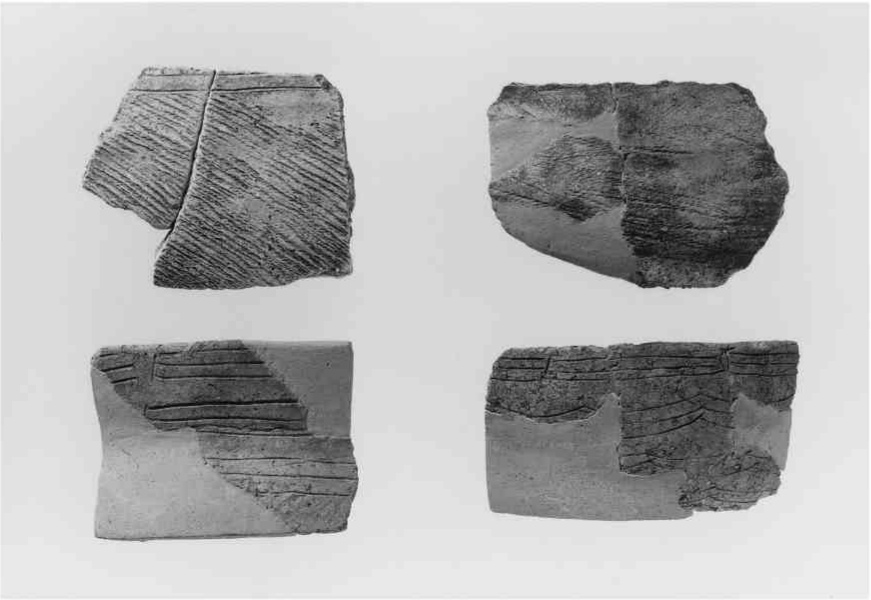
弥生土器

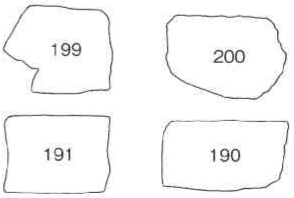




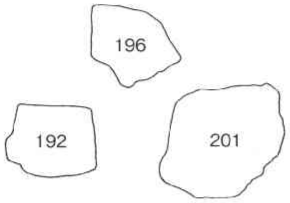


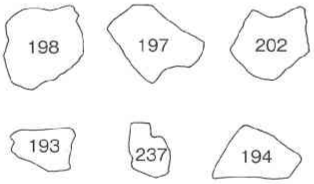


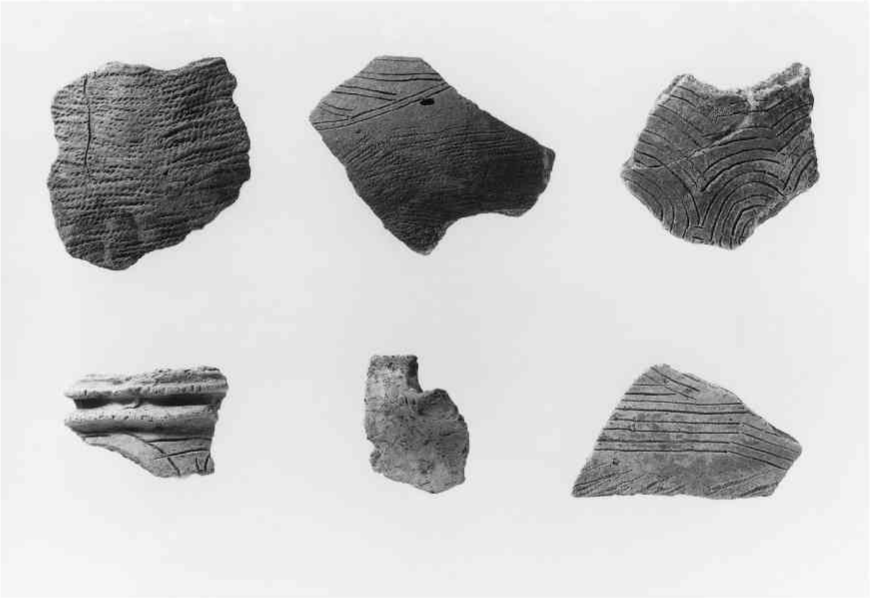


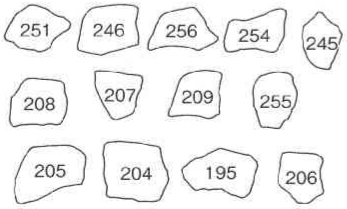


弥生土器


196
192
201


198
197
202
193
237
194




251
246
256
254
245
208
207
209
255
205
204
195
206

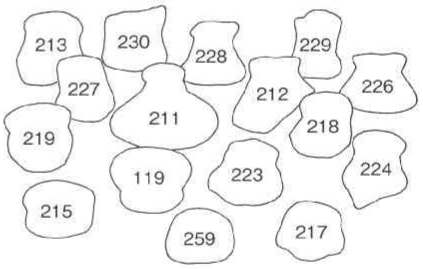
弥生土器

126

225

弥生土器

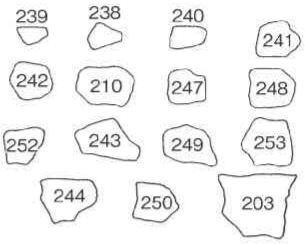
231

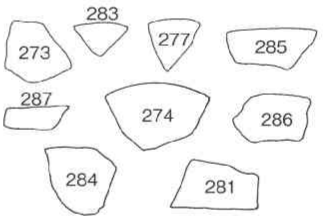


235

236

弥生土器





289

弥生土器・土師器・須恵器

左:215、中:216、右:220

280

282

弥生土器・須恵器

270

271

272

269

278

232

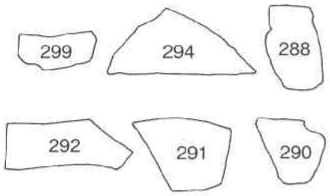
279

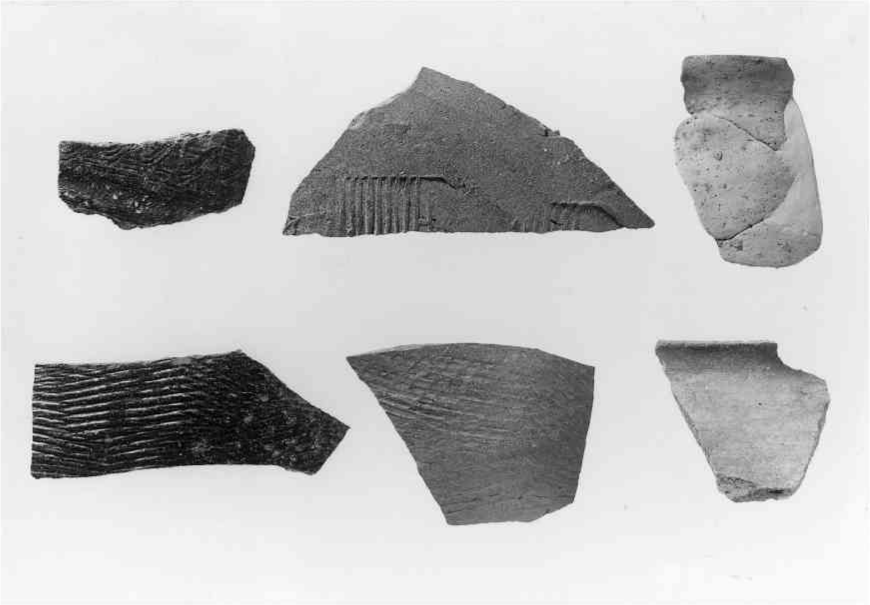
275

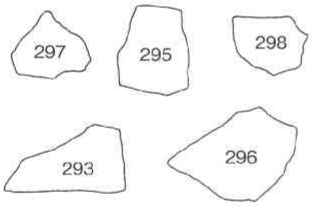
276

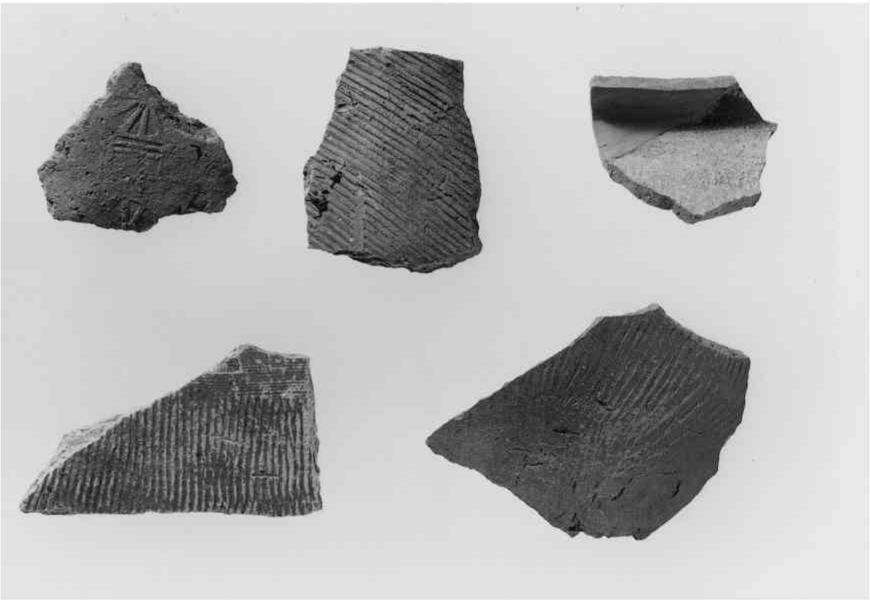
268

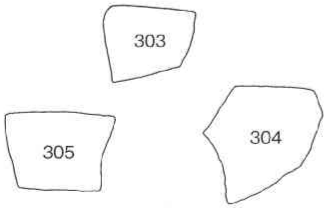
須恵器

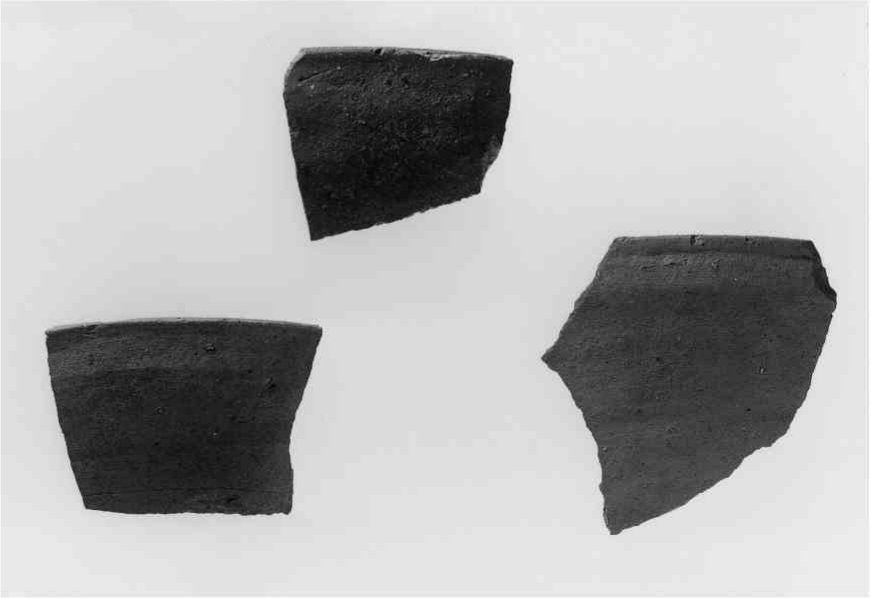




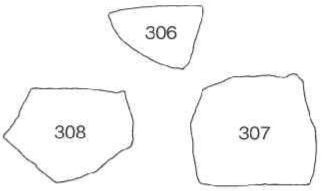


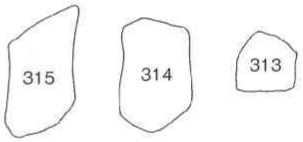


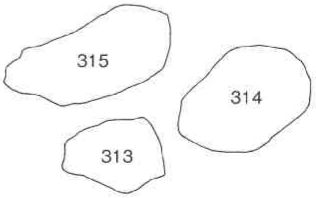




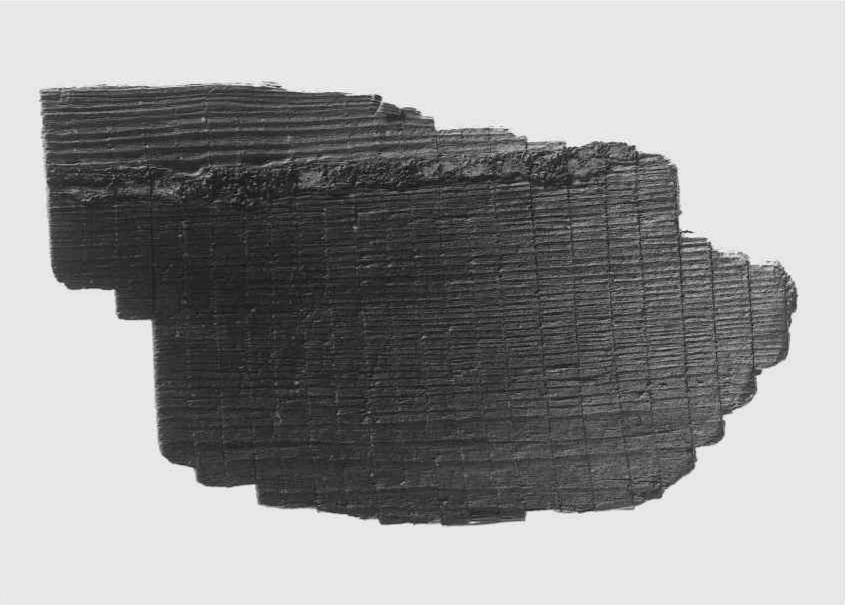
土師器・須恵器・中世陶器

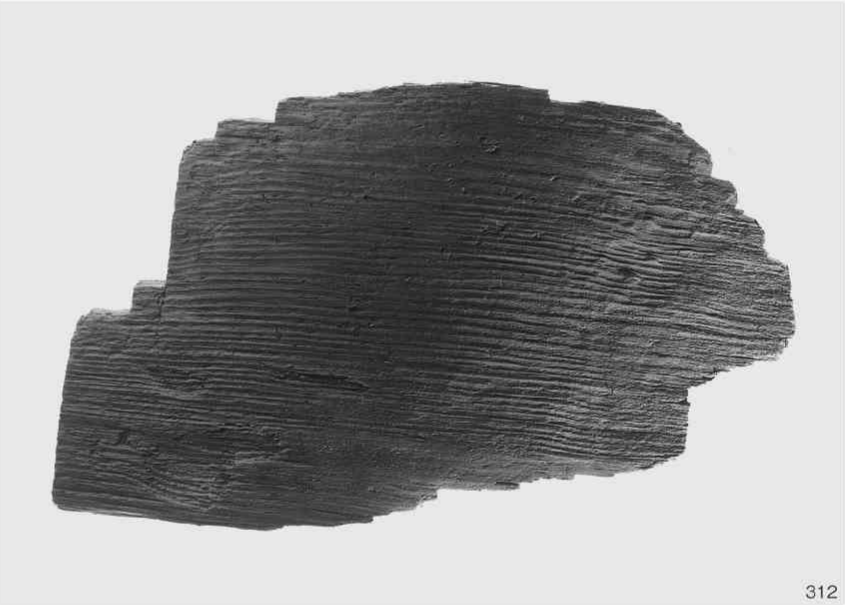






中世陶器・砥石

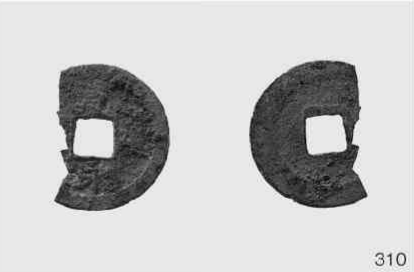




312

311

309



310

木製品・貨幣

報告書抄録

ふりがな	かみおおざくうらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	上大作裏遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第176集
編著者名	今正幸　須賀井新人
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号　ＴＥＬ　023-672-5301
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かみおおざくうら 上大作裏 いせき 遺跡	やまがたけん 山形県 なんようし 南陽市 おおあざすなづか 大字砂塚 あざおおざくまえ 字大作前ほか	06213	平成８年度 登録	38°　03′　28″	140°　06′　43″	20060821 ～20061109 （第１次）	1,800㎡	一般国道113号 赤湯バイパス 改築事業
						20070510 ～20070727 （第２次）	4,000㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
かみおおざくうら 上大作裏 いせき 遺跡	集落跡	縄文時代 （早期・前期）	竪穴住居　4 陥穴　1 墓壙　1	縄文土器 有孔円板　7 打製石器 礫石器	縄文時代早期末の竪穴住居跡を検出。 弥生時代中期後半の土器が一括出土。
		弥生時代 （中期）		弥生土器	
		平安時代 （13世紀）		須恵器 土師器	
		中　世 （13世紀）	井戸　2 溝　2	陶器 曲物　1 貨幣　2	

要　約

織機川の旧河道とみられる自然堤防上の微高地に立地する縄文時代、弥生時代、平安時代、中世の複合遺跡である。

縄文時代早期後葉～前期初頭の竪穴住居跡が４棟検出され、土製品の有孔円板が伴出している。周囲には当該期の墓壙１基と貯蔵穴とみられる袋状土坑群が確認された。また、縄文時代前期末葉の陥穴１基も検出されている。

自然堤防の段丘縁辺の堆積層からは、弥生時代中期後半を主体とする土器が多量に出土している。住居跡などの遺構は検出されなかったものの、調査区周辺に当該期の集落が存在した可能性が高い。

他の遺構や遺物としては、平安時代の９世紀を主たる時期とする須恵器・土師器、中世の井戸跡２基・区画溝と13世紀に属する陶器などがある。

平野部で検出された縄文時代早期末の住居跡や一括出土した弥生土器は、山形県では調査例や資料数がまだ少なく特筆される。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第176集

上大作裏遺跡発掘調査報告書

2009年３月31日発行

発行　財団法人　山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161　山形県上山市弁天二丁目15番１号
電話　023-672-5301
印刷　株式会社アサヒ印刷
〒990-2251　山形県山形市立谷川二丁目486-14
電話　023-686-4331